

Shizuoka University of Art and Culture

13

VOL.13 2012

静岡文化芸術大学
研究紀要

SHIZUOKA UNIVERSITY OF ART AND CULTURE
BULLETIN 2012

ISSN 1346-4744

13

静岡文化芸術大学研究紀要

Shizuoka University of Art and Culture Bulletin

VOL.13 2012

目次

原著論文

アルジェリア／フランス ―『アルジェの女たち』をめぐる絵画と文学の対話（II）	石川清子	1
地方都市のフェアトレードの現状と展望	下澤 嶽	13
静岡文化芸術大学でのハビタット・フォー・ヒューマニティ：過去、現在、将来	ジャック・ライアン	19
階級の視点から読むアメリカ文学 ――ソール・ベローの <i>Dangling Man</i> 研究	鈴木元子	25
新カリキュラムに向けての段階的取り組み ―静岡文化芸術大学における英語教育改革に関する報告―	マーク D. シーハン 杉浦香織 ジャック・ライアン	35
サービ・リカバリー場面での公正と感情：先行研究の検討と今後の展望	小本恵照	41
チャンネル間競争と販売費用削減投資	鈴木浩孝 成生達彦	53
大学生に対する情報リテラシー教育	野村卓志 原田 茂治	65
歴史的運河への「まなざし」―ヨーロッパ・東アジアの比較を通じて	四方田雅史	71
劇場モデルに関する考察 ―帝国劇場の「前舞台領域」消滅から捉えた「多目的劇場」誕生の経緯について―	永井聡子	81
カリキュラムを横断した各専門分野協同によるプレゼンテーション	高山靖子 峯 郁郎 古瀬 敏	マーク D. シーハン ジャック・ライアン 85
見える力学	海野敏夫	91

研究報告

外国語活動・英語活動を通じた大学と小規模小学校との連携 ―授業支援、学習教材の製作を通して―	杉浦香織	マーク D. シーハン	97
大学生による地域の学校支援活動の組織化に関する研究」報告（その1） ―平成 23 年度地域の小・中学校における学習支援ボランティア活動の現状と課題	瀬戸知也		105
イタリア語教育の拡充とイタリアの大学との学術交流協定に向けた研究報告	土肥秀行		109
旅行ガイドブック・ブログの中のイギリス産業遺産 ―観光のまなざし論からのアプローチ―	加藤裕治		115
負の遺産を包含した都市文化政策事例研究	根本敏行		123
南ウェールズの世界遺産ビッグ・ピット Big Pit ―炭坑の歴史と国立石炭博物館のマネジメント	藤田憲一		137
日中連携による実践型のデザイン教育展開の可能性	磯村克郎 佐井国夫	迫 秀樹 黒田宏治	143
浜松の民芸運動の現代的評価に向けて	黒田宏治	阿蘇裕矢	149
メディア造形学科における研究制作活動、情報発信活動の紹介	的場ひろし	和田和美	153
静岡文化芸術大学学術機関リポジトリ (SUACAR) の構築に向けて ―学術的成果の公開を通して地域に貢献する―	古瀬 敏 河手太士	林 左和子	163
ユニバーサルデザイン研究所の設立に関する研究	古瀬 敏 小杉大輔 谷川憲司 高山靖子	林 左和子 三好 泉 迫 秀樹 的場ひろし	167
「楽器産業文化学」構築の試み	小岩信治		171

Contents

Original Articles

Algeria / France — Dialogues between Painting and Literature on Eugène Delacroix's <i>Women of Algiers in Their Apartment</i> (II)	Kiyoko ISHIKAWA	1
The real situation and Future Vision of the Fair-Trade movement at local cities in Japan	Takashi SHIMOSAWA	13
SUAC Habitat for Humanity: Past, Present and Future	Jack RYAN	19
American Literature and Social Class: A Study of Saul Bellow's <i>Dangling Man</i>	Motoko SUZUKI	25
Steps toward a new curriculum: A report on English education reform at SUAC	Mark D. SHEEHAN Jack RYAN	Kaori SUGIURA 35
Justice and affect in service recovery situations: A critical review of literature and suggestions for future research	Keisho KOMOTO	41
Competition between Marketing Channels and Investment in Sales Cost Reduction	Hiroataka SUZUKI Tatsuhiko NARIU	53
Information Literacy Education for University Students	Takashi NOMURA Shigeharu HARADA	65
The Tourist "Gaze" upon the Historical Canals: From the Viewpoint of Comparison between Europe and East Asia	Masafumi YOMODA	71
A study on the theater model : The birth of the Japanese Multi-purpose theater and the elimination of the front stage area at the Imperial Theater	Satoko NAGAI	81
Design English: Collaboration and presentation across the curriculum	Yasuko TAKAYAMA Jack RYAN Satoshi KOSE	Mark D. SHEEHAN Ikuro MINE 85
Visible Dynamics	Toshio UNNO	91

Research Report

Cooperation between a small elementary school and a university through foreign-language activities: The support of lessons and collaboration on English learning materials creation	Kaori SUGIURA	Mark D. SHEEHAN	97
Organizing School Support Activities by University Students Volunteers (Part 1): Present Conditions and Problems of Learning Support Activities at Primary and Middle Schools in 2011	Tomoya SETO		105
Proposals for improving the teaching of Italian and plans for an academic exchange agreement with the University of Bologna	Hideyuki DOI		109
Industrial heritages of UK to be introduced in Japanese travel guidebooks and blogs -For thinking the tourist gaze from role of the media-	Yuji KATO		115
Case study of urban cultural policy that encompasses the negative legacy	Toshiyuki NEMOTO		123
Big Pit (National Coal Museum in South Wales; The World Heritage): The history of the colliery and the management of the Museum	Kenichi FUJITA		137
Possibility of deploying a practical design education through cooperation between Japan and China	Katsuro ISOMURA Kunio SAI	Hideki SAKO Kohji KURODA	143
Towards the Evaluation of the MINGEI Movement in Hamamatsu	Kohji KURODA	Yuya ASO	149
Creative and publicity activities in Media Design Fields	Hiroshi MATOBA	Kazumi WADA	153
Toward the Establishment of Institutional Repository at SUAC :Contribution to Society through Dissemination of Academic Accomplishments	Satoshi KOSE Futoshi KAWATE	Sawako HAYASHI	163
Toward the Establishment of Universal Design Research Institute at SUAC	Satoshi KOSE Daisuke KOSUGI Kenji TANIKAWA Yasuko TAKAYAMA	Sawako HAYASHI Izumi MIYOSHI Hideki SAKO Hiroshi MATOBA	167
Musical instruments and the industry as a cultural history of Hamamatsu City: A new interdisciplinary research field for SUAC	Shinji KOIWA		171

アルジェリア／フランス『アルジェの女たち』をめぐる絵画と文学の対話（Ⅱ）

Algeria / France – Dialogues between Painting and Literature on Eugène Delacroix's *Women of Algiers in Their Apartment* (Ⅱ)

石川 清子

文化政策学部国際文化学科

Kiyoko ISHIKAWA

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

ウジェーヌ・ドラクロワ『アルジェの女たち』（1834）は、オリエントのハーレムの女性を題材にしたオダリスク絵画の代表的名画であり、以降のオリエンタリズム絵画、裸婦像に多大な影響を及ぼした。しかし、1830年のフランスのアルジェ占領があつてこそ、画家はハーレム内部に入ることができ、ゆえにこの絵を描くことができた。フランスのアルジェリアに対する植民地支配の産物とも言える。また名画として鑑賞されてきたこの絵を、フランス語表現の女性作家はどのような視点で見て、どのように自己の作品に反映させ、自らのアイデンティティを構築していくか。この論考はその後半部で、アルジェリアとフランス両方にルーツをもつフランス人作家、レイラ・セバルのシェラザード三部作を検討し、80年代に顕在化する北アフリカ系フランス人の若者の自己構築の諸相を、この名画と関連づけて考察する。

Eugène Delacroix's *Women of Algiers in their Apartment* (1834), one of the masterpieces of "Odalisque paintings" representing female slaves or concubines in a harem, has a great influential power on posterior paintings such as of Renoir, Matisse, and Picasso. From historical and political viewpoints, it is the French conquest of Algeria in 1830 that enabled Delacroix to intrude into a harem to watch and sketch these women. The present paper is the latter part of the above-mentioned study, in which an Algerian-French writer, Leïla Sebbar's "Shérazade" trilogy is examined in the relation of Odalisque paintings. Through the journey of the protagonist, French born seventeen-year-old girl of the second generation of Algerian immigrants, we see the complex process of self-construction of protagonist and recognize the multiplicity of cultural cross-fertilization in France in 1980s.

序

前稿では、ドラクロワの絵画『アルジェの女たち』をアルジェリアの女性作家、アシア・ジェバル（1936—）の同名の作品集から考察し、絵画と文学の対話、植民地支配の主従関係をいわば脱構築する主体的営為としての女性の書きものという点について述べてきた。本稿では、アルジェリアに深く関係のあるもう一人の女性作家、レイラ・セバル（1941—）の80年代のシェラザード三部作を、引き続きドラクロワの名画とそれに付随するオダリスク絵画との関連においてとらえ、セバル作品の独自性について検討する。

セバル三部作の第一作『シェラザード、十七歳、髪は褐色の巻毛、眼は緑色』（Sebbar 1982; 以下『シェラザード、十七歳』）で、家出少女の主人公がジェバルのこの作品集を持ち歩いてきたことは既に述べた。2年前に刊行されたジェバルの本を82年に刊行された本書に早くもとりあげ、同郷の先達に敬意を表しているわけだが、本作には別の箇所でもう一度ジェバルへの言及がある。家出したシェラザードの足跡をたどって警部が図書館を訪れ、訊ねられた図書館員がシェラザードは北アフリカの作家をよく読んでいたことを語り、「フェラウン、ディブ、ブージェドラ、ファレス、ハダッド、ヤシーヌ、ロブレス、メンミ、シュクリ、マムリ、シュライビ、ベン・ジェルーン」（132）の名に混じってジェバルもあげている¹。セバルからジェバルへのこの目配せは、単に同じアルジェリア出身の女性という同胞意識や作家としての尊敬の念を示しただけではないだろう。二人には共通点もあるが、また当然相違点もある。その相違点ゆえに、ドラクロワの傑作へのアプローチもジェバルとは異なったやり方となされる。セバルの出自と、使用言語に由来する作家としての特異な

位置やその小説『シェラザード、十七歳』については既に論じた機会があるが²、本稿ではフランスにおけるアルジェリア移民二世代の少女を行為主体として、オダリスク絵画がどのように彼女を挑発し、そして自己発見へと至らしめるかを、物語中の様々な諸相が複雑なネットワークを形成してゆく三部作のうち、ドラクロワの絵画、そしてオダリスク絵画に視点をできるだけ限定して検討していく。主人公シェラザードの発見や道程はまた、特異な出自を有するセバル自身の作家の軌跡にも重なるだろう。

1. ジェバルとセバル

前稿と本稿ではドラクロワの『アルジェの女たち』がジェバルとセバルの作品でどのように再編成されるかをみるわけだが、二人の作家はセットで論じられることが多い³。世代が近いアルジェリア出自の代表的な女性作家であること、二人の扱うテーマが近いことなどがその理由であろう。後者に関しては、本稿のドラクロワの絵画の再考もあげられるが、そのほかにも『千夜一夜物語』の語り部、シェヘラザードを主題にしていることも共通する。ジェバルは『影、スルタン妃』（Djebar 1987）でシェヘラザードと妹ドゥンヤザードの相補いあう関係を現代のアルジェリアの女性たちにあてはめ、セバルは「聡明で賢く、策略にたけ才覚のある」（Kian, «Une Entrevue» 131）語り部を自らの主人公の言動にだぶらせる。ちなみに、セバルの主人公名はシェヘラザードではなく、hé という「最も甘美な、最もオリエンタルなシラブルを失った」（Sebbar, *Le Fou* 164）フランス化した名前である。二人の作家には、父親が双方とも、アルジェリアの教員養成機関だったアルジェ近郊ブーザレアの師範学校出身という共通点もある。ジェバルにとって、父は植民地支配下のアルジェリアで支配者の言語に導いた「とりな

し役」であり、フランス語は父の言語であった (Djebar *L'Amour, la fantasia*)。対してセバルはアルジェリア人の父とフランス人の母との混血で、母の言語のフランス語を母語とし、フランス語で育った。

マグレブと呼ばれる北アフリカのフランス語作家についてしばしば言われることだが、フランス語で作品を書きこぞすれ、生まれた土地とその風景を精神的ルーツとしている。ところが、セバルの場合は、アルジェリア生まれアルジェリア育ちではあるが、父親の学校という職場を住居にしつつ、学校という特殊な風景のなかでフランス語のみを使用する環境で育ってきた。アルジェリア＝父の土地から受け継ぐもの、を父の意志で絶って育ったと言える。母もまた、生地を離れアルジェリアという未知の土地へ一人でやってきた。また、アルジェリア独立後の1968年には、一家はアルジェリアを離れニースに定住することになった。父の同期生で友人であったムルード・フェラウンの、独立直前の極右秘密軍事組織 OAS による暗殺事件、そしてフランス移住の事情について、父は頑なに沈黙をとおしたと言う (*Je ne parle pas* 11-12)。アラビア語の氏名をもちつつアラビア語をほぼ知らず、フランス語のみを遺産として両親から (正確には母から) 受け継いだ、いわゆる根なし草のセバルは、あらかじめ失われた父の言語＝アラビア語について父の思い出とともに滔々と語るが⁴、作家としてフランス語で書く理由として次のように語っている—「[アルジェリアの私の従姉妹たち、父の姉妹たちの声を] 私は聞き、そしてそれを母の言葉で書きたい。父に、父の言葉に、アラビア語に、父のアラビア語の沈黙に近づくために」(*L'Arabe* 50)。取り返し不可能なルーツについて追求する姿勢は、自らの作品の主人公たち、とりわけシェラザードと分かち合うものがある。両親の経験した「二重の追放」を受け継ぎ、「孤独と、多数派から外れていること」(Sebbar et Huston 50)を自分が負うものとして引き受けるセバルにとって、二つの文化を断片的にしか所有していない「ゼロ世代」と呼ばれる移民第二世代と心情と境遇を分かち合う。そんな身の上の思春期の娘シェラザードをセバルは「私の共犯者」(Sebbar et Huston 79)と呼ぶ。あるインタビューで自らの作家の立場と移民世代との関わりについて、次のように述べている。

私は一書く動機の一つがそれだったのですが—この国[アルジェリア]に自分を結びつける必要があるのです。マイノリティ、特にマグレブ出身のマイノリティの女性や少女、子どもの文化や、家のなかで起こることに私の興味が集中するのは、私が二つに分断され二重の帰属をもつことに由来するからで、私がこの人間だったら、向こうの人間だったらどうなっているだろうと考える好奇心をかきたてられます。移民の少女がそれを書けるとは、いわゆる生粋のフランス人の女性が私と同じまなざしでものを見るとは思いません。感じて、把握し、書く—その方法は私固有の立場の特別なものだと思います。(Hugon 36)

フィクションの主人公シェラザードはいわば冒険譚をとおして、失われている二つのルーツを、少なくともその手

がかりを学習していく。「学習」と記したのは文字どおり、知らなかったもの・こと、所有していない知識を学んで獲得し、学ぶために移動し世界を広げ、移動しつつ自己形成をしていくからだ。シェラザードにとって、その最大のきっかけがドラクロワの『アルジェの女たち』だった。

2. シェラザード三部作

上記のインタビューの幾分楽観的な発言が80年代になされたものだということは考慮する必要がある。フランス80年代はミッテラン社会党政権誕生とともに、マグレブ系移民第二世代が、アラブ人を指す差別語の「ブール」Beur⁵と自らを呼んでその存在を主張し、「相違への権利」*Droit à la différence* という多文化社会フランスに希望を託すキャッチフレーズが生まれた時代だった。83年の「ブールの行進」⁶の時期には、マグレブ系移民第二世代は新しいフランスの原動力として、メディアの注目のまっただ中にあったと言ってもよい。89年から国中を論争に巻き込んだ公立学校でのイスラームのスカーフ問題、イスラーム原理主義の興隆と2001年9月11日の合衆国での同時多発テロ、2005年秋の全国に飛火した郊外の若者の暴動—フランスでの移民第二世代へのまなざしは、異なるエスニシティが共存するフランスを表す「ブラック・ブラン・ブール」Black-Blanc-Beur という言葉がもてはやされたサッカーワールドカップ優勝の98年をピークに変化していく⁷。スカーフ問題に対する決着、「移民系」と特殊な呼称で括られる住民の統合、郊外のイスラーム問題などが表出し、「共和国」の原則をめぐる議論は現在もつづいており、「相違への権利」という80年代の合言葉は遠い過去のものとなってしまった。

セバルの三部作も80年代の社会風潮に後押しされて書ききった感があり、第一作『シェラザード、十七歳』と第二作『シェラザードの手帖』(Sebbar 1985;以下『手帖』)は、ブール世代に希望を託した痛快な物語になっている。第三作『シェラザード狂い』⁸(Sebbar 1991)でシリーズは完結し、完結作は奔走する主人公を遠くレバノンにまで赴かせ、広く地中海地域全体のなかでのイスラーム文化を出自とする女性のありようを追求する作品だが、無理にまとめようとする苦しさも見受けられる。その一因として、ソヘイア・キアンが指摘するように、「[80年代に] 反移民、人種差別主義への応答として多文化主義がもちだされたが時流は変わり、フランスでもアルジェリアでも[90年代は] 喪失、決裂、相互理解の不可能性といった問題がとりあげられるようになった」(*Ecritures* 83-84) こともあげられる。キアンは、セバル作品のテーマや趣向が90年に入ってから変わったと分析している(*Ecritures* 79-90)。

ジェバルとセバルの生きた背景の違いを押さえ、かつ時代の流れも考慮に入れて、フランス生まれ、パリ郊外育ち、十七歳のアルジェリア系移民第二世代の80年代の家出少女⁹とオダリスク絵画との遭遇に的を絞りながら三部作を検証してみる。シェラザードは当時メディアがとりあげた、マグレブ系移民二世女子によくみられた家出娘である。ただし、彼女は読書という趣味をもち、ポンピドゥーセンターの図書館を逃げ場とし、読書して昼の時間を過ごす。彼女の父や兄は、家出娘が身を寄せるとされる歓楽街

の店を探し歩く。

まず、おおまかに三作の梗概を提示しておく。『シェラザード、十七歳』は、英語に由来するスクワットと呼ばれる不法占拠した建物に暮らす若者たちと主人公の交流を背景に、オダリスク絵画に特別の愛着を示すジュリアン・デロジエというアルジェリア育ちのピエノワールの青年と主人公が知り合う。ドラクロワ『アルジェの女たち』をきっかけに、彼女は自分のルーツに関わるアルジェリアとオダリスク絵画、とりわけマチスの『赤いキュロットのオダリスク』に強く惹かれアルジェリア行きを決意する。そして極左秘密組織に属するスクワットの仲間、ピエロの車に同乗してマルセイユをめざすが、ロワール川を渡る際に木に衝突し、車は爆発、ピエロは死亡¹⁰。シェラザードは行方をくらます。

『手帖』はその後日譚で、車の爆発事故からマルセイユまでたどってきた道のりを『千夜一夜物語』のシェヘラザードがシャハリヤール王に夜伽をするように、ヒッチハイクで拾ってもらったトラックの運転手、ジルに話して聞かす。彼女がオルレアン近郊からマルセイユまでたどり着いた経緯にさまざまな作り話を織りまぜ、読んだ本、出会った人々、そしてオダリスク絵画を所蔵する美術館の数々をジルに話す。注目すべきことに、ジルとシェラザードのフランス北上の道程が83年の「プールの行進」のルートに重なっている。また、北上する目的のうちの一つはマチスの生地、カトー・カンブレジに行くことだった。フランスを縦横に移動しながら、フランスについて殆ど知らなかった主人公は、複数の文化が複雑に混じりあう80年代半ばのフランスの多様な姿を発見する。そしてその間、ジュリアンはあらゆる手をつくして、シェラザードと落ちあおうとする。ジルはシェラザードをパリの入口で降ろし、彼女の書き留めていた手帖の一冊が座席に置き忘れている。

完結作『シェラザード狂い』は、アルジェリア、そしてレバノンに旅立った主人公の現実世界と、ジュリアンがシェラザードを主人公にして撮ろうとする映画のシナリオというフィクションが交錯する。内戦下のレバノンの屋敷で女主人に迎え入れられてくつろぐシェラザードたち四人の構図は、ドラクロワの『アルジェの女たち』をなぞっている。

三部作をつきつめれば、世間を知らない家出娘が自らのルーツに関わる美術作品を契機に、行動力と機智でフランス及び地中海世界へと旅立ち、自律性と自立心を獲得していく成長物語であるが、以下では、作品中のオダリスク絵画の役割をより綿密に考察する。事実、三作中にはカタログのごとく19世紀、20世紀のオリエンタリズム絵画の名が頻出し、網羅的、さらに見ると体系的なオダリスク絵画の参照は、高校生や大学生が、西欧が構築したこの絵画ジャンルの特徴を俯瞰するのにちょうどよいかもしれない。近代西欧美術でイスラーム圏の女性がどのように表象されるか、このイメージこそ主人公が拒否し、固有のアイデンティティを探し始める理由になるのだが、『シェラザード、十七歳』を文学と絵画の相関性、パリの美術館を知るための教育の場で使おうという論考もある（Engelking, Mortimer 2005）。

3. 『アルジェの女たち』

シェラザードはジュリアンに連れられて初めてルーヴル美術館に行き、『アルジェの女たち』を見る。ジュリアンは、彼女のスカートの結び方が幼少期に過ごしたアルジェリアの村の女たちを思い出させ、絵を初めて見た主人公は、女たちの一人が自分と同じ緑色の眼をしていることに気づく。「緑色の眼」は西欧文化のなかでエキセントリックなしるし¹¹であり、またマグレブにおいては先住民族の「ベルベル性」を示す特徴でもある。自分との親縁性が主人公の探究心をかき立てる。以下は「ドラクロワ」という章の後半である。

こんなふうに二人は何度もドラクロワの絵まで歩いていき、そしてこの絵以外の女たちには目もくれず引き返していった。彼女たちを見るために来ただけだから。帰り道、セーヌ川の河岸を歩く時ジュリアンは、水ギセル^{カスーン}をもつ女の髪を飾るバラの花、三人の間に置かれた火鉢、素足の女たちの金の足輪、美しい黒人女の手、ミッドナイトブルーの短いボレロ、そしてその下の、尻にぴっちりまとった赤と黒の縞模様の腰布、ものうげな白い肌の女主人を見おろす立姿の黒人女のまなざしなどを語って止まなかった。ジュリアンはシェラザードに、ハーレムの女たち、ドラクロワとフロマンタンの北アフリカ、アルジェリアで知った農場で働くアラブ人たちや入植者^{コロニ}たち、いつも一緒に遊んでいた近所の子どもたちのことを話した。

「じゃあ、戦争は？」シェラザードが言う。

「それはまた別の話さ……」

ジュリアンはルーヴルのあとでアルジェリア戦争の話はしたくなかった。（13-14）

二人のルーヴル通いは、同じ『アルジェの女たち』を目指せども動機は異なる。ジュリアンはオダリスク絵画の並外れた愛好者ゆえ、シェラザードは自分と同じ緑色の眼ゆえに惹かれる。この絵が、主人公の成長と冒険譚の発端となるのだが、この部分だけから、以降の全体に関わることが三点指摘できる。まず、実在する絵画をめぐる叙述であるが、画像挿入なしの文章のみによる描写であること。次に、この絵をきっかけとして主人公はアルジェリアについての知識を獲得していくが、その方法は体系をもたない断片的なものになること。最後に、ジュリアンは指南役でもある反面教師でもあること。

第一点目。『アルジェの女たち』と後半に言及される『赤いキュロットのオダリスク』について、絵は主人公が見た通りのように、初めて絵に接して印象に残る部分を強調するように文章として提示される。作品画像を一葉添えれば事足りるのだが、この描写は、作者が意識したかどうかは別にして、備忘録がわりに手帖にメモを記すシェラザードの「書く」という作業と重複する。オリエンタリズム絵画のオタクであるジュリアンからすれば、シェラザードはつねに見られる客体である。事実、ジュリアンはこの絵の緑色の眼の女性にシェラザードを重ね、彼女を被写体として写真に撮り部屋に飾り悦に入る。ジュリアンが読書するシェラザードを眺める時は、彼女は同時に絵画の「読書する女」liseuseにもなる（76）。「読書する女」はオダリ

スクと同様、19世紀、20世紀西欧絵画の主要な主題であった。ポンピドゥーの美術館で、主人公はマチスの『黒い背景の読書する女』に『アルジェの女たち』と同じインパクトを受ける(244)。ここでも、絵のなかに自分の姿をみとめたからか。それから絵の作者名と題、制作年を手帖に記すのだが、「書く」という能動的作業は、ジュリアンが妄想する「物憂げに横たわって、虚ろなまなざし、半ばまどろんだ」(190)眺められるだけのオダリスクを、書く女 *écrivaine*、そして語る女 *conteuse* へと導いていく。語り手としてのシェラザードは次作『手帖』の重要な要素であり、また彼女の「手帖」がその語りの元になることもほのめかしている。

ついで、アルジェリアに関する一枚の絵を契機に、主人公は、ジュリアンからアルジェリアの情報を得てゆく点について。両親からの文化的遺産を継承しない「ゼロ世代」と言われる移民第二世代、特にマグレブ系の彼ら、彼女らはどのように文化的情報を獲得していくのか。それもマスメディアから容易に伝わるポップカルチャー以外の文化は、『シェラザード、十七歳』では、主人公が若さと境遇ゆえの知識不足を補うのに、ひじょうに断片的な情報と偶発的な手がかりをもとに、あらゆる情報を分類や選別なしにキャッチし、混ぜこぜにしながら吸収していくさまが描かれる。美術館というハイカルチャーの場所は、移民第二世代の若者にとって、自動的に排除すべき文化の象徴になっている¹²。彼らの学業での成績不振はしばしば指摘され、本編でも、マルセイユから来たジャミラは「郊外団地地区の娘のうち、バカロレアを受験して唯一合格した」(29)娘だし、高校に行かなかったドリスは、「スーアル」という蔑称がスターリンという人物を指すのは知っているが、どういう人物か詳しく知らないままである(79)。そういう境遇にとって、「美術館の絵は、墮落したブルジョワの、退廃的西欧の文化、古くさくて、重苦しい、くたばった」(238)、自分たちには無関係のものであり、シェラザードはばかにされると分かっているのでスクワット仲間の誰にも、ルーヴルや読書のことは言わずにおく。シェラザードもまた、大学生のピエロやバジルから見ればものを知らず、「おまえは何も知らないんだな」を連発される。五月革命時に名を馳せたトロツキスト活動家、アラン・クリヴィエヌはまだしも、ラジオでポップスを絶えず聞くこの娘は当時のレゲエのスター、ポブ・マーリィの顔が識別できない。

主人公はレヴィ＝ストロース的ブリコラージュの方法で、生きるための知識を構築してゆく。たとえば、アルジェリア仏語文学の祖、ムルード・フェラウンを手始めとして、彼女はこの文学に親しんでいくのだが、そもそもフェラウンを読むきっかけは、シェラザードの母方の祖父から同郷の作家として名前を聞いたことがあるだけだった¹³。また、アルジェリアの習慣や伝統、宗教(と同時に家族のルーツに関するもの)に関しては、両親からではなくコーラン学校の導師だった祖父から教わる。主人公は町の図書館にフェラウンの作品を請求し、図書館員が読書好きの彼女及び友人のために、「フランス人が知らず、また自分たちの知的遺産に属さないものであまり興味ももたず、決して読まない」(97)文学の書架を充実させ、それらを彼女は手当たり次第に読み耽る。ここで留意すべきは、恐らく出奔前

には、この図書館からジェバルの本を借りていたはずなのに(132)、ドラクロワの絵画を知らずにいたことだ。同様に、家出後にポンピドゥー・センターの図書館に足繁く通いつつも、有料であるからか、上階の近代美術館には一度も足を踏み入れたことがない。本編の最後では、そこでマチスの『赤いキュロットのオダリスク』を「発見」することになる。

オダリスク絵画愛好家のジュリアンを介して、スクワットの仲間には無縁のハイカルチャーの世界に触れ、主人公はハイ／ローの文化の区分化を知らないまま、知識と自己を構築していく。「アイデンティティと自分の起源をつかもうと、シェラザードはアルジェリアに関わるものすべてにくらいつく」(Kian, *Ecritures* 131)が、盗品の複数の手帖にアトランダムに書きつけたメモはその集成である。自分の出自に関わる土地の文化や歴史、関係書籍、書記アラビア語—知りたいことの殆どを、彼女は「書物の人」ジュリアンから「他者」の文化を学ぶように教わるのだ。ブリコラージュ的に蓄積される情報はまた、ジュリアンから横領する情報でもある。シェラザードとジュリアンは、同じアルジェリアに関して、お互いが知らないことを相補い「交換」する協力者でもあるのだが(たとえば、シェラザードはジュリアンにアルジェリア口語方言のアラビア語を教えている)、同時に、シェラザードがジュリアンの部屋からものをくすねるように(実際、彼女の身の回りの品物は盗品だらけだ)、ジュリアンの思い入れとは別の方向に彼の知識を使って自発的に自己を構築し、壁に貼られた自分の写真を破り(159)「私はオダリスクなんかじゃない」(206)と書き置きを残し、ジュリアンの部屋から逃走してしまう。獲得あるいは横領し、次いで逃走して自己形成を実現する—このやり方を、フランソワーズ・リヨネは「[ミシェル・セールの意味での]典型的な寄生者」(Lionnet 74)と呼び、アンヌ・ドナディは「[この家出娘]は、言語のみならずフランス社会のあいだを、その表象と組織体系を混乱させながら、文字どおり盗む／逃げる」(Donadey 111)と述べる。「盗む」も「逃げる」もフランス語では同じ一語 *voler* になる。

ジュリアンは文化のレベル分けができるインテリ青年なので、お気に入りの絵を見たあとの幸福な余韻のなかで陰惨なアルジェリア戦争について話したくはないし、避ける判断力をもっている。対してシェラザードは知らないゆえに、すべてを混ぜこぜにする。別の見方をすれば、社会の周辺部を生きるスクワットの仲間の「ロー」カルチャーと、高学歴の白人フランス人の「ハイ」カルチャーは絶対交わらないのだが、唯一シェラザードのなかで双方がクロスする¹⁴。

最後の点の反面教師としてのジュリアンについて。以上述べたことから推測できるように、三部作を論じた多くの論考が、ジュリアンは過去の植民地としてのアルジェリアにノスタルジーを感じ、オダリスク絵画に代表される西欧が作ったオリエント神話にとらわれた、シェラザードの合わせ鏡、反作用を生じさせる触媒の役割としてみなしている。彼は確かに、西欧側の絵画や書物で想像のアルジェリアを築きあげる。たとえば、ヴァレリー・オルランドは「レイラ・セパールは、西欧世界がこれまでずっと長いこと保持してきたオリエント神話を喚起し、次いでその非を明ら

かにするためにジュリアン・デロジエという人物を作った」（Orlande 161）と断言し、ジュリアンをコロニアルなまなざしをもつ西欧白人男性の代表のように解釈するが、ジュリアンとシェラザードが同じアルジェリアを共通項に交換すべきものをもっている点、アルジェリア生まれのフランス人として、彼もまた複雑な出自の背景をもっている点で、主人公の対立項と単純化はできない。

驚くべきことに、作者セバールは自分の立場はシェラザードよりも、むしろジュリアンだと述べている—「自分自身はジュリアン・デロジエのような人物にむしろ近いと思います」（Hugon 36）。または「シェラザードよりもジュリアンのほうが私のまなざしをもっていると思います」（Kian, « Une Entrevue » 133）と。「アラブ・イスラム文明や文化について私が知っていることは、フランス語で書かれた本、あるいはアラビア語、英語、スペイン語から翻訳された本から得たもの」（Sebbar et Huston 149）とセバール自身はナンシー・ヒューストンとの交換書簡のなかで述べているが、これこそはジュリアンがしてきたことではないか。ジュリアンは、書物や絵画を通じて自分の探究しているのが「想像のオリエント／アルジェリア」であると自覚はないのだが、それらを通じて自分のなかのノスタルジーとしてのアルジェリア、自らのルーツに接近しようとする試みは、確かにセバール自身と方法が似ている。シェラザードはジュリアンの知識を踏襲せず、それを踏み台に別の場所に行く術を身につける。その展開は次作と完結作とで読むことになる。

シェラザード三部作は主人公が自分のルーツを「学習」する過程だと上述したが、ドラクロワの絵画は学習の第一歩、学習態勢に入るためのきっかけであり、第一作『シェラザード、十七歳』は学習の基礎編と言えよう。まず、オリエンタリズム絵画、オダリスク絵画とは何かから学習すること—この点が、ドラクロワの名画の構図を現代のアルジェの女たちにスライドさせて「横領」するジェバールとのちがいである。ジェバールの手法は、既に書かれたものを消してあらたに書きかえるパリンプセストの手法と呼べるだろう（Donadey 97, 139）。

4. オダリスク絵画、ポンピドゥー・センター、マチス

『アルジェの女たち』を発端として、シェラザードはドラクロワの日記、ウジェーヌ・フロマンタンの手記、アルジェリア戦争に関する本を読み、ルーヴルではドラクロワの絵のそばにアングル『トルコ風呂』（図1）、シャセリオー『エステル化粧』（図2）を偶然見つける。裸体の白い肌の女性のそばには必ず黒人の召使がいる—まだ、オダリスク絵画というものを知らなかったシェラザードはジュリアンに訊ね、彼はメモを見ることなく、アングルの『グランド・オダリスク』から、ドラクロワ、ルノワール（図3）、マチスの系譜を示し、マチスについては1912年から29年のニース時代に精力的にオダリスクを描いたと、うち8作品の題をすらすら言っただけ¹⁵。



図1 ドミニク・アングル《トルコ風呂》
1859-63年頃、110×110cm、ルーヴル美術館



図2 テオドール・シャセリオー 《エステル化粧》
1841年、45.5×35.5cm、ルーヴル美術館



図3 オーギュスト・ルノワール《オダリスク（アルジェの女）》
1870年、69×122cm、ワシントン・ナショナル・ギャラリー

「いつも裸の女の人なの？」と「オダリスク」という単語を初めて聞いたシェラザードが訊ねた。

「と言うより裸にされたと言うべきかな。ターバンをつけているだけのアングルは別として僕が知っているオダリスクは大体、腰のすぐ下まで届く膨らんだズボンをはいて、胸が透けて見えるか胸元を広くあけたブラウスみたいなのをはおっているんだ。どのオダリスクも皆、寝そべって物憂げでうつろなまなざし、眠ったように見える……西洋の画家にしてみれば、投げやり、かつ扇情的で背徳を感じさせる誘惑を東洋の女性に見出すんだろう。19世紀絵画では「オダリスク」と呼んでいるけれど、オダリスクがオスマン帝国では単に女の召使をさすこと、宮殿のハーレムの女性に仕える女奴隷の意味だっことは忘れてしまった。もしよければ、ポンピドゥーセンターの近代美術館に行って見せてあげよう。」(189-190)

この後もジュリアンの講釈は、マネ、コロー（図4）、ルノワール、マチスらの絵をあげて続くのだが、この会話をとおして主人公はオダリスク絵画に強い関心を抱き始める。セバール自身はインタビューで次のように発言している。「絵画をとおして、ジュリアンの恋するまなざしをとおして、シェラザードは芸術が再構築した「オリент」を発見するのですが、それは彼女の両親、読み書きを知らず、コード体系を知らない国で移民として生きる両親の文化にあらたな価値を与えることです。ドラクロワ、シャセリオー、マチス[……]は一種の仲介者、西洋から東洋へ、東洋から西洋への橋渡しの役を担っています」(Kian, « Une Entrevue » 133)。



図4 カミーユ・コロー 《オダリスク》
1871 - 73 頃、51×61cm、バーゼル美術館蔵

「学習」しつつある主人公が次のステップに移るのは、ポンピドゥー・センター近代美術館にあるマチスの『赤いキュロットのオダリスク』と向き合う時だろう。センターの上階にある閉館後の近代美術館に忍び込んだ彼女は、キスリング、ボナール、レジェ、ピカソ、バルチャスの作品にまざって、マチスの『黒い背景の読書する女』に衝撃を受けたあと問題の絵をみつける。プレート記載事項をすべて手

帖に記してから、絵をじっと見る。

シェラザードは「赤いキュロットのオダリスク」を見た。

どうして心がときめくのか理解できなかった。絵の中の女は横たわり、胸を露わにして薄布をまとった腕を頭の後ろで組み、髪のは半分は真珠の縁飾りがついたモスリンのスカーフで隠れている。丸くて小さい黒い眼。小さい口。ポーズのせい、殆ど二重顎になっている——シェラザードは彼女が美しいとは思わなかった。膨らんだ赤いキュロットは臍の下までずり落ちている。ブラウスの前を開いて胸と腹部は裸だ。赤いキュロットは脛のところで締まっていて金糸を施した黄色い布の折り返しとなり、キュロット下部の黄色い花に合わせてある。左足の折り返しには緑色も入って、足は若いアーモンド色とくすんだ金色のビロード縞模様のマットのうえで折り曲げている。マットのまわりの壁は黄と赤、青と白、緑と白のアラベスク模様。寝そべったオダリスクの右手の小さな円卓には花瓶があって赤い花が三輪飾られているが、少し萎れている。床は赤い。キュロットと同じ色だ。(245)

現在であれば携帯電話のカメラで画像を収めるのだろう。これらの事柄は恐らく、彼女の手帖にデッサンではなく、文字で書き留められる¹⁶。それら走り書き（物語としても読める）を次作『手帖』でジルが読むことになる。図書館で馴染みのポンピドゥー・センターの美術館に初めて足を踏み入れるのもこの時である。この文化施設の本来の複合的役割が、この時始動すると言ってもよい。ジョルジュ・ポンピドゥー国立芸術文化センターの正式名称で図書館、美術館、シネマテーク、音楽研究所などを抱える、様々な形態の文化活動の拠点として開館したのが1977年だが、セバールがこの場所を選んだのは単に当時の若者のたまり場的な流行の場所というだけではなく、ルーヴルというフランスの栄光を象徴する権威的場所との対比もあるだろう。また、ルーヴルが美術という芸術の単一的な面を担うのに対し、ポンピドゥー・センターは同時代の総合的な文化活動を支えるのであって、ルーヴルの一枚の絵を起点に、文学、映画、音楽、そしてさまざまな文化事象へとネットワークをはりめぐらしていくシェラザードの行動は、まさにポンピドゥー・センター的なものに変ずる。『手帖』で彼女の手帖を開いたジルは、フランスの市町村名を順不同に書きつらねた頁に遭遇して、その無秩序な散らばりように驚くが、書き手のなかでは整理のついたネットワークを形成しているのだ(90)。『シェラザード、十七歳』の教育的美術論を書いたエンジェルキングの次の指摘は的を得ている——「ルーヴルとポンピドゥー・センターは、現代のパリを特徴づける未だ論争がやまない古いものと新しいものの衝突、スタイルとアイデンティティの衝突を表しているが、それはセバールの小説中で起こる二つの主要な問題を明白にする。つまり芸術とは誰のものが、そしてフランス性をどうやって定義できるかという問題を」(Engelking 622)。

次作で問題になるのは、まさしくフランスのフランス性 *francité* / *Frenchness* で、『赤いキュロットのオダ

リスク』に感銘を受け、全面的な光を感じさせる明るい画面に恐らく心を動かされたのだろう、主人公はアルジェリア行きを決意する。実際にはマルセイユでフェリーに乗り遅れ北上するジルのトラックに乗るのだが、この絵のプレートにメモした「アンリ・マチス／カトー・カンブレジ 1869 — ニース 1954」の部分に頼りに、マチスの生地（フランスの北部）の仏北部のカトー・カンブレジ、対して光溢れる終息の地ニースと、フランスの南北端の地に赴く。ルーヴルの長く暗い通廊の先の『アルジェの女たち』で感知し、『赤いキュロットのオダリスク』でみとめた光を追い求め（*Carnets* 238）、オダリスク絵画に導かれるようにフランスを周遊しつつ、一元性に還元できない多様性にみちたフランス、とりわけ、著者自身が強調した「西洋から東洋へ、東洋から西洋への橋渡し」によって混成した現代フランスを各地で発見、経験することになる。

5.『アルジェの女たち』から出発して

体系化されない文化の断片しか持ちあわせないシェラザードにとって、ジュリアンによるオダリスク絵画紹介が教室内の講義であるなら、続く二作は学習したことの実践となるだろう。さらには読者への練習問題提示、そして作者自身への宿題への解答と。とりわけ、第二作『手帖』は、一作目がほぼパリを舞台に展開したのに対し、主人公をフランス各地に赴かせフランスの周縁部を体験させる。その道中つねに参照するのは、最初の女性社会主義者と言われる画家ゴーギャンの祖母、フローラ・トリスタンの日記『フランス一周』とランボーの書簡集である。どちらも19世紀の社会の規範から外れた放浪者の手記である。また、主人公のたどる道筋は、オダリスク絵画を所蔵する美術館のある都市を網羅しつつ、83年のプールの行進の旅（マルセイユから北上し、仏北東部を通過してパリまで）、マチスに所縁のあるカトー・カンブレジ（北西部）とニース（地中海沿い）、アングルの生地モンターバン（南西部）、というふうには、シェラザードなりのフランス一周を形作る。物語展開の複雑さに言及する紙幅はないが、オダリスク絵画関係以外にも、話題にあがる人物や作品名を列挙すると、V. S. ナイポール、ジェシー・ノーマン、ラシッド・タハとカルト・ド・セジュール、シャルル・マルテル、アブデルカーデル、セルジュ・ゲンズブール、イザベル・アジャニ、ピエール・ロチ、『嫉妬』（J. L. ゴダール）、『パリ、テキサス』（W. ヴェンダース）、『ライラとマジヌーン』、『パリからエルサレムへの旅程』（シャトブリアン）、さらに労働者階級の運転手ジル周辺の大衆文化（テレビ番組や流行歌、雑誌、コマーシャル）が加わり、前作にも増して無秩序な雑多性を呈する。

時代と空間、事物と事象の混淆を通じて主人公がめざすのは、「混成し雑種の¹⁷新たな象徴的な空間のかけらを寄せ集めること」と、現代フランスのポストコロニアルなアイデンティティを『手帖』に見てとるリヨネは言う（*Lionnet* 68-69）。紋切型の¹⁸「美し国フランス」のイメージを打ち壊し、六角形と呼ばれるフランスの文化的現実を揺り動かす。さらには、第三共和政の子どもたちが教科書として読んだ『二人の子どものフランス巡歴』*La Tour de la France par deux enfants* の批判的模倣にも読める。複数のエスニシティ、文化がモザイク状に寄せ集まる

フランスに、シェラザードはとりわけ、フランスの長い歴史のなかでアルジェリアをはじめとするマグレブがもたらしたもの、マグレブから継承したもの、現代のフランスのなかで出会うマグレブの人々やものを見聞し、二つの国から受け継ぐ自らのアイデンティティを確認していく。一つだけ例をあげれば、シャルル・トレネの『¹⁹美し国フランス』をアラブ風メロディーでカバーし、同じ歌詞をまったく別の意味に歌いあげるリヨンのロックアラブ rockarabe のバンド、カルト・ド・セジュールの衣装のくぐり込みはまさにそれだ。カルト・ド・セジュールは滞在許可証を意味する。シェラザードはジルに説明する。

これが彼らの着こなし、スタイル、誰もこんな真似できないわ、なぜって向こうのお爺さんたちみたいにシェシア¹⁸をかぶり、シェシアってなんだか知ってる？ その辺の若者と同じにジーンズを履いてアメリカの放出品の戦闘服を着てみたり、それから蚤の市でみつけたタキシードとか刺繍のボレロを着たり、それらをいっしょに着るなんてほかの誰にもできっこない……分かるかな……トルコ、アラブ、ベルベル、アフリカの昔からある衣装はお爺さんの代から受け継いだもので、それにみんなが着てるヨーロッパスタイルを混ぜるのよ、すぐくっついてくよ、でも何でも混ぜこぜで着ればいわけじゃないの、よく考えてアレンジしてるんだから……（159）

ジュリアンの理路整然とし体系化されたオダリスク絵画論とは裏腹に、主人公が駆けつけて訪れる美術館の作品鑑賞は、その地で遭遇する出来事に何らかの影響を即座に与えてゆく。その一例が、リヨネの指摘する、友人ファリッドの死を知らせるため、彼女がリヨン郊外の団地に住む家族を訪ねるくだりである（*Lionnet* 70-71）。

4号塔、8階、76号のアパルトマンのドアを少年は指した。シェラザードは呼び鈴を鳴らした。（……）通路は暗く、玄関は狭い。彼女はドアの前に立ったままだった。（……）すぐにシェラザードはこの人〔ファリッドの母親〕にファリッドのことを知らせにきたのは間違いだったと考えた。これから自分が話すことはこの人を傷つけるだろう、嘘をつかなければ。なぜここまで来てしまったのだろう……とても緊急なことのように、シェラザードはパリ郊外からマルセイユ、リール、彼女が赴くところどこでも知っている、みな同じに似ているこの郊外団地、HLMに駆けつけたわけだが……彼女は一人、踊り場であまり……まるで、自分の母さんに、姉や妹たちに、そして日曜だったら父さんに対面するような気がした。（……）

ファリッドの母の家で、シェラザードは「見てきたばかりの」『オダリスク、鸚鵡と女』（図5）を、豪華な芳香と絹地に包まれ、まどろんだようにけだるいフランス絵画の東洋風の女たちを、ハーレムの白い肌の奴隷女たちを思い出していた……彼女らは愛されただろう。そして大都市の周縁部の団地に住む、今のフランスの「東洋」の女たちは、自分の母、ファリッドの母は？ ドウエ、ルーベ、トゥルコワン、ランの北部に住む母親たちは、

マルセイユの友人ネフィサが言っていたように寒さと灰色と黒のレンガのなかにいるのだろうか？(Carnets 151-153)



図5 ウジェーヌ・ドラクロワ 《オダリスク、鸚鵡と女》
1827年、24.5×32.5cm、リヨ市立美術館

リヨネはこのくだりを、絵画のオダリスクを現代のフランスに生きる現実のマグレブの女たちへとずらし、その二つの境遇を比較して自分と自分の同胞の境遇を測定する術を体得していると指摘するが、もう一点別の重要な指摘は、ファリッドの家を訪ねる際のシェラザードの視点を、暗い通路と狭い入口を通してハーレムへ入る画家ドラクロワのそれにだぶらせていることである¹⁹。画家と同じ位置に主人公を立たせ、画家は夢心地で「ホメロスの時代」を幻視するのに対し、シェラザードは鑑賞したばかりの絵を思いながら、今を生きる自らと同じルーツをもつ女たちの境遇を考える。ポンピドゥーでマチスのオダリスクを見て「どうして心がときめくのか理解できなかった」彼女が、「まどろんだようにけだるいフランス絵画の東洋風の女たち」と自分のつながりをはっきり自覚する瞬間だろう。

同様の視点で『手帖』を読むと、主人公が絵のなかの女たちとだぶる光景が何度かある。たとえば冒頭で、ジルのトラックに無断で乗り込み身体をまるめて寝入るシェラザードの描写は、横たわるオダリスクにも見える(13)。ところがジルは絵画などに興味はないので、娘の汚れたジーンズを見て、彼の興味はその下の下着のほうにいてしまう。ジュリアンだったらどうだろう。川で水浴するシェラザードは「白いタオルをターバン風に頭に巻いている。背中を太陽に向けて座っている。日の光りが肩を照らし、アングルの浴女のように」(219; 図6)で、「ジュリアンだったらアングルを連想するだろう」が、ジルは絵と画家など知らないゆえ、アングルもルノワールもセザンヌも連想しないだろうと考える。他者は自分をどのように見るか、そしてクリシェとして描かれた眺められるがままの、自らと同じルーツをもつ女たちといかなる関係を切り結べるか。『手帖』の放浪物語は、主人公が魅了された絵の女たちを自分なりに描きかえる前作の応用問題であり成長物語である。ジュリアンの説明によれば「寝そべて物憂げでうつろなまなざし、眠ったように見え、(……) 投げやり、かつ扇情的で背徳を感じさせる」女たち、とりわけ、そのよ

うにこれまで見なされてきたドラクロワの名画の女たちを自分はどうか受けとめ、どう応答するのか。その答えの一つは、ジェバールやニアティ²⁰のようにパリンブセストのように今の彼女たち(アルジェの女たち)の側から「書き換え」ることである。『手帖』の次の情景は、セバールの同様の試みであろう。南仏の山間の町カストル近郊の小村にしっかり根づいたモロッコ人たちの婚礼の風景が、彼らのフランスでの存在を主張するように喜びをこめて描かれる。



図6 ドミニク・アングル 《ヴァルパンソンの浴女》
1808年、146×97.5cm、ルーヴル美術館

シェラザードはアッティカがくれた真っ赤なスカーフを巻いて踊った。女たちは皆で踊った。小さな娘たちも踊った。彼女はアッティカの女友だちを引っ張って輪の中に入れた。ドラクロワのアルジェの女たちに思いを馳せた。あの女たちが踊っていたら、こんな風に魅力的だったろう。アッティカの女友だちは、絵では水ギセルを持っている女と同じように緑と金色の服で、白いモスリンのチュニック、刺繍をした薔薇色の短いベストを着ている。黒髪には赤紫色の大輪の薔薇を一輪挿している。そんな格好で一晩中踊った。(253)

名画『アルジェの女たち』をアルジェリアに根を半分もつ少女のオリジナルをなぞるような『アルジェの女たち』の牽引力から始まった前作を継ぐ『手帖』は、シェラザードのフランス周遊最後のほうで、作者自身の宿題提出を準備している。ドナディは、絵画の「書き換え」が最高度に発揮されるのは完結作『シェラザード狂い』と主張している(Donadey 110)。シェラザードを主人公に映画を撮ろうとするジュリアンは、旅するシェラザードに追いつけども、また逃げられ、そのたびにシナリオを変更する。映画の一場面は内戦下のバイルートの邸宅で、その女主人とシェラザードを含む、年齢、国籍、民族がそれぞれ異なる

る四人の女性がドラクロワの絵の構図に倣い撮影のポーズを撮る。シナリオの書き換え、なごやかに談笑しつつも境遇を異にする四人の女性というふうに、ここには複数の読みが可能であり、単に「言葉に新しい意味を与え、これら[オダリスクたる彼女たちの西欧側から]の表象の書き換え」(Donadey 111)には留められない複雑な絡み合いがあるが、完結作の最後でシェラザードを「逃げ出したオダリスク」(202)と呼ぶのは、恐らく作者自身の一つの区切りの意味合いにすぎないだろう。

6. 画家とモデル、みつめられる被写体、カメラ

ジュリアンはカメラの被写体としてシェラザードに夢中になり、シャラザードはうんざりして拒否反応を示すのだが、カメラマン／画家＝モデルの関係は、見る／見られるという固定した関係のうえに成立し、ドラクロワの『アルジェの女たち』の制作現場を想像し、ジェバールが「哀しげに座った女たちの心の中は何も明かされない」(*Femmes d'Alger* 243)とあばいているように、19世紀初め、フランスの支配化に置かれたばかりのアルジェで、モデルになったハーレムの女たちの諦観したような受動性をジェバールは想像する。外部の男性は通常立入禁止のハーレムに、ドラクロワがある意味力づくで入ったこともジェバールは示唆していた。芸術家として名を残す画家の北アフリカ訪問の役割が、モロッコ派遣使節団の記録係だったことも忘れてはならない。報道、記録としての絵やデッサンは、その後写真に取って代わられる。写真はまた、複製となって大量に出回る。今世紀初頭、アルジェリアの原地民女性をモデルに紋切型のエロスを演じさせて写真が撮られ、フランス本国でそれらは絵葉書として大量に流布した。マレク・アルーラは『コロニアルなハーレム』という題の写真集で、その黄金期と言われる1900年から1930年のあいだに製作された絵葉書を集めて、図像から読みとれる支配者側の欲望とファンタズムを解説している。「恐らく何百万と複製されたアルジェリア女性の像の背後に、原地民に対するコロニアルなものの見かたの一つがおおよそかたどられる。それは、支配者であり、さまざまな形の暴力の所有者が手にする、まなざしの権利の行使と言える」(Alloula 11)。

セバールの三部作がドラクロワの絵画を発端として、そしてそれを軸に展開するのなら、絵画の役割を受け継いだ写真、そしてジュリアンが「それはまた別話」と返答をためらったアルジェリア戦争にも触れねばならない。1962年に終わったこの戦争については、アルジェリアの伝統を教えてくれる祖父も―彼の妻＝シェラザードの祖母はこの戦争の犠牲者である²¹―黙して語らなかった。セバールは、ジュリアンの部屋のテーブルにさりげなく、マルク・ガランジェの写真集『アルジェリアの女性1960年』を配置する。『シェラザード、十七歳』と刊行年が同じなので執筆時に刊行されたのだろう。写真の展覧会は1970年に既にリヨンで行われていたので、刊行されて即座に物語に組み入れたのかもしれない、逸話はごく短いものとなっている。シェラザードはこの写真集を何気なくめくり、しまいに泣き出してしまふ。女性たちの肖像写真はアルジェリア戦争に召集されたカメラマンが、現地民の身分証明書を作成するという軍の命を受けて、周辺部の

全村民を写真撮影（特に女性）したものの一部である。撮影者ガランジェの序文によると、一日200人を休む間もなく野外で撮影し、普段は外部の人間に対して着用するヴェールを外して撮ることが絶対命令だった。彼は「間近に、黙したままだが彼女らの激しい抵抗のちからを感じた。これらの写真をとおして、それに敬意を表したい」と述べている(Garanger)。ちなみに、セバールは後にガランジェの写真にテキストをつけて本を出版する。物語中、シェラザードは涙の理由を自分の言葉でまどうまく説明できないゆえ、次のような叙述が添えられる。「これらのアルジェリアの女たちは機関銃たるレンズの前で、皆同じ激しく荒々しい同じまなざしをしている。その獐狂さを、写真の像では決して制御や支配はできず、ただ記録することしかできない。これらの女たちは皆、同じ言葉を、母と同じ言葉を話していたのだ」(*Shérazade* 221)。

シェラザードにとっては、自分とアルジェリアで育った母を歴史の文脈につなげる瞬間でもあるのだが、ジュリアンには、この写真集の女たちも絵のなかのオダリスクたちと同じに見えるのだろうか。ジュリアンは、モデルを描く画家と同じ立場で、シェラザードを被写体としてカメラに収めるのに夢中になっている。セバールの視点は「ジュリアン・デロジエのような人物にむしろ近いと思う」と自ら発言しているのは既に見たとおりだが、シェラザードとジュリアンの二人の人物をとおして、自らの二つのルーツを探っていくのがシェラザード三部作であり、アルジェリアとフランス、どちらにも深く根を降ろすことのない、いわば追放された状態 *exil* で／について書き続けていくのだろう。ジェバールとセバールのオダリスク絵画への反応を考察したドナディは「ジェバールのフィクションはパリンプセストのような絵画に喩えられるが、セバールの作品は地中海的モザイクのように描けるだろう」(Donadey 139)と結論する。ハイ／ローの文化の境目を混乱させ、体系化されないまま貪欲に吸収し、ブリコラージュ的機智で、他人の知識やものを自分のサイズに合わせて獲得していくセバールの主人公は、地中海の周辺を放浪しつつ、文化的・歴史的なその遺産を寄せ集めていく。マグレブ系移民二世、いわゆる「プール」に対する80年代の政治的・文化的追い風のなかで、創作の人物シェラザードに、作者自身が共犯者として伴走者として期待を寄せていたことは言うまでもない。

注

- 1 図書館員は利用者の利用状況については個人情報を守るべき立場にあるので、本来ならばこの箇所はありえない状況であろう。
- 2 拙稿「出奔するマグレブ系『移民第二世代』の娘達の物語とテリトリー―レイラ・セバールの八十年代の小説を中心に―」参照のこと。
- 3 Huughe, Kian *Ecritures et transgressions d' Assia Djébar et de Leïla Sebbar*, Merini, Mortimer, Solé « Une jeune Algérienne qui rêvait en français » はジェバールとセバールの二人を同時に論じている。博士論文を考慮すれば、二人の作家をペアで扱う論考はさらに増えるだろう。フランス語マグレブ文学のサイト LIMAG Littératures du Maghreb を参照のこと (<http://www.limag.refer.org/>)。2001年までのセバールのみの参照資料や文献はLarondeに詳しい。
- 4 Sebbar *Je ne parle pas la langue de mon père, L'Arabe*

comme un chant secret の2冊が特に詳しい。

- 5 「アラブ人」Arabe の俗語で逆さ言葉 verlan を使っている。arabe/ara-beuh/beuh-ara/beur と変化。Solé のエッセイ « Black-blanc-rebeu » によれば、この語が辞書に載ったのが 1980 年 9 月。keur はさらに逆さ言葉となり rebeu も辞書に載るようになった。
- 6 正確な名称は「平等と反人種差別のための行進」La Marche pour l'égalité et contre le racisme。リヨンの神父クリスチャン・ドゥロルムとリヨン郊外のマグレブ系移民二世代の若者が中心になって、当時頻繁に起きた移民系住民にたいする殺傷事件、暴行に抗議して 1983 年 10 月 15 日、マルセイユを出発。出発時は参加者 32 名だったが、賛同者を巻き込み、リヨンでは千人以上、12 月 3 日、パリ、エリゼ宮到着時には 6 万人以上に膨れ上がった。この行進運動に対する現在の評価は別に置いて、セパールはこの行進とそれに付随する「プール」世代のクローズアップに大きな希望を託し、行進直後に刊行した中編『息子よ、母に話して』では、この話題にかなりの部分を割いている。本書によると、行進は 43 都市を通過し、主要通過点としてマルセイユ、アヴィニョン、オランジュ、ヴァランス、リヨン、ディジョン、ミュルーズ、ストラスブール、リール、ルーベ、アミアン、パリをあげている (Parle mon fils 23-31)。
- 7 フランスの三色旗にならって、Black は黒人、Blanc は白人 (フランス語)、Beur はアラブ人をそれぞれ指し、多民族共存のフランスのモットーとして流布した。
- 8 原題は *Le Fou de Shérazade*。ラシッド・ライシは本書と間テクスト性を論じた論考で、この題は、アラブ世界古典のライラとマジュヌーンの物語 *Majnûn Laylâ* や *Qays et Layla*、現代フランス文学のアラゴン『エルザ狂い』*Le Fou d'Elsa* をほのめかすと述べている (Raïssi 76)。「手帖」で、次々行き先を変えるシェラザードを追いかけて、ようやく追いついたジュリアンは「ぼくはきみを狂ったように探したんだ」*Je t'ai cherchée comme un fou* (176) と言っている。
- 9 シェラザードの父はシトロエンの工場に務め、主人公はオルネー・スー・ボアの HLM に両親と多数の兄弟姉妹で住んでいる。本書刊行の 1982 年に 17 歳を単純計算すると、彼女は 1965 年生まれ、現在 (2012 年) ならば 47 歳になる。80 年代初頭、リヨン郊外の移民二世の男子は「ロデオ」(駐車した車に次々火をつけて遊び憂さ晴らしすること) によって有名になった一方、女子は思春期の娘たちが家族のもとから失踪する「家出娘」*fugueuse* がメディアに注目された。どちらもマグレブ系移民二世に対するメディアが作りあげたステレオタイプのイメージだが、社会的現象となるに足るケースだったことはまちがいない。後者の場合、その原因は、未婚の娘を家族の男性が監視して守る伝統的なマグレブの家庭の重圧から、さらに具体的には家が決めた強制的な結婚から逃げるため、と多くは説明される。ロベール・ソレの記事によると「[家出の] 目的は、必ずしもフランス社会に溶け込もうというものでもなく、特に明確な目的はない。空虚に突進するようなものであり、薬物中毒が売春という結果になることもある」(Solé 1989)。スクワット仲間のジャミラがまさにこれに当てはまる。シェラザードの兄たちは妹を探しに、家出した姉妹たちが身を隠しそうなクラブやカフェを回って歩き、「彼らは今や、北駅、レブブリック、シャンゼリゼ付近のブラスリーやカフェをすべて知っている」(*Shérazade* 71) ほどだった。
- 10 ピエロが属する秘密組織について、68 年 5 月以降に勢力を増し、大物財界人などを誘拐した実在の過激極左グループをモデルにしたことをインタビューで語っている (Kian « Une Entrevue » 133)。
- 11 緑色の眼は文学の伝統のなかで、社会の規範から外れたエキセントリックな象徴作用を帯びてきた。例として、ボードレール『パリの憂鬱』のなかで、「月の恵み」« Les Bienfaits de la lune » 「スープと雲」« La Soupe et les nuages » の緑色の眼の恋人たちを参照のこと。
- 12 同様に、『手帖』でも労働者階級のトラック運転手ジルは「絵の美術館は行ったことがない」と言う (*Carnets* 43)。フランスの階層再生産のシステムの最大の決定要因を、ブルデューは「文化資本」という鍵語で説明していったことを指摘しておく (Bourdieu 1979)。
- 13 シェラザードはこの祖父の家に家族の休暇時によく行く。祖父はアルジェリア東部のフェラウン出身の村で、コーラン学校の導師をしていたという設定である。フランスに出稼ぎに行った村民の手紙の読み書きをしていたのが祖父だった (96-97)。この情報からすると、シェラザードの母の生地は、アルジェリア、カビリー地方の山岳地帯の小村ティジ・ヒベル Tizi Hibel となる。こういった仕掛けはセパールのフェラウンへのオマージュでもあるが、ベルベル系の住民が多いカビリー地方という設定から、シェラザードのベルベル的要素が確約される。
- 14 スクワットの仲間が美術館に代表される文化を非難するように、ジュリアンはラジオをつけると、シェラザードの仲間が聴くロック専門の FM 局を素通りしてフランス・ミュージック局を探す。見つからないとワグナー『ジークフリート』のレコードをかける。スクワット仲間と唯一、ハイ/ローの文化の敷居を越えるのは、秘密テロリスト組織に属するピエロである。ピエロの車にシェラザードが同乗する時、ピエロは「車に乗る時はフランス・ミュージックがいい」(258) と言ってブラムスを聴く。もっともピエロはスクワット仲間より年齢が上でむさ苦しい奴と言われ、タバコも若者が好むマールボロではなく、古典的なゴロワーズである (260)。ピエロとジュリアンは共通する点があり、「教養」の面でもそれが言える。ピエロはブラムスのあとベルディの『椿姫』を聴く。
- 15 8 点のオダリスク像は以下のとおり。『白いターバンのオダリスク』『赤い櫃のオダリスク』『仏陀のポーズのオダリスク』『木蓮のオダリスク』『緑の葉叢のオダリスク』『赤いキュロットのオダリスク 2』『灰色のキュロットのオダリスク』『肘掛け椅子のオダリスク』(189)。
- 16 画像や写真と文章を組み合わせた作品のスタイルに興味をもつのは、2004 年刊行の『フランスのなかの私のアルジェリア』(Sebbar 2004) 以降、積極的に同様のスタイルの作品、さらにイラスト入りの小説も発表している。
- 17 混血 *métis*、混血性 *métissage*、掛け合わせ *croisée* と言った鍵語はグリッサンの重要な概念になっている。
- 18 アラビア男性が冠る一般に飾り房のついた円筒形の縁なし帽。
- 19 ジェパールは自らの『居室のなかのアルジェの女たち』の後書きで、アルジェでのドラクロワのハーレム訪問の様子を仔細に叙述している。以下はその部分訳。
画家の友人、クルノーがこの闖入の様子を詳細に報告している。家はかつてデュケーヌ通りと呼ばれた場所にあった。ドラクロワは恐らくポワレレルとともに、家の主に連れられ「薄暗い通路」を歩いて行った。通路の奥にほとんど現実とは思えない光に浸された、いわゆるハーレムが突然現れる。そこでは女たちと子どもが「絹や金糸が積み重なるなかで」画家を待っていた。元海賊の妻は若く美しく、水ギセルの前に座っていた。ドラクロワは「目の当たりにするこの光景に陶然としていた」と、ポワレレルは、この一部始終を語ることになるクルノーに書いている。
家の主が即興で通訳となり会話が始めると、画家は「これまで知るすべもなかった不可思議な暮らし」のすべてを知りたがる。さまざまなポーズで座る女たちを何枚もスケッチし、忘れてはならない一番重要に思えることを紙のうに留めた。彼の目は驚き困惑しつつも正確な色 (「金の縞が入った黒、光沢のある紫、濃い藍色を帯びた赤」など) と衣装の細部をとらえ、何枚もの不可思議な報告書を残した。
絵と文字によるこのすばい注釈には、画家の興奮した手さばき、陶然としたまなざしが感じられる。夢と現実がとなりあうこの揺れ動く境界線上で、とらえどころのない束の間の啓示の時に立ち会っているのだから。「氷菓や果実をもってしても鎮めがたい興奮の熱」とクルノーは記している。

ドラクロワは彼が見たまったく未知の光景を純粋なイマージュとして知覚した。あまりにも鮮烈な目新しさは現実を感わせてしまうからだろうか、画家はスケッチしたそれぞれの女の名前を記している。水彩画のそれぞれに、バヤ、ムニ、ゾラ・ベン・ソルタン、ゾラそしてカドゥジャ・タルポリジと紋章のごとく名を入れた。スケッチされた身体が異国趣味の匿名性から抜け出すように。

類い稀な色の氾濫、聞き慣れない響きの名前－これらが画家を動揺させ昂揚させもしたのであるか。これらが彼にこう叫ばされたのか。「何と美しい！ まるでホメロスの時代にいるようだ！」(Djebar, *Femmes d'Alger* 238-240)

- 20 拙稿「アルジェリア／フランス－『アルジェの女たち』をめぐる絵画と文学の対話 (I)」, p.2 参照のこと。
- 21 『シェラザード、十七歳』には、主人公が祖父に、祖母がなぜ戦争で亡くなったか詳しく訊こうとするが、祖父は「もうその話はないでおくれ」と孫娘を諭す (147)。

付記：本稿は JSPS 科研費 23520391 の助成を受けたものです。

参考文献

- Alloula, Malek. *Le Harem colonial*, Séguier, 2001.
- Baudelaire, Charles. *Petits poèmes en prose (Le Spleen de Paris)*, Garnier, coll. Classiques Garnier, 1962.
- Bourdieu, Pierre. *La Distinction, critique sociale du jugement*, Editions de Minuit, 1979.
- Djebar, Assia. *L'Amour, la fantasia*, Lattès, 1985.
- . *Femmes d'Alger dans leur appartement*, Albin Michel, (1980) 2002.
- . *Ombre sultane*, Lattès, 1987.
- Donadey, Anne. *Recasting Postcolonialism: Women Writing Between Worlds*, Heinemann, 2001.
- Engelking, Tama Lea. " *Shérazade* at the Museum: A Visual Approach to Teaching Leïla Sebbar's Novel " *French Review* 80 (3) Feb. 2002, 621-634.
- Garanger, Mark. *Femmes algériennes 1960*, éditions Contrejour, 1982.
- Garanger, Mark et Leïla Sebbar. *Les Femmes des Hauts-Plateaux : Algérie 1960*, Boîte à documents, 1990.
- Glissant, Edouard. *Le Discours antillais*, Seuil, 1980.
- Hugon, Monique. " Leïla Sebbar ou l'exil productif " *Notre librairie* 84 juillet-septembre 1986.
- Huughe, Laurence Christine. " Déconstruction du regard panoptique orientaliste : la contribution narrative d'Assia Djebar et de Leïla Sebbar " *Etudes francophones* 15 (2), 2000, 89-99.
- 石川清子 (Ishikawa, Kiyoko) 「アルジェリア／フランス－『アルジェの女たち』をめぐる絵画と文学の対話 (I)」『静岡文化芸術大学研究紀要』1号、2011年3月、1-9.
- . 「出奔するマグレブ系『移民第二世代』の娘達の物語とテリトリー－レイラ・セバールの八十年代の小説を中心に－」『静岡文化芸術大学研究紀要』1号、2001年3月、15-25.
- Kian, Soheila. " Une Entrevue avec Leïla Sebbar : l'écriture et l'altérité " *The French Review* 78 (1), October 2004, 128-136.
- . *Ecritures et transgressions d'Assia Djebar et de Leïla Sebbar*, L'Harmattan, 2009.
- Laronde, Michel (Dir.). *Leïla Sebbar*, L'Harmattan, 2003.
- Lionnet, Françoise. « Narrative Strategies and Postcolonial Identity in Contemporary France: Leïla Sebbar's *Les Carnets de Shérazade* », *Writing New Identities*, Ed. Gisela Brinker-Gabler and Sodonie Smith, Univ. of Minnesota Press, 1997, 62-77.
- Merini, Rafika. *Two Major Francophone Women Writers, Assia Djebar and Leïla Sebbar*, Peter Lang, 1999.
- Mortimer, Mildred. " Language and Space in the Fiction of Assia Djebar and Leïla Sebbar " *Research in African Literatures* 19 (3), 1988, 301-311.
- . " Re-presenting the Orient: A New Instructional Approach " *French Review*, 79 (2), December 2005, 296-312.
- Orlando, Valérie. *Nomadic Voice of Exile: Feminine Identity in Francophone literature of the Maghreb*, Ohio Univ. Press, 1999.
- Raissi, Rachid. " Shérazade du *Fou de Shérazade* de L. Sebbar à l'aune de réel et du mythe " *Synergies* 3, 2008, 75-86.
- Sebbar, Leïla. *L'Arabe comme un chant secret*, Bleu autour, 2007.
- . *Les Carnets de Shérazade*, Stock, 1985.
- . *Le Fou de Shérazade*, Stock, 1991.
- . *Je ne parle pas la langue de mon père*, Julliard, 2003.
- . *Mes Algéries en France*, Bleu Autour, 2004.
- . *Parle mon fils parle à ta mère*, Thierry Magnier, (1984) 2005.
- . *Shérazade, 17 ans, brune, frisée, les yeux verts*, Stock, 1982.
- Sebbar, Leïla. et Nancy Huston. *Lettres parisiennes*, Barrault, 1986.
- Serre, Michel. *Le Parasite*, Grasset, 1980.
- Solé, Robert. " Après l'assassinat d'une lycéenne à Suresnes Fragiles "beurettes" " *Le Monde*, le 17 mars 1989.
- . " Black-blanc-rebeu " http://www.facebook.com/note.php?note_id=147968528558900, le 2 septembre 2010.
- . " Une jeune Algérienne qui rêvait en français " *Le Monde*, le 23 octobre 2007.

地方都市のフェアトレードの現状と展望 ～静岡のフェアトレード・グループの事例から～

The real situation and Future Vision of the Fair-Trade movement at local cities in Japan—The Case study of Fair-Trade Groups in Shizuoka—

下澤 嶽

文化政策学部国際文化学科

Shimosawa Takashi

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

本稿は、2011年に実施された静岡県内のフェアトレード・グループ調査の情報をもとに、近年日本でも関心が高まりつつあるフェアトレード活動の地方都市での広がりや課題、将来の発展イメージを明らかにするものである。

This paper is the report to clarify the Fair-Trade movement and problems at Japanese local cities using the recent research result of Fair-Trade Groups in Shizuoka Prefecture conducted in 2011. The report also suggests the future developing image of the Fair-Trade Movement in Japanese local cities.

1. はじめに

開発途上国の生産者を不正な搾取から守り、公正な国際貿易のあり方を模索するためのフェアトレード活動は、1940年代に欧米のNGO¹によって始められ、その後年々広がりを見せ、1970年中頃には日本でも徐々に同様の活動が見られるようになった。日本のフェアトレード団体の販売力や社会への影響力は急速に成長していったとはいいがたいが、2000年以降フェアトレード・ラベル²の普及がフェアトレードの再認識につながり、一部の日本企業もフェアトレード参入を始め、以前よりも活発にメディアでも取り上げられるようになった。

欧米では市民によるNGO活動が盛んで、市民社会が成熟しているとされる。しかし、こうした市民社会の機能は欧米の文化であり、アジア、アフリカの土壌には必ずしも同様な機能が発展するとは限らないと指摘されることも多い。特に日本では、市民社会（または民間の人道団体）への関心や信頼が希薄で、それを支援する市民はまだ充分育っていないとよく言われる。フェアトレードの活動の広がりも、欧米とは異なる日本独自の特徴や課題があると筆者は思っている。

最近まで日本のフェアトレードに関連する出版物は、

個々の団体の商品紹介、主催者側の意見や立場表明に関連する情報提供が多かった。近年、渡辺、長坂³の研究によって、以前よりも日本のフェアトレード活動の全体像がわかるようになってきている。その中でも日本の地方都市におけるフェアトレードに関する研究は、これからといってい

いだろう。日本の著名なフェアトレード団体や企業は東京、大阪などの大都市に集中している。関心を持つ学生たちは、そうしたフェアトレード団体のカタログやウェブサイトから商品を購入することはあっても、自分の住む地域で身近にフェアトレード団体と接することは極めて少ない。

地方都市におけるフェアトレード活動は関心のある市民であっても見えにくく、フェアトレード・ショップが「点」として知られるだけであった。それらのショップも短命に終わることが多く、地方都市のフェアトレード活動の広がりは見えにくい状況に置かれ続けていると言える。大都市に集中しているフェアトレード団体にとっても、地方都市でのフェアトレード活動の広がりや深化は自らの発展にとって重要な意味を持っている。長坂が2009年におこなった本格的な日本のフェアトレードに関する調査の中で、推定で806のフェアトレード団体が全国に存在し、都道府県ごとの数は表1の通りであると報告している。

表1

	送付対象	回答数		送付対象	回答数		送付対象	回答数
北海道	66	10	千葉	33	4	島根	3	0
青森	6	1	埼玉	27	3	広島	12	1
秋田	6	0	東京	142	10	山口	12	1
岩手	10	2	神奈川	62	5	徳島	3	0
山形	6	0	静岡	34	3	香川	3	0
宮城	15	2	愛知	45	15	愛媛	6	0
福島	18	2	岐阜	17	2	高知	7	0
新潟	11	1	三重	9	1	福岡	20	4
石川	14	2	滋賀	4	1	大分	12	1
富山	7	2	京都	17	2	佐賀	2	0
福井	5	1	奈良	7	1	長崎	7	2
長野	18	3	和歌山	5	0	熊本	10	3
山梨	12	3	大阪	34	4	宮崎	5	0
栃木	7	2	兵庫	23	1	鹿児島	9	1
群馬	8	1	岡山	7	1	沖縄	8	1
茨城	9	2	鳥取	3	0	計	806	101

出典：長坂寿久 2009『世界と日本のフェアトレード市場』、36p

地方都市のフェアトレード活動でもう一つ特記すべき新しい動きがある。

英国で 2000 年から始まったフェアトレード・タウン運動⁴の推進団体であるフェアトレード・タウン・ジャパンが 2011 年に設立され、熊本市が世界で 1000 番目のフェアトレード・タウンとして認証を受けた。現在は、名古屋、逗子、札幌でもフェアトレード・タウン運動の認証の動きがあり、地方都市におけるフェアトレード運動の推進力として期待されており、今後の動きに注目していく必要がある。

この論文では、静岡県を例にとり、フェアトレードの地方都市における広がりとその課題を整理し、今後のフェアトレード基盤拡大の最大の課題である、「地方都市におけるフェアトレードの広がり」について考察する。

2. 静岡県における市民による国際協力活動の実態調査報告書から

2011 年 10 月から 12 月にかけて、個人研究として静岡県の国際協力活動の実態調査を実施した。この調査では、開発途上国の支援活動を行っている団体を「国際協力グループ」、開発途上国の住民の生産物を国内で販売協力している団体を「フェアトレード・グループ」として、アンケートと訪問による調査を行った。

表 2 が調査対象団体の数であるが、アンケート対象団体 156 団体は、過去 10 年分の新聞記事、ウェブサイト等から絞り込んだ。訪問調査は有効回答のあった 52 団体から、活動が持続的で、ある程度の規模で展開されていると判断した 13 団体を選んだ。

表 2 アンケート回収状況と調査訪問数

	国際協力 グループ	フェアトレード ・グループ	合計
発送数	107	49	156
回答数	回答総数	19	67
	有効回答数	17	52
訪問調査数	7	6	13
無回答数	43	19	62
宛所がない	16	11	27

この調査では、静岡県で活動する国際協力グループとフェアトレード・グループをあわせて調査してまとめているが、今回の論文では表 2 のフェアトレード・グループのみに絞って考察を進めていきたい。

調査の要約

この論文ではフェアトレード・グループとしているが、調査対象となったグループは、個人経営の店舗の形をとっているものがほとんどである。ただ、複数の理解者、支援者と共に活動していることが多く、通常の店舗経営とは異なる部分を意識して「グループ」という名称を使って進めていきたい。また店舗のすべてが地方都市内で活動しているため、「地域」という言葉ではなく、「地方都市のフェアトレード・グループ」という呼称を使っていきたい。

今回の研究で調査対象となったフェアトレード・グループは推定で 49 団体で、有効な回答を返答したグループは

17 団体、そして訪問調査をしてさらに情報収集をしたのがその中の 6 団体である。長坂の調査（表 1）によると静岡県のフェアトレード・グループは 34 グループがリストアップされており、回答は 3 団体のみであった。全国の中では、静岡県は 4 番目にフェアトレード小売店が多い県と推定されている。今回の筆者の調査は静岡県のみではあるが、長坂のものよりやや地域に深く入り込む結果となった。筆者の調査から集められた重要な情報は 17p に 7 つの表にまとめてある。

今回の調査情報からわかることを要約すると静岡県で活動するフェアトレード・グループは以下のような傾向があることがわかる。

- (1) 静岡県のフェアトレード・グループの拠点は静岡市、浜松市に複数が存在するが、あとは数カ所の市に 1 グループずつ存在する。
- (2) 扱っている製品は、大都市にあるフェアトレード輸入団体の製品が多い。直接輸入業務を行っている団体は 2 団体のみであった。
- (3) 主にフェアトレード製品を扱う団体は 2 団体だけで、あとの団体はカフェ、自然食品、エコ関連商品と組み合わせ活動を展開している⁵。
- (4) 設立時期は 2000 年以後の団体が多く、法人格は持たず、年間の売り上げ額は 50 万円未満のものが多数を占める。
- (5) 民間や行政の助成金を活用している例は 1 件のみである。
- (6) 日常の販売活動にボランティアを参加させているグループは少ない。おそらく、商品管理、金銭管理が難しく、ボランティアに任せるにはハードルが高いと考えているからと思われる。
- (7) 多くのグループは横の連携に関心はあるが、それにかかわる余裕がない。

また上記の結果は、久長が 2009 年におこなった全国の地方都市のフェアトレード・ショップ調査結果の傾向とほぼ一致している。

さらに 6 グループの訪問調査をすることで、活動者からよりリアリティのある情報を得ることができた。それらを要約すると以下の通りである。

- (1) 生産現場と直接つながって独自に製品の仕入れ、開発を行っているグループは 2 グループだった。その他のグループは、関東、関西などを拠点としているフェアトレード輸入団体の製品を販売している。こうした製品を中心に販売活動を行う場合、利益分はどうしても小さくなるため、利益を十分出せているグループはなかった。
- (2) 主にフェアトレード製品を扱って活動しているグループは 2 つだけで、ほとんどのグループは自然食品、エスニックな雑貨、カフェの活動などを織り交ぜて販売・経営している。
- (3) 「2 年続けば成功だ」といった訪問先の経営者のコメントに代表されるように、地方都市のフェアトレード・ショップはこれまで短命に終わることが多かつ

たと思われる。多くのグループは「営利を優先するのではなく、商品の価値を知ってもらいたい」という経営姿勢を強く持っているため、短期に営利を追い求めることが少なく、ゆえに組織的持続力もなかなか生まれないといった悪循環を抱えている。フェアトレード・グループの設立年が2000年以後に集中しているのも、多くのグループが生まれ、短期間に閉店していく悪循環が存在しているからだと考えられる。

- (4) ひとつのグループは、日本貿易振興機構の助成金を活用していたが、それ以外に行政、民間の助成金の活用している例はなかった。こうした支援制度の確立が遅れているのもフェアトレード活動の発展を妨げている理由のひとつと思われる。
- (5) 設立者が自ら仕入れや販売業務を行っているが、自分の人件費を十分捻出できているケースはなかった。店頭販売をボランティアが代行することに対して、金銭管理の難しさや、毎日繰り返す業務には向いていないといった問題意識から、5グループが消極的な姿勢だった。

以上からわかるように、静岡県内の数市にはフェアトレード商品の販売を試みるグループが存在するが、店舗維持も難しく、地域住民への働きかけや広報活動、イベントへの出展も限定されている状態である。そのため、グループは「点」としてそこに存在し、来店する客には影響を与えているものの限定的であり、持続的で、面としての効果は難しい状況である。

3. 地域のフェアトレード活動から見える指摘

静岡のフェアトレード・グループへのアンケートや店舗訪問を通して得た情報の中で、地方都市のフェアトレード・グループが持つ独自の特徴や視点があることを考察したい。

(1) フェアトレード輸入団体との葛藤

多くのフェアトレード輸入団体は大都市に事務所を持ち、開発途上国の生産現場と直接取引をして商品を輸入し、自らも販売するが、同時にこれらを地方都市のフェアトレード・グループに一定の価格で卸している。長久の研究によれば、43団体ほどこうしたグループが国内に存在するとされている。

静岡のフェアトレード・グループへの訪問調査では、どこのグループからも、「返品ができる委託契約が減り、ほとんどが買取契約となった。小売店舗の負うリスクが高い」「買取価格もしだいに高くなってきている。利ザヤは2割、3割程度。利率がよい契約の場合は買取量を増やさせるなど、小売店舗にリスクを負わせる傾向が強まっている」「フェアトレード輸入団体の担当がすぐ辞める。融通がきかず機械的に断られたり、一方的に条件を提示されることが多い」といった、フェアトレード輸入団体への声が多かった。

フェアトレード輸入団体が必要以上に利潤を得ているという表現は正しくないが、多くを売りたい、利益を出したいと思えば、どうしても競争原理が組織内に働く。デザイ

ン、広告に資金と時間が使われ、数字の分析にのめり込み、どうしても地方都市の小売店に気が回らなくなる。「フェアトレード輸入団体 vs 地方都市フェアトレード・グループ」の関係は、依存的でありながらも、利益の分配においてはフェアトレード輸入団体が強い地位にいる。フェアトレード輸入団体が自分たちの利益や経営を一方的につきつけられれば、いつまでたっても地方都市のフェアトレード・グループは強くない、ゆえに市場のパイも大きくなりにくいという悪循環の構造があると言える。

もともとフェアトレードは、生産者の不当な中間搾取をできるだけおさえることが重要とされてきた。しかし仕入れたあとの国内の販売プロセスは、その公正さが必ずしも厳密に語られてきたわけではなかった。フェアトレード輸入団体の中にも、地方都市のフェアトレード・グループが自分たちの活動のパートナーだという意識が醸成されていく必要があるだろう。

(2) グループの持つ多様な品揃えと価値観

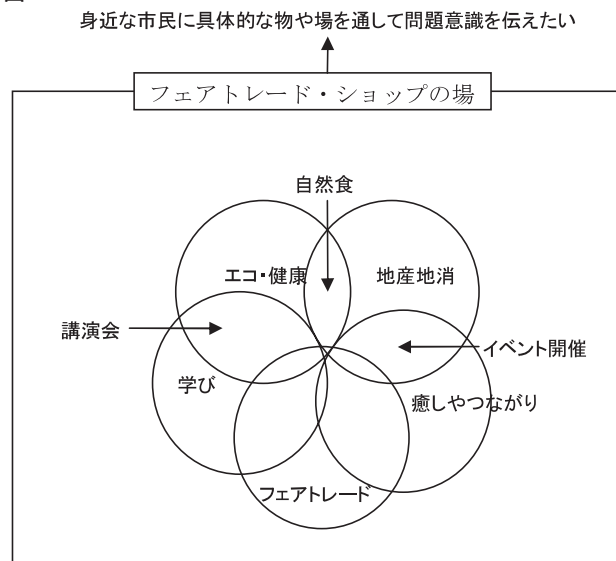
地方都市のフェアトレード・グループは、多様な商品やサービスを組み合わせ活動していることが最大の特徴でもある。

「素材がエコで健康的なもの」「地元の障害者やお年寄り、農家が生産したもの」「エスニックでおしゃれなもの」「癒しの効果があるもの」などの多様な商品やサービスと一緒に、フェアトレード商品が並べられているのが普通である。商品販売だけでなく、「エスニックレストラン」「カフェ」「蕎麦屋」といった飲食業とあわせて、フェアトレード商品を店舗の脇に置いているケースも多く見られる⁶。さらに、「勉強会」「講座」「料理教室」「音楽会」「会議室の貸し出し」「チラシ、ポスターの掲示」といった新しい価値観や学びの場を提供していることも多い。

地方都市のフェアトレード・グループの拠点で、こうした特徴がなぜ出やすいのか、いくつかの推論が考えられる。

地方都市では社会に対する問題意識をビジネスの形にかえて継続していくことはまだ難しく、多様な商品やサービスを入れることでリスクを分散しているとも考えられる。しかし、筆者が訪問した率直な感想は、それは結果であって、利益を生み出すために便宜的に多様な素材を組み合わせているという印象はなかった。むしろ多くのフェアトレードの店舗が、現代の個人をとりまく様々な課題の共有と解決のための模索の場として作られているからではないか。地域の住民に「新しいメッセージがある」と気づいてもらうことが価格や利益と同様に重要なのである。そうした強い情念をもった主催者の価値が、多様な商品やサービスとなって組み立てられているのである。フェアトレードはその中の構成要素のひとつでしかない。彼らは自分の店舗やショップを「フェアトレード・ショップ」と決めつけられるのを嫌がり、自分がつけた固有名称で呼ばれることを好む。こうした地方都市のフェアトレード・グループの内部に息づいている価値観を簡単に表すと図1のようになるのではないだろうか。

図 1



4. 地方都市のフェアトレード・グループ、自立のシナリオ

地方都市のフェアトレード運動が少しでも持続的で、多くの市民に影響を与える存在になるためには、まずそれぞれのフェアトレード・グループが組織的な体力をつけ、発信力をもてるようになることである。別の言葉で言えば「スタッフがなんとか食べていける組織にする」ことが当面の目標と言っても過言ではない。その体力強化の延長線上に、広報、啓発活動、イベント開催などの頻度と質が高まり、日本国内のフェアトレードの認知と販売力が高まっていくはずである。

自ら輸入業務を行う

大都市のフェアトレード輸入団体から商品の大半を仕入れ販売する方法で、スタッフの生活を支えるような経営状態まで高めるのはかなり難しい。これを乗り越えるためには、開発途上国の生産団体と取引し、輸入業務を一部自ら行うことである。できるだけ新しい輸入製品はコーヒー、紅茶、石鹸のような消費財が望ましく、そうすることでリザヤはひとつの商品あたり 4 割から 5 割近くに上がり、持続的に収益が入る可能性が高まる。また場合によっては、それを周辺のグループにも商品を卸すことで利益をさらに上げることにも可能である。1 グループだけで展開するのは資金的にも難しいと考えられるので、数グループが共同で行うことも必要かもしれない。こうした地方都市のフェアトレード・グループの輸入業務を支援するための助成金やローン制度などがあるとさらに可能性が高まるのではないだろうか。

多様な商品と価値観による活動の展開

地方都市でフェアトレード活動を展開する際、「途上国社会とのつながり」「エコ」「地産地消」「癒し」「学び」「出会い」といった多様な社会問題や価値観を表わす商品やサービスを組み合わせることは決してマイナスではないと思う。多様な問題提起を組み合わせることで販売を行う手法を地方都市独自の強みとして位置付ければ、多くの市民が関心を持ち利益が今より高まる可能性がある。その店舗の持続

性が高まり多くの市民との接点の場となれば、結果的にフェアトレード活動も力を得ていく可能性が出てくる。

「途上国との関わり」「エコ」「地産地消」「癒し」「学び」「出会い」といったキーワードは、地方都市で生活する者にとっては関心を持ちやすいテーマであるだけでなく、根底は同質な問題群と位置づけることもできる。これらをバランスよく見ながら、新しく問いかけていくことは、むしろ生活の場から考える市民活動として本来の姿かもしれない。

そこには、これまでグローバル経済が産み落としてきた「弱い生産者からの搾取」「有害物質の過剰な使用」「大量生産と使い捨て文化」「大都市集中の企業経営」への対抗的な価値が見られる。多様な商品構成で経営や運動を考えるスタイルを「フェアトレード・プラス」とも呼べるのかもしれない。

地方都市のフェアトレード・グループがフェアトレード製品を相対化することで、売り上げが下がるかのような印象が残るかもしれないが、むしろそれを強みにしながら市民の認知を高め、ビジネスの持続性を高める方が、地域の「面」としての効果につながっていくのではないだろうか。

ボランティアを組み込んだ新経営

持続性が弱いとされるボランティアに商品管理や販売管理を任せることに消極的なのはある程度理解できるが、むしろルーティーンでシステム化しやすい商品管理や販売管理の部分ほど、ボランティアに任せられる可能性が高い部分でもある。ボランティア・コーディネートのスキルを身につければ、必ずしもボランティアは「宛てにならない存在」ではなく、有効なリソースに変わる可能性がある。またボランティアのサポートにより生まれた時間を使って、新しい活動を増やすことも可能になるだろう。

もうひとつボランティアの活用の可能性として、委託販売システムの開発がある。各地域で学園祭、お祭り、フェスティバルなどのイベントが行われる。それぞれのイベントでは販売ブースが設けられることが通常だが、関係者にフェアトレードブースを出すよう働きかけ、ショップの商品を預けて販売代行してもらう活動の展開だ。

ボランティアのかかわりを活性化させるスキルをもっと上げることで、販売網、広報力、人的パワーの経営改善につながる可能性があると思われる。

5. おわりに

フェアトレードは、欧米の NGO によって「開発途上国の生産者が中間搾取をできるだけ受けず、公正な価格で取引をし、生産者の生活向上を果たす」ために行われてきた。日本にもその活動は徐々に広がってきており、2000 年以降はフェアトレード・ラベルの導入、フェアトレード・タウン運動などにより、注目を集めるようになってきている。しかし、さらに日本社会の中でしっかりと活動が定着していくためには、地方都市におけるフェアトレード・グループの強化が必須である。

地方都市のフェアトレード・グループの数は少なくないが、静岡県調査からも示唆されるように、その組織基盤は弱く短命で、悪循環の中にある。またフェアトレード・グループの多くはフェアトレードに留まらず、多様な価値やサービスを発信する傾向にある。日本社会のフェア

トレード関心層が広がるにつけ、競争力をつけようとするフェアトレード輸入団体との葛藤も大きくなっていると思われる。

地方都市でのフェアトレードのこれからの浸透を考える場合、地方都市に分散するフェアトレード・グループの店舗の経営改善が必須である。そのためには、「直接輸入業務を行い利益率を上げる」こと、「グローバル経済社会の課題を意識させる多様な商品やサービスを提供する」こと、「地域のボランティアと連携するマネジメント力をつけること」で、組織的体力を高める必要がある。また、そのた

めにも政府、民間の様々な支援策の充実が望まれる。

調査を終了後、一部のグループ関係者と人間関係が生まれ、話し合いを続けていくうちに、「静岡県でもちゃんとフェアトレード・ショップが経営できるために何かしよう」という声が出て、活動者有志で「フェアトレード・コミュニティしずおか」が結成された。この会では、互いの組織基盤、販売基盤が強化され、持続的なものになるような環境づくりを、フェアトレード・グループ自身が活動を展開する見込みである。

静岡県における市民による国際協力活動の実態調査結果 (フェアトレード・グループのみの集計結果)

表 1 活動拠点がある場所

静岡市	4
浜松市	3
富士市	2
その他	8
合計	17

表 2 法人格の有無

なし	13
NPO	2
株式会社	1
有限会社	1
合計	17

表 3 設立時期

	グループ
1979 年以前	2
1980 年代	0
1990 年代	3
2000 年～2005 年	6
2006 年～現在	5
不明	1
合計	17

表 4 年間予算規模

50 万円未満	8
50 万以上 100 万未満	1
100 万以上 200 万未満	3
200 万以上 300 万未満	0
300 万以上 500 万未満	0
500 万以上 750 万未満	2
750 万以上 1000 万未満	1
1000 万以上	1
なし	0
無回答	1
合計	17

表 5 民間・行政の助成金の活用

ない	16
ある	1
合計	17

表 6 ボランティアの受け入れ

受け入れしていない	16
受け入れしてる	1
合計	17

表 7 グループ間の連携の関心

連携にあまり関心はない	2	21%
連携に関心がある	2	27%
連携に関心はあるが十分かわる余裕がない	11	48%
合計	17	

注

- 1 Non-Governmental Organization の略で民間の人道支援団体のこと。
- 2 ドイツやオランダの NGO 団体が 1988 年頃から始めた手法で、基準を満たしているフェアトレード商品を認証し、その商品にラベルの使用を付与するシステム。その後いろいろな団体が認証ラベルをつくるようになっていたが、1997 年にそれらを統合して「国際フェアトレード・ラベル機構」(略称 FLO) が設立され、フェアトレードの販路の拡大、企業参入の牽引力になっている。
- 3 長坂寿久 2009『世界と日本のフェアトレード市場』明石書店、渡辺龍也 2010『フェアトレード学 私たちが創る新経済秩序』新評論、等
- 4 2000 年 4 月に、人口 4 千人のイギリスのガースタング町が、町をあげてフェアトレードを推奨するフェアトレード・タウン世界第一号として誕生し、その後英国を始め世界的に運動が広がった。現在では、世界 20 カ国、950 以上の地方自治体がフェアトレード・タウンを宣言している。日本でも 2011 年 4 月にフェアトレード・タウン・ジャパンが正式な認証団体として発足された。そして同年 6 月に世界で 1000 番目のフェアトレード・タウンとして熊本市が、日本で初めて認定を受けることになった。
- 5 久長の全国のフェアトレード・ショップの調査では、回答団体の 30.6%が 80%以上フェアトレード商品を扱っている小売店としているが、静岡の実態はもっと少ないと思われる。2009b『世界と日本のフェアトレード市場』明石書店、37p
- 6 久長も調査結果からこれとほぼ同様の説明をしている。2009b『世界と日本のフェアトレード市場』明石書店、35p

参考文献

- 長坂寿久 2009a「日本のフェアトレード市場の調査報告」『季刊 国際貿易と投資』(国際貿易投資研究所) Summer 2009/No.76:94-118.
2009b 『世界と日本のフェアトレード市場』明石書店
2008 『日本のフェアトレード 世界を変える希望の貿易』明石書店
2006a『欧州フェアトレード 2005』報告書(要約)『季刊 国際貿易と投資』(国際貿易投資研究所) Summer 2006/No.64:89-108.
2006b「欧州のフェアトレード市場と日本」『季刊 国際貿易と投資』(国際貿易投資研究所) Summer 2006/No.64:75-88.
フェアトレード・タウン・ジャパン ウェブサイト
<http://www.fairtrade-town-japan.com/> (2012 年 10 月 3 日現在)
フェアトレード・ラベル・ジャパン ウェブサイト
<http://www.fairtrade-jp.org/> (2012 年 10 月 3 日現在)
渡辺龍也 2010『フェアトレード学 私たちが創る新経済秩序』新評論
渡辺龍也 2009「フェアトレードの拡大と深化 経済・社会・政治領域からの考察」『現代法学：東京経済大学現代法学会誌』(東京経済大学) (17): 89-124

SUAC Habitat for Humanity: Past, Present and Future

ジャック・ライアン

文化政策学部国際文化学科

Jack RYAN

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

本稿では、静岡文化芸術大学におけるハビタット・フォー・ヒューマニティ（以下SUACハビ）について報告するものである。非営利団体ハビタット・フォー・ヒューマニティとSUACハビの設立背景と使命、およびSUACハビの目的と主な活動について報告する。また、最近もしくは現在進行中のプロジェクトに関する具体的な調査と、将来的に計画している活動の一部を紹介する。

This paper is a report on the Habitat for Humanity circle at Shizuoka University of Art and Culture (SUAC). This report will outline the background and mission of both the nonprofit organization Habitat for Humanity and the SUAC Habitat for Humanity circle. It will also delineate the objectives and primary activities of the circle. The report will conclude with a survey of recent and current projects as well as some of the activities the Habitat for Humanity circle at SUAC is planning to undertake in the future.

Travel is fatal to prejudice, bigotry and narrow-mindedness.

- Mark Twain

Even in the midst of our seemingly irreversibly globalizing world it sometimes seems teachers of English in Japan have to try to drag often reluctant students kicking and screaming into the brave new world of English as a global language. Recently, much hand-wringing has been done here in Japan over reports showing the numbers of Japanese studying abroad continuing to decline after peaking some years ago. Surveys have also shown that younger Japanese "salarymen" are overwhelmingly unwilling to work abroad. In this context, globally-minded university volunteer groups can play a valuable role in encouraging young Japanese to break out of a sometimes insular and short-term mindset. By promoting a global viewpoint, developing an awareness of poverty and other issues and, most importantly, making annual trips overseas to interact with and work side by side with people in developing countries this is exactly what the Habitat for Humanity circle here at SUAC strives to do.

In this paper I will briefly explain the history and mission of both the nonprofit organization Habitat for Humanity and SUAC Habitat for Humanity. I will also discuss the primary functions and activities of the circle. Finally I will report on recent projects and future plans undertaken by the group as we strive to make it an ever more vital and productive organization.

Habitat for Humanity

Habitat for Humanity is a "nonprofit, housing organization building simple, decent, affordable housing in partnership with people in need." Habitat is active in over 80 countries and has built over 400,000 homes for more than 2 million people around the world since its founding in Atlanta, Georgia in the United States in 1976. Habitat describes itself as being a "Christian housing ministry" however it is not considered evangelical; meaning that Habitat does not proselytize or try to convert anyone to Christianity.

The Habitat for Humanity mission is to "build, rehabilitate and repair simple, decent, affordable homes in sustainable communities with support from homeowner families, volunteers, donors and partner organizations." Homes are built using volunteer labor and sold at no profit. "Volunteer labor" refers to both local, in-country volunteers as well as groups like SUAC Habitat which typically come from outside the local area. An important part of the Habitat for Humanity philosophy is that homes are not given away, they are sold to homeowners, who are referred to as "home partners." Homeowners are called "home partners" because they are seen as "partners" in the process of building their own home. They are expected to invest their own labor, or "sweat equity," into the building of their new Habitat house and, often, the houses of others. Homes are not built for home partners but with them.

SUAC Habitat for Humanity

The SUAC Habitat for Humanity circle (hereinafter "SUAC Habitat") was the brainchild of Mary Hughes, at the time an Assistant Professor in the Department of International Culture. Ms. Hughes' wanted to offer opportunities to motivated and energetic SUAC students to improve their English skills and do volunteer work overseas and established SUAC Habitat in 2004. It quickly became popular.

While SUAC Habitat does not have an official mission statement, the implicit goals of the circle are to provide opportunities for students to learn more about housing and poverty issues in the world, to promote cross-cultural communication and understanding, to develop compassion for those less fortunate, to develop leadership skills and, last, but certainly not least, to improve English communication skills.

The SUAC Habitat circle is open to all SUAC students. Despite hopes that the circle would attract roughly equal numbers of students from different faculties, from its inception, it has been peopled overwhelmingly by female students from the Department of International Culture. There have typically been both few male circle members and few members from the Faculty of Design. Participation in the circle is of course voluntary and it appears that students in the Department of International Culture have a high level of interest in global issues and cultures and overseas travel, issues which naturally encourage an interest in circles such as SUAC Habitat. Nonetheless, a more diverse group of SUAC Habitat members, representative of the SUAC student community as a whole, would be ideal.

SUAC Habitat for Humanity Activities

The four functions of SUAC Habitat are to fundraise, advocate, educate and build. In practice, the first three of these functions are often carried out at the same time. Fund raising activities take place all year long and include periodic flea markets, street fund raising, operating stalls at the annual school festival, holding special events at local restaurants and cafes and setting out collection boxes at area shops and restaurants. Advocacy and education usually go hand in hand with fundraising as, at most of the aforementioned fundraising events, SUAC Habitat staff are on hand to explain the

group's activities, hand out pamphlets, show videos of our experiences and share photos and booklets students created of their activities. The goals of advocacy and education are to promote the overall Habitat mission, encourage support and teach people about the Habitat for Humanity organization. The fundraising goal is closely tied to the build function which is the highlight of our year. Most of the funds raised from our various activities are used to support our build which is our annual overseas volunteer trip, known in Habitat parlance as a "Global Village" trip. These trips require months of planning and a years worth of fund-raising to become a reality. For scheduling reasons SUAC Habitat Global Village build trips always take place during the spring vacation. The Global Village trip is the highlight of the SUAC Habitat circle year and will be explained in more detail in the next part of this paper.

Habitat for Humanity's Global Village

SUAC Habitat members are some of the 700 or so volunteers who are dispatched from Japan on Habitat for Humanity Global Village trips each year. SUAC Habitat has made all of its annual trips to date to Southeast Asian countries due to a combination of need, convenience, ease of scheduling and financial considerations.

Personal safety for a group of predominantly female Japanese young adults is an ever-present concern considering that anywhere we go will likely have a higher crime rate than Japan. Even so, the diligent preparation and cultural awareness of SUAC Habitat members has helped to ensure that no serious problems or incidents have occurred on any of the SUAC Habitat trips to date. SUAC Habitat's good safety record should also be attributed in part to the professionalism and competence of Habitat staff who coordinate our entire itinerary in the local country.

Of course, this coordination with local Habitat staff begins long before we land in our destination country. We communicate with them about schedule, budget, housing and recreational activities months before our departure date. This communication is conducted entirely in English and is handled by SUAC Habitat members with only very occasional assistance. This experience gives students valuable opportunities to improve their English while also learning cross-cultural communication skills and how to negotiate and reach consensus in the coordination a large-scale

overseas project.

Global Village Trips

Global Village trips provide everyone concerned with opportunities for long-term interaction with people from other parts of the world. A typical Global Village trip begins in earnest when SUAC Habitat members arrive in our destination country and are met at the airport by the local coordinator who has arranged our schedule, lodging, transportation and work-site. The local coordinator essentially serves as guide, translator and fixer during our stay. Upon arrival at the final destination an orientation meeting is held in which the coordinator will explain the work context and background of the home partner or partners. Introductions to the local Habitat staff (drivers, volunteer interpreters, assistants etc.) will be made and any questions from SUAC Habitat members fielded. These meetings are very useful for us to understand the context in which we will be working and to develop an understanding of the circumstances of the local home partner. The SUAC Habitat circle also has their own meeting in the evening after work every day which consists of two or three members sharing their impressions so far and anything interesting, confusing or troubling they have experienced. These meetings are useful as a forum for members to communicate openly and share concerns or difficulties they may be having.

A typical Global Village trip consists of a week or ten days spent working on a building site broken up by two days of rest and recreation (R & R). The itinerary for the R & R days is decided beforehand through discussions between the local coordinator and the SUAC Habitat leader and usually consists of a visit to a local cultural center, tourist or historical site. Often we will be accompanied by local university students serving as volunteer guides wanting to meet people from overseas and practice their English. R & R days are always useful in allowing SUAC Habitat members to see more of the country, learn about the local history and culture and communicate with the coordinator and local volunteers in a more casual environment than at the build site. At the end of our stay there is always a closing ceremony at the build site in which we present the home-partners with gifts such as a sen-bazuru (thousand origami cranes) for best wishes on a happy future in their new home and a book containing messages from all the SUAC Habitat members. After the

ceremony at the build site there is also a farewell ceremony at a local restaurant or hotel in which everyone concerned with the project participates. The local coordinator, home partner and SUAC Habitat leader make speeches and present a cultural performance. These events are invariably emotional but fun-filled events with much laughter and tears and provide enduring memories for the SUAC Habitat members.

While home-stays with local families may seem like a natural way to get the most valuable experience during a Global Village trip this has not been possible to date. Repeated inquiries with local coordinators about the possibility of arranging home-stays has proven that they are unrealistic. SUAC Habitat usually sends 15-20 people on our Global Village trips and the burden of finding that many local families willing to host guests from overseas is daunting. Local coordinators have also suggested that the size of local homes, lack of amenities and sanitary conditions often conspire to make them unsuitable for SUAC Habitat members. Instead, we have found that staying two or three to a room in an inexpensive or moderately priced hotel has proven to be the best form of accommodation.

The initial overseas trip successfully took SUAC Habitat to the Philippines in Spring vacation of 2005. The following year saw SUAC Habitat visit Papua New Guinea which was found to be a challenging location in terms of safety, infrastructure and organization. Students documented their experiences in Papua New Guinea in an informative and interesting journal consisting of a collection of daily reports and photos of the build site. Later years saw SUAC Habitat make return trips to the Philippines, Thailand and Malaysia.

Recent Global Village Projects

In March 2010 SUAC Habitat traveled to Udon Thani in Northern Thailand. Twenty-two students and one adult chaperone spent ten days in Udon Thani building a single family home for a Thai family. This type of Global Village build experience, working closely with one family to help build a single-family home, is one of the two main types of building that take place on the Global Village trips. The other type of building involves working on a larger, often neighborhood-wide, building site in which a block of homes or even an entire neighborhood are being constructed.

Even though Thailand is not an English speaking country per se the local Thai coordinating staff and some of the construction workers at the build site were reasonably fluent in English. SUAC Habitat members are often shy and nervous when arriving at a build site for the first time as the local construction workers can look intimidating at first glance. On a Habitat Global Village trip however, there really is no time for hesitation because after introductions are made at the build site we all quickly get to work. The build site foreman typically asks for three people to help with one task, five to help with another and three or four for yet another. Students are quickly split up into their respective jobs and left to rely on the local construction worker to supervise them. SUAC Habitat members do unskilled labor on the build site such as shoveling dirt, digging trenches for plumbing, carrying equipment, painting, bricklaying, making bricks and laying concrete floors. This can be quite a shock for any student not used to physical labor. It is important for all students to take frequent breaks and ensure that they are drinking enough water as they are working in tropical heat and humidity. One of the benefits of working on a single family home as was the case in Udon Thani, Thailand is that it is possible to get to know the home partner family quite well. This give SUAC Habitat members an enlightening window into the lives of the home partner family with all their concerns and hopes and dreams for the future. With more than twenty people working on only one house, it is possible to complete a significant part of the house during a short time in country. It is rewarding for all SUAC Habitat members when a build site that is often only a dirt lot when they arrive is often ready for the home partners to move in with concrete walls, windows, concrete floors and a toilet when they leave.

With SUAC Habitat members working side by side with local people, nervousness quickly fades and connections begin to be made despite the language barrier. Even so, there is no doubt that not having a common language is clearly a barrier and connections are rarely as deep or long-lasting as they would be if everyone was able to communicate more extensively using English. Experience suggests that, in a non English-speaking country like Thailand, SUAC Habitat members tend to rely more on their adult chaperone as an interpreter necessarily limiting the breadth and depth of their communication with local people.

In March of 2011 SUAC Habitat took a trip to the Philippines to work in the city of Calauan in the province of Laguna which is about two hours south of Manila. Unlike Thailand, the Philippines is ostensibly an English-speaking country which promised to make the experience much different from the 2010 trip to Thailand. In addition to the linguistic differences from Thailand, in the Philippines SUAC Habitat worked not on a single family home but on an extensive building site. This was part of a government supported public-private partnership to voluntarily relocate residents from unsanitary, lower-income parts of Manila to a new, purpose-built community in Calauan, Laguna. In the Philippines SUAC Habitat members were able to communicate with local laborers and staff in English quite well from the very first day. This helped build rapport and allowed work to proceed more efficiently which made for a very pleasant build site environment. Working on a large build site rather than a single-family home also allowed for a greater variety of job tasks. While not being able to feel the sense of accomplishment as when completing one single-family house or getting to know one home partner family as well as in Thailand, SUAC Habitat members were able to meet many home partners and do a greater variety of job tasks in the Philippines. SUAC Habitat members who participated in both the 2010 Thailand and 2011 Philippines Global Village trips reflected on both experiences and found many positives in both while agreeing that it was much easier in the Philippines to communicate with people in English.

In March of 2012 SUAC Habitat set a new precedent by taking a joint Global Village trip with the Habitat for Humanity circle at Meiji Gakuin University (MGU) in Tokyo. This trip took the group to Siem Reap, Cambodia. This trip also marked the first time that SUAC Habitat traveled without an adult escort. Organizing this trip was a considerable challenge as it required coordination between SUAC Habitat and MGU Habitat as well as coordination with the Cambodian coordinator. Another challenge proved to be the meshing of the somewhat different philosophies and Global Village goals of SUAC Habitat and MGU Habitat. An example was the issue of making a donation of used work clothes and leftover foodstuffs at the end of the stay in Cambodia with some members opposed believing it violated the philosophy of the Habitat for Humanity organization. Eventually, a compromise was agreed upon but issues such as this indicate what kind of conflicts can occur

even between seemingly similar organizations of like-minded people. Ultimately, SUAC Habitat members reported that the overall experience of both traveling without an adult escort and with the Habitat circle from another university was an overwhelmingly positive one. It is hoped that joint Global Village trips can be undertaken in the future.

Current and Future Projects

SUAC Habitat fundraising activities are ongoing and planning for a 2013 Global Village trip is already underway. Also, in July of 2011 SUAC Habitat was rewarded for its efforts over the years by becoming recognized as an official campus chapter by Habitat for Humanity Japan. This is a significant accomplishment that all former and current SUAC Habitat members should be proud of. At present, there are only seven campus chapters in all of Japan and this gives SUAC Habitat more influence with Habitat for Humanity Japan both in selecting our Global Village location and other Habitat activities. It also allows SUAC Habitat to have a voice in suggesting policies and the future activities of Habitat for Humanity Japan.

SUAC Habitat temporarily suspended overseas activities and became actively involved in volunteer relief efforts for the Tohoku area immediately after the devastating earthquake and tsunami in March 2011. SUAC Habitat has

sent representatives to various parts of Tohoku during every vacation since the disaster. During summer vacation 2011 a SUAC Habitat member participated in an all-Japan Habitat volunteer relief effort in Ofunato and Rikuzentakada cities. SUAC Habitat members continue to travel to Tohoku both on official Habitat for Humanity Japan trips and unofficially with other Japanese university Habitat groups to provide volunteer aid and support in the rebuilding efforts. Many SUAC Habitat members have expressed an interest in volunteering in Tohoku as part of an official Habitat volunteer group but have been unable to do so due to minimum age restrictions and other strict regulations set by Habitat for Humanity Japan.

Another exciting development for SUAC Habitat is that two active members are currently studying overseas and have already created links with the Habitat for Humanity chapter at The University of Findlay in the United States. They have shared their experiences and the mission of their circle and have been engaged in a dialogue with their peers at The University of Findlay with the goal of possibly doing some joint activities in the future. It is also expected that the sharing of information can improve our fundraising, advocacy and education efforts. These activities indicate that SUAC Habitat is as vital as ever and is expanding both its vision and reach as we move to an inexorably more globalized world.



SUAC Habitat members present a sen-bazuru to the home partner.
Udon Thani, Thailand March 2010



SUAC Habitat members at the build site. Caluan, Laguna, Philippines
March 2011



SUAC Habitat members with MGU (Meiji Gakuin University) Habitat members
Siem Reap, Cambodia March 2012

References

Hays, R. A.; "Habitat For Humanity: Building Social Capital Through Faith Based Service." *Journal of Urban Affairs*. (2002): 24: 247-269.

Hughes, Mary.; Jenkins, Amy "Building for the Future: Habitat for Humanity Global Village Trips." *The Language Teacher*. (2005): pp. 9-12. Print.

Stoddart, H. & Rogerson, C.M. "Volunteer tourism: The case of Habitat for Humanity South Africa" *GeoJournal* (2004) Volume 60, Issue 3 pp. 311-318

"SUAC Habitat: Global Village Workcamp in Papua New Guinea ." SUAC Habitat. Mary Hughes editor: Hamamatsu, Shizuoka, Japan, 2006. Print.

"Global Village volunteer program ." Habitat for Humanity. Habitat for Humanity, n.d. Retrieved from <<http://www.habitat.org/gv/>> 16 Jun 2012.

"Habitat for Humanity Japan." Habitat for Humanity. Habitat for Humanity, n.d. Retrieved from <<http://www.habitat.org/intl/ap/103.aspx>> Web. 22 Jun 2012.

Stewart, Devin, "Slowing Japan's Galapagos Syndrome" Retrieved from http://www.huffingtonpost.com/devin-stewart/slowng-japans-galapagos_b_557446.html Friday July 15, 2012

Gov't launches task force to increase no. of Japanese studying abroad Retrieved from http://www.breitbart.com/article.php?id=D9NF50V80&show_article=1 Friday July 29, 2012

High school students less willing to study overseas Retrieved from <http://www.japantimes.co.jp/text/nn20120405a9.html> Monday August 27, 2012

階級の視点から読むアメリカ文学——ソール・ベローの *Dangling Man* 研究——

American Literature and Social Class : A Study of Saul Bellow's *Dangling Man*

鈴木 元子

文化政策学部国際文化学科

Motoko SUZUKI

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

アメリカ文学の作品を階級の視座から研究する。唯美主義や新批評による分析ではなく、文学作品を社会や、歴史、文化と接するところで解釈するものである。カルチュラル・スタディーズや社会学の「階級」の概念を援用して、小説の主人公の意識の揺れを分析する。作品としてはアメリカのユダヤ系作家ソール・ベロー (Saul Bellow) の *Dangling Man* (『宙ぶらりんの男』) を取り上げた。

This is a study on *Dangling Man* written by Saul Bellow, a Jewish American writer, from the viewpoint of social class. It is not a close reading under Aesthetical or the New Critical analysis but is explored based on the concept of class being used in fields of cultural studies and sociology. Class consciousness of the protagonist in *Dangling Man* is discussed in relations to society, history and culture.

階級の視点から読むアメリカ文学 ——ソール・ベローの *Dangling Man* 研究——

妻アニータに捧げられたソール・ベロー (1915-2005) の第一作目の小説『宙ぶらりんの男』 (*Dangling Man*) は、1942年12月15日から43年4月9日までの日記から成る日記体小説である。ハードボイルドの時代に男性が日記をつけることは、“nowadays is considered a kind of self-indulgence, a weakness, and in poor taste” (9) と断わりをつけながら、28歳のユダヤ系アメリカ人ジョウゼフ (Joseph) は、米軍入隊待機中の日常と心境を綴っていく。この“nowadays”とは1942年も終わりに近づいた頃のことだが、従来この「1942年」という時代性に関心を払う者は少なかった。作品の時代性に注目するよりも、普遍化してしまう傾向が強かったからである。

ゆえに本研究では作品の時代設定を重視し、細かく検証しつつ、階級の視座からの読み直しをはかり、ジョウゼフを中心に作中人物たちの社会階層の位置の析出を試みる。それは、「地方色文学と上流階級」という論考を著したりチャード・H・ブロードヘッド (Richard H. Brodhead) が主張するように、“it is through the analytic agency of class that literature can be examined as a relational field” (Dimock 9) だからである。

1 戦時中

この小説の時代性について目が開かれたのは、ジョウゼフの1942年12月22日付けの日記に、“the posters of foundering ships and faces of Japanese” という9語を発見したときである。目が釘付けになった。安レストランの壁に貼ってあったこのポスターをジョウゼフが目にしたのは、日本軍が1941年12月7日 (米時間) に真珠湾を攻撃してアメリカと開戦してから約一年後のことであつた。こうして『宙ぶらりんの男』のこの時代のことを一旦受容すると、作品中の「第二次世界大戦下」を表す言辞が次々と目に飛び込んでくるようになった。

12月17日の戸外、強風が吹きつける閑散とした街

路に、「長い兵隊用のコートに身を包んだ」 (“in a long, soldierly coat”) 通行人が一人佇んでいるシーンや、毎朝新聞を儀式のように隅から隅まで読んでいるジョウゼフがたまに会った友人アプトを相手に、「最初に切り出したリビアにおける戦争の話」 (“on the first subject that came to hand, the war in Libya”) ¹ が22日の日記に記されているなど、何気ない日常生活に戦争が忍び寄ってきていることに気づくのである。

さらに国家が戦時下にあることで、人々の暮らしに様々な影響が出始めていた。12月26日、兄エイモスの家に行くと、コーヒー、靴、衣料などの物資配給量の不足が話題になっていた。アメリカ政府が戦時用の備蓄のために販売規制をかける前に、買いだめをしておいた方がよいというのである。そして、1月3日の日記には、太平洋上で戦死した戦死者名簿にジョウゼフの元同級生の名前があったことが記されている。“His rank was given in the paper as ensign; his ship was a Catalina” の記述から、戦死して友人の階級が海軍少尉に昇格したことを複雑な心境で受け取っている主人公の気持ちが窺われる。次の“A Jefferson Forman is listed as having crashed in the Pacific” の一文から、友人は日本軍と戦って戦死したことがわかる。ところが、ジェフ・フォーマンの訃報に心沈む主人公の脇で、靴の買いだめのことしか頭にない兄の姿が日記にくっきりと描写されているのは、ジョウゼフも観察者だからといえよう。

1月11日、市電に“A young soldier and a girl” が乗り込んでくるが、二人とも酔っぱらっている。13日、シカゴのサウス・サイド63丁目のクーロン体育館の前でボクサーたちの写真を眺める。下のキャプションには、“Young Salemi, now with the Rangers in the South Pacific” (青年サレミ、南太平洋の特別奇襲隊を慰問) とある。アメリカでも、スポーツ選手がスポーツに熱中していればよい時代ではなくなっていたのか。物価は高騰し、去年の春25セントだったリール糸が現在は3倍の75セントに跳ね上がり、オレンジの価格も値上がりしていた。4年前には貧民救済法の支援を受けていた人々が、今では軍需工場の職工として高給を取っているという思いもかけ

ない事象も見られた。

ジョウゼフの義父は物資さえ手に入れば、いくらでも金儲けができる時代だと言うが、老人には実際に元手はない。義母はロシア人救援バザーのためにケーキを焼き、女たちは献血に行く。年若い娘たちは若い男がみな兵隊に取られ、残っているのは高校生だけだと嘆き、友人のジャック・ブリルは12月に入隊し爆撃機の爆撃手になるのだと言う。このように、ジョウゼフの日記から「戦争」に関する部分を拾い上げてみると、太平洋戦争、北アフリカ戦線、南アジアでの戦い、ソ連での戦闘と、四つの戦争がアメリカ人の暮らしに暗雲を投げかけていた時代であったことがわかる。

そのような中で、*"He isn't working now, he's waiting for the Army, so he has all the time in the world"* (22) という皮肉めいた義母の言葉通り、入隊すると思い、一足先に会社を辞めていた主人公は毎日時間を持て余していた。彼自身、*"I, in this room, separate, alienated, distrustful, find in my purpose not an open world, but a closed, hopeless jail. My perspectives end in the walls"* (92) と表現しているように、会社を辞めたことで社会におけるアイデンティティの大きな部分が失われ、だからといってすぐに入隊・配属されるわけではなく、「待機」しているという「宙吊り」の中にいる苦悩を赤裸々に記録している。社会的な疎外感を味わいながら、閉塞感の漂う「牢獄」に在るのと同じで、過去の評論では永らくこれがこの作品の主題であるとの定説を生んだ。

2 ジョウゼフたちの階級

このような緊迫した時勢に、ジョウゼフは下宿屋の1室に閉じこもり、妻に養われながら、*"I must know what myself am"* (1月26日) と深い思索に入る。このアイデンティティの不確かさ（揺れ）は、妻にはアルムスタットという旧姓があるのに対して、ジョウゼフには名字の記載がなく、且つ彼の父親の氏名も不明であるということにそれを読みとることができる。ⁱⁱ

ジョウゼフはひきしまった顔に長くてまっすぐな鼻が目立つ風貌をしており、短い口髭を生やし、大きな黒い眼をした黒髪の青年である。背が高く、筋肉は弛んでいるがハンサムで、ウィスコンシン大学を卒業していて、愛想がよくて人に好かれるタイプと自己申告しつつも、「変わっている」(*"peculiar"* [26], *"ridiculous"* [28], *"the funny side"* [28], *"odd"* [28]) とつけ加えるのを忘れない。思想的には、17歳のときに коммуニストであり、今はマキアヴェリアンに見られることを好むという。大学で歴史学を専攻していたためか、現在でもまるで研究者のように本に取り囲まれている。このようなことからアメリカ社会の階級については敏感であると推測することができる。*"You don't believe in the historic roles of classes, do you?"* (139) と、おのれの分身に語るのもその例証といえよう。

それぞれの作中人物が当時の社会でどのくらいの階級に位置していたのかを推定してみたい。ブルジョア（資産家）階級には、兄嫁ドリーの父とドリーの兄ローレン、ジョウゼフの兄エイモスが当てはまるだろう。ローレンは

東部の大きな靴会社の社長で、この戦争でアメリカ政府が皮革製品販売を制限するだろうという情報をいち早く入手するのは、政府に近い政財界に身を置いているからである。従って兄の一人娘のエッタは叔父のジョウゼフを見下し、資産家である母方の一族の方を好んでいる。*"She prefers her mother's people. Her cousins have automobiles and summer homes"* (61) の一節が示すように、「車と夏の別荘」が資産家階級を表すシンボルとして機能しているのを見る。ブロードヘッドによると、南北戦争後にアメリカのエリートは上流階級のバカンスによる養生法を真似るようになったので、夏の高級保養地として、バークシャー、マサチューセッツ北岸、ケープ・コッド、マサチューセッツ・ヴィニヤード、メイン州やニュージャージーの海岸などが新たに開発されたという。避暑地に「小別荘（コテージ）」建築様式が現われたのは1882年頃からである (Brodhead 159)。*"Howells' s documentary The Rise of Silas Lapham (1885) notes that in the contemporary world the hereditary upper class and industrial nouveaux riches both make it their duty to 'summer,' . . ."* (Brodhead 160)。エリートの夏期休暇保養の習慣は重要な象徴的機能を果たすようになり、この集団の社会的優位性を劇的に表現するようになったのである。そこで、エッタのいとこたちが「車と夏の別荘」を所有していることは彼らが資産家階級で、他者に比べて社会的に優位であるということを知らしめているのである。

ジョウゼフより12歳年上のエイモスは株式取引所の使い走りから身を起こし、25歳までに *"a member of that body, with a seat of his own"* (59) にまで出世していた。このように一代で社会階層の階梯を駆けのぼれたのは、大金持ちの娘ドリーと結婚したことに依る。それを心得ているエイモスは、ジョウゼフにも金持ちの娘と結婚することを強く勧めるが、彼は従わない。大学卒業後は自分の会社で働くようにという兄の助言も無視して就職した旅行会社など、エイモスから見れば *"a menial job"* (59) でしかなかった。つまり、他人の会社では、それより先に出世していく道筋がないということであろう。ところが、兄の会社なら違う。それは『ペンギン社会学辞典』がアップークラスについてこのように定義しているのを見ても容易に理解することができる——*"Family and kinship give a certain coherence to the class, which is reinforced by similar educational experiences, intermarriage and continuing friendship and business contacts"* (Abercrombie 404)。

この作品では下宿屋家主の娘婿のブリッグズ大尉、ジョウゼフに臨時の仕事を世話しようとしてくれるマイロン・アドラー、加えて、フルタイムで働いている友人のホワイトカラーたちが中流階級といえる。他には、ワシントンに居住し、北アフリカに飛んだタッド、ブラジルを旅行しているロビー・スティルマン、親友のモリス・アプト、ジョン・パール（画家）、ジャック・ブリル、ミーナ・サーヴェイティアス、ジョージ・ヘイザがいる。この中でも大学時代のルームメートのアプトは出世頭のような男で、博士論文を書いて政治学の講師になったが、パーティーの後、今度はワシントンに発って若手官僚になるという。ジョウゼフ

の「それにも満足しないだろう」のコメントから、アプトの出世欲と能力なら中産階級を超えて上流階級まで上りつめるのもそう遠くはないことが示唆されている。ペローの後の作品である『学生部長の十二月』に登場するデューイ・スパングラのような人物になっていきそうである。外部からこの友人たちのグループに入ったというジャック・ブリルは、“Others lean to the snob side. They’re not very agreeable. They’re cold. Even you, if you don’t mind my saying so” (54) と指摘してくるので、戦前に有名大学を卒業していた彼らは中流のスノップだったに違いない。

それに比して、労働者階級には、下宿屋の部屋を掃除しているメアリと、仕立屋のミスター・ファンゼルが該当する。メアリも、姓、学歴、年齢、家族、住所など一切が不明であるが、“Marie has high standards for white conduct, and her nostrils grow wider when she speaks of him [Vanaker]” (17) の一節から、おそらく白人ではないのではないかと考えられる。白人の下位に置かれている有色人種だからこそ、白人の言動に高い水準を求めるのではないか。舞台はシカゴなので、有色で人口比の多い「黒人」ではないかと推測される。

1月18日、メアリが仕事をしているのを眺めて、日記にこう記す——“In those moments at the window, how different Marie was, how purely human as she rubbed the glass” (113)。ガラスを磨く彼女に対して、無職の彼は内心忸怩たる思いがあったのだろう。一生懸命に働くメアリに比べ、「不安のうちに横たわり、明日はどうなるのかと考えている自分」。だが、逆にこの文章は労働をしなくても食べていける我身が階級的に上位であることをも示している。メアリがプロレタリアートなら、無産階級に働いてもらうのがブルジョアジーである。ジョウゼフは自分を「プチ・ブル」(“petty-bourgeois” 36) と見なしていた。労働をせずに1日24時間自由に暮らし、文芸を楽しめる身分があるとしたら、それは一昔前の「貴族階級」である。しかし、現状は苛酷で、兵隊にもなれない自分は、メアリの目からも“I am of no importance” (15) に違いなかった。他方、ファンゼルは、“He must make money while he can; he is one of the little people” (110) と叙述されるように、自己の労働を提供して賃金を得て生活する「賃金労働者」であった。

ジョウゼフが高校生のときに信奉していたマルクスの『共産党宣言』(1847)では、労働者階級をプロレタリアートと呼ぶ。ジョウゼフも1回だけこの用語を使っている。昔の共産党員仲間のジミー・バーンズにアロウ・レストランでばったり会ったとき、“He still wears that proletarian bang on his earnest forehead and dreams of becoming an American Robespierre” (35) と直感した。そして、自分がバーンズから無視されると、“I’m a contemptible petty-bourgeois renegade; could anything be worse?” (36) と叫んでしまう。実は無職だったのだから、正直にそう言うこともできたのに、プロレタリアートより上位のプチ・ブルと自己認識しているのは、大学を卒業していたからだろうか。貧しい苦学生から出発して、フランス革命を起こすと権力を掌握し、独裁者となって粛清の恐怖政治を行った、「ル

ソーの血塗られた手」ロベスピエールにはもう関心が失せていたからである。

財産がなく、社会的地位も生活水準も低い「下層階級」には、隣の部屋の住人ヴァナカーが該当する。夜間に近所迷惑な咳払いをし、トイレの戸を閉めず、深酒をして空瓶を隣家の庭に投げ捨て、靴下や香水を盗み、最後にはジョウゼフと喧嘩になり下宿屋から追い出される男である。しかしまたヴァナカーのような下層の男が住む下宿屋にジョウゼフ夫妻が居住しているという事実こそ、夫妻の経済的困窮を表している。その前に住んでいたのは、家具つきアパートであったのだから、住環境が落ちたといえる。さらには職もなく、1日中部屋に独りであるという意味では、ジョウゼフもヴァナカーもあまり変わりはない。ジェイムズ・メラード (James Mellard) も言葉こそ違いが同様のことを指摘している——“To the extent, then, that Vanaker is the objective correlative for Joseph’s spiritual craters...” (20)。

アイヴァはヴァナカーに“werewolf” (16) というあだ名をつける。ウェアウルフ (werewolf) の“were”は人間の男性を意味する古英語で、ラテン語の“vir” (ウィル) に由来する。「ウルフ」は狼なので、ウェアウルフを直訳すれば「狼男」となる。狼変身 (lycanthropie) というのは、人間が特に狼に変身する現象で、人狼の存在は古代から文献に見られた (クレベール 69)。狼男にはウルフマンという英語があるのに、なぜここで「ウェアウルフ」としたのだろうか。また、12月16日の日記でジョウゼフはヴァナカーを、“He is a queer, annoying creature” (16) と記述している。民間伝承において狼男は森や畑を荒らし、そこに立ち入る人間を襲撃する悪しき存在である。1935年にハリウッド映画で、狼男を題材にした最初の *Werewolf of London* という映画が公開されたが、内容的には、イギリスの植物学者が珍しい植物を探しにチベットに行き、そこで狼男に襲われて、みずからも狼男に変身するようになり、最後には警官に射殺されるというストーリーである。ペローが狼男を表現するのに、“wolf man”より“werewolf”を採用したのは意味がありそうである。1935年に公開された *Werewolf of London* というタイトルの映画と、その6年後の1941年に公開された *The Wolf Man* ではストーリーが異なっており、ペローのお気に入り35年の植物学者が登場する映画の方だったのである。ⁱⁱⁱ



Werewolf of London のポスター

ヴァナカーに狼男の異名を与えることで、半人半獣の「人間以下」というイメージを付与したのであろう。家中を覗き回るヴァナカーを、メアリは“He is no gentleman” (17) と言う。ジョウゼフの階級意識の中で、ヴァナカーは一段と下位に置かれた存在、ここまでは落ちたくないといった存在ではなかろうか。

この小説の中にはもう一人、マルクスの用語を借りれば、「ルンペンプロレタリアート」と呼べるような人物がいる。ルンペンプロレタリアートとは、無産階級や労働者階級の中でも革命意欲を失った極貧層を指す。特に、『ルイ・ボナパルトのブリュメール 18 日』(*Brumaire*) では、ルンペンプロレタリアートの具体的内容について、次のように記述されている。

いかがわしい生計手段をもつ、いかがわしい素性の落ちぶれた貴族の放蕩児と並んで、身を持ち崩した冒険家的なブルジョアジーの息子と並んで、浮浪者、除隊した兵士、出獄した懲役囚、脱走したガレー船奴隷、詐欺師、ペテン師、ラッツァローニ、すり、手品師、賭博師、ポン引き、売春宿経営者、荷物運搬人、日雇い労務者、手回しオルガン弾き、くす屋、刃物研ぎ師、鋳掛け屋、乞食、要するに、はっきりしない、混乱した、放り出された大衆、つまりフランス人がボエーム〔ボヘミアン〕と呼ぶ大衆がいた。(マルクス 104)

ぐれて冒険的な生活を送っているブルジョアの子弟や、ギャングや犯罪者などのアウトローをも指す用語である。ルンペンプロレタリアートは、ベローの後の作品である『サムラー氏の惑星』(*Mr. Sammler's Planet*, 1970) でサムラーの姪のマーゴットが口にしており、『フンボルトの贈り物』(*Humboldt's Gift*, 1975) ではシトリーンとカンタービレの会話に出てくる。

このルンペンプロレタリアートの範疇に該当するのが、“I work a little, sponge a little, gamble a little. I suppose I am a deadbeat” (130-31) とうそぶく友人のアルフ・スタイドラー (Alf Steidler) である。2月1日、たまたまサウス・サイドでスタイドラーに遭遇し、思い出すのはドニ・ディドロ (Denis Diderot) の『ラモーの甥』(*Le Neveu de Rameau*, 1761) の一節、“... un (personnage) composé de hauteur et de bassesse, de bon sens et de déraison” (DM 127) である。1 年前にジョウゼフがフランス啓蒙期の哲学者に関する伝記的なエッセイを書いていたとき、ディドロについても半分くらいまで書いて中断していたのである。ディドロといえば、その『百科全書』は当時の先端技術や科学思想を紹介しながら社会・宗教・哲学等の批判をしたために、刊行が宗教界と特権階級から危険視され、出版弾圧まで受けたのであった。それゆえディドロの名前自体が、支配者階級に対するアンチテーゼを暗示している。

スタイドラーは道路工夫という底辺の仕事から始め、公共事業促進局 (WPA) が閉鎖になると、ルビッチに取り入ろうとして、太平洋沿岸に向かった男であった。実在の人物エルンスト・ルビッチ (Ernst Lubitsch, 1892-1947) は、ロシア系ユダヤ人の洋服屋の息子としてベルリンに生まれたが、父の仕事を継がずに劇場入りし、役者

から始めて制作者に昇格すると、米国に渡ってハリウッドで活躍した映画監督である。徴兵検査にはねられたスタイドラーは、自分はイカレテイルが、ジョウゼフは“normal bastards” (130) だと励ましてはくれるものの、弟のポケットから 20 ドルを盗んだと平気で言うスタイドラー。ジョウゼフは、“I was as tired as though I had spent the day in dissipations of a particularly degrading sort with Steidler as my accomplice. I did not tell Iva of the visit. She disapproves of him” (133) と彼の低級さを日記に綴っている。アイヴァに嫌われているスタイドラーと自分とでは、人間として大差があると確信しながらも、2月10日の日記にスタイドラーが前週 2 回も訪ねてきたのは、ジョウゼフを「同類」(“congenial” 148) と見なしているからではないかと不安になる。換言すれば、“we are in the same boat” (148) なのだろうか。本に囲まれ、研究者肌のジョウゼフにしてみれば、競馬での勝敗や詐欺、報復、債権者を侮る手紙、情事について延々と語るスタイドラーと自分とでは品性において階級が異なるはずなのに、家族に依存して生活する経済的な観点からは同階層になってしまう。すなわち、ジョウゼフもルンペンプロレタリアートに限りなく近づいていることを意識せざるを得なかった。

3 ジョウゼフとベロー

ジョウゼフにとって、おのれが何者であるかを知る一助は自己のルーツである。そういえば、幼少期の彼を惹きつけたのは「祖父」の写真であった。

It showed him supporting his head on a withered fist, his streaming beard yellow, sulphurous, his eyes staring and his clothing shroudlike. I had grown up with it. And then, one day, when I was about fourteen, I happened to take it out of the drawer together with the envelope in which my curls had been preserved. Then, studying the picture, it occurred to me that this skull of my grandfather's would in time overtake me, curls, Buster Brown, and all. Still later I came to believe (and this was no longer an impression but a dogma) that the picture was a proof of my mortality. I was upright on my grandfather's bones and the bones of those before him in a temporary loan. But he himself, not the further past, hung over me. (75-76)

祖父の写真は、ジョウゼフが紛れもないユダヤ人であることを思い出させてくれた。ラヒリ・マハサヤの写真のように、祖父の写真はジョウゼフが忘れた頃に突然出てきて、彼を放っておかないのである。^{iv}

幼少時代、ジョウゼフの家族はモントリオールのサン・ドミニーク通りのスラムに暮らしていたことがある。

I have never found another street that resembled St. Dominique. It was in a slum

between a market and a hospital. I was generally intensely preoccupied with what went on in it and watched from the stairs and the windows. Little since then has worked upon me with such force as, say, the sight of a driver trying to raise his fallen horse, of a funeral passing through the snow, or of a cripple who taunted his brother. And the pungency and staleness of its stores and cellars, the dogs, the boys, the French and immigrant women, the beggars with sores and deformities whose like I was not to meet again until I was old enough to read of Villon's Paris, the very breezes in the narrow course of that street, have remained so clear to me that I sometimes think it is the only place where I was ever allowed to encounter reality. My father blamed himself bitterly for the poverty that forced him to bring us up in a slum and worried lest I see too much. And I did see, in a curtainless room near the market, a man rearing over someone on a bed, and, on another occasion, a Negro with a blonde woman on his lap. But less easily forgotten were a cage with a rat in it thrown on a bonfire, and two quarrelling drunkards, one of whom walked away bleeding, drops falling from his head like the first slow drops of a heavy rain in summer, a crooked line of drops left on the pavement as he walked. (85-86)

階段や窓から覗き見た、このサン・ドミニーク通りの情景——ホームレスや障害者、夜の女性、泥棒、酔っ払いのたむろする移民街は最下層の情景——であったが、ジョウゼフにとってはこれこそが「現実と出くわす唯一の場所」であったと告白されている。つまり、彼の意識の原点はここにあるというのだ。それゆえ飛び級して社会上昇した兄が甘やかして育てている一人娘に対する家庭教育について、“You’ve taught her to hate the class and, yes, the very family you come from” (72) と文句をつけざるを得ない。自分たちの出自の階級がモントリオールのユダヤ系移民のスラムであることを、記憶喪失者のように忘れて暮らしている兄に対して、抗議せざるを得ないのである。

自分の骨格が母方の祖父の骨格と同じであるという発見は、「母がユダヤ人であればその子どもはユダヤ人」というユダヤ民族のルールに則り、ジョウゼフのユダヤ性が折り紙つきであることを示している。祖父と自分の切っても切れない血筋は、同時に民族の血統を示す。しかしながら、それはドイツ系の友達の家に遊びに行ったとき、思いもよらない恐ろしい呪いとなって降りかかってきた。12月27日の日記によると、ジョウゼフの家族は顔立ちがよく、特にジョウゼフはハンサムであった。高校生のとき、ヴィル・ハルシャの家に遊びに行くと、たまたま家にいた彼の父が妻に向かって、ジョウゼフのことを、“*Er ist schön*”

(「彼は美しい顔をしている」) とドイツ語で話した。ハルシャ夫人もドイツ語で、“*Mephisto war auch schön*” (「メフィストだって、やはりきれいな顔をしていたわ」) と答えた。

この回想は中産階級のジョウゼフが入隊のために職を辞したことで、ヴァナカーと同階層にまで下降してしまったことに暗に繋がってくる。自分では意識していなかったが、ジョウゼフはヴァナカー同様に苛立ち、怒り、大声を出し、喧嘩っばやく、妻のほかにキティ・ドームラーとも関係をもち、ヴァナカーが「人狼」なら、ジョウゼフは兄に「ジャッカス」(65, 73) と罵られるほど、「動物」にまで落ちていたのかもしれない。ユダヤ教では、魂のない身体を動物という (“A body without a soul is an animal” Blech 21)。ジャッカスとは口バのことで、そこからバカ、まぬけ、うすのろといったシュレミール的な意味合いが派生してくる。ドイツ人夫妻が彼について語った「悪魔」(メフィスト) がひとつのアイコンなら、ジャッカスもまたジョウゼフを表わすもうひとつのアイコンなのである。

ユダヤ教神秘主義の「カバラ」(生命の樹の体系) では、魂を二種類に分け、それぞれ「動物魂」(ネフェシュ) と「人間魂」(ネシャマ) と呼ぶ。さらにカバラの伝統では、進化は順に鉱物、植物、動物の段階から、肉体をもつ人間の段階へと上っていく(ハレヴィ 27)。ジョウゼフに付与された動物や悪魔のアイコンは、人間の世界における彼の経済的・社会的地位の転落を象徴すると共に、精神的な揺らぎ(感情的な爆発、怒り、情緒不安定)を表わしているとも見受けられる。旧約聖書物語のヨセフが極端に上下する人生を送ったように、同名のジョウゼフ(ヘブライ語読みでヨセフ) もその運命の下にあるといえそうである(Pinsker 115)。

モントリオールでスラム暮らしをしていた一家が父のビジネスの失敗から今度はアメリカに流れてくるのだから、シカゴでも移民として最底辺層から出発しなければならなかったであろう。20世紀初頭、移民がアメリカの社会階級においてどのような位置づけにあったかは、リチャード・H・ブロードヘッドのこの言葉を待たずとも——“To this elite at this time, as many studies have shown, the Immigrant became a kind of iconic representation of the lower classes thought of as class antagonists” (164)——、まさに下層階級を表わしていたのである。さらにジョウゼフの国籍が「カナダ国籍」のままであったことから、この『宙ぶらりんの男』という日記体小説は始まったのである。ジョウゼフが「アメリカ人でない」ことが原因で、入隊の手続きが遅れに遅れ、その数カ月間の当事者の心境を綴ったのがこの小説だからである。そして、この辺りの事情は、作者ソール・ベローの伝記的な事柄をかなり反映しているといえる。

1942年にベローはメルヴィン・トゥミン(Melvin Tumin)に宛てて、“I am again I-A; last week I took a second blood test and if my virtue is vindicated I shall be inducted within the next two weeks” (L 21) との書簡を送っている。トゥミンはのちにプリンストン大学で社会学の教授になり、人種関係の研究で有名になるが、このときは博士課程に在籍して、グアテマラで調査をしていた(L 24)。この書簡からベローもジョウゼ

フと似たような生活を送っていたことがわかる。この頃ベローはすでにアニータと結婚していて、ジョウゼフがアイヴァに依存しているように、ベローも彼女に養われて小説を書いていた。ベローは父からの資金援助には恥ずかしさを感じていたし、重ねて、作家という職業を選択したことに対する後ろめたさが付きまとっていたのである。このもどかしさに打ち勝つために、強制的に徴兵されたいと望むまで追い詰められていた (L 25)。

ある日の午後 2 時半、元指導教授のメルヴィル・J・ハースコビッツ (Melville J. Herskovits) から電話がかかってきたことがある。

"In some detail he insulted me on each of the following: 1. The fact that I am unemployed and at home at 2:30 P.M. 2. My lack of qualification as an applicant for any consideration from the national roster. 3. The fate of my novel. [...] And last, *in allgemein* [*], my wasted life." (L 26)

侮辱された内容の 1 と 2 はジョウゼフと共通し、3 は小説の執筆状況と出版についてだが、ジョウゼフもディードの原稿を未完成のままにしていたので、ほぼ相似していることになる。このときベローは出版社に送った短編小説が却下され、惨めな思いに陥って「クマ」になっていたところだった。

There is nothing new with me. I am a recluse, I am a bear. I bite people's heads off when they cross me. I have known one hundred sixty-nine brands of humiliation. Two weeks ago I stopped work on my novel—it was not direct enough—and have since solaced myself with a book called *The Notebook of a Dangling Man*. (L 27)

ベローは 1942 年 2 月 23 日に The Colt Press の編集長ウィリアム・ロスに宛てた手紙の中で、"because the Army is hot on my heels and I should like to have the fate of the book decided before I leave" (L 29) と書いているし、さらに 4 月 2 日の手紙においては、"The Army has just notified me that I will be inducted on June 15th. With this hanging over me I would like to clear up all my business, and especially *The Very Dark Trees*, as quickly as possible" (L 29) と書いている。実は、ベローの入隊日もカナダ国籍のために日程が延びていたのである。

1943 年に、シカゴからベローがドゥワイト・マクドナルド (Dwight Macdonald) に宛てた手紙にはこう記されていた——"I [...] am now nearing the end of *Notes of a Dangling Man*, a short, semi-autobiographical novel which rather pleases me. I am going to have to peddle this one on my own, too" (L 34)。

ついに 1944 年 3 月 23 日にバンガードプレスから

『宙ぶらりんの男』が出版されると、エドモンド・ウィルソン⁹が『ニュー Yorker』誌で、"one of the most honest pieces of testimony on the psychology of a whole generation who have grown up during the Depression and the war" (Atlas 99; L xxi) と高く評価してくれた。このように『宙ぶらりんの男』は半自伝的な小説で、モントリオールユダヤ系移民の子という出自ばかりか、カナダ国籍のために入隊が遅れたというのもソール・ベロー自身が経験したことだったのである。

4 エッタとの衝突

次にジョウゼフの変人ぶりを炙り出すために、兄との関係、また姪との衝突事件を中心に考察してみたい。兄は弟の職業選択や生き方に関して、"strange" (59) だと決めつけていた。ジョウゼフが失業すると小切手を送ってきたが、すぐに送り返すほど弟は誇り高かった。食費をうかすようにと兄は頻繁に食事に招いてくれ、弟に服を贈ると言い、断るとひどく腹をたてた (『オーギー・マーチの冒険』にも同様のシーンがある)。

エッタは 15 歳だが、うなじをのぼして歩く姿は賞賛すべきもので、エッタも自分同様誇り高い女性だとイザヤ書 (3:16-17) まで引用している。ところが、二人の間には、"a longstanding antagonism" (61) があったのである。兄が子どもの頃の苦労話をしても、結局エッタは資産家の娘として生まれてきたのだし、資産家の娘として育てられたのである。それは、ジョウゼフとは全く別世界の人間であることを意味した。つまり、両者の暮らしぶりと考え方に、それだけ社会階級的な差があったことになる。しかしながら皮肉なことに、ジョウゼフとエッタには身体的な相似もまたあったのである (62)。祖父の骨格とジョウゼフの骨格との類似、そして、ジョウゼフとエッタの骨格との類似は、理性や嗜好をはるかに超えたものであった。エッタの側からすれば、彼女の恐怖は自分の中に軽蔑すべき叔父の血が混じっていることで、一方ジョウゼフが恐怖するのも、子どもがいない自分たち夫婦にとってみれば、自分が過去から受け継いできた血 (DNA) がエッタの中に入っているからこそ、こんな愚かな娘であっていいのか、という不満やらかなない気持ちが生じてくるのであった。

「一日も早く入隊して、幹部候補生の資格を取ることだ」(64) と急かす兄に対して、ジョウゼフには出世欲というものなかったので、生き方も違えば折り合う部分もなく、終極、戦争に対する考え方も異なっていた。戦争も出世や金儲けの機会と捉えるエイモスに対して、ジョウゼフは、"As I see it, the whole war's a misfortune. I don't want to raise myself through it" (64) や、"Socrates was a plain foot soldier, a hoplite" (64) と考えていた。兄がくれた百ドル紙幣をつき返すと、"You are the most obstinate jackass I've ever seen" (65) と叱責される。さらに追い打ちをかけるように、その娘のエッタに彼は "Beggars can't be choosers!" (70) と「乞食」呼ばわりまでされ、おまけに "You dirty . . . dirty no-account. You crook!" (70), "like a pool-room bum" (72) と散々侮辱されるのである。この "bum" とは「ルンペン、怠け者、無能な人」の意味で、ついには、ブルジョアの姪に「泥棒」("thief" 73) と勘繰られるところまで

エスカレートしていく。

他方、ジョウゼフの実父も、化学を勉強していた息子が学校をやめて軍需工場に働きに行き、“an excellent job” (124) に就いたという友人の話を引き合いに出してくる始末である。それに対して、ジョウゼフは職業やひいては階級についてこう考えている。

This means that I, too, should have been a chemist or physicist or engineer. A non-professional education is something the middle classes can ill afford. It is an investment bound to fail. [...] My accomplishments, he acknowledges, are wider than his; my opportunities were greater. But bread and butter come first. [...] My father's justification is, however, that I have prepared myself for the kind of life I shall never be able to lead. (124-25)

中産階級には実用教育（職業教育）こそ必要で、職業に結びつかない学問などは子どもへの投資が失敗したも同然で、まずは食い扶持を稼ぐことが第一なのだという父の考えも、それはそれで理解できるのだが、そのとき自分が目指してきたものが、到底手の届かない世界であるような気がしてきて、戸惑うのである。つまり、この1940年代でも、まだユダヤ人にとって「成功」とは何かという問題が提起されていたのである (Gilman 126)。言い換えれば、中産階級の息子が望んではいけない階級を望んでいる、といった一種の階級的疎外感を味わうのである。

さらに、妻に養われだすと、予期しなかったことが起こり始める。妻が自分に反抗するようになったり、妻の指図を受けて小切手を換金するために銀行に行ったり、妻の実家で義父の介護をしたりと、ジョウゼフの主夫化や女性化（役割分担的な意味での）を強いるような状況が生じてきたのである。

ジョウゼフはみずから中産階級と認識していた。プチ・ブルジョアとさえ思っていたのかもしれない。ところが実態は、ヴァナカーやスタイドラーのレベルまで下降しそうな危機を孕んでいた。日記を書く習慣から、ジョウゼフはそれを意識化できるような立場にいた。無職・無収入に加え、正常な中産階級からは逸脱した品性・物腰まで徐々に見られるようになってきていた。暴言暴力に近い行為が銀行やアロウ・レストランで見られ、また兄の家ではエッタの尻を叩くなど、これまで彼女の両親でさえしたことのないことをしでかし、さらにはアイヴァとの口論、最後にはヴァナカーに対する爆発といった具合に、5回の事件を引き起こした。ヴァナカーは他人の部屋から靴下や香水を盗み、スタイドラーも弟のポケットから20ドルを盗むような泥棒だった。この二人とは絶対に一線を画していたはずのジョウゼフなのに、ぶらぶらしている叔父さんだから母ドリーの寝室で何かを漁っていたとエッタに盗みの嫌疑をかけられてしまったのである。“Convicted of theft, or assault, or worse. . .” (74) における“worse”のあとの語られていない言葉は、エッタの悲鳴から性暴力の嫌疑さえ浮上したことを物語っている。ジョウゼフの名前が由

来する聖書のヨセフも婦人暴行の「冤罪」で投獄されたことがあった。

5 おわりに

小説の最後でアイヴァの言葉から、繕いができないくらい繕った服をジョウゼフが着ていたことが（読者に）判明すると、彼はすでに中産階級には留まっておれず、ひどく困窮していたことが露わになる。徴兵委員会に手紙を書いて、入隊を早めてもらうのは、自分の階級的下降をようやく意識したジョウゼフがやむにやまれずに取った行動といえる。もともと日記をつけ始めた動機が「おのれを知りたかった」からで、「わが身に何が起こりつつあるかを見逃さずにいた」(27) だったからである。

それはまた、ハードボイルド派に対する挑戦でもあったろう。ヘミングウェイのように、「飛行機を乗りまわし、猛牛と闘い、大魚を釣り上げる」ハードボイルド派に対して、ペローのジョウゼフは自室を出ることが殆どなく、椅子に根が生えた状態で、心の中の真摯な問題に向き合っていたからである。アメリカのWASPの文体であるハードボイルドが「アメリカが受け継いだイギリス紳士の遺産」(9) であるとするならば、カナダを経由して東欧の旧大陸から新大陸に移民してきたユダヤ系アメリカ人にとって、すなわち戦時中に内省するユダヤ系にとって、真に迫る問題とはアメリカに同化することの意味とその決断ではなかっただろうか。小説全般を通して、反体制の匂いがするもの、それはジョウゼフのアメリカの社会や文化に同化していくことへのユダヤ民族としての最後の「ためらい」があったからであろう。米軍に入隊して、米軍兵士になっていくことへの「ためらい」である。本当にこれでいいのか？ この国のために命をかけて戦う価値があるのか？ 父親の生き方は「ねずみ」でしかなかった。ねずみはかごに入れられてかがり火に投げ込まれる(86)。弱ければ生き残れないのがアメリカの社会だ。兄のようにあつという間にアメリカの商業主義社会に同化して、金融ゲームに走ることに賛成できかねた。実際、そのようなビジネスのオモなかつたし、関心もなかった。本に囲まれて、書くという仕事をしたかっただけである。だが作家を志しても、反道徳的で暴力的な内容を批判せずに、客観的で簡潔な描写で書くヘミングウェイのハードボイルドを受け入れるつもりはさらさらなかった。関心があるのは、「伝記風」なものであった。ジョウゼフも、その背後にいる作者ソール・ペローも実際に書き始めていたが、まだ迷いのうちにいたことが了解される。

“And, of course, I hope to survive. But I would rather be a victim than a beneficiary” (84) と述べるとき、2千年間もディアスポラの民であったユダヤ民族、犠牲者としてのユダヤ民族のある種の肯定的な声を聞く思いがする。それは具体的にアメリカという国家において、どの社会階層に生きることが最もユダヤ人らしいのか、言い換えればユダヤ人の「リアリティ」なのか、或いは「ユダヤ人らしさ」(ユダヤ性) を保持できるのかという深遠な問題だったはずである。戦前、ドイツ社会に同化しようとしてユダヤ人たちはユダヤ教を変えて同化を試み(ユダヤ教改革派)、またキリスト教に改宗したり、キリスト教徒と結婚する者も一時期増えたが、結局失敗に終わったと

いう歴史的に苦い経験があった。

そうすると、日記の最後の叫びである “I am in other hands, relieved of self-determination, freedom canceled. Hurray for regular hours! And for the supervision of the spirit! Long live regimentation!” (191) は、立派な「アイロニー」といえよう (Mellard 21; Lyons 24; L 36)。軍隊に入っても前線で殺し合いはしたくない、軍隊の中で一生懸命やって出世したいとは思わない、戦争には賛成できない、という彼の考えを保持したままの入隊だからである。そこで、先はもう見えている。春、そろそろ穴倉から出てよい季節になっていた。

最後に、作者の執筆事情について少し触れるならば、ペローは現実問題として、一旦ここで『宙ぶらりんの男』の筆を置かざるを得なくなった、自分の入隊のために。入隊前の 1944 年 3 月にこの作品を出版すると、4 月に長男誕生、再度の延期を経て、翌春には新兵訓練基地のシープスヘッドで大西洋本部付になる。軍から解放されたら、親友のアイザック・ローゼンフェルド (Issac Rosenfeld) のようにフリーランスの作家になるつもりでいた (L 40)。



①ペローのシカゴ大学社会科学研究棟にあるかつての研究室 #502



②高層アパート「クロイスターズ」の看板。



③ソール・ペローやアラン・ブルームがかつて居住していた「クロイスターズ」。シカゴ大学のキャンパスの南端にある。

注

- i リビアでの戦争とは、1940年9月にイタリア軍がエジプト侵攻を謀ったため、イギリス軍もリビアに侵入した。そしてイタリアの要請を受けたドイツも1941年2月にロンメルを指揮官とするドイツアフリカ軍団をリビアに送り、ベンガジを奪回、トブルクを包囲した。だが、1942年10月からイギリス軍がスーパーチャージ作戦を開始すると、枢軸軍はリビアへと撤退した。
- ii "My (own) father" (Dec. 17, Jan. 5) だけである。いくら日記といっても、一度くらいは本名を記せたはずである。
- iii 後の作品 *More Die of Heartbreak* には植物学者が登場する。
- iv 祖父とは実母の父親のことで、亡くなる少し前に撮影したものである。これは、のちの小説 *More Die of Heartbreak* で言及されている *The Autobiography of a Yogi* (MDH 40) のラヒリ・マハサヤの写真と効果において類似している。マハサヤ大師は、自伝の主人公の誕生を祝福して2、3年後に亡くなっている。大師の写真は、彼の生涯にわたって試練や困難時に祈ると不思議な効験を発揮した。

引用資料一覧

- Abercrombie, Nicholas, Stephen Hill, and Bryan S. Turner. *The Penguin Dictionary of Sociology*. 5th ed. New York: Penguin, 2006. Print.
- Atlas, James. *Bellow: A Biography*. New York: Random, 2000. Print.
- Bellow, Saul. *Dangling Man*. New York: Vanguard, 1944. Print.
- . *More Die of Heartbreak*. New York: William Morrow, 1987. Print.
- . *Saul Bellow: Letters*. Ed. Benjamin Taylor. New York: Viking, 2010. Print.
- Blech, Benjamin. *The Complete Idiot's Guide to Understanding Judaism*. 2nd ed. New York: Alpha, 2003. Print.
- Brodhead, Richard H. "Regionalism and the Upper Class."

- Eds. Wai Chee Dimock and Michael T. Gilmore. *Rethinking Class: Literary Studies and Social Formations*. New York: Columbia UP, 1994. 150-74. Print.
- Dimock, Wai Chee and Michael T. Gilmore, eds. *Rethinking Class: Literary Studies and Social Formations*. New York: Columbia UP, 1994. Print.
- Gilman, Sander L. *Multiculturalism and the Jews*. New York, London: Routledge, 2006. Print.
- Lyons, Bonnie. "From Dangling Man to 'Colonies of the Spirit.'" Ed. Gerhard Bach. *The Critical Response to Saul Bellow*. Westport, Connecticut: Greenwood, 1995. 23-28. Print.
- Mellard, James. "Dangling Man: Saul Bellow's Lyrical Experiment." Ed. Gerhard Bach. *The Critical Response to Saul Bellow*. Westport, Connecticut: Greenwood, 1995. 14-23. Print.
- Pinsker, Sanford. *The Schlemiel as Metaphor: Studies in the Yiddish and American Jewish Fiction*. (Revised and Enlarged Edition). Carbondale, Edwardsville: Southern Illinois UP, 1971, 1991. Print.
- クレベール, ジャン＝ポール 『動物シンボル事典』 竹内信夫他訳 東京 大修館書店 1989。
- ディドロ, ドニ 『ラモーの甥』 本田喜代治・平岡昇訳 東京 岩波書店 1940 1992。
- ハレヴィ, ゼヴ・ベン・シモン 『イメージの博物誌 11, ユダヤの秘義: カバラの象徴学』 大沼忠弘訳 東京 平凡社 1982 1998。
- マルクス, カール, フリードリヒ・エンゲルス 『共産党宣言・共産主義の原理』 水田洋訳 東京 講談社 1972 2008。
- マルクス, カール 『ルイ・ボナパルトのブリュメール 18日』 植村邦彦訳 東京 平凡社 2008。

《画像》

- "Werewolf of London (1935)." (ポスター) Web. 28 Sept. 2012. <<http://www.imdb.com/title/tt0027194/>>
- 写真① ベローの在職中のシカゴ大学の研究室 (2010年筆者撮影)
- 写真② 高層アパート「クロイスターズ」の看板 (2010年筆者撮影)
- 写真③ 高層アパート「クロイスターズ」 (2010年筆者撮影)

新カリキュラムに向けての段階的取り組み —静岡文化芸術大学における英語教育改革に関する報告—

Steps toward a new curriculum: A report on English education reform at Shizuoka University of Art and Culture

マーク D. シーハン

文化政策学部国際文化学科

Mark D. SHEEHAN

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

杉浦 香織

文化政策学部国際文化学科

Kaori SUGIURA

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

ジャック・ライアン

文化政策学部国際文化学科

Jack RYAN

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

本稿は静岡文化芸術大学における英語教育改革の多面的な取り組みについて報告するものである。現カリキュラムにおける取り組みを振り返ることは、2015年からはじまる新カリキュラムの開発にとって意義があると考えられる。ここ数年でなされてきたカリキュラムレベルにおける改革は、教育方針、実践方法、などである。具体的には、授業内容（文政学部とデザイン学部の共同授業、共通テキスト使用など）や共通課題（オンライン TOEIC 練習、多読、e-learning）を充実するなど段階的な改革を行っている。さらには、カリキュラムを補完するものとして、課外活動の充実も図っている。授業外で英語を向上させる諸活動（ESS、スピーチコンテストや討論への参加、インターナショナルフォーラム開催）について紹介する。また、これらをシステマティックに動かしていくためのコーディネーション、ミーティング、役割の明確化などについても報告する。

This paper reports on the multifaceted steps taken to improve English language education at Shizuoka University of Art and Culture (SUAC). This report is a reflection on the progress made in the current program. By taking stock of what is presently being done, the authors will subsequently be able to develop plans for the next English curriculum in 2015. The improvements, implemented over a number of years, include changes at the curricular level in educational policies and practices such as the use of an online TOEIC system, the implementation of an Extensive Reading program, a subscription to an E-learning system, the use of common textbooks, and an English course collaboration between the Design and Cultural Policy and Management Faculties. Furthermore, to complement these additions that have strengthened SUAC's English courses, a number of extracurricular activities such as the founding of an English Speaking Society, hosting of an English speech contest, participation in an English Model United Nations, and the organization of International Community Forums have been carried out on campus. After explaining the steps taken to improve English courses, coursework, assignments, and teaching materials, information will be given about the opportunities provided to students to continue improving English outside of the classroom. To make these improvements happen, systematic coordination including English meetings and the delegation of roles and responsibilities has taken place and will continue to be refined.

1.0 Steps taken within the English Curriculum

1.1 The current English curriculum

Before detailing the various improvements occurring in the English curriculum, an overview of English courses available at SUAC will be provided. For ease of reference, a flow chart has been created to illustrate the organization of the English program at the university. (Figure 1) While students at SUAC have several English courses and opportunities to improve their language skills available to them, English is currently not a required subject. Nonetheless, students who enroll in English courses to receive foreign language credits must successfully complete four courses; each course is worth one credit. These courses are traditionally taken during freshman year by the vast majority of students. Students who wish to continue their studies, or students who are enrolled in the teaching licensure program take additional credits including upper level English courses. An English Diploma Course

SUAC English Courses

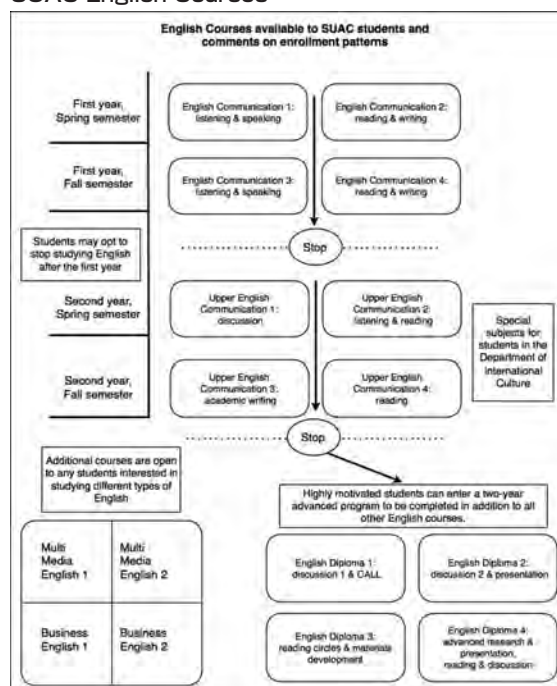


Figure 1. SUAC English courses and enrollment patterns

(EDC) is also available to qualified students who wish to study English at the advanced level. Despite the lack of an official requirement and prerequisites, a high number of students enroll in SUAC's English courses. In order to manage the approximately four hundred students taking English courses in any given semester at SUAC, various policies have been put in place. These policies include common assignments and course coordination both of which are expected to help make the transition to the next English curriculum in 2015 more seamless. More details about these educational practices will be provided below.

1.2 TOEIC Exercises and TOEIC ITP

While improving students' overall English skills is the primary focus of the English program at SUAC, a secondary focus is helping students to raise their TOEIC scores to a level that may assist them with job placement in companies in Japan. Spending time in class training for commercial standardized tests not only does not meet the needs of language learners at SUAC, but it is also a misuse of valuable class time. As a result, students are assigned online exercises using a system that was created in cooperation with Ritsumeikan University's College of Science and Engineering. Students in all SUAC English courses are required to complete about ten hours of online TOEIC exercises each semester; the exercises are done for homework and are intended to familiarize students with the format, question

types and length of the TOEIC test. Since these exercises have been created specifically to raise TOEIC scores, TOEIC score data has been tracked to measure the efficacy of this system. Figures 2 and 3 provide data related to online TOEIC system use and highlights of the most recent SUAC TOEIC Institutional Testing Program (ITP) scores. The completion rate for this homework assignment is nearly 100% each semester. This high rate of success for an assignment that requires so much time and effort on top of other coursework is evidence of not only the ease of use of the system, but also that students find value in the task and derive some benefit from their investment.

1.3 Extensive Reading

Implementation of the TOEIC system was a precursor for greater synchronization of English coursework between classes and among teachers. The success of the university-wide TOEIC assignments allowed common Extensive Reading assignments to be more easily introduced into the English curriculum. While the transition to additional common homework was facilitated by the precedent set by the TOEIC homework, implementing Extensive Reading (ER) is not without its challenges. The ER assignment requires students to read graded readers from the SUAC library and to complete 15,000 words in the spring and 20,000 words in the fall semester. Students keep a scorecard and self-

TOEIC System statistics and TOEIC data

Semester	Number of students using the system	Number of questions answered
Spring 2012	467	136,886
Fall 2011	343	127,566
Spring 2011	435	177,001

Figure 2. 2011-12 Online TOEIC system use

Test Date	High scores	Average scores
July 2012	905, 815, 805	465 (n=220)
May 2012	840, 815, 790	476 (n=187)
December 2011	850, 825, 810	528 (n=165)
October 2011	835, 815, 800	530 (n=131)
July 2011	925, 815, 800	497 (n=138)
May 2011	835, 830, 825	501 (n=126)

Figure 3. 2011-12 SUAC TOEIC ITP High scores and averages

report their progress to their teachers. Perhaps the greatest challenge for the ER assignments is verifying whether or not students have actually read the books they listed on their Extensive Reading scorecard. Nonetheless, it is essential that students take part in Extensive Reading activities in order to improve their language skills. The merits of this system outweigh the demerits and a number of students have reported that they enjoyed being able to read English books for this assignment. Engendering a lifelong love of reading in English is an ancillary goal of the ER assignment and one that is sure to serve students well long after they graduate from SUAC.

1.4 E-learning

Implementation of ALC e-learning was a catalyst for the tightening of course coordination at SUAC and the introduction of more common assignments in English courses. In order to better utilize the online system for which SUAC has made a significant investment, e-learning homework is assigned, and ten weekly quizzes are administered to all students enrolled in all English communication and upper English communication courses. That means about 400 students in two communication and two upper communication courses during any given semester require support using the system, level appropriate assignments, assessment tools such as quizzes, and oversight to ensure they are completing their assignments. Furthermore, considerable time and effort is required by English instructors to give guidance on the assignments, prepare and give weekly quizzes on system content, and keep records on student performance. In its second year of implementation, e-learning has undergone some adjustments and changes in response to student needs. Survey data on student use of and response to the system has been gathered and will be presented in more detail in a future report.

1.5 Common assignments and coursework

While the aforementioned TOEIC, Extensive Reading, and e-learning assignments are efforts to give all students studying English at SUAC a set amount of homework, further coordination is necessary in order to ensure that students can reach common goals and have similar learning experiences upon completion of their coursework. To that end, a trial effort to implement the use of common textbooks from the 2012-13 academic year in some English Communication 1, 2, 3, and 4 courses has been undertaken. Use of common

texts in upper level reading and academic writing courses are also being used by some teachers in order to work together toward common goals on the one hand, while providing students with specialized instruction that will more accurately meet their needs on the other hand. In particular, most Department of International Culture students taking English Communication 1 and 3 have been assigned a text designed by English teachers in the Department of International Culture that focuses specifically on the content areas they can be expected to study in more detail in their academic careers at SUAC. The English content focuses on one country or region in each unit and various activities allow students to practice all four core language skills: speaking, listening, reading and writing. The selection of content has been partially influenced by input from departmental colleagues who have at times lamented students' lack of basic knowledge of different parts of the world. It is expected that these efforts will be expanded and refined as we move closer to implementation of the new English curriculum in 2015.

1.6 TOEIC Bridge and Class Streaming

Since April 2011, in order to measure the English levels of incoming freshmen at SUAC and to place them in courses with suitable materials and levels of instruction, the TOEIC Bridge test has been conducted during spring guidance. The TOEIC Bridge test is a shorter, simplified version of the TOEIC test designed to measure the reading and listening ability of non-native speakers of English. The test, comprised of 100 multiple choice questions, is a suitable instrument for streaming of lower to intermediate level students in the current English program. Students who enroll in upper English communication courses are streamed using SUAC TOEIC ITP scores and information from surveys conducted at the end of each semester. The surveys require students to report their TOEIC scores, any scheduling conflicts they might have for a particular course and time, and also the level of class they feel is most appropriate for them. After this information is gathered, students are placed in a course that is intended to meet their educational needs. It should be noted that while a number of practices are in place to help students in the Faculty of Design at SUAC, English courses taught to design majors are not currently streamed. Nonetheless, a special program has been put in place to meet the needs of design students.

1.7 Design English

Since April 2011, a unique program has been underway to offer motivated design majors a chance to improve their English skills and gain valuable real-world experience while working in collaboration with students from the English Diploma Course (EDC). The program is written about in more detail in another report in this publication; however, some information will be provided below regarding how the project has had a positive impact on plans being developed to serve design majors in the new English curriculum in 2015. The program has been officially funded by a grant from SUAC and has a team of six instructors, three from the Faculty of Design and three from the Department of International Culture. In brief, design students and EDC students are put together on teams to create an English presentation about a product or product concept that has been designed by design majors. This project enables design students to gain valuable experience using English in a context that may benefit them in their careers as internationally minded designers. Furthermore, EDC students get experience working with colleagues from another field of study in a context that more closely resembles a business setting, as opposed to their more familiar surroundings of academia. This project has provided a number of benefits to the SUAC English program. It has given English teachers valuable insights into the learning styles and needs of design majors, so that courses and materials can be better tailored to help those students have a more fulfilling and relevant English learning experience at SUAC. It has also had a positive effect on design students who have participated in the program. Students who have successfully completed the program have become role models for underclassmen and have had their motivation to study English increased. The program has also built a bridge between both faculties. Having students and teachers from the Faculty of Design and Faculty of Cultural Policy and Management work toward common goals is good for the learning community at SUAC.

1.8 Course coordination, roles and responsibilities, and Faculty Development

None of the above mentioned policies and plans would be possible without the cooperation of the part-time English faculty at SUAC. Over 50% of SUAC's core English courses are taught by part-time teachers; therefore, working together on common goals and assignments is essential to

any educational plans at SUAC. This is especially true in light of the fact that, as we move toward the next English curriculum in 2015, a lack of coordination and common goals and assignments among all English teachers at SUAC, both part-time and full-time, will make the new curriculum a dead letter as soon as it is implemented. There can be no doubt that a greater burden has been put on teachers, both part-time and full-time, as a result of the required coordination. Nonetheless, raising awareness of the importance of the whole curriculum, rather than focusing only on individual courses, has been done by sharing common assignments, policies, and materials. To that end, each semester meetings are held for part-time teachers to start the semester and go over any changes to policies or plans, and share ideas on how to best implement the English assignments and use new materials. These meetings are also opportunities for teachers to share opinions, ideas and even discuss problems with their colleagues. The input received from teachers has been valuable and has enabled the organizers of these faculty development sessions to make improvements to better serve the needs of students and teachers. It is essential that this spirit of cooperation continue, both in and out of the classroom, to meet the needs of language learners at SUAC.

2.0 Steps taken outside the English Curriculum

2.1 ESS

In 2008, four upperclassmen and one of the authors of this report officially formed an English Speaking Society (ESS) at SUAC. The main goal of the club was to provide students with fun opportunities to use English outside of class. As in the case of the founding members, the club allows students to maintain their English after formal study has been completed. The club also allows underclassmen a chance to overcome their anxieties in speaking English and make friends while discussing and debating many of the issues of the day. The ESS also frequently holds joint events with students at other local universities such as Shizuoka University. The ESS has approximately thirty members; meetings and events are open to visitors and any other students and members of the SUAC staff or faculty who would like to use English in a fun and relaxed setting. Meetings take place during lunch on Mondays and Wednesdays.

2.2 English Speech Contest

In the spring of 2011, members of the English Speaking Society proposed a plan to have an English speech contest at SUAC. The members who suggested this event had taken part in a number of other speech contests and debates and were well aware of the motivational power of setting an English learning goal and working toward that goal. The speech contest was open to students from other universities in the area. The date of the contest was set to correspond with SUAC's open campus in the summer of 2011. The event was made open to the public as a way to promote English education at SUAC and to allow visitors during open campus to learn more about SUAC's students. In all, thirteen contestants participated in the event, including two contestants from Shizuoka University. Speeches were limited to five minutes. Students were encouraged to bring props or visual aids to enhance their speeches. This event was considered a success for a number of reasons. First, it gave students a concrete English goal that was successfully achieved by all who participated. Second, it provided students a chance to speak publicly and gain confidence in doing so. Finally, it increased motivation in all participants to take advantage of all opportunities to further their study of English.

2.3 Japanese University Model United Nations

In February of 2012, SUAC English teachers received an invitation to have a group of five students attend the Japanese University Model United Nations (JUEMUN) conference at Kinki University in Osaka. SUAC English teachers seized on this chance that presented itself as a rare and extremely beneficial opportunity for students at SUAC to prepare for and participate in; negotiations and preparations for the event began in early March 2012.

The recruitment process for this event was hindered due to ambiguity over whether or not SUAC would officially fund this event. As a result, the scope of recruitment was narrowed to students willing to participate regardless of funding and students with high-level English skills. The event took place from Friday to Sunday during the weekend of July 6, 7, and 8, 2012. To prepare for this conference students were assigned a country and a committee and were required to do research and prepare a paper that would aid them when they gave formal speeches or participated in debates.

The JUEMUN was attended by a total of 59 delegates from 14 countries, including Japan. Universities in Japan that sent delegates include Doshisha University, Kinki University, Kyoto University of Foreign Studies, Kobe University of Foreign Studies, Nagoya University, Ritsumeikan University, and Shizuoka University of Art and Culture. The event was held entirely in English. During the formal and informal debates, students worked together in regional blocs, as well as in committees to propose solutions to deal with an increasing world population. This was an incredible learning experience for SUAC students; the team of five students conducted themselves professionally. The second and third year students were model representatives of our university and returned from the event with many new friends, the knowledge that English truly is a global language and renewed determination to further improve their English.

2.4 International Community Forums

It is said that Hamamatsu has the largest per-capita population of Brazilians in Japan as well as large numbers of international residents from other parts of the world. Even so, sadly often little interaction seems to take place between the Japanese community and international community in the city. To make an effort to both alleviate this situation and to provide additional opportunities for SUAC students, indeed the entire SUAC community, to meet and interact in English with members of the sizable foreign community here in Hamamatsu, an International Community Forum was established in April 2012. An English-speaking member of the foreign community is invited to SUAC to give a short presentation during lunch on the last Wednesday of every month. Their presentation is generally about their country, their background and what has brought them to Hamamatsu after which an open-ended discussion is held. International Community Forum guest speakers are specifically requested to keep their presentations casual and short enough to allow plenty of time for Q & A and discussion. Despite being held during lunch, attendance at the International Community Forums has been outstanding with about 30 people attending every month to date. The International Community Forum can already be deemed a success as the interaction between students and guest speakers during the Q & A and discussion has been very lively and rewarding to see as a teacher. To date, we have had guest speakers from the United

States, Tunisia and Israel. Future scheduled guests for the 2012-13 academic year include Hamamatsu residents from Mongolia, France and Denmark.

Conclusion

The aforementioned curricular and extracurricular English language policies and practices have laid the groundwork for reforms that will occur when the new curriculum will be put into place in 2015. Common homework assignments enabled instructors to ensure that all students received a fair workload, and equal opportunities to study regardless of whose course they were enrolled in. The importance of extracurricular activities to aid in language learning cannot be overstated. SUAC's extracurricular English activities are numerous and provide students with opportunities

to meet weekly in ESS and chat, participate in discussions and debates in English, set goals for speech contests, participate in Model United Nations Conferences, and learn about the world by meeting and listening to special guests at the International Community Forums. While these steps taken to improve English education have shown positive results and given students rewarding experiences, more needs to be done to prepare for the new curriculum. Continuing to promote extracurricular activities is certainly on the agenda for curriculum reform. At the curricular level, more synchronization of courses with other academic disciplines at SUAC, designing courses to address the needs of students on an academic track and others on a general English track, and finally devising common course goals and course benchmarks will be given top priority.

サービス・リカバリー場面での公正と感情：先行研究の検討と今後の展望

Justice and affect in service recovery situations: A critical review of literature and suggestions for future research

小本 恵照

文化政策学部文化政策学科

Keisho KOMOTO

Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

サービス・リカバリーに関する研究においては、リカバリーが顧客満足や顧客ロイヤルティなどに与える影響を、消費者の意思決定プロセスに焦点を当てて中解明が試みられてきた。その分析手法をみると、公正感を中心的な構成概念として用いた理論を構築し、データによって仮説を検証する方法が支配的となっている。公正感については、分配的公正、手続き的公正、相互作用的公正という3次元の公正感を用いられることが多い。最近の研究では、公正感に感情を加えることによってモデルを拡張する動きがみられる。ここでは、公正感がポジティブあるいはネガティブな感情を生み出し、感情が態度や行動に影響を与えるというモデルが代表的なものとなっている。しかし、公正感と感情に関する理論の発展は続いており、サービス・リカバリー研究に適用できる新たな知見も少なくない。たとえば、(1)より細分化された公正感、(2)総合的公正概念、(3)経験を重視した公正概念などをモデルに取り込むことによって、研究を発展させることができると考えられる。

In service industries, since service failures are inevitable, service recovery that can enhance customer satisfaction and loyalty is considered to be critical for business success. Service marketing researchers have attempted to explore the mechanisms by which service recovery influences outcomes such as customer satisfaction and loyalty through customer decision-making processes. Dominant research methods are building models by using the construct of justice and empirically testing the hypotheses. The construct of justice generally has three components, that is, distributive justice, procedural justice, and interactional justice. Recently, researchers have advanced service recovery research by taking not only justice but also emotions into consideration. They postulate that justice evokes positive emotions, while injustice evokes negative emotions. Also, they think that positive or negative emotions have effects on consumer attitudes and behaviors. However, since theories of both justice and affect are developing, new theoretical developments might be applicable to service recovery research. I suggest the three new research areas that adopt the following elements: (1) four components model of justice; (2) overall justice construct; (3) construct of experience of justice.

1. はじめに

現代社会ではサービスに関する産業が成長を続けている。たとえば、介護・福祉、情報通信、レジャー、健康などはいずれもサービスに関連している¹⁾。サービス業に属する企業をマネジメントする上で必要とされるのがマーケティングである。無形性が優勢なサービスに関連したマーケティングは、財を中心とする伝統的なマーケティングと異なる内容が多いことからサービス・マーケティングと呼ばれ独自の研究分野を形成してきた²⁾。サービス・マーケティングの中の研究分野の一つにサービス・リカバリーがある。製品の生産の多くの部分を設備や機械に依存する製造業と比較すると明らかであるが、サービス業では労働に頼る部分が大きく、提供するサービスの品質の均一性を維持することが難しい。また、サービスの品質はサービスが提供される環境的要素にも左右される。旅行やスポーツ観戦が天候の影響を受け、レストランでの食事が周囲の顧客の振る舞いに影響されるのがその例である。こうしたサービスが有する特性から、サービスの提供場面では顧客が期待するサービスが提供されないことが起こることが少なくない。飲食店で注文とは違う料理が運ばれてきたり、予約したはずのホテルの部屋が確保されていないといった例がこれに該当する。これらはサービスの失敗 (service failure) と呼ばれる。サービス業ではサービスの失敗が不可避であるならば、失敗からの効果的なリカバリーを図ることは極めて当然のことであると言える。効果的なリカバリーによって、失敗によって低下した顧客満足や顧客ロイヤルティを回復させ、場合によっては失敗前よりも満足や

ロイヤルティを向上させることも不可能ではないからである (Hart et al., 1990)。

上記のようなサービス提供場面におけるリカバリーの重要性を踏まえ、サービス・リカバリーに関する理論的および実証的研究が蓄積されてきた。本稿は、サービス・リカバリーに関する研究の現状を整理した上で、今後の研究の課題を提示することを目的とする。本稿の構成は次のとおりである。まず、第2節では、サービス業におけるリカバリーの重要性について説明する。第3節では、サービス・リカバリーに関する先行研究を整理する。ただし、先行研究を網羅的に整理することを目的とはしない。後述のように、サービス・リカバリーでは公正理論を基礎とする分析枠組みが支配的地位を占めている。本稿では、この現状を踏まえ、公正理論の発展の中にサービス・リカバリー研究を位置づけることによる整理を試みる。ここでは、近年、関心が高まっている公正感と感情に重点を置いた整理を行う。第4節では、公正理論と感情理論の視点から今後のサービス・リカバリー研究を展望する。最後に、本稿の結論を述べる。

2. サービス・リカバリーの定義と研究の意義

2.1. サービス・リカバリーの定義

サービス・リカバリー研究の議論を始める前に、用語の定義を見ておきたい。Zeithaml et al. (2009)によると、サービスの失敗は「顧客の不満足につながるような期待を下回るサービスのパフォーマンス (成果)」と定義され、サービス・リカバリーは「サービスの失敗に対応して組織

が取る行動」と定義されている。本稿はサービス・リカバリーを学術的な理論をベースに考察するため、上記の簡明な定義を用いることとする。なお、経営管理上の視点を重視する立場からの定義としては、Tax and Brown (2000) によるものがある。そこでは、サービス・リカバリーを苦情対応 (complaint handling) と同義とする文献が多いことを指摘した上で、Lovelock (1994) の定義を拡張し、「サービスの失敗を見出し、効果的に顧客の問題を解決し、失敗や問題の根源的な原因を分類し、サービス・システムを評価・改善するために他のパフォーマンスの基準と統合可能なデータを生み出すプロセス」と定義している。これは、リカバリーの範囲をかなり広く捉えた内容となっている。

2.2. サービス・リカバリーと苦情

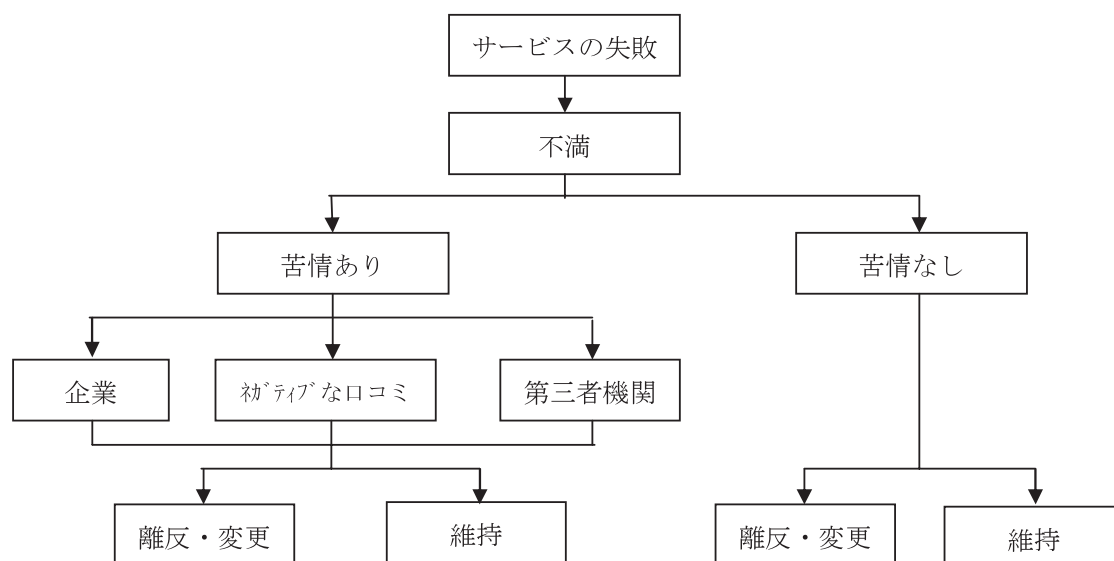
Tax and Brown (2000) の定義から明らかなように、サービス・リカバリーと苦情対応は同義ではない。なぜなら、サービスの失敗によって顧客の苦情が発生するとは限らないからである。Zeithaml et al. (2009) が引用している TARP Worldwide Inc. のデータによると、サービスのデリバリーに問題を経験した顧客のうち店舗従業員に苦情を言う人は 45% に過ぎず、企業の本部に対して苦情を言う人は僅か 1 ～ 5% に過ぎないことがわかっている。つまり、サービスの失敗を経験した人のうち半数は企業に対して苦情を申し立てないわけであり、マネジメントの観点からはサービスの失敗を見出す努力が重要となる (Tax and Brown, 1998)。

サービスの失敗に対する顧客の反応を整理しておく次のようになる (図 1)。サービスの失敗が生じると、期待を下回るサービスが提供されるわけであり、顧客には当然不満が生じる。また、怒り (anger)、不平 (discontent)、失望 (disappointment)、自己憐憫 (self-pity)、不安 (anxiety)、後悔 (regret) といったネガティブな感情が生じることも指摘されている (Zeelenberg and Pieters, 2004)。

その後の行動については、消費者によって異なる。すなわち、苦情を申し立てるかどうかによって大別される。本稿では、サービス提供企業に対し顧客が何らかの苦情を表明することを「苦情を申し立てる」と定義する。まず、先述のように、サービスの失敗があっても、苦情を申し立てない消費者が少なくない。苦情を申し立てない理由としては、苦情を申し立てるには手間がかかるため、苦情申し立てが時間と労力の無駄になると判断していることが大きな理由である (Voorhees et al., 2006)。苦情を申し立てない場合、顧客は、当該事業者が提供するサービスをそのまま利用するか、それとも当該事業者のサービスの利用を中止するかという選択を行う。

次に、苦情を申し立てるケースについては、3 種類に分けることができる。一つは、先述のように企業の本部もしくは店舗従業員に対して苦情を述べるという方法であり、日常的に用いられる苦情を意味する。この顧客の行動は、企業にとって望ましい反応と言える。なぜなら、苦情に適切に対応する機会が得られるからである。適切な対応によって顧客の不満を解消させることができるならば、顧客との関係を将来にわたって維持することができると同時に、ネガティブな口コミを顧客が広めることを防止することができるからである。すなわち、サービス・リカバリーによって顧客関係を改善する余地が生まれる。これに対し、残る二つの顧客の行動は企業にとって望ましいものではない。一つは、友人や知人に対する顧客のネガティブな口コミである。インターネットやソーシャル・ネットワーキング・サービス (SNS) が普及する中で、口コミが広がる範囲が拡大すると同時に拡散スピードが速まっている。特に、ネガティブな口コミの原因が、企業の提供するサービス自体にあるとされると、企業やサービスに対するダメージは非常に大きなものとなる。残る一つは、公的機関などの第三者機関に苦情を申し立てるという行動であるが、こうした行動は企業の評判を低下させることになる。こうした 3 種類の苦情の申し立てを行った後に、顧客は当該サービス事業者のサービスの利用を継続するか、あるいは今後は異

図 1 サービス失敗後の顧客の行動



(出所) Zeithaml et. Al. (2009), Figure 8.4 (p. 218) をもとに作成。

なる事業者のサービスを利用するという事業者選択の変更を行うかという意思決定を行う。

2.3. サービス・リカバリーの重要性

サービス・リカバリーが企業にとって重要と考えられているのは、サービスの失敗によって消費者に生じた不満を効果的に解消することが、顧客満足や顧客ロイヤルティの回復ならびに好意的な口コミにつながり、最終的には企業業績の向上に寄与すると考えられているからである。サービスの失敗の後に効果的なリカバリーを経験した消費者は、サービスの失敗を経験した消費者よりもより強いロイヤルティを持つに至るという、「サービス・リカバリー・パラドックス」が生じる可能性も指摘されている³⁾。

しかし、サービス・リカバリーの重要性はこれにとどまらない。リカバリーを一つの契機として、サービスの失敗の内容を検討し、サービス提供態勢の見直しや改善を図ることは、将来的な顧客および従業員の満足の向上につながるからである。こうした取り組みは、顧客と従業員のロイヤルティを向上させ、企業業績の改善に寄与することになる (Tax and Brown, 1998)。

3. サービス・リカバリー研究の現状

3.1. サービス・リカバリー研究の概要と期待不一致モデル

サービス・リカバリーの研究は、(1) サービス・リカバリーという売手の行為を満足やロイヤルティという顧客の評価の帰結に結びつける研究と、(2) サービス・リカバリーとそれらの帰結までの消費者意思決定プロセスに何らかの媒介要因を当てはめて説明を試みる研究に大別される (高橋, 2007)⁴⁾。前者は、Bitner et al. (1990) や Kelley et al. (1993) にみられるように、サービスの失敗の類型化とサービス・リカバリーの内容を探ることによって、効果的なサービス・リカバリーを探ることを目的とする研究であった。しかし、この種の研究には、サービス・リカバリーが、どのような消費者の心理プロセスを通じて、企業が重視する顧客の満足やロイヤルティの向上に寄与するかを明らかにする理論的基礎を有していない点において致命的な欠陥があった。

その欠陥を補うために用いられたのが、期待不一致モデルと公正理論である。期待不一致モデルは、高い期待やサービス内容が顧客満足にプラスの影響を与えるとともに、期待されたサービス水準と提供されたサービス水準の乖離が顧客の満足に影響を与えるとする (Oliver, 2010)。期待不一致モデルの概念を取り入れた研究には、Oliver and Swan (1989)、Smith et al. (1999)、Andreassen (2000) などがあるが、いずれの研究でもリカバリーで提供されたサービスの水準が期待を上回ると顧客満足が高まることを示している。

しかし、サービス・リカバリー場面においては、サービスの失敗を予見し、そのリカバリーに対する期待を予め消費者が形成しているとは考えにくいという懸念が指摘されていないわけではない (高橋, 2007)。つまり、サービス・リカバリーのあとの調査段階での満足度をもとに、期待が評価されているのではないかという懸念である。この懸念が当てはまる場合には期待不一致モデルの適用は望ましい

ものではない。確かにこうした懸念が当てはまるケースはないわけではないが、期待不一致モデルが該当するケースも多いように思われる。例えば、2012 年から本格的に登場した格安航空会社 (LCC) の例をもとに考えてみたい⁵⁾。2012 年 7 月 3 日に就航したジェットスター・ジャパンは、就航初日に新千歳空港から成田空港に向かう最終便が欠航となり、利用者は翌日まで北海道で足止めを余儀なくされた。ジェットスター・ジャパンは利用者に対して宿泊代や 8000 円分の利用券を負担した。この航空サービスの失敗では、利用者は欠航が決まった時点で、宿泊場所の用意など何らかの対応を航空会社が取ることを期待することは十分に考えられる。また、飲食店での注文品と提供品が異なるという失敗やホテルの部屋の予約に関する失敗などについても、顧客はサービス提供者のリカバリーに対し何らかの期待を想定することが多いと思われる。このような例を踏まえると、期待不一致モデルを適用できる余地は依然として存在すると考えられる。

また、期待不一致モデルをより詳細にみると、公正理論と期待不一致モデルには共通する要素が含まれており、期待不一致モデルと公正理論は対立するものではなく、両者は共通する課題をやや異なった視点から考察していると考えられなくもない⁶⁾。この点を、公正感と感情の関係を分析している代表的モデルの一つであるフェアネス理論 (Folger and Cropanzano, 1998, 2001) によって見てみたい。そこでは、反現実的思考 (counterfactual thinking) が理論を展開する基本的な要素とされている。その理論をサービスの場面で適用すると、サービスの失敗が生じ何らかのリカバリーが取られた場合、(1) そのリカバリー手段を選択すべきだったのか、(2) 他のリカバリー手段を選択することはできなかったのか、(3) 他のリカバリー手段を選択した場合には結果はどう変化しただろうか、という反現実的思考を行うことによって、(不) 公正感やそれに伴う感情が生じるとされる。こうした反現実的思考はサービス・リカバリーに対する事前の期待と実際に採用されたサービス・リカバリーの内容を比較していることができなくもない。採用されたサービス・リカバリー手段に対するこうした見方から考えると、期待不一致モデルと公正理論には共通する部分が少なくないと考えられる。しかし、この点についてはここではこれ以上深入りせず、別の機会に改めて検討することにした。

3.2. 公正理論

期待不一致モデルに代わり、現在のサービス・リカバリー研究の支配的枠組みとなっている理論は公正理論である。ビジネスの場面における公正は、社会心理学の組織への適用が始まった 1950 年頃から研究されるようになり、現在では組織的公正理論として確立している⁷⁾。そこでは、公正を次の 3 種類に分類している。第一は分配的公正 (distributive justice) である。この概念は、人々の結果に対する反応は結果の絶対水準ではなく、比較対象とする他人の結果の水準に依存するという相対的剥奪 (relative deprivation) の概念を基に、Homans (1961) によって初めて用いられた。そこでは、社会的交換のもとでは、投入したコストに比例した報酬を受け取ることが期待されるという、分配的公正の原則が存在するとされた。この

概念を衡平理論 (equity theory) として発展させたのが Adams (1965) である。彼は、投入したコストと産出として受け取る報酬の比率に注目した。すなわち、自己の比率と比較対象となる他者の比率が均衡しているかどうかの公正感の知覚につながり、公正感が人の態度や行動に影響を与えることを明らかにした。

1960年代と1970年代は分配的公正が公正理論の中心であったが、1970年代の中葉には衡平理論は分配に至るプロセスを考慮していないとの批判が生じた (Leventhal, 1980)。そこでは、分配に至る様々な手続きが公正感に影響を与えるとされた。この公正は当初法律と紛争解決の場面で研究が進められ、手続き的公正 (procedural justice) と呼ばれる (Thibaut and Walker, 1975)。Leventhal (1980) は、手続き的公正感が法律や紛争解決以外の多様な社会状況と結びつくことを主張し、手続き的公正を高めるプロセスの6つの特徴を提示することによって理論の発展に貢献した。分配的公正と手続き的公正との関係で重要な点としては、不公正な分配であっても、それが公正な手続きに従ったものであるなら、不公正感が緩和されることなどを挙げることができる (Lind and Tyler, 1988)。

1980年代以降、手続き的公正に関する研究が進んだが、その中で、手続きや分配が公正であっても、手続きから分配に至るプロセスで生じる他者とのコミュニケーションが不公正であると公正感が得られないという主張が登場した (Bies and Moag, 1986)。これを彼らは相互作用の公正 (interactional justice) と呼んだ。相互作用の公正の内容としては、誠実、敬意、質問の適切性、正当性が挙げられている。分配的公正、手続き的公正、相互作用の公正という3つの公正感が異なる概念かどうかという弁別妥当性等の議論については、それらの間の相関は大きいものの、異なった概念であり区別することの有用性が確認されている (Cohen-Charash and Spector, 2001)。サービス・リカバリー研究では、この3つの公正概念を用いて研究が進められてきた。サービス・リカバリーの場面における、公正感の役割を図示すると図2のようにな

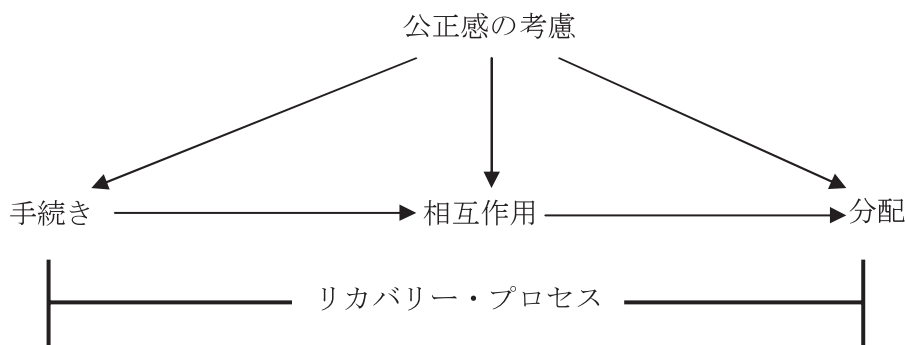
る。

3.3. 公正理論を用いた代表的な研究

公正理論を用いたサービス・リカバリー研究をみると、1980年代では、例えば、Goodwin and Ross (1989) は、分配、手続き、相互作用という3次元の公正概念に言及しているものの、実証分析は総合的な公正概念を用いた分析にとどまっている。また、Oliver and Swan (1989) は分配的公正のみを媒介変数として取り入れた研究である。公正理論の理論的発展を踏まえ、ようやく1990年代に入り、3次元の公正概念を用いた研究が登場するようになった。Goodwin and Ross (1990) は、公正感の3つの次元を苦情の文脈に取り入れ分析を行っている。そこでは、分配的公正が特に大きな影響を与えていることなどが示されているが、実証研究の手続きの内容が記述されていないなど、科学的な手続きに則った検証が行われていないという問題があった。Goodwin and Ross (1992) の研究は、自動車修理サービスなどの状況を設定し、大学生に対して実験を行ったものである。そこでは、顧客の発言の機会、サービス提供者の謝罪、修理代金の減額といった補償という3次元の公正感に影響を与えると考えられる条件に差を設け、顧客満足、総合的な公正感の知覚などに与える影響を分析している。それによると、発言の機会や補償は顧客満足に有意な影響を与えていたが、謝罪は有意な影響を与えていないという結果を得ている。この研究は、手続き的公正を発言の機会のみで捉えるなど、公正概念の計測に課題が残るものの、3次元の公正感が顧客満足に影響を与えることを科学的な手続きに則って明らかにした点において意義のある研究となっている。

3次元の公正概念を多面的に高い精度で計測した研究としては、Tax et al. (1998) を挙げることができる。彼らは、企業の従業員を対象に質問票による調査によって、3次元の公正感が顧客満足に与える影響を計測した。計測は、顧客満足を被説明変数とし、3次元の公正感およびそれぞれ2つの公正感の積からなる3つの交差変数を説明変数とする回帰分析を行い、いずれも期待された符号条件

図2 サービス・リカバリーのプロセスにおける公正感の役割



(出所) Tax and Brown (2000) の Figure 16.1 を修正して作成。

で統計的に有意な結果を得ている。なお、この研究は、サービスの失敗以前におけるサービス提供企業に対する顧客の評価を媒介変数として、顧客満足が信頼とコミットメントに与える影響についても分析を加えている。それによると、顧客満足は信頼とコミットメントを高めることが確認されるとともに、サービス提供企業に対する顧客の事前の評価が高いほど、顧客の不満足が信頼とコミットメントに与えるダメージが小さいことを明らかにしている。

Smith et al. (1999) は、3次元の公正感に加え、期待不一致要因を加えて顧客満足に与える影響を計測した。また、サービスの失敗の程度、失敗のタイプの影響についても分析を加えている。調査の方法は次のとおりである。まず、調査対象者は、3か月以内に訪れたレストランおよびホテルに関する自由記述の質問に回答し⁸⁾、続いて、再びそのレストランまたはホテルを訪問したという仮想の状況の下で、それぞれの調査対象者はサービスの失敗とリカバリーに関する異なったシナリオを読み質問に回答するというものであった。それによると、3次元の公正感はいずれも顧客満足が高めるとともに、リカバリーの水準が期待を上回るほど顧客満足が高まることが明らかとなった。失敗の程度については、それが深刻なほど顧客満足が低下することが判明した。失敗の内容が提供されたサービスの結果なのか、サービスが提供されるプロセスなのかという、失敗のタイプの影響については、レストランの場合には有意な影響は見られなかったが、ホテルでは失敗が結果のタイプの場合には顧客満足が有意に低下することが明らかとなった。

サービス・リカバリーに対する反応は国民の文化的要素を反映するため (Hui and Au, 2001; Orsingher et al., 2010)、わが国の消費者を対象とする研究の重要性は大きい。しかし、サービス・リカバリーに関する実証的研究は非常に少ない。ここでは、高橋 (2007) の研究を見ておきたい。そこでは、ファミリーレストラン、ファストフード店、居酒屋という飲食店におけるサービス・リカバリーを対象に分析が行われている。分析の枠組みは3次元の公正感が顧客満足に影響を与え、顧客満足が顧客ロイヤリティに影響を与えるというものである。分析結果をみると、まず、3次元の公正感が並列的に顧客満足に影響を与えるというモデル (並列モデル) より、3次元の公正感の間に因果関係を想定したモデル (因果モデル) のほうがモデルの適合性が高いことを明らかにしている。次に、分配的公正と手続き的公正は顧客満足に有意なプラスの直接的影響を与えるが、相互作用の公正は有意な直接的影響を与えていないことを明らかにしている。高橋 (2007) の研究は、わが国の消費者を対象にした非常に貴重な研究だが、(1) 3次元の公正感の間には高い相関が知られている中で (Cohen-Charash, 2001; Colquitt, 2001)、並列モデルにおいて公正感相互の相関を考慮していない、(2) 因果モデルにおいて3次元の公正感の間になぜ因果関係が生じるのかが必ずしも明確に説明されていないという点において少々課題が残っているように思われる。

なお、サービス・リカバリーを中心とする苦情対応の顧客満足に関する研究のメタ分析によって、3次元の公正感をベースとする実証分析の総合的な結論を紹介しておきたい。メタ分析は、Orsingher et al. (2010) が行ってお

り、そこでは顧客満足の先行変数を分配的公正、手続き的公正、相互作用の公正とし、結果変数を口コミ、総合的満足、再購買意図としている。分析結果によると、3次元の公正感はいずれも顧客満足に有意なプラスの影響を与えているが、それぞれの公正感を与える影響の大きさは異なることを明らかにしている。また、顧客満足が結果変数に与える影響については、口コミに対する影響はみられるものの、総合的な満足や再購買意図に対しては有意な影響は見られないと報告している。

3.4. 公正理論に感情を組み込んだモデル

サービスの失敗の場面で容易に想像がつくように、顧客がサービス提供者に苦情を申し立てる場合、怒りなどの感情を伴っていることが非常に多い。この点に着目して、3次元の公正感が顧客の満足やロイヤリティなどに直接的な影響を与えるのみならず、公正感が感情に影響を与え、引き起こされた感情が顧客満足や顧客ロイヤリティに影響を与えるというルートも考慮に入れたモデルが提示されてきた。

こうした公正感と感情の関係を考察するという動きは、サービス・リカバリーの場面に適合することに加え、組織的公正理論の研究が進む中で、公正感と感情に関する理論的および実証的研究の研究成果をサービス・リカバリーの場面に適用した面もある。公正感と感情については、Homans (1961) は分配的公正が満たされない場合に怒りの感情が出ると述べており、公正感と感情には密接な関係があることが古くから指摘されてきた。しかし、その後、公正感と感情の関係は注目を集めず研究は進まなかった。公正感と感情の関係に関する本格的な分析は、Folger (1986a, 1986b, 1987) が提示した認知的準拠理論 (referent cognitions theory) によって開始された。認知的準拠理論では、人は受け取るに値すると思うものが受け取れなかった場合に腹立たしく感じるが、それは起こった事象を評価するための参照の枠組みが、事象が生じなかった場合との心理的な比較をするためであるとされた。しかし、認知的準拠理論には、(1) 道義的な善と経済的な損害を明示的に区別していない、(2) 相互作用の公正を対象としていないという欠点があった (Cropanzano et al., 2011)。

この欠点を補うものとして登場した、公正感と感情に関する代表的理論の一つには、先に述べたフェアネス理論 (fairness theory) がある (Folger and Cropanzano, 1998)。記述がやや重複するが、その概要を説明しておきたい。そこでは、まず、ある出来事が公正か不公正かという評価を導く認知に注目する。次に、その認知が感情的反応を引き起こすと想定する。より具体的に述べると、人は出来事が公正か不公正かを、3種類の反事実 (counterfactuals) を想定するという反現実的志向によって判断するとされる。一つ目は、違った行動がとられていたならば、どのようなことが起こったであろうかという問いである (would)。二つ目は、相手方はそのような行動をとるべきであつたであろうかという問いである (should)。三つ目は、相手方は違った行動をとることが可能だったかという問いである (could)。組織内の例では、上司が行った何らかの行動に対し、道義的にもその行動とは異なる

る行動をとるべきではなかったと判断し、違った行動をとったとしても結果は望ましいものでなかったと考えるならば公正感が得られる。あるいは、上司がその行動をとる以外の方法がなかったと考えるならば公正感は強まる。フェアネス理論によると、こうしたポジティブな反現実的思考は喜びや幸福感といったポジティブな情動を導く (Cropanzano et al., 2000)。一方で、上司が違った行動ととる余地があり、道義的にもとるべきであり、その結果より望ましい結果が得られたと考えるならば、不公正感を生み出し、非難、怒り、憤りなどのネガティブな感情を呼び起こす。つまり、フェアネス理論は、何らかの出来事は反現実的思考を呼び起こし、(不) 公正感を生み出すとともに、ポジティブまたはネガティブな感情を引き起こすと考えるのである。

フェアネス理論は公正理論が感情の領域に発展したものであるが、逆に感情の理論である認知的評価理論 (cognitive appraisal theory; Lazarus, 1991) を公正感に適用する動きも近年では進んでいる (Cropanzano et al., 2011)。認知的評価理論の内容は多様であるが (Weiss et al., 1999)、感情 (emotions) が生じるプロセスには共通性がある。それは、2 段階の評価プロセスからなる。第 1 段階は、何らかの事象 (event) が当該個人の幸福 (well-being) にとっての関連性 (relevance) が評価される。関連性の評価は、当該個人の目標や価値を達成するかあるいは逆に阻害するという点において重要かどうかの評価の基礎となる。この第 1 段階の評価では、まず事象に対する認知的評価が行われ、その後にポジティブかネガティブかという感情の方向性が定まるとされる。第 2 段階は、事象が生じた文脈の評価であり、意味づけのプロセスとされる。そこで考慮される内容は多様である。例えば、変化や対応の可能性、事象が生じる確実性、制御の可能性などが挙げられる (Cropanzano et al., 2011)。第 1 段階の評価と第 2 段階の評価が組み合わされることにより、多様な感情が生じるとされる。例えば、現時点の状況がポジティブであったとしても、将来の状況が自己にとって有利なものではないと考えるならば、心配 (worry) という感情が生まれる。逆に、現時点がネガティブであっても、将来が明るいと考えられるならば、希望に満ちた感情が生まれる。このような内容を有する認知的評価理論と公正理論との親近性が認識される中で、認知的評価理論と公正理論を統合しようとする研究が進められている (Cropanzano et al., 2011)。

こうした公正理論と認知的評価理論の発展の中で公正感と感情の関係に注目が集まったことも、サービス・リカバリー研究で感情を積極的にモデルに取り入れようとする動きにつながったと推察される。

3.5. 感情を取り入れた代表的な研究

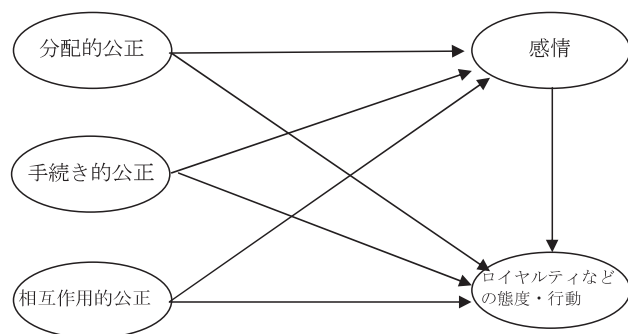
サービス・リカバリーの場面に感情を取り入れた最初の研究は、Smith and Bolton (2002) である⁹⁾。この研究は、先に説明した Smith et al. (1999) の分析フレームワークに感情の要素を取り入れ、分析内容を充実させたものである。すなわち、調査対象者が 3 か月以内に訪問したレストランとホテルを思い浮かべ、サービスの失敗とリカバリーに関する異なったシナリオを読み質問に回答す

るというものであった。この研究での感情の扱いの特徴は、サービス・リカバリーに対する感情ではなく、リカバリーの前のサービスの失敗から生じる感情の影響を探っている点にある。感情の影響を計測する方法は次のとおりである。まず、調査対象者に、サービスの失敗に関するシナリオを読んでもらい、その直後に失敗の場面に対する判断 (thoughts) や感情 (feelings) を記述してもらう。次に、記述内容に対して内容分析 (content analysis) を加え、マイナスの感情 (emotions) を 5 種類に分類する。最後に、5 種類に分類された感情を一つでも記述している人を、サービスの失敗によってマイナスの感情が生じた人とし、そうでない人を感情が生じなかった人として区分した。感情の有無という区分にもとづきサンプルを分割して、顧客満足度を被説明変数とする回帰分析を行い、推定された切片や説明変数の係数がサンプル間で相違があるかどうかを検証している。それによると、必ずしもすべてのケースに当てはまるわけではないが、感情が顧客満足に主効果および交互作用を与えていることを明らかにした。この研究は、サービス・リカバリーの場面で感情を扱った先駆的研究として評価できるが、サービスの失敗の場面では一時的にせよマイナスの感情が生じると考えるのが自然であることを踏まえると、シナリオを読んだ後の記述によって感情の有無を判断するという手法が適切かどうか疑問の余地が残る¹⁰⁾。

第 2 の研究としては、Chebat and Slusarczyk (2005) がある。この研究は、銀行の顧客で調査に先立つ 1 年以内に苦情を申し立てた人を対象に調査を行っている。その内容をみると、公正感の違いによってポジティブな感情とネガティブな感情が生じることに着目し、3 次元の公正感と感情が銀行との取引の継続か否かという行動に与える影響を分析している。分析モデルは図 3 のとおりである¹¹⁾。Chebat and Slusarczyk (2005) 以降の研究では、先行変数である公正感と結果変数である顧客ロイヤルティなどの間に信頼などの媒介変数を加え、モデルの改良などが図られているが、基本的な枠組みは図 3 に示すとおりである。Chebat and Slusarczyk (2005) はこの枠組みをもとに共分散構造分析を行い、因果関係の推定を行っている。それによると、手続き的公正を示すとされる「迅速な対応」がポジティブな感情に有意な影響を与えない点、迅速な対応と分配的公正が銀行との取引の継続という変数で計測された顧客ロイヤルティに対して有意な影響を与えていない点を除くと、仮説を支持する結果を得ている。すなわち、公正感はポジティブな感情に対してプラスの影響を与え、ネガティブな感情に対してマイナスの影響を与える。また、顧客ロイヤルティに対しては、相互作用的公正とポジティブな感情がプラスの影響を与え、ネガティブな感情はマイナスの影響を与えている。Chebat and Slusarczyk (2005) は、Smith and Bolton (2002) と異なり、感情の先行要因 (antecedents) として公正感を捉えており、公正研究の流れに沿った分析となっている。この点において、新たな知見を提供している。しかし、分析にはいくつかの課題がある。まず、公正感から感情を導く論理にやや不十分な点がみられる。分配的公正と迅速な対応で捉えた手続き的公正が感情と関係する点については、主として Homans

(1961) の主張に依拠するものであり、相互作用的正と感情の関係については十分な説明がされていない。次に、公正概念の計測の問題である。手続き的正を迅速な対応のみで計測し、顧客ロイヤルティを銀行取引の継続の有無のみで計測しているが、これは十分な妥当性を持った計測とは言い難いと思われる。

図3 感情を加えたサービス・リカバリーの分析モデル



(注) 3次元の公正感の間に相関を想定することが多い。

第3の研究としては、Schoefer and Ennew (2005) が挙げられる。この研究は公正理論と認知的評価理論を結びつけ、3次元の公正感が感情に与える影響を分析している。具体的な内容は、大学生と一般人を調査対象とする2つのサンプルに対して、各人にサービス・リカバリーを記述したシナリオを提示し、そこで生じる感情を計測するという実験を行っている。提示されるシナリオは、分配的公正、手続き的正、交互作用的公正のそれぞれについて、公正感が高い対応と低い対応が用意されているため、 $2 \times 2 \times 2 = 8$ とおりのケースが生じることになる。一方、シナリオ提示後の感情については、ポジティブな感情については14種類、ネガティブな感情については16種類、合計で30種類の感情を計測する尺度が設定された。分析では、まず、回答された感情の評価結果について探索的因子分析を行い、ポジティブな感情を示す要因とネガティブな感情を示すそれぞれ9つの計測変数が抽出された。感情に関する計測結果が、3次元の公正感の高低の違いによって異なるかどうかを、分散分析(AVOVA)によって分析している。ネガティブな感情については、大学生と一般人のいずれのサンプルでも3次元のすべての公正感について、公正感が低いほどネガティブな感情が強まることが明らかとなった。一方、ポジティブな感情については、大学生のサンプルでは、相互作用的正は有意な影響を与えなかったが、残りの公正感については公正感が強いほどポジティブな感情が強まることが判明した。一般人については、分配的公正以外の公正感については、公正感が高まるほどポジティブな感情が有意に強まることが明らかとなった。この結果から、公正感が感情に影響を与えることが確認されたが、その影響はネガティブな感情のほうがより強いことが明らかとなった。しかし、この研究は、公正感が感情に影響を与える点のみを分析しており、公正感と感情が消費者の態度や行動に与える影響は分析されていない。

第4の研究はDeWitt et al. (2008) である。彼らの分析の特徴は、リレーションシップ・マーケティングにお

ける重要概念の一つである信頼(trust)を公正感の結果変数とする媒介変数としてモデルに組み込み(Morgan and Hunt, 1994)、公正感が顧客ロイヤルティに与える影響のプロセスを明確化した点にある。より具体的に述べると、Chebat and Slusarczyk (2005) のモデルからの修正点は、(1) モデルの結果変数を行動的ロイヤルティとし、態度的ロイヤルティが行動的ロイヤルティに影響を与えるルートを設定した、(2) 信頼と感情を媒介変数に組み込むことによって、公正感が行動的および態度的ロイヤルティに影響を与えるのは、信頼と感情を経由する間接的なルートによるものとした、(3) 公正感の影響については、3次元の公正感を独立して扱わず、3次元の公正感から構成される総合的な公正感を用いて分析したという点である。公正感と感情の関係は、認知的評価理論によって説明されている。実証分析は、ショッピング・モールや公園などの場所で、一般人に対しホテルまたはレストランでのサービス・リカバリーに関するシナリオを読んでもらい、質問に回答してもらうという方法で行われた。モデルの推定は共分散構造分析によって行われ、提示された仮説がすべて支持されるという結果を得ている。すなわち、(1) 公正感とはポジティブな感情と信頼にプラスの影響を与え、ネガティブな感情にはマイナスの影響を与える、(2) ポジティブな感情と信頼は態度的ロイヤルティおよび行動的ロイヤルティにプラスの影響を与え、ネガティブな感情はそれらにマイナスの影響を与える、(3) 態度的ロイヤルティは行動的ロイヤルティにプラスの影響を与えるという内容である。この研究は、リレーションシップ・マーケティングの枠組みの中に感情を組み込んだ点は評価できる。公正感が信頼に影響を与えることは広く認識されているからである(Aryee et al., 2002; Brockner and Siegel, 1996; Colquitt et al., 2001; Konovsky and Pugh, 1994; Ramaswami and Singh, 2003; Zeinabadi and Salehi, 2011)。しかし、総合的な公正感を構成概念としたため、3次元からなる公正感による影響の違いが分析できていないという欠点がある。

第5の研究はdel Rio-Lanza et al. (2009) である。この研究は、3次元の公正感がサービス・リカバリーに対する顧客満足に与えるプロセスを明らかにすることを目的としている。モデルとして提示されたプロセスは、公正感が顧客の満足に直接的に影響を与えるルートと、公正感がサービス・リカバリーに伴うネガティブな感情を経由して顧客満足に影響を与えるルートを想定している。サービス・リカバリーで生じる公正感が感情を経由して顧客の態度あるいは行動に与えるプロセスを分析した、Chebat and Slusarczyk (2005) と DeWitt et al. (2008) の研究との違いは次のとおりである。前者との比較では、前者は顧客の離反の有無という行動を結果変数としたが、この研究はサービス・リカバリーに対する顧客満足を対象としている点で異なっている。また、前者はポジティブな感情とネガティブな感情を取り上げているが、この研究はネガティブな感情のみを対象としている点も違っている。後者との比較では、まず、後者の結果変数がロイヤルティである点が異なっている。次に、後者は総合的な公正感を先行変数とするモデルであったが、この研究は3次元の公正感のそれぞれの影響を計測している点が違っている。具

体的な分析は、過去 1 年以内に携帯電話会社に対して苦情を申し立て、リカバリーを経験した人に対してインタビューを行う形で行っている。分析は共分散構造分析によって行われ、いずれの公正感も顧客満足に有意なプラスの影響を与えているが、手続き的公正の影響が最も大きいことを明らかにしている。感情に対する影響については、手続き的公正のみが有意なプラス効果を与えていることが明らかとなっている。

4. サービス・リカバリー研究の今後

公正理論をベースとしたサービス・リカバリー研究は、3次元の公正概念をモデルに取り入れたあと、感情の要素などを媒介変数として組み込む形でモデルの精緻化が進められてきた。以下では、公正理論と感情に関する理論的研究が進展していることを踏まえ、今後のサービス・リカバリー研究の方向を提示したい。

4.1. 公正感の細分化

公正に関するこれまでの研究では、公正感を3次元に細分化し、それぞれの公正感が与える影響の違いを考察してきた。しかし、公正感をさらに細分化し4次元で捉えようとする動きがある。すなわち、相互作用的公正をさらに2種類の公正感に分けることができるという議論である (Greenberg, 1993)。一つは、手続きの実行や結果の決定に関与している人や組織が、対象となる人を丁重さ、尊厳、敬意などを持って扱ったかという視点であり、人間相互間の公正 (interpersonal justice) と呼ばれる。もう一つは、手続きの実行や結果の配分がなぜ行われたかを、十分に説明したかという視点であり、情報的公正 (informational justice) と呼ばれる。前者は生じた結果に対する反応を変化させる効果を持つのにに対し、後者は用いられた手続きに対する反応を変化させる点で効果が違っているとされる (Colquitt, et al., 2001)。4次元の公正感がよりの確に公正感を把握していることの検証は Colquitt (2001) が行っている。彼は、大学生と製造業の従業員に対する調査を実施し、確認的因子分析によって4種類の公正感が異なった概念であること¹³⁾、4次元の公正感を用いたモデルが最も適合性が高いことを明らかにしている。列車などの交通サービスの遅延の場面における車内の乗客に対する情報提供や乗務員の対応を想起すれば明らかなように、サービス・リカバリーの場面でも人間相互間の公正と情報的公正は異なる構成概念として弁別され、計測できる概念であると考えられる。そうであるならば、4次元の公正感を用いた実証分析の余地は大きいと考えられる。

4.2. 総合的な公正感を用いた研究

公正感を細分化することは、それぞれの細分化された公正感がより強く影響を与える結果変数が存在する限り有効な方法である。しかし、最近ではこれとは逆の主張がみられるようになってきた。その理由としては次のような理由が指摘されている (Barclay and Whiteside, 2011)。第1は、人が公正についての考え (impression) を形成する際には、統合的 (holistic) な判断をする傾向がみら

れる点である。第2は、個人の行動は総合的な公正の感覚に導かれる傾向がみられる点である。第3は、統合的な判断は結果に対して個別の公正感よりもより根源的な影響を与える傾向がみられることである。総合的な公正感の有用性については、Ambrose and Schminke (2009) は、(1) 職務満足度、感情的コミットメント、転職意図という結果変数に公正感が影響を与えるモデル、(2) 職務のパフォーマンス、組織的市民行動 (organizational citizenship behavior)、組織的逸脱 (organizational deviance) という結果変数に公正感が影響を与えるモデルを推定して検証を行っている。それによると、3次元の公正感が総合的な公正感に影響を与え、総合的な公正感が結果変数に影響を与えるというモデル (モデル1) と、モデル1に3次元のそれぞれの公正感が直接的に結果変数に影響を与えるパスを加えたモデル (モデル2) の適合度を比較した場合、パスを加えたモデル2の適合度が有意に高いという結果は得られず、簡素化 (parsimonious) の視点から総合的な公正感の有用性が高いと結論づけている。なお、DeWitt et al. (2008) の研究も総合的な公正感を取り上げているが、注12でも述べたように総合的な公正感を3次元の公正感を計測する変数で捉えているため、ここでの議論には該当しない。ここでの主張は、3次元の公正感を計測する変数とは異なる、総合的な公正感自体を独自の計測変数によって計測することが重要であるとの立場である。サービス・リカバリーが注目する顧客の態度や行動に、総合的な公正感が強い影響を与えているならば、この概念を用いた研究の余地があると考えられる。

4.3. 公正という経験を重視したモデル

公正理論に感情を取り入れたモデルが開発されてきたことは、先に述べたとおりであるが、そこでの公正感と感情の関係は、まず、何らかの行為に対して認知的評価を行い、その認知的評価に基づき感情的反応が生じるというプロセスのものが多く¹⁴⁾。しかし、評価の過程での感情の役割に注目する研究が増えてきている。不公正は判断ではなく感情的で生理学的な経験であり、感情は不公正の経験の本質的な要素であるという考え方がある (Bies and Tripp, 2002)。また、van den Bos (2009) は情報の不確実性が大きな状況では、感情が公正の判断に影響を与えることを示し、公正を判断する局面では認知と感情がともに影響を与えると主張している。このような議論を踏まえ、Barclay and Whiteside (2011) は、知覚 (perceptions)、感情 (affect)、信念 (beliefs) が相互に作用することで、(不)公正という経験が形成され、さらに結果変数である態度や行動と(不)公正という経験の間に(不)公正の強さという概念を導入したモデルを提唱している。彼らは、このモデルによって、不公正な水準が同じ事象が状況によって異なる反応を生み出すことが説明できるとしている。サービス・リカバリーの状況では顧客の感情的言動はよく目にすることであり、Barclay and Whiteside (2011) のモデルをサービス・リカバリー研究に応用できる余地は大きいと考えられる。

5. おわりに

本稿は、経済のサービス化が進む中で企業業績の向上を実現する上で重要な役割を果たすと考えられるサービス・リカバリー研究について考察してきた。それによると、初期のサービス・リカバリー研究では、サービス・リカバリーのタイプと顧客満足などの結果を直接結び付ける研究が多かったが、次第に、リカバリーと結果の間の消費者の意思決定プロセスを解明することに重点が移っていった。消費者の意思決定プロセスでは、伝統的な期待不一致要因とともに、消費者がリカバリーに対して知覚する公正感が注目され、期待不一致と公正感を構成概念に用いたモデルが開発された。しかし、サービス・リカバリーの場面では期待不一致が適していないとの主張もあり、公正感を中心にモデル構築を行い、実証分析を行う研究が支配的となっている。公正感を用いた分析では、分配的公正、手続き的公正、相互作用の公正という3次元の公正感を用いた研究が中心となっている。

近年の研究では、公正に感情を加えてモデルを構築する動きがみられる。その際には、公正感がポジティブあるいはネガティブな感情を生み出し、感情が態度や行動に影響を与えるというモデルが中心である。しかし、公正と感情に関する理論の発展は続いており、サービス・リカバリーに適用できる新たな知見も少なくないと考えられる。こうした状況を踏まえると、今後の研究テーマとしては、公正感の細分化、総合的公正概念、経験を重視した公正概念などをモデルに取り入れた研究を指摘することができる。

注

- 1) ただし、商品をサービスと財を明確に区別することは必ずしも容易ではない。一般に、財は有形 (tangible) でありサービスは無形 (intangible) であるとされるが、純粋に無形のサービスはほとんど存在しないからである。例えば、ファストフードは一般にサービスと認識されることが多いが、そこで提供される食事は有形である。したがって、商品は有形性と無形性を両極とする連続体の中に位置付けられると考えられている (Schostack, 1977)。本稿では、完全な無形性を有するサービスは非常に限定的であることを踏まえ、無形性が支配的な商品をサービスと定義し議論を進める。
- 2) サービスと財の本質が類似してきており、両者のマーケティングの違いはないという議論がないわけではない (Gronroos, 2000)。
- 3) サービス・リカバリー・パラドックス (SRP) の例としては、ホテルで予約した部屋が確保されていない場合に、即座によりグレードの高い部屋を同じ金額で提供されるケースなどが挙げられている (Zeithaml et al., 2009)。サービス・リカバリー・パラドックスが生じるかどうかに関する実証研究の結果は様々である。de Matos et al. (2007) によるメタ分析によると、顧客満足については SRP が支持されるものの、再購買意図、口コミ、企業イメージでは SRP は支持されないなど、対象とする結果によって SRP が生じるかどうか異なっているという結果が得られている。
- 4) 黒岩 (2005) は、高橋 (2007) とは異なり、(1) 苦情対応に対する消費者の満足度に影響を与える変数の探索についての研究、(2) 苦情対応満足度がその他の成果変数に与える影響の研究に分け、先行研究のサーベイを行っている。
- 5) 日本経済新聞、2012年7月6日、2012年7月14日。
- 6) Oliver and Swan (1989, p. 26) は、不一致と分配的公正を同時に媒介変数に含めた分析を行っている。その中で、両者を統合した分析の可能性に言及し、公正理論が期待不一致モデルに含まれる可能性と、その逆の期待不一致モデルが公正理論に含まれる可能性があることを指摘している。
- 7) 社会科学で議論される「公正」は、規範を議論する哲学とは異なり、人々が活動や行為を公正と知覚するかによって判断されるとされる (Folger and Cropanzano, 1998)。

- 8) サービス提供者に対する満足やロイヤルティに関する構造化された質問にも回答している。
- 9) 感情 (affect) については、特定の対象に向けられる情動 (emotion) と対象を特定しない気分 (mood) に分けられるが (Robbins and Judge, 2012; 池田他, 2010)、本稿では、情動と気分を区別することなく、感情として扱う。
- 10) Smith and Bolton (2002) は、マイナスの感情が生じても記述しない可能性に言及しつつ、記述の有無が客観的区分になることの利点から、この基準を採用したとしている。
- 11) Chebat and Slusarczyk (2005) では手続き的公正という用語を用いず、サービス・リカバリーにおける手続き的公正の中心概念である迅速な対応 (timeliness) という用語を使っている。また、図3では感情は一つの構成概念として示されているが、ポジティブとネガティブな感情がそれぞれ異なる公正概念として扱われている。
- 12) ここでは、3次元の公正感を計測する変数によって、総合的な公正概念を捉えたとの立場に立っている。このため、3次元の公正感を計測する変数とは異なる、総合的な公正感自体を計測する変数が用いられているわけではない。
- 13) 4次元の公正感がそれぞれ異なった概念であることを示す弁別妥当性については、相関係数の大きさによって判断が行われている。弁別妥当性の検定方法として Hair et al. (2006) でも提示されている、平均分散抽出度 (AVE: average variance extracted) を構成概念間の相関係数の二乗が超えないという基準 (Fornell and Larcker, 1981) を満たすことが一般には求められていることを考慮すると、Colquitt (2001) の分析にはやや不十分な点がある。
- 14) 認知的評価理論 (Lazarus, 1991)、感情イベント理論 (Weiss and Cropanzano, 1996)、フェアネス理論 (Folger and Cropanzano, 1998) といういずれの理論も、本文で記述した論理にもとづいている。なお、感情が認知に影響を与えるという逆の因果関係も知られている。人は所与の刺激をいかに感じているかを評価する際の情報として、現時点での感情の状態を利用するという感情情報理論 (Schwartz and Clore, 1983, 1996; Schwartz, 2012) である。

参考文献

- Adams, J. S. (1965) "Inequity in Social Exchange," in L. Berkowitz (ed.) *Advances in Experimental Social Psychology*, Vol. 2, Academic Press, pp. 267-299.
- Ambrose, M. L., and M. Schminke (2009), "The Role of Overall Justice Judgments in Organizational Justice Research: A Test of Mediation," *Journal of Applied Psychology*, 94, pp. 491-500.
- Andreassen, T. W. (2000), "Antecedents to Satisfaction with Service Recovery," *European Journal of Marketing*, 34 (1/2), pp. 156-175.
- Aryee, S., P. S. Budhwar, and Z. X. Chen (2002), "Trust as a Mediator of the Relationship between Organizational Justice and Work Outcomes: Test of a Social Exchange Model," *Journal of Organizational Behavior*, 23, pp. 267-285.
- Barclay, L. J., and D. B. Whiteside (2011), "Moving Beyond (In) Justice Perceptions," in S. W. Gilliland, D. D. Steiner, D. P. Skarlicki (eds.) *Emerging Perspectives on Organizational Justice and Ethics*, Information Age Publishing, pp. 49-74.
- Bies, R. J., and J. S. Moag (1986), "Interactional Justice: Communication Criteria for Fairness," in B. Sheppard and M. H. Bazerman (eds.), *Research on Negotiation in Organizations*, JAI Press, pp. 43-55.
- Bies, R. J. and T. M. Tripp (2002), " 'Hot Flashes and Open Wounds': Injustice and the Tyranny of Its Emotions," in S. W. Gilliland, D. D. Steiner, and D. P. Skarlicki (eds.), *Emerging Perspectives on Managing Organizational Justice*, Information Age Publishing, pp. 203-221.
- Bitner, M. J., B. H. Booms, and M. S. Tetreault (1990), "The Service Encounter: Diagnosing Favorable and Unfavorable Incidents," *Journal of Marketing*, 54 (January), pp. 71-84.
- Brockner, J., and P. Siegel (1996), "Understanding the Interaction Between Procedural and Distributive Justice: The Role of Trust," in Kramer, R. M. and T. Tyler (eds.), *Trust in Organizations: Frontiers of Theory and Research*,

- Sage Publications, pp. 390-413.
- Chebat, J. C., and W. Slusarczyk (2005) "How Emotions Mediate the Effects of Perceived Justice on Loyalty in Service Recovery Situation: An Empirical Study," *Journal of Business Research*, 58, pp. 664-673.
- Cohen-Charash, Y., and P. E. Spector (2001), "The Role of Justice in Organizations: A Meta-Analysis," *Organizational Behavior and Human Decision Process*, 86, pp. 278-324.
- Colquitt, J. A. (2001), "On the Dimensionality of Organizational Justice: A Construct Validation of a Measure," *Journal of Applied Psychology*, 86, pp. 386-400.
- Colquitt, J. A., D. E. Conlon, M. J. Wesson, C. O. L. H. Porter, and K. Y. Ng (2001) "Justice at the Millennium: A Meta-Analysis Review of 25 Years of Organizational Justice Research," *Journal of Applied Psychology*, 86, pp. 425-445.
- Cropanzano, R., J. H. Stein, and T. Nadisic (2011), *Social Justice and the Experience of Emotion*, Routledge.
- Cropanzano, R., H. M. Weiss, K. Suckow, and A. A. Grandey (2000), "Doing Justice to Workplace Emotion," in N. Ashkanasy, C. Hartel, and W. Zerbe (eds.), *Emotions at Work*, Quorum Books, pp. 49-62.
- del Rio-Lanza, A. B., R. Vazquez-Caselles, and A. M. Diaz-Martin (2009), "Satisfaction with Service Recovery: Perceived Justice and Emotional Responses," *Journal of Business Research*, pp. 775-781.
- de Matos, C. A., J. L. Henrique, and C. A. V. Rossi (2007), "Service Recovery Paradox: A Meta-Analysis," *Journal of Service Research*, 10, pp. 60-77.
- DeWitt, T., D. T. Nguyen, and R. Marshall (2008), "Exploring Customer Loyalty Following Service Recovery: The Mediating Effects of Trust and Emotions," *Journal of Services Research*, 10, pp. 269-281.
- Folger, R. (1986a), "A Referent Cognition Theory of Relative Deprivation," in J. M. Olson, C. P. Herman, and M. P. Zanna (eds.), *Relative Deprivation and Social Comparison: The Ontario Symposium, Vol. 4*, Erlbaum, pp. 33-54.
- Folger, R. (1986b), "Rethinking Equity Theory: A Referent Cognition Model," in H. W. Bierhoff, R. L. Cohen, and J. Greenberg (eds.), *Justice in Social Relation*, Plenum Press, pp. 145-162.
- Folger, R. (1987), "Reformulating the Preconditions of Resentment: A Referent Cognition Model," in J. C. Masters and W. P. Smith (eds.), *Social Comparison, Justice and Relative Deprivation: Theoretical Empirical and Policy Perspectives*, Erlbaum, pp. 183-215.
- Folger, R., and R. Cropanzano (1998), *Organizational Justice and Human Resource Management*, Sage Publications.
- Folger, R., and R. Cropanzano (2001), "Fairness Theory: Justice as Accountability," in J. Greenberg and R. Cropanzano (eds.), *Advances in Organizational Justice*, Stanford University Press, pp. 1-55.
- Fornell, C., and D. F. Larcker (1981) "Evaluating Structural Equation Models with Unobservable Variables and Measurement Errors," *Journal of Marketing Research*, 18 (February), pp. 39-50.
- Goodwin, C., and I. Ross (1989), "Salient Dimensions of Perceived Fairness in Resolution of Service Complaints," *Journal of Consumer Satisfaction/ Dissatisfaction and Complaint Behavior*, 2, pp. 87-92.
- Goodwin, C., and I. Ross (1990), "Consumer Evaluations of Responses to Complaints: What's Fair and Why," *Journal of Services Marketing*, 4 (3), pp. 53-61.
- Goodwin, C., and I. Ross (1992), "Consumer Responses to Service Failures: Influence of Procedural and Interactional Fairness Perceptions," *Journal of Business Research*, 25, pp. 149-163.
- Greenberg, J. (1993), "The Social Side of Fairness: Interpersonal and Informational Classes of Organizational Justice," in R. Cropanzano (ed.), *Justice in the Workplace: Approaching Fairness in Human Resource Management*, Lawrence Erlbaum Associates, pp. 79-103.
- Gronroos, C. (2000), "Service Reflections: Service Marketing Comes of Ages," in T. A. Swartz and D. Iacobucci (eds.), *Handbook of Service Marketing & Management*, Sage Publications, pp. 13-16.
- Hair, J. F., W. C. Black, B. J. Babin, R. E. Anderson, and R. L. Tatham (2006) *Multivariate Data Analysis (6th ed.)*, Pearson Prentice Hall.
- Hart, C., W. L., J. L. Heskett, and W. E. Sasser Jr. (1990), "The Profitable Art of Service Recovery," *Harvard Business Review*, 68 (July/August), pp. 148-156.
- Homans, G. C. (1961), *Social Behavior: Its Elementary Forms*, Harcourt Brace Jovanovich.
- Hui, M. K., and K. Au (2001), "Justice Perceptions of Complaint-Handling: A Cross-Cultural Comparison between PRC and Canadian Customers," *Journal of Business Research*, 52, pp. 161-173.
- Kelley, S. W., K. D. Hoffman, and M. A. Davis (1993), "A Typology of Retail Failures and Recoveries," *Journal of Retailing*, 69, pp. 429-452.
- Konovsky M. A., and S. D. Pugh (1994) "Citizenship Behavior and Social Exchange," *Academy of Management Journal*, 37, pp. 656-669.
- Lazarus, R. S. (1991), *Emotion and Adaptation*, Oxford University Press.
- Leventhal, G. S. (1980) "What Should Be Done with Equity Theory?" in K. J. Gergen, M. S. Greenberg, and R. H. Willis (eds.), *Social Exchange: Advances in Theory and Research*, Plenum Press, pp. 27-55.
- Lind, E. A., and T. R. Tyler (1988), *The Social Psychology of Procedural Justice*, Plenum Press. (菅原郁夫・大淵憲一訳『フェアネスと手続きの社会心理学—裁判、政治、組織への応用—』、ブレーン出版)。
- Lovelock, C. H. (1994), *Product Plus*, McGraw-Hill.
- Morgan, R. M., and S. D. Hunt (1994) "The Commitment -Trust Theory of Relationship Marketing," *Journal of Marketing*, 58 (July), pp. 20-38.
- Oliver, R. L. (2010), *Satisfaction: A Behavioral Perspective on the Consumer (2nd ed.)*, M. E. Sharpe.
- Oliver, R. L., and J. E. Swan (1989), "Consumer Perceptions of Interpersonal Equity and Satisfaction in Transactions: A Field Survey Approach," *Journal of Marketing*, 53 (April), pp. 21-35.
- Orsingher, C., S. Valentini, and M. de Angelis (2010), "A Meta-Analysis of Satisfaction with Complaint Handling in Services," *Journal of the Academy of Marketing Science*, 38, pp. 169-186.
- Ramaswami, S. N., and J. Singh (2003), "Antecedents and Consequences of Merit Pay Fairness for Industrial Salespeople," *Journal of Marketing*, 67 (October), pp. 46-66.
- Robbins, S. P. and T. A. Judge (2012), *Organizational Behavior (15th ed.)*, Pearson Education.
- Schoefer K., and C. Ennew (2005), "The Impact of Perceived Justice on Consumers' Emotional Responses to Service Complaint Experiences," *Journal of Services Marketing*, 19, pp. 261-270.
- Schostack, G. L. (1977), "Breaking Free from Product Marketing," *Journal of Marketing*, 41 (April), pp. 73-80.
- Schwartz, N. (2012), "Feelings-as-Information Theory," in P. A. M. Van Lange, A. W. Kglanski, and E. T. Higgins (eds.), *Handbook of Theories of Social Psychology: Volume 1*, Sage Publications, pp. 289-308.
- Schwarz, N., and G. L. Clore (1983), "Mood, Misattribution, and Judgments of Wellbeing: Informative and Directive Functions of Affective States," *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, pp. 513-523.
- Schwarz, N., and G. L. Clore (1996), "Feelings and Phenomenal Experiences," in E. T. Higgins and A. Kruglanski (eds.), *Social Psychology: Handbook of Basic Principles*, Guilford,

- pp. 433-465.
- Smith, A. K., and R. N. Bolton (2002), "The Effect of Customers' Emotional Responses to Service Failures on Their Recovery Effort Evaluations and satisfaction Judgments," *Journal of the Academy of Marketing Science*, 30, pp. 5-23.
- Smith, A. K., R. N. Bolton, and J. Wagner (1999), "A Model of Customer Satisfaction with Service Encounters Involving Failure and Recovery," *Journal of Marketing Research*, 36 (August), pp. 356-372.
- Tax S. S., and S. W. Brown (1998), "Recovering and Learning from Service Failure," *Sloan Management Review*, 40 (Fall), pp. 75-88.
- Tax S. S., and S. W. Brown (2000), "Service Recovery: Research Insights and Practices," in T. A. Swartz and D. Iacobucci (eds.), *Handbook of Services Marketing & Management*, Sage Publications, pp. 271-285.
- Tax S. S., S. W. Brown, and M. Chandrashekar (1998), "Customer Evaluations of Service Complaint Experiences: Implications for Relationship Marketing," *Journal of Marketing*, 62 (April), pp. 60-76.
- Thibaut, J. W., and L. Walker (1975), *Procedural Justice: A Psychological Perspective*, Lawrence Erlbaum.
- van den Bos (2009), "Hot Cognition and Social Justice Judgments: The Combined Influence of Cognitive and Affective Factors on the Justice Judgment Process," in D. D. Cremer (ed.), *Advances in the Psychology of Justice and Affect*, Information Age Publishing, pp. 37-59.
- Voorhees, C. M., M. K. Brady, and D. M. Horowitz (2006), "A Voice from the Silent Masses: An Exploratory and Comparative Analysis of Noncomplainers," *Journal of the Academy of Marketing Science*, 34, pp. 514-527.
- Weiss, H. M., and R. Cropanzano (1996), "Affective Events Theory: A Theoretical Discussion of the Structure, Causes and Consequences of Affective Experiences at Work," in B. M. Staw and L. L. Cummings (eds.), *Research in Organizational Behavior*, Vol.18, JAI Press, pp. 1-74.
- Zeelenberg, M., and R. Pieters (2004), "Beyond Valence in Customer Dissatisfaction: A Review and New Findings on Behavioral Responses to Regret and Disappointment in Failed Services," *Journal of Business Research*, 57, pp. 445-455.
- Zeinabadi, H., and K. Salehi (2011), "Role of Procedural Justice, Trust, Job Satisfaction, and Organizational Citizenship Behavior (OCB) of Teachers: Proposing a Modified Social Exchange Model," *Procedia-Social and Behavioral Sciences*, 29, 1472-1481.
- Zeithaml, V. A., M. J. Bitner, and D. D. Gremler (2009), *Services Marketing: Integrating Customer Focus Across the Firm* (5th ed., International Edition), McGraw-Hill.
- 池田謙一・唐沢穂・工藤恵理子・村本由紀 (2010), 『社会心理学』、有斐閣。
- 黒岩健一郎 (2005), 「苦情対応研究の現状と課題」『武蔵大学論集』、第52巻、第3・4号、pp. 15-31。
- 高橋郁夫 (2007), 「『サービスの失敗』とその後の消費者意思決定プロセス」『三田商学研究』、第50巻、第2号、pp. 19-33。

チャネル間競争と販売費用削減投資

Competition between Marketing Channels and Investment in Sales Cost Reduction

鈴木 浩孝

文化政策学部文化政策学科

Hiroataka SUZUKI

Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

成生 達彦

京都大学大学院経営管理研究部

Tatsuhiko NARIU

Graduate School of Management, Kyoto University

複占市場において、生産者が系列の販売業者を介して財を販売しており、また生産者は販売業者に対してフランチャイズ料を課しているとする。さらに、生産者間では価格競争が行われ、販売業者間では数量競争と販売費用削減投資の競争が行われているとする。このとき、生産者は需要が拡大すると出荷価格を下げ、出荷価格は互いに戦略的代替関係となり、また均衡において生産者は出荷価格を自身の限界生産費用よりも低く設定する。これにより販売業者は多くの注文を行い、そしてこのような販売量の増加が費用削減投資の増加につながる。その結果、需要が拡大したときに小売価格も低下することになる。さらに、垂直的統合と垂直的分離の選択においては、生産者にとって垂直的分離が支配戦略となる。ただし両生産者が垂直的分離を選んでいる状況は「囚人のジレンマ」に相当し、垂直的分離はチャネル間競争を激しくする。

Suppose that a duopolistic manufacturer sells its products through its affiliated retailers, and that the former charges a franchise fee on the latter. Also suppose that the manufacturers compete in price, and that the retailers do in quantity and investment level in sales cost reduction. Then, each manufacturer cuts its shipping price when the market demand shifts upward, and the shipping prices become strategic substitutes, and in equilibrium, manufacturers set each shipping price under the marginal production costs. Under low shipping price, retailers have more incentives to sell, and that increases their investment level in sales cost reduction. As a result, retail price falls when the market demand shifts upward. Moreover, the vertical separation rather than vertical integration is dominant strategy for each manufacturer, but the situation of both manufacturers choosing vertical separation is "prisoners dilemma". So the (possibility of choosing) vertical separation of the retailers by each manufacturer intensifies the competition between marketing channels.

1. 序論

生産者が財を消費者に直接販売することは稀で、多くの場合、そのプロセスには小売業者をはじめとする流通業者が介在している。生産者の流通業者に対するコントロールという観点から見れば、一方の極には市場取引に基づく垂直的分離があり、他方の極には生産者による直接的かつ完全なコントロールを意味する垂直的統合がある。市場取引（線形料金）のもとで生産者と流通業者の各々が利己的に行動する場合、その総和であるチャネルの利潤は必ずしも最大とはならない。生産者は自らの限界生産費用にマージンを上乗せして出荷価格を設定し、さらに流通業者はその出荷価格にマージンを上乗せして卸売価格あるいは小売価格を設定する。その結果、最終的に小売価格はチャネル利潤を最大化する水準（＝垂直的統合時に設定される水準）よりも高くなってしまふのである。ここで生産者が流通業者を垂直的に統合すれば、意思決定主体が単一化することによってチャネル内での取引は効率的となり、二重マージンの問題は解消される¹⁾。

ただし、このような垂直的統合が多大な費用を伴うとすれば、分離の範囲内で統合と同種の効果をもたらす方が考えられることになる。その方策とは、ひとつは市場取引（線形料金）とフランチャイズ料を組み合わせ、二部料金制の導入であり、もうひとつは垂直的取引制限である。これらを適切に行えば二重マージンは解消され、分離の下でも統合時と同じ状況が実現可能となる。このような垂直的取引制限の分野の研究として、Spengler(1950)

は「二重マージン」への対処としての上限価格規制を、また Telser(1960) は販売業者間の「水平的外部性（スペシャルサービス）」への対応としての再販制（下限価格規制）を論じている。また垂直的取引制限が輸送面での効率化を促し、その結果生産者余剰のみならず消費者余剰も増加し得ることを述べたものとしては、テリトリイ制に関する Matsumura (2003) や、上限価格制に関する Nariu and Flath (2005) がある。

ただし、単一チャネルの場合に導かれる結論が、複数チャネル間での競争を想定するケースでも同様に成立するとは限らない。ゆえに、仮に垂直的統合に費用がかからないとしても、複数チャネルの状況下では、生産者は垂直的統合を選択するとは限らない。なぜなら生産者は、チャネル内取引の効率化のみならず、チャネル間競争に伴う相互作用をも考えなければならないからである。前述の二重マージンの論点からも明らかのように、垂直的統合は小売価格を下げる向きに働く。しかし、複数チャネル間で競争が行われること自体が、すでに小売価格の低下要因となっている。したがって複数チャネルの状況では、生産者は垂直的分離を行うことで敢えてチャネル内取引に二重マージンを発生させ、小売価格の低下を抑制しようとする場合がある。このような観点から、Bonanno and Vickers (1988) や Rey and Stiglitz (1988) は、垂直的分離がチャネル間競争を緩和する効果を持つことを述べている²⁾。

Bonanno and Vickers (1988) や Rey and Stiglitz (1988) のように、複数チャネル間での競争において、まず生産者が小売業者に対して出荷価格（およびフラン

チャイブ料)を設定し、次に小売業者が市場で小売価格を設定するという形態を、以後「価格—価格競争」と呼ぶことにする。Gal-Or (1991), 成生 (1994), Irmén (1997) は、複占チャンネル間での価格—価格競争モデルにおいて、戦略的動機にもとづく垂直的分離について検討している。出荷価格やフランチャイズ料の設定以前に、生産者が垂直的統合と垂直的分離との選択を行う段階を考えれば、(フランチャイズ料の徴収を伴う)垂直的分離は、生産者にとって支配戦略である。また両生産者がともに小売業者を垂直的に統合している状態から、一方の生産者だけが垂直的分離に変更することは、他方の生産者の利潤をも増加させることになる。ゆえに垂直的分離は fat cat 戦略であり、両生産者が垂直的分離を行うことでチャンネル間競争は緩和され、その結果小売価格はカルテル時の価格に近づくことになる。さらに長谷川・成生 (2006) は、需要の不確実性の要素をも導入した拡張を行っている。そこでは、財が同質的でありかつ需要の不確実性が大きい場合には垂直的分離が選択されるという結論から、家電業界での価格が建値制(垂直的統合)からオープン価格制(垂直的分離)に変化した理由について説明をしている。

上記の価格—価格競争に対して、生産者が小売業者に対してまず出荷価格(およびフランチャイズ料)を設定し、次に小売業者が市場で販売量を設定するという形態を、以後「価格—数量競争」と呼ぶことにする。

価格—価格競争と比べると価格—数量競争の先行研究は少ないが、Saggi and Vettas (2002) は対称的な複占チャンネルのモデル³⁾の下で設定される二部料金制が下流段階での競争に与える影響について分析し、需要が増大すると出荷価格が引き下げられることや、出荷価格が戦略的代替関係になること、出荷価格が限界費用よりも低く設定されることなどを導いている。成生・鈴木 (2004) では、同質財市場のケースで得られる Saggi and Vettas (2002) の上記の結論が、差別化された財の市場のケースでも成り立つことを示している。さらに成生・鈴木 (2006) では、垂直的分離と垂直的統合の選択段階まで考慮する場合に垂直的分離が均衡として実現することを示し、さらにその垂直的分離はチャンネル間競争を激しくするという、Bonanno and Vickers (1988) や Rey and Stiglitz (1988) とは対照的な主張を導いている。

本稿では、成生・鈴木 (2006) の拡張として、販売業者による費用削減投資を考慮する状況でのチャンネル間競争について検討する。結論の1つ目は、費用削減投資が行われる状況でも各生産者は垂直的分離を選択し、チャンネル間競争はますます激しくなるということである。

2つ目は、需要が増大するときに、小売価格が低下するということである。費用削減投資を考慮しない Saggi and Vettas (2002) や成生・鈴木 (2006) のモデルでは、需要が増大するときに出荷価格は低下するものの、小売価格は低下しない。そこでもし費用削減投資が低コストで可能であれば、需要の増加に伴う販売量の増加を見込む販売業者は投資をより多く行い、それによる限界販売費用の低下が小売価格の低下につながるようになる。

需要のピーク時に価格が低下する⁴⁾という現象は、日常でも見られるものである。この要因については、ホールドアップ問題に対するロスリーダー効果という観点をはじ

めとしてさまざまな考察が行われているが、本稿で導出される結果は、チャンネル間の相互作用の中での販売業者による費用削減投資も、その要因のひとつであることを示している。

本稿の構成は以下の通りである。まず第2節では、基本モデルを提示する。その中の第1項では、両生産者が販売部門を統合している状況を、第2項では両者がともに販売部門を分離している状況を、第3項では一方が統合、他方が販売部門を分離している状況を検討する。その上で第3節では、生産者が販売部門を統合するか分離するか意思決定について検討する。第4節では要約を述べるとともに、本稿が扱っている価格—数量競争の展開についての概要を述べて、全体の結びとする。

2. モデル

同質財を生産する2人の生産者 ($i=1,2$) が存在し、生産者 i によって生産された財は、自らまたは系列の販売業者 i を介して消費者に販売されるものとする。財にたいする市場の逆需要関数は、

$$p = a - q = a - (q_1 + q_2)$$

で与えられる。ここで p は小売価格、 q は総販売量、 q_i は販売業者 i の販売量で、 a および b はパラメータである。また、各生産者の限界 (= 平均) 費用は c で共通とする。

販売業者 i (統合されている場合には生産者の販売部門) の財1単位あたりの販売費用を

$$m_i = m - x_i$$

とする。ここで m はパラメータであり、 x_i は広告などへの投資による販売費用の削減額である。この種の投資には

$$k(x_i) = tx_i^2 / 2$$

の費用がかかるものとする。ここで t はパラメータである。

以下では、極大化の二階条件と諸変数の非負条件を保証するために

$$t > 2(5 + \sqrt{13})/9$$

$$c + m < a < \min\{(2t-1)c/(t-1) + m, c + (1+t)m\}$$

を仮定する⁵⁾。

本稿では次のような4段階ゲームについて検討する。まず第1段階において、各生産者は自ら販売するか、または独立の意思決定主体である販売業者を介して販売するか、いずれかを選択する。販売業者を介して販売する場合には、第2段階において、生産者は出荷価格とフランチャイズ料を設定する。これを受けて第3段階では、各販売業者(統合の場合には生産者)が投資水準を決める。そして第4段階では、各販売業者が販売量を設定する。ただし生産者が自ら販売する場合には、上記のうち第2段階部分が省略される。以下では、このようなゲームの部分ゲーム完全均衡を求める。

2-1 垂直的統合

まずは、生産者が販売部門を垂直的に統合し、財を消費者に直接販売する状況について検討する。

販売量の決定

第4段階において生産者 i は、ライバルの生産者 j が設定する投資水準 x_j と販売量 q_j を所与として、自らの利潤 π_i を最大にするように自らの販売量 q_i を設定する。この状況での生産者の意思決定問題は

$$\begin{aligned} \underset{q_i}{\text{Max}} \pi_i &= (p - v_i)q_i - tx_i^2 / 2 \\ &= \{a - (q_i + q_j) - v_i\}q_i - tx_i^2 / 2, \end{aligned} \quad (1)$$

と定式化される。ここで、 $v_i = c + m_i$ は限界販売費用である。この極大化条件より、反応関数

$$q_i(q_j) = (a - v_i - q_j) / 2,$$

が導かれる。生産者 i の生産量は

$$q_i^I = (a - 2v_i + v_j) / 3, \quad (2)$$

で与えられる。ここで、上付き I は垂直的統合を示している。このときの小売価格、生産者 i の利潤は、それぞれ

$$\begin{aligned} p^I &= (a + v_i + v_j) / 3, \\ \pi_i^I &= (a - 2v_i + v_j)^2 / 9 - tx_i^2 / 2, \end{aligned}$$

と計算される。

投資水準の決定

このことを踏まえた上で、販売部門を統合している生産者 i は、第3段階において費用削減投資の水準を決定する。この意思決定問題は、

$$\begin{aligned} \underset{x_i}{\text{Max}} \pi_i &= (p - v_i)q_i - tx_i^2 / 2 \\ &= \{(a - 2(c + m - x_i) + (c + m - x_j))\}^2 / 9 - tx_i^2 / 2, \end{aligned}$$

と定式化される⁶⁾。この極大化条件より、反応関数

$$x_i(x_j) = 4(a - c - m - x_j) / (9t - 8),$$

が導かれる。したがって、生産者 i の投資水準は

$$x_i^I = 4(a - c - m) / (9t - 4),$$

で与えられる。このときの生産者 i の販売量、販売費用、小売価格、生産者 i の利潤は、それぞれ

$$\begin{aligned} q_i^I &= 3t(a - c - m) / (9t - 4), \\ m_i^I &= \{9tm - 4(a - c)\} / (9t - 4), \\ p_i^I &= \{(3t - 4)a + 6t(c + m)\} / (9t - 4), \\ \pi_i^I &= t(9t - 8)(a - c - m)^2 / (9t - 4)^2, \end{aligned} \quad (3)$$

と計算される。

2-2 垂直的分離

次に、この節では両方の生産者が販売業者を分離する状況について検討する。

販売量の決定

第4段階において販売業者 i は、生産者 i が設定する出荷価格 w_i とフランチャイズ料 F_i 、さらにはライバルの販売業者が設定する販売量 q_j を所与として、自らの利潤 y_i を最大にするように自らの販売量（生産者 i にたいする注文量） q_i を設定する。このもとでの販売業者の意思決定問題は、

$$\begin{aligned} \underset{q_i}{\text{Max}} y_i &= (p - v_i)q_i - tx_i^2 / 2 - F_i \\ &= \{a - (q_i + q_j) - v_i\}q_i - tx_i^2 / 2 - F_i, \end{aligned}$$

と定式化される。均衡における販売業者 i の注文量は、

$$q_i^S = (a - 2v_i + v_j) / 3 = \{a - 2(w_i + m_i) + (w_j + m_j)\} / 3,$$

で与えられる。ここで上付 S は、垂直的分離を示している。このときの総販売量、小売価格、および販売業者 i の利潤は、それぞれ

$$\begin{aligned} q^S &= (2a - v_i - v_j) / 3 = \{2a - (w_i + m_i) - (w_j + m_j)\} / 3, \\ p^S &= (a + v_i + v_j) / 3 = \{a + (w_i + m_i) + (w_j + m_j)\} / 3, \\ y_i^S &= (a - 2v_i + v_j)^2 / 9 - tx_i^2 / 2 - F_i \\ &= \{a - 2(w_i + m_i) + (w_j + m_j)\}^2 / 9 - tx_i^2 / 2 - F_i, \end{aligned}$$

と計算される。

投資水準の決定

第3段階において販売業者 i は、生産者 i が設定する出荷価格 w_i とフランチャイズ料 F_i 、さらにはライバルの販売業者が設定する投資水準 x_j を所与として、自らの利潤 y_i を最大にするように自らの投資量 x_i を設定する。このもとでの販売業者の意思決定問題は、

$$\underset{x_i}{\text{Max}} y_i^S = \{a - 2(w_i + m - x_i) + (w_j + m - x_j)\}^2 / 9 - tx_i^2 / 2 - F_i,$$

と定式化される⁷⁾。上式の極大化条件より、反応関数

$$x_i(x_j) = 4(a - m - 2w_i + w_j - x_j) / (9t - 8),$$

が導かれる。したがって、販売業者 i の投資水準は

$$x_i^S = 4\{(3t - 4)(a - m) - 2(3t - 2)w_i + 3tw_j\} / (9t - 4)(3t - 4)$$

で与えられる。ここで上付き添え字 S は、両生産者が販売部門を垂直的に分離していることを示す。このときの販売業者 i の販売量、総販売量、小売価格、および販売業者 i の利潤は、それぞれ

$$q_i^S = \frac{3t\{(3t-4)(a-m)-2(3t-2)w_i+3tw_j\}}{(9t-4)(3t-4)}, \quad (4)$$

$$q^S = \frac{3t(2a-2m-w_i-w_j)}{9t-4},$$

$$p^S = \frac{(3t-4)a+3t(2m+w_i+w_j)}{9t-4},$$

$$y_i^S = \frac{t(9t-8)\{(3t-4)(a-m)-2(3t-2)w_i+3tw_j\}^2}{(9t-4)^2(3t-4)^2} - F_i, \quad (5)$$

と計算される。

出荷価格の設定

このような販売業者の行動を考慮した上で、第2段階において生産者 i は、ライバル生産者 j の出荷価格 w_j を所与として、販売業者 i に非負の利潤を与えるという制約のもとで、自らの利潤 π_i を最大にするように出荷価格 w_i とフランチャイズ料 F_i を設定する。この生産者の意思決定問題は

$$\text{Max}_{w_i, F_i} \pi_i = (w_i - c)q_i^S + F_i, \quad \text{s.t. } y_i^S \geq 0,$$

と定式化される。制約条件が等号で成立することに留意し、(4) 式および (5) 式を考慮すれば、上式で表現された制約条件付き最大化問題は

$$\begin{aligned} \text{Max}_{w_i} \pi_i = & \frac{(w_i - c)3t\{(3t-4)(a-m)-2(3t-2)w_i+3tw_j\}}{(9t-4)(3t-4)} \\ & + \frac{t(9t-8)\{(3t-4)(a-m)-2(3t-2)w_i+3tw_j\}^2}{(9t-4)^2(3t-4)^2}, \end{aligned}$$

へと改められる⁸⁾。この極大化条件より、反応関数

$$w_i(w_j) = c + \frac{(27t^2 - 24t + 16)\{-(3t-4)(a-m) + 2(3t-2)c - w_j\}}{4(3t-2)(27t^2 - 60t + 16)}$$

が導かれる。この反応関数を連立して解けば、均衡における生産者 i の出荷価格は

$$w_i^S = c - \frac{(27t^2 - 24t + 16)(a - c - m)}{(15t - 4)(9t - 8)}, \quad (6)$$

となる。

このときの販売業者 i の投資水準、販売量、小売価格、販売業者 i のフランチャイズ料、生産者 i の利潤は、それぞれ

$$\begin{aligned} x_i^S &= \frac{24(3t-2)(a-c-m)}{(15t-4)(9t-8)}, \\ q_i^S &= \frac{18t(3t-2)(a-c-m)}{(15t-4)(9t-8)}, \\ p^S &= \frac{(9t-4)(3t-8)a + 36t(3t-2)(c+m)}{(15t-4)(9t-8)}, \\ F_i^S &= \frac{36t(3t-2)^2(a-c-m)^2}{(15t-4)^2(9t-8)}, \end{aligned} \quad (7)$$

$$\pi_i^S = \frac{18t(3t-2)(27t^2 - 60t + 16)(a-c-m)^2}{(15t-4)^2(9t-8)^2}, \quad (8)$$

と計算される。

ここで得られる結果をまとめると以下ようになる。

命題 1

両生産者が販売業者を分離する状況において、

- ・生産者は自らの限界生産費用を下回る出荷価格を設定している。
- ・(a が大きくなるという意味で) 逆需要関数が上方にシフトするとき、生産者は出荷価格を引き下げる。
- ・その際に小売価格は、 $t < 8/3$ では低下し、 $t > 8/3$ では上昇する。
- ・仮に費用削減投資が行われない場合の均衡解と比較すると、出荷価格および小売価格は低く設定され、生産者の利潤は小さくなっている⁹⁾。

費用削減投資が行われない成生・鈴木 (2006) のケースでも、生産者は出荷価格を限界生産費用よりも低く設定していた。それは、自身と取引する小売業者の限界販売費用を低下させることで、クールノー市場での競争を有利に導くためであった。さらに本章のように費用削減投資が行われる場合には、小売 (販売) 業者も自身の限界販売費用を低下させて次段階での競争を有利にしようと投資を行う。その結果、投資が行われないケースよりも競争はさらに激しくなる。

また、 t が小さいほど、すなわち費用削減投資が低コストで実行可能なほど、需要の増加に伴う販売量の増加を見込む販売業者は投資をより多く行い ($\partial^2 x_i^S / \partial t \partial a < 0$)、それによる限界販売費用の低下が小売価格の低下につながるようになる。この「需要の増加が小売価格の低下を招く」という結果は、成生・鈴木 (2006) のモデルに対して費用削減投資という要素を挿入したことで、新たに得られたものである¹⁰⁾。

2-3 垂直的統合と垂直的分離

この節では、一方の生産者は販売業者を垂直的に統合しているが、他方の生産者は販売業者を分離するという非対称な状況について検討し、2-1、2-2 項の結果との比較を行う。出荷価格を操作できるのは一方の生産者のみであるゆえ、当該生産者が設定する出荷価格の水準によっては、ライバルの販売量や投資水準がゼロとなる均衡解も生じ得る。

いま、分離した側が生産者 j とすれば、生産者 j は販売業者 j に対して、出荷価格 w_j およびフランチャイズ料 F_j を設定する。

販売量の決定

第4段階において生産者 i は、ライバルの販売業者 j が設定する販売量 q_j を所与として、自らの利潤 π_i を最大にするように自らの販売量 q_i を設定する。同様に販売業者 j は、ライバルの生産者 i が設定する販売量 q_i 、および生産者 j が設定する出荷価格 w_j とフランチャイズ料 F_j を所与

として、自らの利潤 y_j を最大にするように自らの販売量 q_j を設定する。このもとでの生産者 i の意思決定問題は (1) 式と同じである。他方、販売業者 j の意思決定問題は、

$$\text{Max}_{q_j} y_j = \{a - (q_i + q_j) - v_j\} q_j - tx_j^2 / 2 - F_j$$

と定式化される。ここで、 $v_j = w_j + m_j$ は販売業者 j の限界費用である。(2) 式を利用すれば、均衡における生産者 i および販売業者 j の注文量は、

$$q_i^A = (a - 2v_i + v_j) / 3 = \{a - 2(c + m_i) + (w_j + m_j)\} / 3,$$

$$q_j^A = (a - 2v_j + v_i) / 3 = \{a - 2(w_j + m_j) + (c + m_i)\} / 3,$$

で与えられる。ここで上付 A は、非対称の状況を示している。ただしこれが複占均衡であるためには、 $q_i^A > 0$ and $q_j^A > 0$ でなければならない。ゆえに複占均衡が実現するための条件は

$$-a + 2(c + m_i) - m_j < w_j < (a + c - 2m_j + m_i) / 2 \quad (9)$$

であり、このときの総販売量、小売価格、および生産者 i 、小売業者 j の利潤は、それぞれ

$$q^A = (2a - v_i - v_j) / 3 = \{2a - (c + m_i) - (w_j + m_j)\} / 3,$$

$$p^A = (a + v_i + v_j) / 3 = \{a + (c + m_i) + (w_j + m_j)\} / 3,$$

$$\begin{aligned} \pi_i^A &= (a - 2v_i + v_j)^2 / 9 - tx_i^2 / 2 \\ &= \{a - 2(c + m_i) + (w_j + m_j)\}^2 / 9 - tx_i^2 / 2, \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} y_j^A &= (a - 2v_j + v_i)^2 / 9 - tx_j^2 / 2 - F_j \\ &= \{a - 2(w_j + m_j) + (c + m_i)\}^2 / 9 - tx_j^2 / 2 - F_j, \end{aligned}$$

と計算される。

逆に (9) 式が成立せず $w_j < -a + 2(c + m_i) - m_j$ となる場合には、市場は販売業者 j の独占となり、そのときの彼の販売量は、利潤最大化条件より

$$q_j^A = (a - v_j) / 2 = \{a - (w_j + m_j)\} / 2,$$

で与えられる。このときの総販売量、小売価格、および生産者 i 、小売業者 j の利潤は、それぞれ

$$q^A = \{a - (w_j + m_j)\} / 2,$$

$$p^A = \{a + (w_j + m_j)\} / 2,$$

$$\pi_i^A = 0,$$

$$y_j^A = \{a - (w_j + m_j)\}^2 / 4 - tx_j^2 / 2 - F_j,$$

と計算される。

投資水準の決定

第3段階において生産者 i は、ライバルの販売業者 j が設定する投資水準 x_j を所与として、自らの利潤 π_i を最大にするように自らの投資水準 x_i を設定する。他方販売業者 j は、生産者 j が設定する出荷価格 w_j とフランチャイズ

料 F_j 、さらにはライバルの生産者 i が設定する投資水準 x_i を所与として、自らの利潤 y_j を最大にするように自らの投資水準 x_j を設定する。まず (9) 式より、

$$-a + 2(c + m_i) - m_j < w_j < (a + c - 2m_j + m_i) / 2$$

$$\Leftrightarrow -a + 2c + m - 2x_i + x_j < w_j < (a + c - m + 2x_j - x_i) / 2$$

$$\Leftrightarrow (-a - c + m + x_i + 2w_j) / 2 < x_j < a - 2c - m + 2x_i + w_j$$

の場合には複占となることから、このもとでの生産者 i と販売業者 j の意思決定問題は、

$$\text{Max}_{x_i} \pi_i^A = \{a - 2(c + m - x_i) + (w_j + m - x_j)\}^2 / 9 - tx_i^2 / 2, \quad (10)$$

$$\text{Max}_{x_j} y_j^A = \{a - 2(w_j + m - x_j) + (c + m - x_i)\}^2 / 9 - tx_j^2 / 2 - F_j, \quad (11)$$

と定式化される¹¹⁾。まず生産者 i については、(10) 式より反応関数

$$x_i(x_j) = 4(a - 2c - m + w_j - x_j) / (9t - 8), \quad (12)$$

が導かれる。

次に販売業者 j については、

$$w_j \leq -a + 2(c + m_i) - m_j \Leftrightarrow w_j \leq -a + 2c + m - 2x_i + x_j$$

$$\Leftrightarrow x_j \geq a - 2c - m + 2x_i + w_j$$

の場合には販売業者 j による独占となることから、このもとでの販売業者 j の意思決定問題は、

$$\begin{aligned} \text{Max}_{x_j} y_j^A &= \{a - (w_j + m_j)\}^2 / 4 - tx_j^2 / 2 - F_j \\ &= \{a - (w_j + m - x_j)\}^2 / 4 - tx_j^2 / 2 - F_j, \end{aligned} \quad (13)$$

と定式化される¹²⁾。(11) 式と (13) 式より、販売業者 j の反応関数は

$$x_i(x_j) = (a - m - w_j) / (2t - 1), \quad (14)$$

$$\text{if } 0 < x_i < \max\{0, c - [(t-1)(a-m) + tw_j] / (2t-1)\},$$

$$x_j(x_i) = a - 2c - m + w_j + 2x_i, \quad (15)$$

$$\text{if } \max\{0, c - [(t-1)(a-m) + tw_j] / (2t-1)\} < x_i$$

$$< \max\{0, c - [(3t-4)(a-m) + 3tw_j] / 2(3t-2)\},$$

$$x_j(x_i) = 4(a + c - m - 2w_j - x_i) / (9t - 8), \quad (16)$$

$$\text{if } \max\{0, c - [(3t-4)(a-m) + 3tw_j] / 2(3t-2)\} < x_i,$$

のように導かれる。

(12) 式および (14)、(15)、(16) 式より、均衡における生産者 i および販売業者 j の投資水準は、 w_j の水準に応じて以下の3通りの形で与えられる¹³⁾。

$$\textcircled{1} \text{ if } 0 < w_j < c - (t-1)(a-c-m) / t,$$

$$x_i^A = 0,$$

$$x_j^A = (a - m - w_j) / (2t - 1),$$

$$\textcircled{2} \text{ if } c-(t-1)(a-c-m)/t < w_j < c-(3t-4)(a-c-m)/3t,$$

$$x_i^A = 0,$$

$$x_j^A = a-2c-m+w_j,$$

$$\textcircled{3} \text{ if } c-(3t-4)(a-c-m)/3t < w_j < c-(3t-4)(a-c-m)/2(3t-2),$$

$$x_i^A = 4(a-c-m)/(9t-4)+12t(w_j-c)/(9t-4)(3t-4),$$

$$x_j^A = 4(a-c-m)/(9t-4)-8(3t-2)(w_j-c)/(9t-4)(3t-4),$$

まず① $0 < w_j < c-(t-1)(a-c-m)/t$ の場合の販売量、小売価格および生産者 i 、販売業者 j の利潤は、それぞれ

$$q_i^A = 0,$$

$$q_j^A = t(a-m-w_j)/(2t-1)$$

$$p^A = \{(t-1)a+t(m+w_j)\}/(2t-1)$$

$$\pi_i^A = 0,$$

$$y_j^A = t(a-m-w_j)^2/2(2t-1)-F_j^A,$$

と計算される。

次に② $c-(t-1)(a-c-m)/t < w_j < c-(3t-4)(a-c-m)/3t$ の場合の販売量、小売価格および生産者 i 、販売業者 j の利潤は、それぞれ

$$q_i^A = 0,$$

$$q_j^A = a-c-m,$$

$$p^A = c+m,$$

$$\pi_i^A = 0,$$

$$y_j^A = (a-c-m)^2 - \frac{t(a-2c-m+w_j)^2}{2} - F_j^A,$$

と計算される。

最後に③ $c-(3t-4)(a-c-m)/3t < w_j < c-(3t-4)(a-c-m)/2(3t-2)$ の場合の販売量、総販売量、小売価格および生産者 i 、販売業者 j の利潤は、それぞれ

$$q_i^A = \frac{3t\{(3t-4)(a-m)-2(3t-2)c+3tw_j\}}{(9t-4)(3t-4)},$$

$$q_j^A = \frac{3t\{(3t-4)(a-m)-2(3t-2)w_j+3tc\}}{(9t-4)(3t-4)},$$

$$q^A = \frac{3t(2a-2m-c-w_j)}{(9t-4)},$$

$$p^A = \frac{(3t-4)a+3t(2m+c+w_j)}{(9t-4)},$$

$$\pi_i^A = \frac{t(9t-8)\{(3t-4)(a-m)-2(3t-2)c+3tw_j\}^2}{(9t-4)^2(3t-4)^2},$$

$$y_j^A = \frac{t(9t-8)\{(3t-4)(a-m)-2(3t-2)w_j+3tc\}^2}{(9t-4)^2(3t-4)^2} - F_j^A,$$

と計算される。

出荷価格の設定

このような販売業者 j の行動を考慮した上で、第2段階において生産者 j は、販売業者 i に非負の利潤を与えるという制約のもとで、自らの利潤 π_j を最大にするように出荷価格 w_j とフランチャイズ料 F_j を設定する。この生産者の意思決定問題は

$$\text{Max}_{w_j, F_j} \pi_j = (w_j - c)q_j^A + F_j, \quad \text{s.t. } y_j \geq 0, \quad (17)$$

と定式化され、また制約条件は等号で成立する。

均衡解は t の大きさに応じて2通りの形が生じる¹⁴⁾。それぞれの場合における出荷価格、生産者 i および販売業者 j の投資水準、販売量、販売費用、小売価格、販売業者 j のフランチャイズ料、各生産者の利潤は、以下の通りである。

$2(5+\sqrt{13})/9 < t < 2(3+\sqrt{5})/3$ のとき

$$w_j^A = c - (t-1)(a-c-m)/t, \quad (18)$$

$$x_i^A = 0, \quad (19)$$

$$x_j^A = (a-c-m)/t, \quad (20)$$

$$q_i^A = 0,$$

$$q_j^A = a-c-m,$$

$$q^A = a-c-m,$$

$$p^A = c+m,$$

$$F_j^A = (a-c-m)^2(2t-1)/2t,$$

$$\pi_i^A = 0, \quad (21)$$

$$\pi_j^A = (a-c-m)^2/2t, \quad (22)$$

$t \geq 2(3+\sqrt{5})/3$ のとき

$$w_j^A = c - \frac{(3t-4)(27t^2-24t+16)(a-c-m)}{4(3t-2)(27t^2-60t+16)} \quad (23)$$

$$x_i^A = \frac{(3t-8)(9t-4)(a-c-m)}{(3t-2)(27t^2-60t+16)} \quad (24)$$

$$x_j^A = \frac{6(3t-4)(a-c-m)}{(27t^2-60t+16)} \quad (25)$$

$$q_i^A = \frac{3t(3t-8)(9t-4)(a-c-m)}{4(3t-2)(27t^2-60t+16)}$$

$$q_j^A = \frac{9t(3t-4)(a-c-m)}{2(27t^2-60t+16)}$$

$$q^A = \frac{3t(81t^2-192t+80)(a-c-m)}{4(3t-2)(27t^2-60t+16)}$$

$$p^A = a - \frac{3t(81t^2-192t+80)(a-c-m)}{4(3t-2)(27t^2-60t+16)}$$

$$F_j^A = \frac{9t(9t-8)(3t-4)^2(a-c-m)^2}{4(27t^2-60t+16)^2}$$

$$\pi_i^A = \frac{t(3t-8)^2(9t-4)^2(9t-8)(a-c-m)^2}{16(3t-2)^2(27t^2-60t+16)^2} \quad (26)$$

$$\pi_j^A = \frac{9t(3t-4)^2(a-c-m)^2}{8(3t-2)(27t^2-60t+16)} \quad (27)$$

ここで留意すべきことは、(18) 式および (23) 式から明らかなように、生産者 j は常に自らの限界費用を下回る出荷価格を設定していることである。つまり販売業者 j の限界調達費用は生産者 i のそれよりも低いため、彼は多くの注文を行い、販売量が多くなる。これにより販売業者 j の費用削減投資への誘因は増大する。実際、(19) 式と (20) 式、および (24) 式と (25) 式を比較すると、いずれにおいても $x_i^A < x_j^A$ が成り立っており、販売業者 j の投資水準は生産者 i のそれよりも多くなるのである。また、特に $t > 2(3+\sqrt{5})/3$ のケースでは、 t の値が比較的小さい場合¹⁵⁾ に限り

$$\partial x_i^A / \partial t > 0$$

が成り立つ。つまり、 t が上昇すると生産者 i の投資水準 x_i^A も増加する。一見逆説的に見えるこの結果は、次のように説明される。 t が上昇するとき、販売業者 j は投資水準 x_j^A を減らす。このことはチャンネル j の販売量の減少を導き、それと戦略的代替関係にあるチャンネル i の販売量の増加をもたらす。その結果、費用削減投資が割に合うようになり、生産者 i は投資を増やすのである。この間接効果が t の上昇による投資の減少という直接効果を上回るため、投資水準 x_i^A が増えるのである。さらに、

$$\frac{\partial \pi_j^A}{\partial t} < 0 \quad \text{and} \quad \frac{\partial \pi_i^A}{\partial t} = 0, \quad \text{if} \quad \frac{2(5+\sqrt{13})}{9} \leq t < \frac{2(3+\sqrt{5})}{3}$$

$$\frac{\partial \pi_j^A}{\partial t} < 0 \quad \text{and} \quad \frac{\partial \pi_i^A}{\partial t} > 0, \quad \text{if} \quad t \geq \frac{2(3+\sqrt{5})}{3}$$

であるから、生産者 j の利潤は t の減少関数であるのに対して、 $t \geq 2(3+\sqrt{5})/3$ (つまり複占の領域) において、生産者 i の利潤は t の増加関数となっている。 t が上昇するに従い、生産者 j のみが出荷価格という戦略を持っていることのメリットは薄れていき、この戦略的相互依存関係の効果が生産者 i に及ぶのである。

また、(a が大きくなるという意味で) 逆需要関数が上方にシフトするとき、生産者 j は出荷価格を引き下げる。その際に小売価格は、 $2(5+\sqrt{13})/9 \leq t < 2(3+\sqrt{5})/3$ では一定であるが、 $t \geq 2(3+\sqrt{5})/3$ では上昇する。

3. 統合か分離か

この節では、第 1 段階における生産者の統合か分離かの意思決定について検討する。両生産者がともに統合を選択した場合、ともに分離を選択した場合、非対称な場合の生産者の利潤は、これまでの計算結果より (3)、(8)、(21)、(22)、(26)、(27)、の各式で表されている。したがって、第 1 段階におけるゲームの利得表は表 1 で与えられる。

このとき、任意の t ($> 2(5+\sqrt{13})/9$) のもとで

$$\pi_j^A > \pi^I \quad \text{and} \quad \pi^S > \pi_i^A$$

が成立する¹⁶⁾。それゆえ、このゲームの均衡では両生産者がともに分離を選択することになる。ゆえに次の命題が成立する。

命題 2

線形需要関数のもとでの対称的複占モデルでは、生産者が小売業者を統合するか、またはフランチャイズ料を徴収しつつ分離するかを選択するゲームにおいては、各生産者にとって小売業者を分離することが支配戦略であり、生産者が小売業者を分離している状態が唯一の均衡となる。

表 1：生産者の利潤

① $2(5+\sqrt{13})/9 < t < 2(3+\sqrt{5})/3$ のとき

	統 合	分 離
統合	$\frac{t(9t-8)}{(9t-4)^2}$	0
分離	$\frac{1}{2t}$	$\frac{18t(3t-2)(27t^2-60t+16)}{(15t-4)^2(9t-8)^2}$

② $2(3+\sqrt{5})/3 \leq t$ のとき

	統 合	分 離
統合	$\frac{t(9t-8)}{(9t-4)^2}$	$\frac{t(3t-8)^2(9t-4)^2(9t-8)}{16(3t-2)^2(27t^2-60t+16)^2}$
分離	$\frac{9t(3t-4)^2}{8(3t-2)(27t^2-60t+16)}$	$\frac{18t(3t-2)(27t^2-60t+16)}{(15t-4)^2(9t-8)^2}$

表の数値に $(a-c-m)^2$ を乗じたものが生産者の利潤である。

また各欄の数値は左側の生産者の利得を表しており、表中の左上、右上、左下、右下の各欄の数値は、それぞれ π^A 、 π_i^A 、 π_j^A 、 π^S に相当する。

また、 $\pi^I > \pi^S$

であるから、この均衡では囚人のジレンマが生じている。

なぜ、各生産者は垂直的分離を選択するのか？このことは次のように説明される。生産者は、販売業者を分離することによって、出荷価格というチャンネル運営手段を手に入れることができる。この状況で、(販売業者に生じた利潤をすべて回収できる) 生産者は、出荷価格を限界生産費用以下に設定することによって、(数量競争を行う) 販売業者から多くの注文を引き出し、多くの利潤を得ることができる。それゆえ、両生産者は分離を選択するのである。このことは、費用削減投資がなくても成立する。実際、投資が行われない状況での生産者の利潤を比較すれば

$$\pi_j^A = (a-c-m)^2/8 > (a-c-m)^2/9 = \pi^I$$

$$\pi^S = 2(a-c-m)^2/25 > (a-c-m)^2/16 = \pi_i^A$$

が成立している。その意味で、チャンネル間競争が激しくなるにもかかわらず、生産者が分離を選択するのは、販売業者間で数量競争が行われていることに依存している。

次に、分離の効果について考えてみよう。両生産者が販売部門を統合している状況での均衡と分離している状況での均衡を比べれば、

$$x^S - x^I = \frac{4(27t^2-24t+16)(a-c-m)}{(9t-8)(9t-4)(15t-4)} > 0$$

$$p^S - p^I = -\frac{6t(27t^2 - 24t + 16)(a - c - m)}{(9t - 8)(9t - 4)(15t - 4)} < 0$$

$$q^S - q^I = \frac{6t(27t^2 - 24t + 16)(a - c - m)}{(9t - 8)(9t - 4)(15t - 4)} > 0$$

を得る。すなわち、分離によって出荷価格が引き下げられるため、販売量が多くなり、費用削減投資も多くなる。その結果、限界販売費用が低下し、それを反映して出荷価格が一層低下するため、小売価格も低くなり、利潤も減少するのである。一方、生産費用が低下するのみならず、小売価格が下がって生産量が増えるため、消費者厚生や経済厚生は向上することになる。

4 結び

本稿では、生産者による費用削減投資を考慮しつつ、チャンネル間での競争について検討した。主要な結論は、チャンネル間競争が激しくなって利潤が減少するにもかかわらず、各生産者は垂直的分離を選択し、販売業者は費用削減のための投資を行うということである。このことは、次のように説明される。生産者は販売業者を分離することによって、出荷価格というチャンネルの運営手段を手に入れることができる。この状況で、(チャンネルの利潤を最大にする)生産者は、出荷価格を限界生産費用以下に設定し、販売業者から多くの注文を引き出すことができる。そして、このような販売量の増加が費用削減投資を増やすのである。これにより限界販売費用が低下すれば、生産者は出荷価格を一層引き下げる。その結果、販売業者の注文量が増加し、出荷価格のみならず小売価格も低下し得る。このことによって、生産者の利潤は減少するが、消費者厚生および経済厚生は増加するのである。

最後に、本稿で扱ってきた価格—数量競争についての概要を述べて全体の結びとする。「価格—数量競争」を扱っている先行研究は比較的少ないが、厳密に「価格—数量競争」とは言えないまでも、メカニズム上同義のものは以前から存在する。例えば、Fershtman and Judd (1987) や Sklivas (1987) である。生産者が設定する出荷価格を、販売業者は自身にとっての限界費用と認識する。つまり生産者による出荷価格の設定は、販売業者のコスト意識の操作を通じたインセンティブ契約の提示に相当する。出荷価格をゼロに設定することは、販売業者を売上高最大化の方に仕向けることに相当し、他方出荷価格を本来の限界生産費用水準に設定することは、販売業者を利潤最大化の方に仕向けることに相当する。Fershtman and Judd (1987) や Sklivas (1987) は、オーナーがマネージャーに対してインセンティブ契約を提示するケースでの複占モデルを扱っているが、それは生産者が販売業者に対して出荷価格を設定してフランチャイズ料を徴収するという、本稿で扱ってきたものと同種のメカニズムであるといえる。したがって、マネージャーが価格競争を行う場合には「価格—価格競争」の場合と同様の結論が導かれて、数量競争を行う場合には「価格—数量競争」の場合と同様の結論が導かれている。Park (2002) はこれらを拡張して、オーナーに対して出荷価格を設定する独占の上流企業が存在するというケースを扱っている。オーナーがマネージャーを

売上高最大化に向かわせる(限界費用を実際よりも低く認識させる)ことは、クールノー市場において自身のマネージャーを相対的に強くできる一方で、上流企業による出荷価格の引き上げを招く。したがって、このような上流企業の存在は、競争緩和につながることになる。

Saggi and Vettas (2002) や成生・鈴木 (2006) および本稿のように、複占チャンネルの設定の下で価格—数量競争を分析しているものとしては、Wang and Wang (2008) がある。そこでは本稿で言うところの「フランチャイズ料を徴収する垂直的分離」と「垂直的統合」という非対称な構造の複占チャンネルを想定し、その下での出荷価格の戦略的効果について分析を行っている。ブランド内競争よりもブランド間競争が相対的に激しいほど、また財の差別化の程度が小さいほど、出荷価格は低く設定される。注目すべきは、"marginal cost dumping"、つまり出荷価格が限界費用を下回って設定される状況が生じるための条件が導出されていることである。

生産者数を一般化して分析を行っているものとしては、長谷川・成生 (2006) がある。Saggi and Vettas (2002) が複占的生产者を想定し小売業者数を内生化していたことに対して、長谷川・成生 (2006) は生産者数と小売業者数とともに内生的に扱い、均衡における生産者数を導出している。小売業者数については Saggi and Vettas (2002) の場合と同様に、各生産者にとっては小売業者数を 1 に設定することが支配戦略となる。

本稿のようにある段階での費用削減投資の効果を分析したものとしては、まず成生・梅竹 (2007) がある。生産者と小売業者からなる 2 段階のチャンネルにおいて、本稿では小売業者が販売費用削減投資を行うというケースを扱っているのに対して、成生・梅竹 (2007) は生産者が生産費用削減投資を行うというケースを扱っている。もうひとつは、成生・李・菊谷 (2008) がある。この論文では、部品の生産に先立って行われる生産費用削減努力を考慮した上で、日米の自動車産業を例に、部品を系列調達(垂直的分離)する企業と内部調達(垂直的統合)する企業とが同一のマーケットで競争した場合の比較優位性を検討している。また垂直的統合の向きは、組み立てメーカーから部品生産部門に向けて行う後方的統合であり、本稿が扱っている前方的統合のケースとは異なっている。部品部門の分離は、費用削減投資を間接的にしかコントロールできなくなるという点ではマイナスである。しかし系列調達企業は、部品部門を分離することによって、部品調達価格と固定的トランスファーという 2 つの戦略変数を手に入れることができる。ここで部品調達価格を低く設定すれば、製品の販売競争で優位に立てるため、費用削減投資の効果は大きくなる。これにより上記のマイナス面をカバーできる。このようなチャンネル間競争の観点から、日米企業のパフォーマンスの違いを説明している。

このように価格—数量競争に関する分析は発展を遂げており、本稿の研究もその一端を担ったものであると考える。

補論 1. 費用削減投資が行われない場合との比較

投資が行われない場合の出荷価格、小売価格、生産者の利潤は、(6)、(7)、(8)の各式において $t \rightarrow \infty$ とするこ

とにより

$$w_i^S = c - (a - c - m) / 5, \quad (28)$$

$$p^S = \{a + 4(c + m)\} / 5, \quad (29)$$

$$\pi_i^S = 2(a - c - m)^2 / 25, \quad (30)$$

と求められる。 $2(5 + \sqrt{13})/9 < t$ のもとで、(6) 式と (28) 式、(7) 式と (29) 式、(8) 式と (30) 式の大小をそれぞれ比較すると

$$\begin{aligned} & c - \frac{(27t^2 - 24t + 16)(a - c - m)}{(9t - 8)(15t - 4)} - \left(c - \frac{a - c - m}{5} \right) \\ &= -m - \frac{12(3t + 4)(a - c - m)}{5(9t - 8)(15t - 4)} < 0, \\ & \frac{(9t - 4)(3t - 8)a + 36t(3t - 2)(c + m)}{(15t - 4)(9t - 8)} - \frac{a + 4(c + m)}{5} \\ &= -\frac{8(33t - 16)(a - c - m)}{5(9t - 8)(15t - 4)} < 0, \\ & \frac{18t(3t - 2)(27t^2 - 60t + 16)(a - c - m)^2}{(15t - 4)^2(9t - 8)^2} - \frac{2(a - c - m)^2}{25} \\ &= -\frac{4[3t\{3t(585t - 268) - 464\} + 512](a - c - m)^2}{25(9t - 8)^2(15t - 4)^2} \\ &< 0, \end{aligned}$$

となる。すなわち出荷価格、小売価格、生産者の利潤のいずれの値も、費用削減投資が行われる場合の方が小さくなる。

補論2. 非対称のケースにおける均衡出荷価格の導出

生産者 j にとっての利潤関数は、自身が設定する出荷価格 w_j の領域により3通りの形が生じ得る。以下ではこれらの分析を行い、均衡出荷価格を導出する。

まず① $0 < w_j < c - (t-1)(a-c-m)/t$ のケースでは、(17) 式で表現された制約条件付き最大化問題は、

$$\begin{aligned} \text{Max}_{w_j} \pi_j &= (w_j - c)t(a - m - w_j)/(2t - 1) + t(a - m - w_j)^2/2(2t - 1) \\ &= t(a - m - w_j)(a - 2c - m + w_j)/2(2t - 1), \end{aligned}$$

へと改められる。この極大化条件を満たす w_j の値は

$$w_j^A = c,$$

であるが、 $c > c - (t-1)(a-c-m)/t$ より①の範囲での最適解は端点解 $w_j^A = c - (t-1)(a-c-m)/t$ となる。

次に② $c - (t-1)(a-c-m)/t < w_j < c - (3t-4)(a-c-m)/3t$ のケースでは、(17) 式で表現された制約条件付き最大化問題は、

$$\text{Max}_{w_j} \pi_j = (w_j - c)(a - c - m) + \{4(a - c - m)^2 - 2t(a - 2c - m + w_j)^2\}/4,$$

へと改められる。この極大化条件を満たす w_j の値は

$$w_j^A = c - (t-1)(a - c - m)/t$$

である。

以上より①、②をまとめると、 $0 < w_j < c - (3t-4)(a-c-m)/3t$ のときの出荷価格、生産者 i および販売業者 j の投資水準、販売量、販売費用、小売価格、販売業者 j のフランチャイズ料、各生産者の利潤は、それぞれ

$$w_j^A = c - (t-1)(a - c - m)/t, \quad (31)$$

$$x_i^A = 0, \quad x_j^A = (a - c - m)/t,$$

$$q_i^A = 0, \quad q_j^A = a - c - m, \quad q = a - c - m,$$

$$p^A = c + m,$$

$$F_j^A = (a - c - m)^2(2t - 1)/2t,$$

$$\pi_i^A = 0,$$

$$\pi_j^A = (a - c - m)^2/2t, \quad (32)$$

と計算される。

次に③ $c - (3t-4)(a-c-m)/3t < w_j < c + (3t-4)(a-c-m)/2(3t-2)$ のケースでは、(17) 式で表現された制約条件付き最大化問題は、

$$\begin{aligned} \text{Max}_{w_j} \pi_j &= \frac{(w_j - c)3t\{(3t - 4)(a - m) - 2(3t - 2)w_j + 3tc\}}{(9t - 4)(3t - 4)} \\ &+ \frac{t(9t - 8)\{(3t - 4)(a - m) - 2(3t - 2)w_j + 3tc\}^2}{(9t - 4)^2(3t - 4)^2} \end{aligned}$$

へと改められる¹⁷⁾。この極大化条件を満たす w_j の値は

$$w_j^A = c - \frac{(3t - 4)(27t^2 - 24t + 16)(a - c - m)}{4(3t - 2)(27t^2 - 60t + 16)},$$

であるが、これが内点解となるのは

$$\begin{aligned} & c - \frac{(3t - 4)(a - c - m)}{3t} \\ & \leq c - \frac{(3t - 4)(27t^2 - 24t + 16)(a - c - m)}{4(3t - 2)(27t^2 - 60t + 16)} \\ & \leq c + \frac{(3t - 4)(a - c - m)}{2(3t - 2)} \quad \Leftrightarrow \quad t \geq 8/3, \end{aligned}$$

の場合であるから、設定される w_j の値は

$$w_j^A = c - \frac{(3t - 4)(a - c - m)}{3t}, \quad \text{if } \frac{2(5 + \sqrt{13})}{9} \leq t < \frac{8}{3},$$

$$w_j^A = c - \frac{(3t - 4)(27t^2 - 24t + 16)(a - c - m)}{4(3t - 2)(27t^2 - 60t + 16)}, \quad \text{if } t \geq \frac{8}{3},$$

となる。

以上より③の範囲では、 $2(5 + \sqrt{13})/9 \leq t < 8/3$ の場合と $t \geq 8/3$ の場合ごとに、均衡における出荷価格、生産者 i および販売業者 j の投資水準、販売量、小売価格、販売業者 j のフランチャイズ料、各生産者の利潤は、それぞれ以下の通りとなる。

$2(5 + \sqrt{13})/9 \leq t < 8/3$ の場合

$$w_j^A = c - (3t - 4)(a - c - m)/3t, \quad (33)$$

$$\begin{aligned}x_i^A &= 0, & x_j^A &= 4(a-c-m)/3t, \\q_i^A &= 0, & q_j^A &= a-c-m, & q &= a-c-m, \\p^A &= c+m, \\F_j^A &= (9t-8)(a-c-m)^2/9t, \\\pi_i^A &= 0, \\\pi_j^A &= 4(a-c-m)^2/9t,\end{aligned}\quad (34)$$

$t \geq 8/3$ の場合

$$\begin{aligned}w_j^A &= c - \frac{(3t-4)(27t^2-24t+16)(a-c-m)}{4(3t-2)(27t^2-60t+16)}, \\x_i^A &= \frac{(3t-8)(9t-4)(a-c-m)}{(3t-2)(27t^2-60t+16)}, \\x_j^A &= \frac{6(3t-4)(a-c-m)}{27t^2-60t+16}, \\q_i^A &= \frac{3t(3t-8)(9t-4)(a-c-m)}{4(3t-2)(27t^2-60t+16)}, \\q_j^A &= \frac{9t(3t-4)(a-c-m)}{2(27t^2-60t+16)}, \\q^A &= \frac{3t(81t^2-192t+80)(a-c-m)}{4(3t-2)(27t^2-60t+16)}, \\p^A &= a - \frac{3t(81t^2-192t+80)(a-c-m)}{4(3t-2)(27t^2-60t+16)}, \\F_j^A &= \frac{9t(9t-8)(3t-4)^2(a-c-m)^2}{4(27t^2-60t+16)^2}, \\\pi_i^A &= \frac{t(3t-8)^2(9t-4)^2(9t-8)(a-c-m)^2}{16(3t-2)^2(27t^2-60t+16)^2}, \\\pi_j^A &= \frac{9t(3t-4)^2(a-c-m)^2}{8(3t-2)(27t^2-60t+16)},\end{aligned}\quad (35)$$

以上の結果より、均衡において生産者 j が設定する出荷価格 w_j^A を求める。 $2(5+\sqrt{13})/9 \leq t < 8/3$ の範囲では、(31) 式と (33) 式のうち、値の大きい π_j^A を実現する方の出荷価格が設定される。(32) 式と (34) 式を比較すると

$$\frac{(a-c-m)^2}{2t} > \frac{4(a-c-m)^2}{9t}, \quad \text{if } \frac{2(5+\sqrt{13})}{9} < t < \frac{8}{3},$$

が成り立つので、(31) 式の $w_j^A = c-(t-1)(a-c-m)/t$ が均衡出荷価格となる。

$8/3 \leq t$ の範囲では、(31) 式と (35) 式のうち、値の大きい π_j^A を実現する方の出荷価格が設定される。(32) 式と (36) 式を比較すると

$$\begin{aligned}\frac{(a-c-m)^2}{2t} &> \frac{9t(3t-4)^2(a-c-m)^2}{8(3t-2)(27t^2-60t+16)}, \\ \text{if } \frac{8}{3} < t &< \frac{2(3+\sqrt{5})}{3}, \\ \frac{(a-c-m)^2}{2t} &< \frac{9t(3t-4)^2(a-c-m)^2}{8(3t-2)(27t^2-60t+16)},\end{aligned}$$

$$\text{if } t > \frac{2(3+\sqrt{5})}{3},$$

が成り立つので、 $8/3 \leq t$ における均衡出荷価格は

$$\begin{aligned}w_j^A &= c - \frac{(t-1)(a-c-m)}{t}, \\ \text{if } \frac{8}{3} \leq t &< \frac{2(3+\sqrt{5})}{3}, \\ w_j^A &= c - \frac{(3t-4)(27t^2-24t+16)(a-c-m)}{4(3t-2)(27t^2-60t+16)}, \\ \text{if } t \geq \frac{2(3+\sqrt{5})}{3},\end{aligned}$$

となる。

以上より、 $2(5+\sqrt{13})/9 < t < 8/3$ における均衡出荷価格は

$$\begin{aligned}w_j^A &= c - \frac{(t-1)(a-c-m)}{t}, \\ \text{if } \frac{2(5+\sqrt{13})}{9} < t &< \frac{2(3+\sqrt{5})}{3}, \\ w_j^A &= c - \frac{(3t-4)(27t^2-24t+16)(a-c-m)}{4(3t-2)(27t^2-60t+16)}, \\ \text{if } t \geq \frac{2(3+\sqrt{5})}{3},\end{aligned}$$

となる。

補論3. 「分離」が支配戦略であることの導出

① $2(5+\sqrt{13})/9 < t < 2(3+\sqrt{5})/3$ のとき

表1の①より、相手の「統合」に対して自分が「分離」を選ぶ場合と「統合」を選ぶ場合の利潤の差は、

$$\frac{\pi_j^A - \pi_j^I}{(a-c-m)^2} = \frac{1}{2t} - \frac{t(9t-8)}{(9t-4)^2} = \frac{t(9t-8)(9-2t)+16}{2t(9t-4)^2} > 0,$$

と計算される。したがって、「統合」に対する最適戦略は「分離」である。

また、相手の「分離」に対して自分が「統合」を選べば、市場は相手の独占状態となり自分の利潤はゼロとなる。したがって、「分離」に対する最適戦略が「分離」であることは明らかである。

以上より、 $2(5+\sqrt{13})/9 < t < 2(3+\sqrt{5})/3$ の範囲で「分離」は支配戦略である。

② $2(3+\sqrt{5})/3 \leq t$ のとき

表1の②より、相手の「統合」に対して自分が「分離」を選ぶ場合と「統合」を選ぶ場合の利潤の差は、

$$\begin{aligned}\frac{\pi_j^A - \pi_j^I}{(a-c-m)^2} &= \frac{9t(3t-4)^2}{8(3t-2)(27t^2-60t+16)} - \frac{t(9t-8)}{(9t-4)^2} \\ &= \frac{t(27t^2-24t+16)}{8(3t-2)(9t-4)^2(27t^2-60t+16)} > 0\end{aligned}$$

と計算される。したがって、「統合」に対する最適戦略は「分離」である。

また、相手の「分離」に対して自分が「分離」を選ぶ場合と「統合」を選ぶ場合の利潤の比は、

$$\frac{\pi_i^S}{\pi_i^A} = \frac{18t(3t-2)(27t^2-60t+16)/(15t-4)^2(9t-8)^2}{t(3t-8)^2(9t-4)^2(9t-8)/16(3t-2)^2(27t^2-60t+16)^2}$$

$$= \frac{288t(3t-2)^3(27t^2-60t+16)^3}{(3t-8)^2(9t-4)^2(9t-8)^3(15t-4)^2},$$

と計算される。ここで

$$\frac{d}{dt} \left(\frac{\pi_i^S}{\pi_i^A} \right) = - \frac{1728(3t-2)^2(27t^2-60t+16)^2(27t^2-24t+16)}{(3t-8)^3(9t-4)^3(9t-8)^4(15t-4)^3}$$

$$\times [(153t-40)3t-80]3t+128 < 0,$$

$$\lim_{t \rightarrow \infty} \left(\frac{\pi_i^S}{\pi_i^A} \right) = \frac{32}{25} > 1,$$

より、 π_i^S / π_i^A は t の減少関数であり、また $t \rightarrow \infty$ に伴い $32/25 (> 1)$ に収束する。ゆえに $\pi_i^S > \pi_i^A$ が成り立ち、「分離」に対する最適戦略は「分離」となる。

以上より、 $2(3+\sqrt{5})/3 < t$ の範囲で「分離」は支配戦略である。

以上の①と②の結果より、 $2(5+\sqrt{13})/9 < t$ の範囲では常に「分離」が支配戦略である。

注

- 空間的競争モデルの中で垂直的統合を論じたものとしては、Gupta, Heywood, and Pal (1995) がある。
- Alles and Datar (1998) は、線分市場モデルの中で同様の結論を導いている。また Arya and Mittendorf (2006) は、単一チャンネルの場合でも二重マージンがチャンネルにメリットをもたらすことを、耐久財モデルを用いて論じている。
- Zhao (2000) は、一方が分離を選んでいの際に、他方が「統合」「生産のみ」「販売のみ」の3つの形態を採り得るとして、非対称な形の複占モデルを扱っている。
- このような現象を扱っている先行研究として、Chevalier, Kashyap, and Rossi (2003)、MacDonald (2000)、Warner and Barsky (1995) などがある。
- 1つ目の不等式は本稿 2-3 項での利潤関数の二階条件に相当する。また2つ目の不等式の右側部分は、同じく 2-3 項での出荷価格の非負条件と、販売費用の非負条件に相当する。
- $t > 8/9$ であれば二階条件は満たされる。
- $t > 8/9$ であれば二階条件は満たされる。
- $t > 2(5+\sqrt{13})/9$ であれば二階条件は満たされる。
- 費用削減投資が行われない場合との比較については、補論1を参照のこと。
- 販売業者の限界費用を低下させるという面では、移転価格の低下（生産者による限界生産費用以下の出荷価格の設定）と、現実の費用の低下（販売業者自身による費用削減投資）は、同じような効果を持つように見える。しかし、仮に本稿のケースにおける費用削減投資の段階が、移転価格設定段階の追加に置き換えられると、それにより競争は激しくなるものの、「需要の増加が小売価格の低下を招く」という結果は得られない。
- $t > 8/9$ であれば二階条件はいずれも満たされる。
- $t > 1/2$ であれば二階条件は満たされる。
- 販売業者 j の反応関数は3つの部分から構成されており、生産者 i の反応関数との交点の位置がそれらのうちのどの部分となるかに応じて、「独占」、「準独占（制約ありの独占）」、「複占」のいずれかの状態が生じる。
- 導出過程は補論2を参照のこと。
- $2(3+\sqrt{5})/3 < t < \text{約 } 3.93 \text{ (} 729t^4-4536t^3+7632t^2-$

$4416t+896=0$ の解) の範囲。

16) 導出過程は補論3を参照のこと。

17) $t > 2(5+\sqrt{13})/9$ であれば二階条件は満たされる。

参考文献

- Alles, M. and S. Datar, "Strategic Transfer Pricing", Management Science, Vol.44, No.4, April, 1998, pp.451-461.
- Anderson, S.P. and D. Neven, "Cournot Competition Yields Spatial Agglomeration", International Economic Review, Vol.32, 1991, pp.793-808.
- Arya, A. and B. Mittendorf, "Benefits of Channel Discord in the Sale of Durable Goods", Marketing Science, Vol.25, No.1, January-February 2006, pp.91-96.
- Bonanno, G. and J. Vickers, "Vertical Separation", Journal of Industrial Economics, Vol.36, No. 3, 1988, pp. 257-265.
- Brander, J.A. and A. Zhang, "Market conduct in the airline industry: an empirical investigation", RAND Journal of Economics, Vol.21, No.4, Winter 1990, pp.567-583.
- Bulow, J., J. D. Geanakoplos, and P. D. Klemperer, "Multimarket Oligopoly: Strategic Substitutes and Complements", Journal of Political Economy, Vol. 93, No. 3, 1985, pp. 488-511.
- Chevalier, J.A., Kashyap, A. K., and P. E. Rossi, "Why Don't Prices Rise During Periods of Peak Demand? Evidence from Scanner Data", American Economic Review, 93, No.1, 2003, pp.15-37.
- Fershtman, C. and K. L. Judd, "Equilibrium Incentives in Oligopoly", American Economic Review, 77, 1987, pp.927-940.
- Fudenberg, D. and J. Tirole, "The Fat-Cat Effect, the Puppy Dog Ploy and the Lean and Hungry Look", American Economic Review, Vol. 74, No. 2, 1984, pp. 361-368.
- Gal-Or, E., "Duopolistic vertical restraints", European Economic Review 35, 1991, pp.1237-1253.
- Gupta, B., Heywood, J. S., D. Pal, "Strategic behavior downstream and the incentive to integrate: A spatial model with delivered pricing", International Journal of Industrial Organization, 13, 1995, pp.327-334.
- Hamilton, J. H., J. Thisse and A. Weskamp, "Spatial Discrimination: Bertrand vs. Cournot in a Model of Location Choice", Regional Science and Urban Economics, Vol.19, 1989, pp.87-102.
- Irmen, A., "Note on duopolistic vertical restraints", European Economic Review, 41, 1997, pp.1559-1567.
- Lin, C. C., "Divisionalization, Franchising, or Mixing: A Market Competition Perspective", Journal of Economics and Management, Vol.6, No.2, 2010, pp.157-174.
- MacDonald, J. M., "Demand, Information, and Competition: Why Do Food Prices Fall at Seasonal Demand Peaks?", Journal of Industrial Economics, March 2000, 48(1), PP.27-45.
- Mathewson, F. and R. Winter, "The Incentives for Resale Price Maintenance under Imperfect Information", Economic Inquiry, Vol.21, 1983, pp.337-348.
- Mathewson, F. and R. Winter, "An Economic Theory of Vertical Restraints", Rand Journal of Economics, Vol.15, 1984, pp.27-38.
- Matsumura, T., "A Two-stage Price-setting Duopoly: Bertrand or Stackelberg", Australian Economic Papers, Vol. 37, 1998, pp. 103-118. or Stackelberg", Australian Economic Papers, Vol. 37, 1998, pp. 103-118.
- Matsumura, T., "Consumer-Benefiting Exclusive Territories", Canadian Journal of Economics, Vol.30, No.4, Nov. 2003, pp.1007-1025.
- Miller, N. H., and A. I. Pazgal, "The equivalence of price and quantity competition with Delegation", RAND Journal of Economics, Vol.32, No.2, Summer 2001, pp.284-301.
- Nariu, T., and D. Flath, "Vertical Control of Cournot Wholesalers in Spatial Competition: Exclusive Territories? Or Maximum Retail Price Stipulations?", Review of Marketing Science, Vol.3, 2005, Article3.

- Pal, D., "Does Cournot Competition Yield Spatial Agglomeration?", *Economics Letters*, Vol.60, 1998, pp.49-53.
- Park, E. S., "Vertical Externality and Strategic Delegation", *Managerial and Decision Economics*, 23, 2002, pp.137-141.
- Rey, P. and J. Stiglitz (1988), "Vertical Restraints and Producers' Competition", *European Economic Journal*, Vol. 32, No. 2-3, pp. 561-568.
- Rey, P. and J. Tirole, "The Logic of Vertical Restraints", *American Economic Review*, Vol.76, 1986, pp.921-939.
- Saggi, K. and N.Vettas, "On Intrabrand and Interbrand Competition: The Strategic Role of Fees and Royalties", *European Economic Review*, 46, 2002, pp.189-200.
- Sklivas, S. D., "The Strategic Choice of Managerial Incentives", *RAND Journal of Economics*, 18, 1987, pp.452-458.
- Spengler, R., "Vertical Integration and Anti-trust Policy", *Journal of Political Economy*, Vol.58, 1950, pp.347-352.
- Telser, L., "Why Should Manufacturer Want Fair Trade?", *Journal of Law & Economics*, Vol.3, 1960, pp.86-105.
- Wang, L. F. S. and Y. C. Wang, "Brand Proliferation and Inter-Brand Competition: The Strategic Role of Transfer Pricing", *Journal of Economic Studies*, 35, 2008, pp.278-292.
- Warner, Elizabeth J. and Barsky, Robert B., "The Timing and Magnitude and Retail Store Markdowns: Evidence from Weekends and Holidays", *Quarterly Journal of Economics*, May 1995, 110(2), PP.31-52.
- Zhao, L., "Decentralization and Transfer Pricing Under Oligopoly", *Sothorn Economic Journal*, 67(2), 2000, pp.414-426.
- 鈴木浩孝・成生達彦「建値制と経済厚生」『国民経済雑誌』第188巻, 第1号, 2003年7月, 27-48ページ.
- 成生達彦『流通の経済理論』, 名古屋大学出版会, 1994年.
- 成生達彦・李東俊・菊谷達弥「部品の系列調達に内部調達に比べて競争優位性をもつか」『経済論叢』第181巻第5・6号, 2008年5・6月, 1-19ページ.
- 成生達彦・鈴木浩孝「チャネル間における数量-価格競争」, 京都大学21世紀COEワーキングペーパー, No.16, 2004年.
- 成生達彦・鈴木浩孝「チャネル間における価格-数量競争」『経済研究』第57巻第3号, 2006年7月, 236-244ページ.
- 成生達彦・鈴木浩孝「チャネル間競争と市場の競争性」『流通研究』第10巻, 第1・2合併号, 2007年9月, 17-27ページ.
- 成生達彦・梅竹「チャネル間競争と費用削減投資」『経済論叢』第179巻, 第3号, 2006年, 1-15ページ.
- 長谷川誠・成生達彦「チャネル間競争下の過剰参入」, WorkingPaper No.50, Graduate School of Economics, Kyoto University, 2005.
- 長谷川誠・成生達彦「不確実性下における戦略的分離とオープン価格制」『マーケティング・サイエンス』第14巻, 第2号, 2006年, 39-54ページ.

大学生に対する情報リテラシー教育

Information Literacy Education for University Students

野村 卓志

文化政策学部文化政策学科

Takashi NOMURA

Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

原田 茂治

静岡県立大学短期大学部

Shigeharu HARADA

Liberal Arts Department, Shizuoka College, University of Shizuoka (Pref.)

中学や高校で情報教育が行われるようになったことから、大学に入学してくる学生も既に情報教育やコンピューター利用経験を経ている。大学の情報リテラシー教育もこれに対応する必要があると考え、新入学生に対して入学までに学んできた情報リテラシーを問うアンケート調査を、2006年度より継続的に行っている。また、ワードプロセッシングについて、実技形式のアンケートも行っている。本稿では、二つの大学で行っているアンケート調査の結果について述べ、これに基づいて考察した大学の情報リテラシー教育について述べる。

Due to the introduction of an information course to the curriculum of high school by the new Education Ministry guidelines, modifications may be required to information literacy education in universities. We have been investigated the terms learned in the information course of high school on the basis of a questionnaire to the incoming freshmen of our universities since 2006 school year. Another questionnaire to test the skill of word processing is also examined. The present paper describes the results the two questionnaires, and discusses an appropriate curriculum of the information literacy education for university students.

1 はじめに

インターネットと、これを利用するための情報機器は広く社会に普及し、一般の生活においてもインターネットを利用することが目新しいものではなくなった。さらに、中学や高校で情報教育が行われるようになったことから、大学に入学してくる学生も既に情報教育やコンピューター利用経験を経ている。大学の情報リテラシー教育もこれに対応する必要があると考え、新入学生に対して入学までに学んできた情報リテラシーを問うアンケート調査を、2006年度より継続的に行っている[1-7]。これは、大学のリテラシー教育で取り上げている項目を知っているかを問うアンケートであるが、さらにワードプロセッシングに関して、文字入力や編集、罫線を用いた作表などの種々の操作を行わせ、その操作ができたかを回答させる実技形式のアンケート調査を2010年度から行っている。本稿では、本年度(2012年度)の調査結果、ならびにこれまでの調査結果を示し、高校生までに入学生が学んできている情報リテラシーの変化と、これに対応する大学の情報リテラシー教育について述べる。

2 アンケート調査の方法

本調査は、静岡県の公立大学法人の運営する静岡文化芸術大学と、静岡県立大学短期大学部の2大学の情報科目担当教員が共同で行った。それぞれの大学へ入学した1年生を対象として、前期に開講する「情報処理基礎」および「情報処理演習」の、年度当初の4月初回講義においてアンケート調査を行った。まず、高校で学んだ情報関係の科目名と、学んだ学年を記してもらった。次に、情報リテラシー教育の内容であるワードプロセッシング、ファイル操作、

画像処理、表計算、プレゼンテーション、インターネット利用の6種類の分野から、大学のリテラシー科目の講義中に取り上げる項目を羅列し、高校で習ったものについて印を付けてもらった。それぞれの分野で列挙した項目数は、ワードプロセッシングで24個、ファイル操作で10個、画像処理で10個、表計算で15個、プレゼンテーションで10個、インターネット関連で15個である。前年度までは、アンケート用紙を配布して記入させたが、今年度はGoogle社のGoogle Driveのアンケート機能を用いて、Webページ上でアンケートに記入させた。

また、ワードプロセッシングで調査した項目のうちから文節長の調整、文字フォント・サイズの変更、行間調整、インデント調整、罫線機能などの13項目を取り上げて設問を作成し、学生に設問の操作ができるかどうかを実習させた。操作が実行できたか、それともできなかったかを回答させて設問ごとに集計を行い、高校で学んだ項目のアンケート結果と比較を行った。本年度は、静岡文化芸術大学で2クラスを対象にして85件、静岡県立大学短期大学部で5クラスを対象にして218件の計303件の回答を得た。

3 学んだ科目・項目のアンケート調査結果

高校で学んだ情報科目の科目名について、今年度(2012年度)について集計した結果をFig. 1に示す。情報Aと回答した学生が44.9%であり、情報B、Cはそれぞれ6.3%、7.9%となり、情報Aを学んできている学生が多いことが明らかとなった。また、回答無し(わからないを含む)とした割合も37.6%と高かった。Fig. 2に、調査を開始した2006年度から今年度までの集計結果を示す。年度ごとのばらつきは大きい、「回答なし」

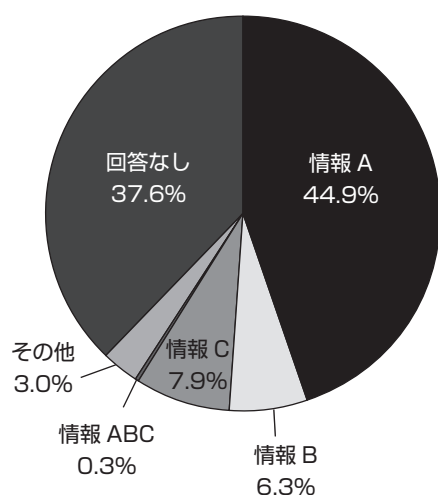


Fig.1 2012年度の学んだ情報科目名

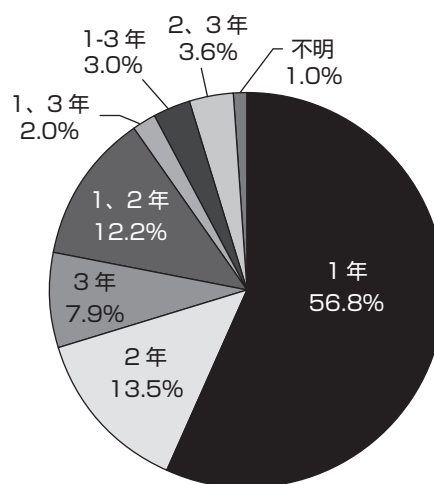


Fig.3 情報科目を学んだ学年 (2012年度)

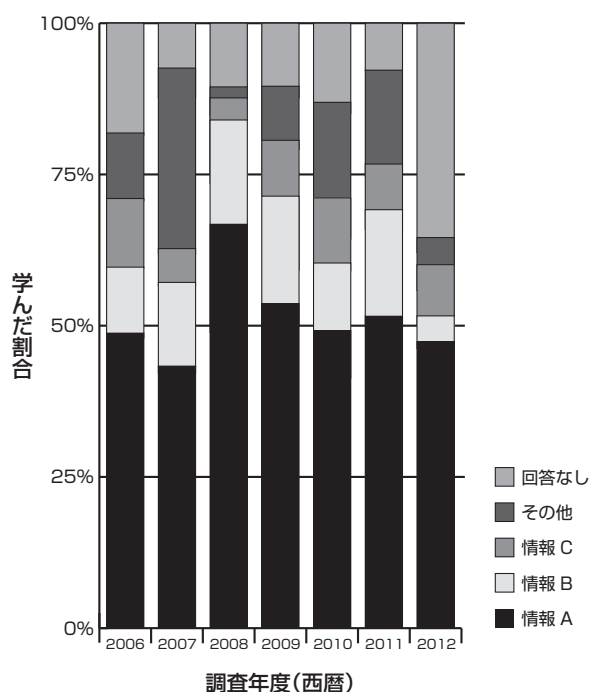


Fig.2 学んだ情報科目名の年度別割合

及び「その他」を含めた割合は増えてきている。これは、他のワードプロセッシングや表計算などの項目の回答に注目したときに、これらの分野について学んだと回答したものの、各分野の具体的な項目について回答していない学生が散見されたことと対応して、高校における情報科目の履修にあまり熱心ではなくなっているかと解釈している。

Fig. 3 に、情報科目を学んだ学年を集計した結果を示す。1年で履修した回答が56.8%と過半数を占めている。これに、1年と2年、1年と3年など、複数の学年に渡って学んだと回答した割合を合計すると74%となり、4分の3近くの学生が1年次から情報科目の講義を受けていることがわかる。一方、複数学年で学んだ学生を合計しても、2年では32.3%、3年では16.5%となり、学年とともに情報科目を学んでいる割合は減少することがわかった。これより、大学に入学したときには多くの学生は継続的に情報科目の教育を受けておらず、1年または2年の空白期

間があることになる。情報技術は進歩が早く、1～2年で利用状況が大きく変わることが多いため、大学で情報リテラシー科目のカリキュラムを考えるときには、この空白期間には留意する必要がある。

次に、ワードプロセッシング、ファイル操作、表計算、プレゼンテーション、画像処理、Web 閲覧、電子メールの7種類の分野をどの程度の学生が学んできたかを調べることを目的とした集計を行った。上述したように、各分野には複数の項目を列挙して、学んだものにマークをつけさせている。このマークがひとつでも付いている分野は学んだものと考えることとし、各分野にマークが付いている学生の割合を集計した。この方法によって求めた、2006年から2012年までの各分野を学んだ割合を Fig. 4 に示す。

ワードプロセッシングとファイル操作に関しては2008年度以降は大きな変化は見られず、高校の情報科目の授業内容は大きく変わっていないようである。表計算とウェブに関しては割合は次第に増し、2012年度には90%程度の学生が学んでいる。また、プレゼンテーションの割合も次第に増え、75%程度の学生が学んでいる。これらは、ワードプロセッシングとあわせてよく学ばれている講義項目である。

その一方、画像処理に関しては2011年度までは学んだと回答する割合が少しずつ減少していた。デジタルカメラ機能を持つ携帯電話は広く普及しており、学生がデジタル写真に触れる機会も多いと思われるが、ワードプロセッサ文書等に写真を貼り込む作業そのものは容易に行えるため、重要度は高くないと判断されていたのかもしれない。一方、2012年度はこの割合が55%と増加した。高校の情報科目で、画素、画素数や解像度について取り上げることにしたと推定している。

学んだと回答した学生の割合が80%程度と多い表計算であるが、その各機能について学んだと回答した割合の集計結果を Fig.5 に示す。計算式や合計、平均の計算は80%程度の学生が学んだとしており、グラフ作成についても66%が学んだとしている。また、セルの結合も59%が学んだとしており、高校で好んで取り上げられている。その一方、抽出と集計はそれぞれ16%、47%と

比較的低い値となっている。また、最も基本的な機能である相対参照と絶対参照についてそれぞれ 18%、15%しか学んだと回答していない。エクセルで単体でレポートを作成するときに必要なヘッダとフッタについても 19%に留まっている。これより、画面に表示されるパレットのボタンやメニュー等で操作できる部分については学んできているが、表計算ソフトの基本概念や書類を仕上げる方法についてはその理解は十分ではない。両学ともアンケート集計等を行う機会が多い学部学科の構成であることから、データベース的機能の一環として抽出、集計とその結果のグラフ作成は、大学のリテラシー教育として重点的に講義を行う必要がある。

プレゼンテーションのアンケート結果についても同様の傾向が見られ、作図機能やアウトライン機能といった基本的な機能よりも、アニメーションなどの画面の視覚的反応を伴う機能に重きが置かれていると解釈している。

これらの結果より、高校における情報リテラシー教育の内容は安定してきており、大きな変化は見られなくなりつ

つあること。その一方で、資料を集め、データーを集計してレポートを作成するという、大学におけるコンピューター利用の観点から見れば、その内容は十分なものではないことが明らかとなった。

次に、電子メールに関して、利用しているアプリケーションに回答のあったものを集計した結果を Fig. 6 に示す。Outlook に加えて、Shuriken や Shylpheed 等のメールアプリケーションの利用は 17%に留まり、83%が Web ブラウザである Internet Explorer を使用したと回答した。高校では、メールの講義に、メールサーバとクライアントアプリを用いるよりも、高校外の業者が提供する Web メールサービスを利用することが多いと推定される。学生のスマートフォン利用が増えるに伴って、従来のメールサーバを用いた使用形態よりも、Web メールやクラウドサービスを用いたメール利用が増えると予想されるため、大学のリテラシー教育でメールを扱う手法については検討が必要と考えている。

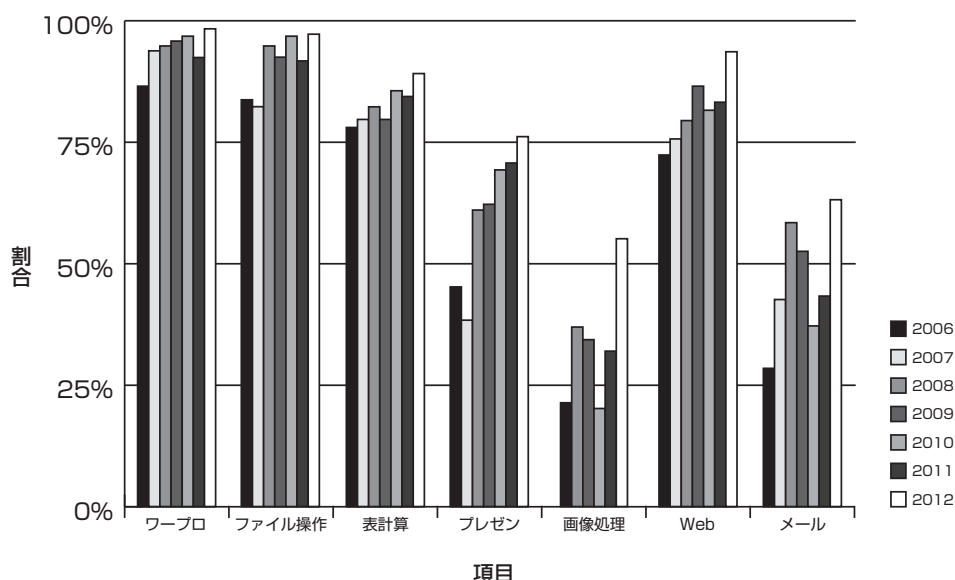


Fig.4 項目を学んだ割合の年度別集計

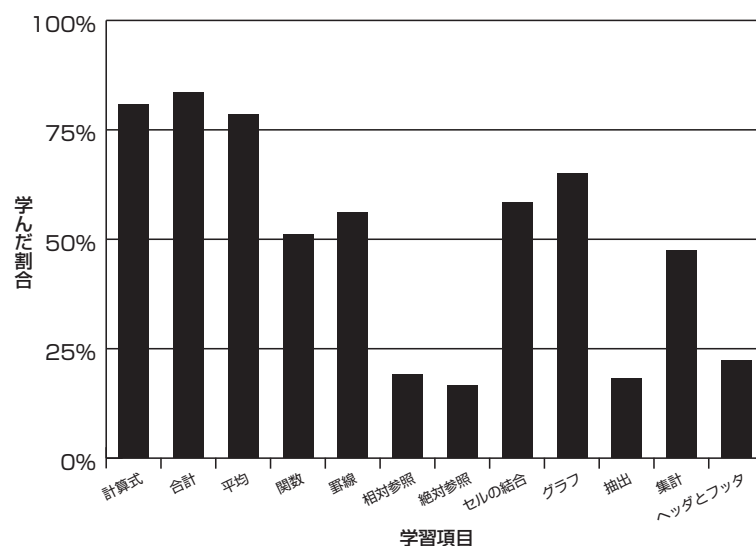


Fig.5 エクセルの項目を学んだ割合

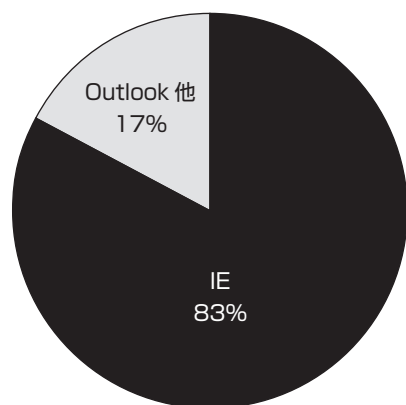


Fig.6 メールで使用したアプリケーション (2012 年度)

4 ワードプロセッシングの実技アンケート

ワードプロセッシングに関して、実技形式で行った調査結果を、対応するアンケートの集計結果と共に Fig. 7 に示す。調査は、漢字変換、文節長の調整、半角／全角文字の選択の入力に関連した項目、フォントの変更、文字サイズ調整の文字の表現に関する項目、切取・貼付の編集項目、行間調整、インデントといった文書の整形、さらに付随的な項目として罫線機能、ページ番号の挿入、図の挿入、写真の貼付け、そして保存と大学でレポートを作成するときに必須の機能である 13 項目を選んだ。実技形式のアンケートは無記名で行い、実施時には口頭でアンケートの目的と成績評価には関係ないことを伝えている。

アンケート結果と実技調査の結果を見ると、漢字変換に関しては、学んだと回答した学生は 91%であったが、97%の学生が文字入力を行うことができた。文節長の調整はアンケートが 50%であったが、操作できたと回答し

た学生は 74%に達した。しかし、レポートや論文における文書入力を考えると、この項目は 100%になるべきであり、リテラシー項目で取り上げる必要がある。

半角／全角文字に関しては、87%が学んだとしているが、実際に使い分けられる学生は 69%であり、これも十分説明する必要がある。書体フォントの変更やサイズに関する項目、さらに切取・貼付の編集はどの項目も 90%以上の学生が操作を行うことができた。文字列を選択してからツールバーやメニューなどで行う操作は結果が視覚的に得られることから、学生にとっても直感的に理解しやすく、修得率も高いのであろう。

行間調整ができる学生は 66%、インデント、罫線機能、ページ番号、作図機能や写真の貼付けといった機能は 50%弱と低い値となった。これらは日常の手紙などの文書作成ではあまり利用しないが、大学のレポート作成に必要な機能である。レポートの書式設定の方法とあわせて講義中に解説したほうが、学生も熱心に取り組むと考えられる。

5 大学のリテラシー教育

社会におけるインターネット及びパーソナルコンピューターや携帯電話等の情報機器の普及により、情報技術を学ぶことに対する新規性は薄れてきていると考えられる。これは、Fig. 2 に示した情報科目を問うアンケート調査において、「回答無し」と「その他」の割合が徐々に増えていることは、情報技術を学ぶことに対する関心が薄れていることに対応していると思われる。また、Fig. 4 に示したように、高校までに情報リテラシー科目のさまざまな項目に触れる機会は増えており、大学のリテラシー教育で情報技術を取り上げても、学生が目新しさを感じることは無

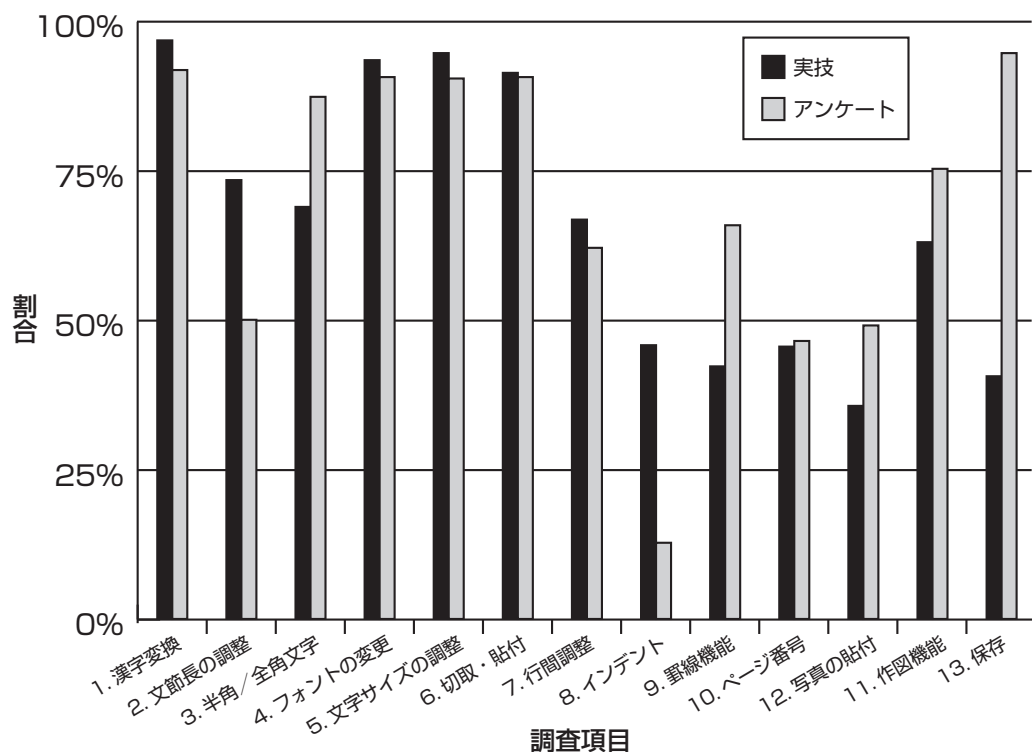


Fig.7 ワードプロセッシング各項目のアンケート集計結果と、実技試験の結果 (2012 年度)

くなってきた。

その一方で、大学で必要とされる、文書、写真、グラフ等を統合し、文書またはポスターとしてまとめてわかりやすく提示するための能力を、高校までの情報教育で修得しているとは言えないことが、Fig. 5 や Fig. 7 に示した調査結果から読み取れる。基本的な文字入力や、表計算の操作はできるが、文書を整形してレポートとしての書式を整える能力は十分ではない。また表計算に対しても、卒業研究において必要となる集計等のデータ処理や可視化を行うには、表計算ソフトウェアの操作の背景にある基礎的な概念の理解が十分ではない。これらの広い意味でのプレゼンテーション能力は、大学に在学している間に必要とされるだけではなく、卒業した学生に対して社会が要求する能力のひとつでもあり、大学において教育を行うことは重要である。その一方で、単なる概念的な項目の説明には興味を持たず、実益的なカリキュラムを求めるのが近年の大学生の傾向であると思われる。

これより、情報カリキュラムにおいても、単にワードプロセッサの機能を教えるのではなく、レポート書式の設定を題材として、レポートを仕上げるために必要な機能の説明という形式で講義を行い、学生の興味を喚起するように努めている。また、画像処理においても、画素数と解像度について詳しく説明し、レポートに貼り込んだ写真が鮮明に見えるために必要とされる画素数の求めかたと処理方法、という形で、実用的な技法を教えるようにしている。また、表計算についても、相対参照と絶対参照について解説するだけでなく、学生が実際に卒業研究で使いそうなアンケート調査の集計を実例にして、集計操作とレポートのまとめかたを教材に取り入れている。これらの工夫により、単にコンピュータの操作法を解説した場合より、学生の興味を喚起できているものと考えている。

これまでも、毎年行っているアンケート調査及び講義中の学生の反応を見ながら講義内容の改善に努めてきている。進歩と変化の速い情報技術であるが、この数年でクラウド・コンピューティングが実際に使われ始め、インターネット利用だけでなく、音楽、映画、書籍等の利用にも大きな役割を果たしつつある。さらに、ソーシャル・ネットワーク・サービス（SNS）等の普及により、従来はマスメディアのみが担っていたニュース等の情報の伝達の手段も変化しつつある。また、情報の収集や分類蓄積にもクラ

ウドサービスの利用が可能になってきている。これをふまえ、2011 年度より、クラウドサービスの利用に関する解説と実習を「情報システム論」の講義に取り入れ始めた[8]。クラウドサービス利用の講義に関しては取り組みを始めたばかりであり、試行錯誤を続けている部分も大きい。今後は情報リテラシー教育においても、その占める位置は大きなものになると考えている。そのためには、使用するソフトウェアだけではなく、コンピューターやネットワーク機器などの利用環境も、クラウド・コンピューティングに対応したものに見直してゆく必要がある。

6 まとめ

コンピューターや携帯電話などの情報機器に日常的に触れる環境となり、中学・高校で情報教育は進んだ結果、基本的な操作を行うことができる学生が増えた。その一方で、重要ではあっても概念的な扱いを含む項目は十分理解していない学生の割合も高い。大学のレポート作成の書式設定や、画像をレポートに含めるときの画素数や解像度の設定、アンケートの集計とその結果をまとめる演習など、学生が大学生活で必要となる技法や実例を解説することで興味を喚起し、リテラシー教育の効果を高めるように努めている。また、今後はクラウド・コンピューティングをリテラシー教育に取り入れることになると考えている。

参考文献

- [1] 野村卓志、原田茂治、「高校新課程を経た学生に対する大学の情報リテラシー教育」、平成 18 年度情報教育研究会講演論文集、p. 371-374、2006.11
- [2] 野村卓志、原田茂治、「高校新課程を経た学生に対する情報リテラシー教育」静岡文化芸術大学研究紀要、8、p. 1-4、2007
- [3] 野村卓志、原田茂治、「大学新入生の情報リテラシーの変化」、平成 20 年度情報教育研究会講演論文集、P-4、2008.11
- [4] 原田茂治、野村卓志、「2007 年度入学生の情報リテラシー」、静岡県立大学短期大学部研究紀要 22-W p. 1-12、2008
- [5] 野村卓志、原田茂治、「大学新入生の情報リテラシーの変化」、平成 21 年度情報教育研究会講演論文集、2009.11
- [6] 野村卓志、原田茂治、「高校情報過程に関するアンケート調査」、平成 22 年度情報教育研究会講演論文集、2010.11
- [7] 野村卓志、野中俊雄、原田茂治、「情報リテラシー教育に関する新入学生のアンケート調査」、大学 ICT 推進協議会 2011 年次大会論文集、p437、2011.12
- [8] 野村卓志、「文系の学生にクラウドサービス利用リテラシーを教育する試み」、大学 ICT 推進協議会 2011 年次大会論文集、p389、2011.12

歴史的運河への「まなざし」 —ヨーロッパ・東アジアの比較を通じて—¹

The Tourist "Gaze" upon the Historical Canals : From the Viewpoint of Comparison between Europe and East Asia

四方田雅史

文化政策学部文化政策学科

Masafumi YOMODA

Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

通常、特に欧州では「運河」は物資を運ぶための人工的水路のことを言うが、運河に対するイメージは地域によって多様な様相を呈している。運河が主な輸送手段ではなくなって以降も、それを反映するようにさまざまな方法で利活用が行われている。本論文は、イギリス・ベルギー・中国・日本の4ヶ国の運河を、主に観光地としての利活用方法に焦点を当てて比較したものである。その分析の結果、その違いは歴史的運河に対する「まなざし」の違いであり、その「まなざし」は主に3つの要因、すなわち運河が建設されてきたときの歴史的背景、地理的条件、およびその国民が自国に抱いているイメージを反映していると結論づけられる。

"Canals" are usually referred to as artificial waterways used in order to carry goods especially in Europe, but images about them are of varieties among various nations. They have been utilized in various ways, as reflected by the diverse images, even after they were not used as a major transport. This paper compares the ways of utilizing the canals in four countries (United Kingdom, Belgium, China and Japan) mainly as tourist sites. From the analysis, it is concluded that their differences depend upon their different "gazes" about the historical canals, and that they are attributed principally to three factors, that is to say, their historical backgrounds in construction of the canals, their geographical conditions, and different images about their own societies by the people.

はじめに

運河は、ものを輸送するなどの目的を担う水路として、れっきとした産業遺産である。日本では、運河と聞いてもイメージしにくいかもしれないが、欧州では運河は重要な文化財、観光資源とみなされている。実は、「運河」に対するイメージは各国によって異なり、それにともないその保存や利活用のあり方も多様である。ヨーロッパ、特にイギリスでは、運河はかつて内陸の輸送網として重要な役割を担い、近代化・工業化の象徴でもあった。それを背景にして、運河を文化財として早くから保存し、さらに観光資源として利活用する動きが早々と見られた。しかし、このような動きがすべての地域で起きてきたわけではない。

文化財や観光資源として運河をみなす上で、運河をどのように見るか、つまり運河への「まなざし」のあり様が重要である。観光を社会学の観点から先駆的に分析したジョン・アーリは、観光において日常と非日常との差異をめぐる「まなざし (gaze)」が重要であると述べている。観光資源とみなすには、それを非日常と考える「まなざし」が不可欠であり、その「まなざし」が時代や社会によって異なっているのである²。観光もマス・ツーリズムの時代を経て多様化しつつあり、産業観光、エコ・ツーリズム、体験観光など、さまざまな観光用語が創造されてきた。運河がもともと持っていた輸送などの機能にくわえ、親水や観光、景観、環境といった多面的機能が強調されるのも、近年の「まなざし」における変化と考えられる³。このような「まなざし」の変化に対応して、これまで観光資源とみなされることがなかった運河が観光資源とみなされるようになる過程をたどっている点で、各国は共通している。このような時系列的な変化にくわえ、地域的差異もまた重要である。後述するように、その運河に与えられた意味も各国で異なりうる。運河は、日本人にとっては未だ疎遠な存在であるが、ヨーロッパ人にとっては身近な存在である。

本稿では、時系列的変化と地域的差異とを両軸にして、各国民が運河をみる「まなざし」を位置づけ相対化してみたい。

まず、第1節では「運河」という言葉の意味の違いに着目し、第2節では運河に対する世界的な動きを概観する。以上を踏まえた上で各国別の分析に入り、第3節ではイギリス、第4節ではベルギー、第5節では中国・日本を取り上げ、運河への「まなざし」を比較する。最終的に、それぞれの地域における観光資源化、利活用のあり方が各国ごとに多様であることを明らかにする。

1. 「運河」という言葉をめぐって

運河は英語では canal、もしくは waterway と呼ばれる。Canal はラテン語の canalis に語源を持ち、「水の管、水路」を意味している。Canalis にはもともと輸送に限定した意味はない。しかし、*Encyclopedia Americana* を繙くと、canal は「一般に交通を容易にするために建設されている」と書かれているが、「当初は湿地を排水し、耕作のために土地を灌漑することなどを含め、多くの目的のために使われた」とある。ここにヨーロッパの背景が読みとれる。運河はまず中東や中国で成立し、それがローマを通じてヨーロッパに伝わった。もともとの運河の目的は排水・灌漑にあったのに対して、欧州ではギリシア・ローマ時代から輸送を主な目的として建設され、その伝統は近代まで続いたために、canal は輸送を主とした語として使われるようになったのである。もともと「水の道」である waterway も、ケンブリッジ英英辞典によると「人々が移動するために使用することができる川および運河」とあり、輸送に限定された語である。canal と waterway が英語圏でほぼ同じ意味で使われるのは以上の理由による。

対して、日本語の「運河」を辞書で引くと、「運輸、給排水、灌漑などのために人工的に造った川。自然の川や

海岸線の海中に手を加えた水路・航路を含む⁴⁾とあり、「運河」には輸送を意味する「運」があるにもかかわらず、多目的であることが強調されている。現に *Britannica Encyclopedia* の区分によると、欧米の運河はほとんど航行のみを目的としているが、アジアではほとんどが多目的である⁵⁾。canal と「運河」は共通して人工の水路を指すが、「運」を含みながら複数の目的が強調される「運河」と、もともと「水路」の意でありながら実質的に輸送のみを目的とした canal との違いが浮かび上がる。このズレが各国の運河を比較するとき、どこまでを運河に含めるか、曖昧さを伴ってくる。たとえば、灌漑を目的にオランダの技術を使って開削された安積疏水（福島県）を「運河」と呼ぶべきか、治水のために河川の流れを変えた荒川・淀川まで「運河」に含めるべきかなどである⁶⁾。このように見ていくと、「運河」という言葉自体、風土的・歴史的・文化的背景から影響を受けていると言える。本稿は輸送を目的とした運河を中心に取り上げるが、特にアジアではその境界が曖昧になることを冒頭で強調しておこう。

2. 歴史的運河をめぐる世界的動向

運河を世界的に文化財・文化遺産として位置づけた国際機関は国連教育科学文化機関（以下、UNESCO）である。そこには運河に対する西欧的な「まなざし」が見てとれる。まず、「運河」は、1994 年の文書で以下のように定義されている。

「運河とは人間によって建設された水路である。それは、内在的に、もしくはこの文化資産の範疇を代表する特に優れた事例として、歴史、もしくは技術の観点から顕著な普遍的価値を有している。運河は、記念碑的成果であり、線状の文化的景観（linear cultural landscape）、もしくは複合的な文化的景観を構成するのに不可欠な要素（an integral component of a complex cultural landscape）の典型的な特徴である⁷⁾」

表 1 は、世界文化遺産とその暫定リストに登録されて

いる運河関連の遺産を列挙したものである。同表からは、世界文化遺産に登録されている運河はすべて欧米にあることが分かる。すなわち、運河を世界遺産にしようとする動きが早々にあったのは欧米であった。暫定リストに含まれている運河関連のものとしては、中国の 2 件とポーランド・ベラルーシ共同の 1 件がある。ほかに、世界文化遺産に登録されている産業遺産の中には、名称に入っていないが、世界遺産が主に保存すべき「コア地域」に運河が含まれている事例は少なくない。たとえばイギリスのダーヴェント渓谷にはクロムフォード運河が含まれている⁹⁾、ソリテアモリーズ＝リバプール運河を活用した工業コミュニティである。このことは、18・19 世紀の産業遺産の多くが運河と密接不可分になっていることを示している。それらまで拡張すると、運河を含む世界文化遺産はさらに多くなる⁹⁾。

表 1 の世界文化遺産はすべて 1990 年代以降に登録されており、1994 年の「世界遺産一覧表における不均衡の是正および代表性・信頼性の確保のためのグローバル・ストラテジー（Global Strategy for a Representative, Balanced and Credible World Heritage List）」の影響も認められる。これは、世界文化遺産が主に西洋に偏っていた状況を改善することを目的とし、特に「産業遺産」、「20 世紀の建造物」、「文化的景観」を重視すべきことを提起したものである。それに続いて策定された「特種な資産に係る世界遺産一覧表への登録に関する指針¹⁰⁾」には、「文化的景観」、「歴史的都市」、「遺産の道」とともに、「遺産運河」という範疇が挙げられている。これら 4 項目に共通するのは、文化遺産を点としてではなく、線や面として捉えようとする動きである。先に引用したように、運河も文化的景観の一種、とりわけ「線状の文化的景観」であることが強調されている¹¹⁾。そして、国際記念物遺跡会議（ICOMOS）のリストも、この定義を踏襲し、閘門・インクライン・ボートリフト・ダム・水路橋など、さまざまな構成物の集合体として運河を捉えている¹²⁾。このように、運河を文化財、ひいては世界遺産とみなす世界的な

表 1 運河関連の世界文化遺産とその暫定リスト

	日本語名	欧文名	国	登録基準	登録年
2012 年段階で 世界文化遺産に 登録された運河	ミディ運河	Canal du Midi	フランス	(vi)	1996 年
	ラ・リヴィエールとル・ルーにあるサントル運河の 4 つのリフトとその周辺	The Four Lifts on the Canal du Centre and their Environs, La Louvière and Le Roeulx	ベルギー	(iii)、(iv)	1998 年
	リドー運河	Rideau canal	カナダ	(i)、(iv)	2007 年
	ポントカサステ水路橋と運河	Pontcysyllte Aqueduct and Canal	イギリス	(i)、(ii)、(iv)	2009 年
	アムステルダム シンゲル運河内の 17 世紀の環状運河地区	Seventeenth-century canal ring area of Amsterdam inside the Singelgracht	オランダ	(i)、(ii)、(iv)	2010 年
世界文化遺産暫 定リスト掲載の 運河	大運河		中国		
	霊渠運河		中国		
	アウグストッフ運河	Augustów Canal	ベラルーシ・ポーランド		

〔出典〕UNESCO のウェブページより作成。

（注）登録基準はそれぞれ（i）人間の創造的才能をあらわす傑作、（ii）建築、科学技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展に重要な影響を与え、ある期間にわたる価値観の交流またはある文化圏内での価値観の交流を示すものである、（iii）現存するか消滅しているにもかかわらず、ある文化的伝統または文明の存在を伝承する物証として無二の存在（少なくとも稀有な存在）、（iv）歴史上の重要な段階を物語る建築物、その集合体、科学技術の集合体、あるいは景観を代表する顕著な見本、（vi）顕著な普遍的価値を有する出来事（行事）、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文化的作品と直接または実質的関連がある、を示す

コンセンサスが形成されてきたのである。

近年では日本の琵琶湖疏水や、暫定リストにも入っている中国の大運河を世界遺産に登録しようとする動きなど、アジアにも広がっている。その意味で、運河への「まなざし」は世界共通のものに収斂していったかに見えるかもしれないが、仔細に見ると、多様な様相が見えてくる。以下では、イギリス（アイルランドを含む）、ベルギー、中国、日本の4ヶ国を取り上げて、運河に対する「まなざし」を比較してみよう。

3. イギリスにおける運河への「まなざし」

運河の保存・利活用については、まずイギリスにおいて大きな運動となった。後述のように、運河をナロー・ボートで航行する動きが1940年代から徐々に拡大していき、文化財に指定されるケースも早くから見られた。リーズ＝リバプール運河沿いのウィガン埠頭を整備して観光客を誘致しようとする試みも見られ、これは「遺産産業」の象徴として賞賛、もしくは批判されることにもなった¹³。このように、イギリスは、運河を文化財・観光地として見る「まなざし」が早くから登場した国である。

まず運河がイギリス経済史に与えた影響について概観しておこう。そこには産業革命へのイギリス人の思い入れが深く反映されているからである。欧州の運河の技術はローマ時代からの蓄積があるが、イギリスは後発国であった。イギリスでは18世紀に運河の開削が本格的に始まり、産業革命と軌を一にして「運河熱」とも呼ばれるブームが起きたのである。その頃は動力を水車に頼っていたため、工業は概ね内陸に立地した一方、綿花などの輸入原料や石炭を他地域に依存しなければならなかった。そのため、効率的な内陸輸送網を必要とし、その需要に応える形で民間主導で運河建設が進んだのである。運河網が全国的に整備されたことがイギリスの産業革命にとって利点になったことが評価されている¹⁴。その建設には、水路橋や閘門・トンネルといった最先端の土木技術が導入され、このような技術を駆使した建造物が後に運河クルーズの人気スポットになっていく。1825年以降、鉄道路線が拡大したが、運河は効率的な輸送網であり続け、100年以上、イギリスの内陸輸送を支えることになった。その意味で、運河が内陸輸送に利用された「内陸運河の時代」は長く、イギリス人の運河に対する思い入れを強めることになった。



写真1 チャーク水路橋と鉄道橋 撮影：筆者

しかし、産業革命期の運河網は、やがてその後の変化に対応できない問題を孕むことになった。写真1にあるように、運河は当時の平底荷船の幅に合わせて作られたため、幅が狭い。また、民間主導で掘削されたため、幅も一定していない。そして、19世紀以降、運河に対する近代化投資もほとんど行われなかった。その要因としては、運河を買収した鉄道会社の過少投資などが挙げられている¹⁵。後述するように、大陸では第二次大戦後も、運河ネットワークの近代化のため各国が拡幅工事を競ったが、イギリスの場合、島国のため、大陸ヨーロッパの近代化投資からの影響も受けず、取り残されたのである。大型船舶が運河を利用できないため、20世紀に入るとさすがに鉄道との競争に勝てず、内陸輸送の主役を鉄道に、後に自動車に譲ることになった。このように運河の「経済的価値」は徐々に低下したが、早くから運河に観光や娯楽という新たな価値（アメニティ価値）が付与されたのである。こうした価値はいかに認識されたのであろうか。

まず、第一の価値としてクルーズなどの娯乐的価値が挙げられる。リーズ＝リバプール運河では、既に1839年にプレジャー・ボートへの言及があり、1930年代にプレジャー・ボートのクラブが組織されたという¹⁶。さらにケネット＝エイヴォン運河では1948年にカヌーレースなど、さまざまなイベントが企画された¹⁷。このように運河の娯乐的価値は早くから認識されたが、特に運河の利用・保存を全国的運動にまで高めたのはL・T・C・ロルトであろう。彼がミッドランドの運河を旅しそれを旅行記*Narrow Boat*に書いたのを機に、レジャー・ボートによる旅という新たな意味づけが商用中心だった運河網になされたのである。

レジャー・ボートによる航行ができるためには、ネットワークとして、使用されていない運河を航行可能なものに修復する必要がある。そのため、早くも1946年に内陸運河協会（Inland Waterways Association、以下IWA）という非営利組織（以下NPO）が設立され、ボランティアなどを活用し運河を保存・修復する動きになった¹⁸。その後、1968年には、交通法で英国運河委員会（British Waterway Board、以下BWB）が管理する運河を3つに分け、300マイルを商用運河、1100マイルをクルーズ用運河とし、残りの600マイルは公衆衛生・アメニティ・安全のために扱われるとされた¹⁹。全体の半分強の1100マイルがクルーズ用に整備されることによって、この観光資源化の動きは決定的になったのである。

第二に遊歩道としての価値がある。運河を遊歩道として利用する動きが見られた²⁰。イギリスの運河には、曳船道（towpath）が既に整備されていた。当初の運河航行は、蒸気機関や内燃機関が使用できなかったため、人力や馬で船を引っ張る必要があった。そのため、運河沿いに曳船道があったのである。その曳船道が意図せざる結果として遊歩道やサイクリング・ロードに使われることになった。「運河熱」が起きた18世紀後半の技術的背景が、運河に遊歩道としての新たな意味を付加することになった。たとえば、アイルランドを代表するグランド運河は、1757年に竣工した当時ブリテン島にもない野心的な運河として知られるが²¹、そこでも地元住民が曳船道を散歩する光景が見られた（写真2）。アイルランドではナローボートのクルー

ズはイギリスほど普及していない反面、遊歩道として活用されていることを物語る。



写真2 グランド運河（アイルランド）の水路橋 撮影：筆者

第三の価値は文化財としての価値である。「運河熱」から200年近く経ち、歴史ある運河には文化財としての価値も付与された。運河が文化財として保存されるようになったのは1950年代に遡る。イングランドでは、ケネット=エイヴォン運河に架かるダundas水路橋が1951年に運河構造物として初めて記念物に登録された。現在、IWAは、2,555の登録建築・構造物(listed buildings and structures)、69の登録記念物(scheduled monuments)を保有・保存している。その中には水路橋、閘門、トンネル、リフト、運河通行者の宿舎などが含まれている。運河とはさまざまな構造物とも組み合わせられた複合的文化財であり、点としての保存だけではなく、線、および面としての保存を必要とした。その意味で、近年強調されている「面」としての保存に先んじた動きであったと評価することもできる。

ポントカサステ水路橋とそれを含むスランゴスレン運河が世界文化遺産に登録されたのも、そのような流れの中に位置づけられる。実際、この水路橋は、その近くにあるチャーク(Chirk)水路橋(前掲写真1)・トンネルとともに、スランゴスレン運河クルーズの主な見所である。また、アンダートン船舶昇降機が2002年に動態保存されたこともその一例である。これは1865年に建設され1908年に近代化された文化財であるとともに、観光の観点からみれば、1つのアトラクションとしての価値も持つものであった²²。

このように、イギリスの運河には、歴史的価値、文化財的価値、景観的価値、観光価値など多面的価値が早くから評価されてきたことが分かる。そもそもイギリスの運河が持っていた歴史的背景と、その後の保存・利活用に向けた動きとが重なりながら、運河を観光資源とみなす「まなざし」が形成されたことが分かる。先述のとおり、イギリスは早くから産業革命を遂げ、脱工業化の先駆でもあった。その結果、工業化・産業化に呼応したマス・ツーリズムから早くから脱し(ニュー・ツーリズム)、産業革命の象徴であった運河も文化財や遺産とみなす動きが早くから見られたのである。運河の保存・復原・利活用については、一

部の人々の努力だけではなく、さまざまな資金提供があったことも指摘しなければならない。ほぼ経済的価値を失ったイギリスでは、国・地方政府のみならず、NPOの役割が重要になっていった。現に運河名が付いたトラスト(受託財団)が、政府からの補助金や企業・個人などからの寄付金を主な財源として運河の復原・再建や利活用が進められたのである²³。このように、運河の建設も民間主導で進められたが、保存・利活用についても民間のNPOが主導した点は、他国と異なるイギリス特有の特徴であると評価することができよう。

運河に対する「まなざし」の変化に伴い、行政側の視点も変化している。運河の観光資源化を強化するように、内陸運河アメニティ委員会が設立され、BWBや環境大臣に諮問することができると規定されていた²⁴。運河を管轄するNPOのBritish Waterwaysは、現在も環境・食料・農村大臣管轄であることから、運河が環境行政の一部と位置づけられていることが分かる²⁵。もともと運河は運輸・交通に関係する行政が担当していたが、環境行政と交錯していった。1997～2001年に環境行政と運輸・交通行政はともに環境・交通・地域省管轄に一元化されたが、この省は2001年に交通・地方政府・地域省(Department for Transport, Local Government and the Regions)と環境・食料・農村省(Department for Environment, Food and Rural Affairs、以下Defra)とに分割されたが、このとき運河はDefraの管轄となっており、その中でも農村・田園政策の一つに位置づけられている²⁶。イギリスでは、運河はもはや交通政策ではなく、農村政策、レジャー政策の一部として位置づけられているのである。これには運河の立地も影響している。イギリスの運河は主に田園地帯を通っていたからである。早くからイギリスは脱工業化に進んだ結果、田園観光、スローツーリズムなどの動きと連動しながら、運河に非日常・脱日常という新たな観光価値が付与されやすかったと考えられる。

4. 大陸ヨーロッパ(特にベルギー)における運河への「まなざし」

次にベルギーを事例に、大陸ヨーロッパにおける運河への「まなざし」を考察しよう。ベルギーは、イギリスの後を追って1830年代に産業革命を開始した最初の大陸ヨーロッパ国家である。

大陸ヨーロッパでは、フランスで内陸のトゥールーズから地中海までをつなぐミディ運河が17世紀に建設され、現在では運河クルーズなどイギリスと同じような動きがある。他方、ベルギーの主な運河建設はイギリスより遅く、19世紀に入ってからであった。たとえばブリュッセルとシャルルロワをつなぐ運河は19世紀前半に整備され、後述するサントル歴史運河も1839年に完成している²⁷。また、ベルギーはイギリスと比べると政府主導で運河の建設が進められたことも記しておく必要がある。



写真3 サントル運河の水カリフト 撮影：筆者

しかし、運河を近代化遺産として保存しようとする試みのうち、特に有名なのがサントル運河の船舶昇降機である（写真3）。これは、水力で動く19世紀の技術を反映する技術水準が評価され、表1にあるように、UNESCOの世界文化遺産にも登録された。運河航行を1つの観光資源としようとするれば、運河をネットワークとして動態保存する必要がある。そこには4機のボートリフトが現存するが、それぞれ稼働するよう保存活動が進められている。さらに、サントル運河があるワロン地域の経済は、炭鉱閉山などにより低迷しており、運河の観光資源化、および炭鉱などのエコ・ミュージアム化を通じ観光業を推進している。そこには、運河が炭鉱とともにワロン住民たちのアイデンティティになっていることが窺える。

ベルギーは小国であるにもかかわらず、運河が1500kmも伸びている。しかし、運河の観光地化から見るとフランスに遅れをとっており、ガイドブックも1960年刊行のE. E. Benest, *Inland Waterways of Belgium* しかなかったという²⁸。

ベルギーでは、第二次大戦後、フランスなどからの影響も受けて運河を拡幅する近代化投資が行われた結果、1000～1350トン以上の船舶が周航できる運河が縦横に造られている²⁹。これは、近代化投資が一部の運河でしか行われなかったイギリスとは対照的である。このように進められてきた近代化投資の象徴がストレピ＝ティウ船舶昇降機（Strépy-Thieu Funicular Lift）、1968年建造のロンキエール・インクライン（Ronquières Inclined Plane）である。特に前者は水力リフトの保存と水運を両立させるために造られたものである。これらはエノー地域のエノー運河（Voies d'Eau du Hainaut）という非営利組織（ASBL）が中心となって管理され、それらと世界文化遺産である水力リフトを一体とする観光が提案されている³⁰。運河にまつわる近代と現代の技術が狭い地域に並存していることに観光的価値を見出していることから、近代と現代が混在することがベルギー運河の魅力と考えられていると言えよう。すなわち、ベルギーの運河は近代的なものだけではなく、同時代的なものでもあるのである。

近代化投資のため、2003年には商用航行が40%も増加し、現在も増え続けている。フランドル地域のフランドル運河振興局（Promotie Binnenvaart Vlaanderen、

以下PBV）やワロン地域の運河・インターモーダル輸送振興局（La Direction de la Promotion des Voies Navigables et de l'Intermodalité、以下DPVNI）はともに環境・経済の両面から運河航行を提案している³¹。DPVNIのホームページ³²には商用情報と観光・娯楽情報が並列しており、この2つの機能がともに重視されている。フランドルのPBVも（1）河川・運河の商業的利用、（2）娯楽、（3）沿岸輸送（shortsea shipping）を提案し、（1）と（3）については、道路交通の混雑防止や地球温暖化ガスの排出削減といった利便性を強調している。このような動きには、欧州連合（EU）が環境重視のモーダル・シフトとして、二酸化酸素排出の少ない運河舟運の意義を強調しているのと呼応している³³。

ベルギーはもともと政府主導で運河建設が進められ、現在の投資や利活用でも政府が主導する面が強いが、民営化の流れの中で次第にNPOの動きが強まっていることにより、イギリスとの距離が縮まっていると言える。

ただし、イギリスでは、運河の狭さが観光の魅力になったのとは違い、ベルギーでは幅が広く、商用航行と娯楽のための航行とが並存している。イギリスの場合、アマチュアがゆっくり航行しても問題はないため、スロー・ツーリズムの魅力も備えているが、ベルギーでは田園のみならず、工業地帯を航行することが多く、田園観光としてよりも、産業観光としての価値がある。その点が、主に田園を航行するフランスとも違い、都市住民のレジャーとしての観光地化がベルギーで不充分であった原因であろう。

このような事情を背景にして、運河への「まなざし」もイギリスとベルギーの間では異なってくる。イギリスでは、田園観光、運河散歩、ナローボートによる運河航行といった特徴があり、それらが運河ファンをひきつける魅力になっている。対してベルギーでは、近代から現代までの技術の集積や、田園から工業地帯までの景観を一度に見られる「複合体」としての魅力を強調しているのである。

5. 中国・日本における運河への「まなざし」

これまで運河への「まなざし」に着目して、イギリスとベルギーを取り上げ、時代や地理的条件などから違いがあることが分かった。しかし、イギリスとベルギーはともにヨーロッパである。イギリスとベルギーを相対化するためにも、中国・日本を比較しながら、運河についてどのような「まなざし」が形成され、どのようにヨーロッパとは違うのか、検討しよう。

（1）中国の運河

中国の運河といえば、北京から杭州までをつないだ京杭大運河が代表的であろう。現在、この大運河が2014年の世界文化遺産登録を目指している³⁴。大運河を評価する特色の1つが考古学的発見である。宋代に北運河で沈没した船が発掘されたり、また明代の閘門跡が山東省で発掘されたりしたことが登録を後押ししている³⁵。また過去の建物群の修復も、遺産登録に向けた努力として精力的に進められている。たとえば、大運河の終着点である杭州市は大運河博物館を創設し、そこにある古い橋などを観光資源として保存・利活用しようとしている。

大運河以外にも、靈渠運河が世界遺産の暫定リストにノミネートされている。J・ニーダムによると、靈渠運河は現存する最古のコントロール（等高）運河であり、パウンド・ロック（閘門）は欧州で使われる400年以上も前に中国の大運河で作られていたという³⁶。このように当時の運河技術は世界最先端を誇っていたのである。しかし、靈渠運河が農業用水路としても活用されるなど、当初から運河に多目的なものが付与されていたと考えられる。そこからは東アジア的な多目的性の起源も示されている。運河建設の目的は、第一に航運であるが、他に灌漑、排水、治水、発電などの目的も考慮されているのである³⁷。

しかし、運河に対するイメージは、このような経緯から、近代化ではなく、前近代の象徴である。中国は平野部が多く、運河輸送が効率的になる条件を満たしていた。そのため、運河は前近代の高い技術水準を反映していたのに対し、近代は運河にとって停滞のイメージがある。運河は近代に修復することができず、たびたび航路として活用できなくなったし、運河・河川を含めた統一的な水路行政も不在であった³⁸。運河の建設・利用は清末・民国期に停滞し、人民共和国時代に修復されたというイメージが強い。現に中華人民共和国は水利の大躍進、「河網化」（河川ネットワーク化）を掲げ、運河・水路建設に積極的に取り組んでいくことによって、前時代との違いを喧伝していたのである³⁹。

現在、中国の観光資源として古鎮が注目を集めている。特に運河周辺の古鎮（たとえば西塘・烏鎮・蘇州・紹興・朱家角）は、「水郷」の町と喧伝され、観光客であふれている。運河には前近代のイメージがあり、それを観光資源として活用した舟遊びが導入される。そこで使用される観光船も伝統的風貌の舟である。現在のところ、中国人にとって運河とは、歴史的存在、しかも近代以前の古きよき存在なのである。

そこには、近代化がまだ同時代のものであり、前近代的なもののみを観光地とみる「まなざし」があると考えられよう。中国にとって「近代」が半植民地化や侵略という負の歴史を引きずっており、先述のように運河の歴史もそのイメージと重なる。ヨーロッパや日本のように誇りにすべき「近代」というイメージからかけ離れている。上海市や福建省アモイ、広東省開平のように近代建築などを肯定的に評価し、近代に自らのアイデンティティを求める都市もあるものの、全体としてみれば、近代化遺産の意味が重視される段階にはまだないのかもしれない。

(2) 日本の運河

日本では運河を積極的に見る動きはまだ少ないのが実情である。それは、運河が他国と比べ疎遠な存在であることも影響している。しかし、1970年代の小樽運河保存運動のように、徐々にではあるが、運河への関心が高まっており、国土交通省が2007年に「運河の魅力再発見プロジェクト」（以下、「プロジェクト」）を公募したり⁴⁰、東京都港湾局も「運河ルネッサンス推進地区」を進めたりする動きも出てきている。

先述の通り、日本において「運河」は曖昧さを持っている。1913年に制定された運河法第1条には、運河は「一般運送ノ用ニ供スル」と規定しているが、これに該当する運

河はなんと琵琶湖疏水しかない。一般に「運河」と呼ばれているものは河川法、もしくは港湾法によって規定されているのである。たとえば利根運河は利根川の支流と位置づけられ、河川法の適用を受けている。また、港湾法第37条には「港湾区域・・・又は港湾区域に隣接する地域」の中に、「水域施設、外郭施設、係留施設、運河」と定められ、港湾区域に隣接する運河は港湾法の適用を受ける。運河と呼ばれていても、行政的には河川や港湾の附属物として扱われてきたのである。2007年の「プロジェクト」の文言にも「臨海部に数多く残されている「運河」とあるように、港湾と結び付いたものが想定されている。すなわち、運河は行政上、独立した行政課題とみなされることが少なかったのである。

日本の運河を時期ごとに3つに大別しよう⁴¹。第一に前近代の運河群、第二に鉄道開設前の近代的運河群、第三に20世紀に入ってから運河群である。そのうち、第一の江戸時代に源流を持つものとして、「プロジェクト」では貞山・半田・堀川運河が当てはまる⁴²。第二カテゴリーは少なく、強いて言えば貞山運河が当てはまる一方、それ以外の7件は第三の範疇に分けられる。

この3つをそれぞれ見てみよう。前近代（特に江戸時代）にできた第一の運河群には、現在は運河と呼ばれないが、京都の高瀬川や大阪の道頓堀などがある。「プロジェクト」に選ばれた堀川運河（宮崎県）は、飢肥杉を輸送するため、油津と飢肥を結ぶ運河であり、江戸時代に開削され近代に拡張された。この運河は飢肥・油津という歴史的街並みのなかで歴史的価値があると位置づけられている。半田運河も伝統的街並み（蔵の町）と結びついている。

明治初期に鉄道が普及するまでに開削された第二の運河群としては、琵琶湖疏水（京都府、滋賀県）や堀留運河（静岡県）、利根運河（千葉県）、兵庫運河・新川運河（兵庫県）などが挙げられる。しかし、これらの多くは鉄道の時代が到来すると意義を失う。琵琶湖疏水は、京都の近代化を支えた歴史的意義から、水路閣・隧道・隧道竪坑・インクライン・発電所などが保存されている。琵琶湖疏水は輸送にくわえ、上水道・発電など多目的に利用された。琵琶湖疏水については遊歩道の整備も進みつつあるが、明治期には既に船舶に蒸気機関の使用が可能であったため、イギリスと違い曳船道がなく疏水沿いに連続して散歩できる道になっていない。それでもインクライン周辺は花見スポットとして京都市民に親しまれ、多様な歴史的建造物が残る意味で、イギリスの運河に最も近いといえる。

しかし、たとえば日本最長の北川・東名・貞山運河も、鉄道が通るまで北上川と阿武隈川をつなぐ運河として輸送に貢献したが、それでも46kmしかないのである。日本では山岳が多く高低差があるため、運河が主な内陸輸送手段にならず、むしろ短距離の輸送を目的としたものが多かった。その点は、大陸に属する大陸ヨーロッパや中国と異なるし、同じ島国であるイギリスとも異なるのである。

鉄道延伸にくわえ、本稿で言う第二期の終焉には1897年に河川法が制定されたことも大きかったと思われる。この法律は治水を重視する姿勢を強調しており、それにのっとり、荒川・淀川のように治水のため河川の流れを変える改修工事が行われてきた。これは「人工的に開削した水路」という意味で「運河」と呼べなくもないが、

そう呼ばれることは稀である。主な目的が輸送ではなく、あくまで治水にあったからであろう。明治初期には治水と舟運を同時に実現する試みが行われたことがあった。たとえば蛇行しながら大阪市内に入るため頻繁に洪水を引き起こした淀川は、まっすぐに改修され毛馬閘門を介して大川とつながれたことで、淀川から中心部への舟運も可能とした⁴³。しかし、「大阪の諸川には運河法か港湾法を適用して欲しいと意見書」という記事によると、河川法が治水を目的としていて「水運の上に不都合」であるため、大阪の河川に運河法か港湾法の適用をしてほしいとの内容である⁴⁴。当時舟運を担う河川・運河が河川法の適用を受けており、水運よりも治水が重視されていたことが窺われる。日本では降水量が多く、河川の傾斜も急であるため、治水が政府にとって最重要の課題になり、それと舟運との対立を解決するのは容易ではなかった。舟運路確保のためには、水深を深くし、流速を遅くする必要がある一方、洪水を防ぐためには、流速を遅くしてはならず、水深を浅くする必要があるという⁴⁵。このように、舟運よりも治水が重視され、運河も治水行政の一部になったのである。それを背景に、運河が日本人の意識の中で河川の一部と考えられ、独立したものとして認識されなかったのも不自然ではなかったと言える。

対して、第三の運河群は、主に港湾や埋立地と結びつき、「港湾法」が適用される運河である。これこそ運河を観光資源として利活用する際に近年強調されるものである。

その先駆が小樽運河である。小樽運河は1914年に着工、1923年に完成し、運河周辺には石造倉庫が立ち並び光景が現出した⁴⁶。しかし、港の衰退とともに、運河は使用されなくなった。北海道道臨港線の整備を契機に、運河の保存をめぐる運河保存派と道路建設派とが対立し、市全体を巻き込む問題に発展するが、当時の北海道知事の斡旋により運河を一部埋め立て、臨港線と小樽運河ふれあい散歩道とともに整備する折衷案が採用された。浅草橋～竜宮橋間は埋め立てられ当初の幅の半分程度に狭くなったが、多くの観光客を集める観光スポットとなっている⁴⁷。

コンテナ船や大型船が登場したため、戦後、主な港湾施設が海側へとシフトし、かつての港の経済的意義は失われていった。その結果、旧来の港湾地区が衰退し、そのリノベーションが喫緊の課題となった。その先駆が小樽運河であった。なぜなら、小樽は戦後既に樺太やロシア・中国との貿易を失い、他の港より早く港湾機能が衰退し、観光資源として見る「まなざし」が1960年代に既に登場していたと考えられるからである。

小樽のような動きは、港湾地区のシフト、港湾地区の再開発と軌を一にして、全国へと広がっていた。たとえば富山市では、富山港と富山駅そばの船溜りとを結ぶ富岩運河、およびその象徴である中島閘門一帯を「富山県富岩運河環水公園」として整備している。これも1930年代の運河であり、運河利活用の最先端の事例であると言える⁴⁸。そこでは運河クルーズが週末に実施され、中島閘門は「水のエレベーター体験」と銘打って、動態保存されている(写真4)。

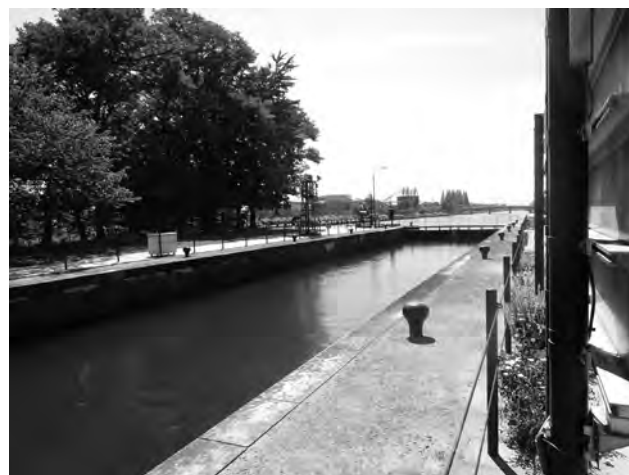


写真4 富岩運河と中島閘門(富山市) 撮影:筆者

名古屋では、中川運河沿いの倉庫をアートにするキャナル・アートが開催されている。そして、東京でも天王洲運河などの利活用を含む「運河ルネッサンス」がその一例である⁴⁹。京浜地帯の運河は、明治から昭和にかけて周囲を埋め立てられてできた運河群であり、重工業化にともなう埋立事業と軌を一にしていた⁵⁰。これらの運河は輸送を主とする意味で文字通りの「運」河であったが、イギリスや中国のような長い運河ではなく、あくまで港湾と結びついた運河であったのである。

このように、日本では港湾地区の再開発の一環として運河が整備された面が強い。この運河群こそ、他地域と比べてたときの日本の特質と言える。周りにあるのは田園ではなく港と工場地帯である。富山市の運河クルーズでも、周囲は公園であるが、もともとは工業地帯であった。京浜地帯の運河を使って工業地帯などを見て回るクルーズが計画され、一定の人気を集めているが、ヨーロッパのようなナローボートのクルーズとは異なるのは確かである。日本では運河が港湾や工業地帯と一体化しているため、港湾のみならず、臨海工業地帯を構成する工場群という新たな要素が重視されている。運河自体に積極的な意味が付与されず、運河と港湾・工場とが結びついていることが運河への「まなざし」の日本的特色になったのである。その意味で、運河が独立した行政課題として強く認識されているイギリスやベルギーとも異なり、やはり港湾と結びついた形でしか運河が認識されていない日本の事情が反映されている。そうであっても、このような運河を観光地とみる「まなざし」は、港湾や臨海工業地帯を非日常なものとみなす脱工業化社会まで待たなければならなかったと言える。このような港湾地域が非日常として観光の対象とみなされるような脱工業化によって、第三の運河群も観光資源にしていく動きが活発になっていると考えられるのである。

むすびにかえて

本稿は運河への「まなざし」を、国際比較という観点もくわえつつ、見てきた。地域間の違いには、運河が建設された際の歴史的背景、気候や地形などの地理的背景など、さまざまな要因が作用していたことが分かる。ここで、横軸を歴史イメージとして前近代～現代でとり、縦軸を地理

的イメージとして内陸～海でとると、表2のようになるうか。イギリスでは、運河は近代的イメージであり、主として内陸的イメージである。その結果、田園的イメージも備えた運河への「まなざし」が形成された。他方、ベルギーは近代～現代のイメージ、内陸～海のイメージが強い。そのため、イギリスとは違い、産業的、現代的イメージも重要になってくる。日本では近・現代のイメージ、海のイメージが強い。そこからは、工業的、現代的イメージがベルギー以上に重視されているとまとめられる。

表2 運河への「まなざし」

		歴史的要素		
		前近代	近代 (18・19世紀)	現代 (19・20世紀)
地理的 要素	内陸	中国	イギリス	
	海		ベルギー	日本

(出所) 筆者作成。

このように、運河へのまなざしには歴史的側面、地理的側面にくわえ、自国に対する現イメージも反映していよう。イギリス・ベルギー・日本はともに先進国であり、かつ工業化から脱工業化へと変化を遂げている。そこでは、近代的、田園的、工業的なものも「非日常」として考えられるようになった。それに対し中国は未だ発展途上の国家であり、工業化のまっただ中にある。脱工業化しつつある沿海部もあるが、まだ近代的、工業的なものは同時代的であり、観光資源となる動きも一般的ではない。それを背景に、近代化を見るまなざしは、先進国と異なるのは当然であった。このような国際比較を通じて、各国における運河の位置を再認識し、それぞれに適合した運河の利活用状況を理解し考えることも可能であろう。

注

1. 本稿は、静岡文化芸術大学文化政策研究科長特別研究費「産業遺産の利活用による地域振興戦略について—イギリス・アイルランド・ベルギーの事例を題材に—」の成果の一部である。
2. ジョン・アーリ(加太宏邦訳)『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局、1995年、Urry, John, *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*, Sage, 1990.
3. 日本建築学会編『水辺のまちづくり 住民参加の親水デザイン』技報堂出版、2008年、第2章。
4. 『精選版 日本国語大辞典』第1巻、小学館、2006年、597頁。
5. *Britannica Encyclopedia*, p.791 (canalの項) には世界の主要運河を目的別にN(舟運)とM(多目的)に分けているが、欧米はNがほとんどである一方、アジア・アフリカはMがほとんどである。
6. たとえば増田彰久『近代化遺産を歩く』中公新書、2001年、156～166頁では、日本の運河が紹介されているが、どちらも含まれていない。
7. "Information Document on Heritage Canals", <http://whc.unesco.org/archive/canals94.htm> 2012年9月27日閲覧。
8. *The Derwent Valley Mills: Your Guide to Derbyshire and the Peak District's only World Heritage Site*, Derwent Valley Mills Educational Trust, 2007, pp.32-33.
9. UNESCOのウェブページには世界遺産を検索する機能があり、canalで検索すると暫定リストでも69件にものぼる。ただし、それらすべてが世界文化遺産の構成資産として運河を含むわけではない。
10. "Guidelines on the Inscription of Specific Types of Properties on the World Heritage List" http://bunka.nii.ac.jp/jp/world/docs/13_fuzoku3.pdf 2012年9月27日閲覧。
11. 運河周辺も含めた景観を重視する論稿としてBurton, Anthony,

- "Canals in the Landscape", in Baldwin, Mark and Anthony Burton eds., *Canals: A New Look, Studies in Honour of Charles Hadfield*, Phillimore & Co. Ltd, 1984.
12. ICOMOS, "The International Canal Monuments List", 1996, <http://www.icomos.org/studies/canals.htm> 2012年9月27日閲覧。
 13. アーリ、前掲書、186～188頁。
 14. Mathias, Peter, *The First Industrial Nation, An Economic History of Britain, 1700-1914*, 2nd. ed., Routledge, 1983, pp.97-102
 15. Burton, Anthony, *The Great Days of the Canal*, David & Charles, 1989, pp.155-166.
 16. Clarke, Mark, *The Leeds & Liverpool Canal: A History and Guide*, Carnegie Publishing, 1994, pp.237-240.
 17. Crew, Kenneth R., *The Kennet & Avon Canal: An Illustrated History*, 3rd ed., David & Charles, 1985, p.155.
 18. その過程については、Blagrove, David, *The Inland Waterways Association: Saving Britain's Canal and River Navigations*, Tempus, 2006.
 19. この600マイルのうち、350マイルは既に法律で閉鎖され航行することはできず、残りの250マイルはすべて航行できるわけではない状況にあった。
 20. たとえば、Bradbury, Julia, *Canal Walk*, Frances Lincoln, 2011.
 21. Ransom, P. J. G., *The Archaeology of Canals*, pp.14, 218-220.
 22. Pratt, Derek, *Waterways: Past and Present: A Unique Portrait of Britain's Waterways Heritage*, A & C Black Co., 2006, pp.136-137.
 23. Squires, Roger, "Waterway Restoration: Public Money, Private Muscle", in Baldwin and Burton eds., *op.cit.*
 24. Ransom, *op. cit.*, p.89.
 25. British Waterways, "About Us", <http://www.britishwaterways.co.uk/about-us/our-structure> 2012年9月27日閲覧。
 26. Defra, "Inland Waterways", <http://www.defra.gov.uk/rural/countryside/waterways/> 2012年9月27日閲覧。
 27. Jones, Jacqueline, *Inland Waterways of Belgium*, 1st ed., Imray Laurie Norie & Wilson, 2005.
 28. *ibid.*, p.iv.
 29. Hadfield, Charles, *World Canals: Inland Navigation Past and Present*, David & Charles, 1986, pp.216-217, pp.247-252.
 30. "ASBL VOIES D'EAU DU HAINAUT", <http://voiesdeau.hainaut.be/tourisme/voiesdeauhainaut/fr/template/template.asp?page=accueil> 2012年9月27日閲覧。
 31. Jones, *op. cit.*, p.7.
 32. <http://voies-hydrauliques.wallonie.be/opencms/opencms/fr/> 2012年9月27日閲覧。
 33. Inland Navigation Europe, "A Changing World", http://www.inlandnavigation.eu/uploads/public_documents/ine_a_changing_world.pdf 2012年9月27日閲覧
 34. 「京杭大運河を整備し、2014年の世界遺産申請を目指す」2009年10月29日、http://news.searchina.ne.jp/disp.cgi?y=2009&d=1029&f=national_1029_019.shtml 2012年9月27日閲覧。
 35. "Province Aids Grand Canal's UNESCO bid", in *China Daily*, August 30, 2012.
 36. ロバート・テンブル(牛山輝代訳)『図説中国の科学と文明』河出書房新社、1992年、302～306、333～336頁。
 37. 国立国会図書館調査立法考査局『中国の治水・水利事業』1960年。
 38. 史念海『中国的运河』陝西人民出版社、1988年、352～366頁；矢野剛『運河論』巖松堂書店、1935年、129～130頁；馬場鐵太郎『支那水運論 附満洲国水運』東亜同文書院支那研究部、1936年、17～22頁。
 39. 国立国会図書館調査立法考査局、前掲書。
 40. 「『運河の魅力再発見プロジェクト』の募集について」http://www.mlit.go.jp/kisha/kisha07/11/110122_.html 2012年9月27日閲覧。
 41. 運河を分類した瀬口哲夫・河合正吉「運河の変容と土地利用に関する研究」『土木計画学研究・論文集』No.14, 1997年は、日本の運河を(1)海岸線平行型、(2)埋立水路型、(3)航路短縮型、(4)市街地連絡型、(5)工業開発・交通拠点型、(6)幹線運河付随型、(7)河川連絡型に分け、

- 時代別に言えば、江戸時代の運河は(1)・(4)・(7)が、明治時代は(1)・(7)が、大正・昭和時代は(2)・(5)・(6)が多いとしている。
42. 『「運河の魅力再発見プロジェクト」認定プロジェクト一覧』<http://www.mlit.go.jp/kowan/unga/080129/ichiran10pro.pdf> 2012年9月27日閲覧。
43. ほかにデ・レーケが木曾川のケレップ水制によって木曾三川の治水と舟運を両立させようとした例などがある。
44. 「大阪の諸川には運河法か港湾法を適用して欲しいと意見書—近く商議所から提出」『大阪時事新報』1921年1月12日 神戸大学新聞記事文庫より。
45. 大熊孝『洪水と治水の河川史—水害の制圧から受容へ』平凡社、2007年、83頁。
46. 詳しくは渡辺悌之助『小樽運河史』小樽市職員共済会、1979年。
47. 田村喜子『小樽運河ものがたり』鹿島出版会、2009年参照。
48. 久保田稔・竹村公太郎・三浦裕二・江上和也編著『運河と閘門—水の道を支えたテクノロジー』日刊建設工業新聞社、2011年、137～141頁。
49. 日本建築学会編『水辺のまちづくり 住民参加の親水デザイン』技報堂出版、2008年、42頁。
50. 遠藤毅「東京都臨海域における埋立地造成の歴史」『地学雑誌』113(6)、2004年。

劇場モデルに関する考察

―帝国劇場（1911）の「前舞台領域」消滅から捉えた「多目的劇場」誕生の経緯について―

A study on the theater model :

The birth of the Japanese Multi-purpose theater and the elimination of the front stage area at the Imperial Theater

永井 聡子

文化政策学部芸術文化学科

Satoko Nagai

Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management

本稿は、「劇場」の意味をオペラ劇場と歌舞伎劇場を軸として考察しながら、舞台と客席の関係性を帝国劇場（1911）の劇場計画をめぐる動きで整理し、日本の劇場が獲得したものと消失したものを検証する。考察の方法は、劇場に関する現場の劇場関係者の言説を中心として論じる。

This is a report on the planning of the Imperial Theater (1911) and the relationship between the audience and the stage. The disappearance of the front stage area and the meaning of "theater" will be discussed while considering Kabuki Theater and the Opera House.

1 - 1. 研究の背景・目的

「劇場」を「民間」「公立」問わず眺め直すと、「劇場」の基本的な空間構成要素は、舞台領域と客席領域が配置されていることである。現代に至る劇場空間の形式が「オーブンステージ」「プロセニウムステージ」と分けられるようにⁱ、この二つの領域を結ぶ在り方によって劇場は様々な様相を呈し、その結ばれ方が重要となる。しかし、特に現代において、公立のホールといえば「多目的ホール」として、基本的には「プロセニウムステージ」形式を採用し、様々な演目に対応できる劇場空間となっている。「観られる側」「観る側」とされるのは、これらを区切る緞帳（幕）が今日の舞台公演ではなくてはならず、その周りには額縁が配置され、額縁の中の世界を固定された椅子席に座って鑑賞することが舞台鑑賞の基本的な鑑賞姿勢となっている。こうした舞台と客席を区切るという発想を定着させたのは近代日本の劇場空間である。しかし、緞帳のある場所に本来は「幕」が用意されていた。重要なのは、それは観客を舞台から遮るものではなかったという事実である。服部幸雄は、『大いなる小屋』の中で、芝居は「幕を後にして演ずる芸」であるとし、「登場してくるものが、それを力として出現する」という、芸能の根源性に関わる精神史がそこにあったと推論した。本来、演劇を見る行為において、観客は舞台に対し異化された芸能要素を自らの意識の中で再編成することを要求され、自然と取り入れてきた歴史がある。古くは、「注連縄」を境に「聖」と「俗」を区別したことは、「神」の存在を想起させ、観る側は「約束事」として舞台の構成を認識し、想像力の中で舞台をまとめ上げた。ここに日本の劇場空間の本質がある。ⁱⁱ

本論では、「劇場」がもつ意味を劇場を構成する舞台と客席を結び前舞台領域を1911年の帝国劇場を中心に検証することで、日本の劇場のモデルについて考察する。すなわち、劇場における前舞台領域の消滅経緯から日本独自の行き方を容認した「多目的劇場」の誕生経緯について検証することを目的としている。

1 - 2. 用語の定義

「劇場」を空間要素、劇構造で舞台と観客の共存を成立する概念とする。「劇場空間」は、物理的に構成する空間要素を指すものとし、「前舞台領域」を舞台と客席を繋げる空間であることとする。

1 - 3. 既往の研究

「劇場」を建築史から捉えたとき、須田敦夫『日本の劇場史の研究』、後藤慶二『日本劇場史』が先駆的な論文である。清水裕之『劇場の構図』は建築的側面から劇場の本質論を「視軸」という概念を用いて検証しており、布野修司『建築論集 - 都市計画という幻想 - 』では、都市論の中において「劇場」の在り方を精神史に関連づけて論じている。服部幸雄『大いなる小屋』は、「劇場」を日本の芝居小屋の誕生から江戸時代の芝居空間の諸要素の意味を精神史から説き起こしている。これらの論文から「劇場」の構成要素の意味を考察する上で大いに示唆を与えられた。その上で、本論では、「劇場」の本質論から帝国劇場建設の意味を中心に、現代の「多目的劇場」の誕生経緯について考察する。劇場空間の展開を考える際、今後の日本の劇場文化を考察することにも繋がることを見据え、この点に着目して我が国の劇場モデルを検証することが目的である。

2. 「前舞台領域」の消滅

我々が言う「劇場・ホール」が「芝居小屋」と呼ばれていた江戸時代、歌舞伎上演を主とする空間には、物理的劇場構造と芝居の上演という関係性の核として、宗教的性格である「聖」と、「俗」、階級性を反映させた侮蔑の称とが混ざりながら、そこには舞台と客席が一体となる仕掛けが用意されていた。本来、我が国の劇場空間が持つ特色には、額縁（プロセニウムアーチ）が決定づける「観る」「観られる」といった対向型ではない空間が存在していた。「舞台」と「客席」との対向関係が存在しない日本の芝居小屋

をクウルト・グラアザは、「舞臺は矢張歐羅巴と同じく幕で閉ぢ」ているけれども、その幕は劇場の横幅全體を満し、特にそれ丈を插める額の設備がない。幕を容れ、従つて亦臺景を仕切るやうになる縁が無いのが、日本の舞臺の効果が我々のと相違する第一の特徴である。唯之だけの事からも日本の演劇と歐羅巴の演劇との目的に根本的の懸隔の存する證明が立つと思ふ。」と、1912（明治45年）四月七日『読売新聞』「日本の劇場の舞台透視法」ⁱⁱⁱの中で書いている。江戸時代の芝居小屋の中、舞台上に設置された「羅漢台」や「吉野」は、舞台と客席との対向関係ではないその証拠であり、観客は次に登場する役者を始まる前に認識し、一方で登場を待ちわびる観客席の興奮とともに、劇場全体としての一体感を実現していた。舞台を裏から見た観客は、役者の背中とその向こうに同じ観客を視界に入れるという二重の視線も持っていた。つまり、「見える」「見えない」ことよりも「見え方」の多様性が容認されていた空間ということになる。こうした日本的劇場空間の意味は重要である。プロセニウムアーチという額縁によって舞台と客席を区切るという、日本の劇場空間の欧風化が実践された近代とはまったく別の次元で創造されてきた我が国の劇場文化がある。ところが、明治の欧風化政策の中、明治44年に開場した帝国劇場建設をめぐる、舞台と客席の関係性を示す前舞台領域が消滅する。新劇場建設にあたり『演劇改良全』の中で末松謙澄は以下のように書いている。舞台と客席の関係性に関する重要な記述に下線を引いた。

「元来演劇は額縁内が世界である。其の中に其世界の空氣が張って居るのである。これから逸脱しては世界外の者となる①のである。花道の揚幕内から声をかけて飛び出したり、見物席から舞台へせり蹴り上がるなどは驚異を以て感興を轉ぜんとする作者の卑怯なる愚案である。誘笑の為に喜劇役者や噺家が利用する唯一の利器である。子供を苛めて見物を泣かさんとすると同様式のもので寧ろ奇術師の小屋に於てなすべきことである。且俳優の扮装は接近して見るべきものとはではない。花道にての所作事中の姫君の毛氈は興の醒めるものである。構造の上から云ふても一階建の少人数の芝居でなければ、花道の過半は二三階席にては見得ないのである。然し如何なる程度に於いてもこれなくては承知ができぬ様子であったから、甚だ不得要領なものを付けることにしたのである。②」^{iv}

下線①は、西欧のオペラ座を新劇場建設のモデルにと検討していた証拠であり、すでに芝居小屋のもつ舞台と客席との関係性を一新しようという意図を汲み取ることができる。②は、新劇場の建設にあたり、演劇界で話題となった仮設花道のことである。花道上における演技が「見えない」ことへの容認はこのときから始まったと言ってよい。

我が国の劇場空間の大転換期となったのが明治末期である。帝国劇場の空間は、パリのオペラ座を模したものとされており、『演劇改良全』には、オペラ座の図が付され、決定的な資料はないものの、劇場の演目は当初、オペラを上演する予定であり、それは「帝国ホテルを設立するに尽力したのと同じで外国貴賓の来朝せられた際に、其の観覧

を仰ぐべき演芸の場所がないから、之れを利用し得られる建物を一つ設けて置きたいと思ったのと、又一にはこれによつて演劇改良の道を講じたいと思ったからである。」と、渋沢栄一は『青淵園回顧録』の「帝国劇場の創立」の中で書いている。続いて、「明治三十九年頃、伊藤公の許へ押しかけて行き、是非演劇改良の事業に力を添へてくれよと相談をもちかけたのである。」とあり、「明治三十九年」時の「新劇場」計画では、①貴賓席は二階正面中央、②廻り舞台は、二重でバックステージ（奥舞台）を備えていた（『建築雑誌』明治39年9月）が、明治41年には、奥舞台はなくなり、花道が両脇花道として加えられ、ちよぼ床、下座、囃子席は「必要に応じてアーチ内に仮設」された。さらに実際には「花道」が下手に斜めに配置され、オーケストラピットも設置された。また、明治39年2月2日『中央新聞』「大劇場設立の問題」劇場専攻者、保岡工学士談においては、「欧米に建築主任者」を派遣することを訴え、「殊に日本の歌舞伎に通じ、其技術と舞台の関係如何を充分に会得した頭脳を有って居なければならぬ、さもないと、只欧米劇場の賛美にばかり心配して、一も欧米式二も欧米式となり、其結果床の浄瑠璃や下座の囃子をオーケストラに移したり、花道を廃したりするような珍案も出来して、数百年来一種独特の美を備へて発達し来つた、日本の歌舞伎の所作事は、模範劇場の為に打ち壊されるやうな始末になる。」と書いた。ヨーロッパにおける近代劇場は、16世紀以後オペラが劇場空間の理念を生み出し、熟成され、発展させる一方で、我が国における劇場空間の欧風化をめぐるの混乱が窺える。「額縁」を配置し、「花道」を排し、歌舞伎を構成していた諸要素を額縁の中に収め、必要なときには仮設したことで「前舞台領域」を消滅させた。我が国の劇場空間において、前舞台領域を消滅させたことは、現代におけるいわゆる「多目的ホール」を誕生させる契機となった。

明治末期、19世紀の終わりには「プロセニウムアーチ」導入時における2つの方向性が認められる。

それが、「分断」と「融合」を繰り返す中、①均質 ②不均質の混合が日本の劇場空間において構成されてきた経緯があることを前提としたい。意識の中で再構成するという行為は、観客がどの客席からも平等な視界を確保するという均質さとは別の次元で捉えなければ説明できない。鑑賞対象が同じように見えることが日本の劇場空間には当てはまらない。舞台に対し異化された空間構成について、清水裕之は『劇場の構図』の中で、特に文楽の空間構成に着目してそれを「均質性」「不均質性」という概念で指摘した。

「人形浄瑠璃の場合には、舞台の人形と遣い手、床の語り手と三味線が観客に対して並列して配置されている。従つて、芸能空間の全体は、決して均質になり得ない。（下線、筆者による）床の脇で聴いている観客と、ずっと後方の席で聴いている観客とでは、あきらかに芸の受け止め方が異なるであろう。床に近い観客は、どうしても義太夫の語りに強く影響を受けるであろうし、また後方の席では、義太夫の緊迫感は薄くなるであろうが、今後は全体を総合的に眺めることができる。異化の指向の強い芸能空間は、このように本来不均質を前提としているのである。（下線、筆者による）」^v

また、ドナルド・キーンは、吉田健一・松宮史朗訳『能・文楽・

歌舞伎』講談社、2009 年の中で、「少なくとも文楽では、西欧のある種の人形芝居のように、観衆に芝居ではなくて現実がそこにあると思わせたい誘惑が見事に斥けられている。」^{vi}と述べ、そこにリアリズムが欠如していることを前提として観客が自身の中で舞台をまとめあげている事実を指摘した。

小山内薫は、『芝居入門』の中で日本の劇場空間の特色とその展開について述べている。以下、文中の下線は筆者による。「これを要するに、舞台の迅速な且芸術的な転換に於いては、日本より百年も遅れて「廻り舞台」を持った西洋の方が今では、遙に日本を凌駕してゐるのである。その故は、西洋には進歩があつて、日本には「進歩」がなかつたからである。日本の舞台設備は二世長谷川勘兵衛のあの巧緻にまで達しながら、それから先へは今に一歩も出ないものである。残念ではないか。口惜しいではないか。併し、それ程「廻り舞台」「引舞台」などでは成功してゐる欧羅巴人も、日本の「花道」の使ひ方には、いまだに無知であらうしい。」と書いた。また、「伯林博物館のクルト・グラアザ氏は、いつか日本へ来た時、沼津の平作の花道の使ひ方を見て、國へ歸つてから、その鑑賞を興味深い、しかも學理的な論文で発表した。私はその翻譯を木下杢太郎君の筆で読売新聞の昏上に（後「地下一尺集」に収めらる）見た記憶がある。ラインハルトはあの論文を讀まなかつたのだらうか。」^{vii}とし、「誠に「花道」は日本演劇の唯一の誇り①である。本花道を川と見て、假花道を岸と見た「野崎」の幕切れ。両花道を吉野川の兩岸と見た「妹背山」の山の段。人物が假花道から正面の「歩み」を通つて本花道へ掛かる間に、舞台から景色を転換する技巧（今の「沼津」の場合、「切れ興三」の木更津など。）かういつた花道の使ひ方は、まだ西洋人の夢想だにしない所②であらう。所詮「幕外の引込み」（この場合には花道だけが一つの舞台を形作るのである）などに至っては、決して世界の何処にも類例を見ることが出来ない③。併し、私達は決して安心してはゐられない。私達は私達の唯一の誇りである「花道」を尚一層有効に尚一層藝術的に為上げなければならぬ。「廻り舞台」に進歩があつたやうに「花道」にも進歩はあるに違ひない。ラインハルトのやうな人が、若し日本の「花道」の眞の使用法を知つたら、この先又どんな事を考へ出すか測り知れないのである。私は窃に心配する。「廻り舞台」で西洋に負けた日本が、また「花道」で西洋に負けるやうな時が来なければ好いがと。④」^{viii}帝国劇場が完成された後の 10 年後、築地小劇場のような実験室としての小劇場では舞台と客席の関係性は演出との関連で多様性を持つに至ったが、小山内薫の言葉、特に①～④の下線では、後の日本の劇場空間の「無目的な」多目的劇場誕生を示唆している。

3. 現代における「多目的ホール」の展開

舞台と客席は同じ大屋根で括られており、花道を含む劇場空間の諸要素から構成される前舞台領域が劇場の特色であり、これは額縁はありながら、馬蹄形の客席で一体感を創造したオペラ劇場との同一性を見ることができる。一方、W. シェイクスピアの作品が上演された当時の劇場や能舞台との相違は、「半屋外」「半屋内」というキーワードで括

り、「ひとつの空間の中に閉じ込めて宇宙を表現する」という劇場空間という見方をすれば、プロセニウムアーチという額縁で区切られた劇場空間も芝居小屋も、馬蹄型のオペラ劇場、棧敷で囲む芝居小屋は、同様の宇宙を形成していたと捉えることができる。表現の可能性に関しては、オペラ劇場は、「奥行き」を拡げ、芝居小屋は「花道」「大臣柱」「棧敷席」から構成される前舞台領域を配置することで、中心を解消する空間構成が成立したのである。こうした劇場空間において、遠近法がもたらすリアリティは存在しない。一方、オペラが劇場空間に対して行った挑戦について、清水裕之は、『[建築設計資料] 63 演劇の劇場 プロセニウムケーし来とオープン形式の相克』^{ix}の中で、以下のようまとめている。

①第一の挑戦

- ・劇場への透視画法の導入に代表される奥行きと拡がりへの挑戦
- ・限定された空間の中に、いかにして「無限な宇宙を擁護するか」という戦い
- ・劇場美術史の中で最高位に位置づけされるビビエナー族の背景画を見るとき、劇場空間における無限への執念がいかに強大なものであったか

②第二の挑戦

- ・劇場にいかに神を出現させるかという挑戦
- ・擬人化された神ではなく、宇宙精神としての神のことであり、具体的には天地を支配する力のこと
- ・天地を支配する力を最も象徴的に啓示するのは、物理力としての重力
- ・その足跡は、劇場における機構の技術の歴史に見ることができる

しかし、帝国劇場建設の問題は、オペラ劇場と歌舞伎劇場がそれぞれに舞台と客席空間の一体性を実現していたにもかかわらず、それぞれがもつ「宇宙精神」から反映された舞台要素を新たに同一空間にあてはめてしまったことにある。

劇場の近代化は、そもそも社会の階級性を反映した空間でありながら、舞台と客席の高揚感から生み出される捉えようのない両者の矛盾性に満ちた空間であり続けてきた歴史である。この矛盾性を確保することで劇場は本来の意味を持つ。逆にこの矛盾性を消し去ろうとした瞬間に劇場の生命力が失われるのである。

現代の劇場において表現の可能性を上げたのは、「照明」という新しい技術である。それは、ホリゾンという舞台奥の無限の広がり可能性を実現させ、プロセニウムアーチ内でのからくりの技術的完成度を高めた。

19 世紀から 20 世紀初頭において、演出家であり舞台照明家であるアドルフ・アッピア（1836 - 1928）の演出論には、近代演出論に照明設備の導入という近代技術を持ち込み、劇場空間に大きな影響を与えた。それは現実の再現ではなく、舞台の本質を捉える光のリアリティであった。

ヨーロッパの劇場空間を大きく変えた劇場に、バイロイト祝祭劇場（1876 年開場）がある。現代でもその姿を堅持している。R. ワーグナーが建築家の連携により実現した「舞台と客席との関係性」に特色がある。「二重のプ

ロセニウムアーチ」の構造が、客席からオーケストラピットを視界から消し、「舞台と客席の一体感」を創出した。それは劇場の近代化に大きな影響を与えた。西洋の劇場では平土間席を囲むように重層された桟敷席をもつ、いわゆる囲み型（馬蹄型）の客席から、封建社会のヒエラルキー下での視覚の不均質さを解消する客席空間であったが、バイロイト祝祭劇場において客席に優劣をなくす均等の資格レベルをもたせようとした結果、その客席空間は囲み型（馬蹄型）から扇型の客席空間へと革命的な空間表現の変化が遂げられた。^{*}ここではまた内部空間の装飾性が排除されるなど、機能性を直接形態に表現しているという点においても、近代建築の先駆性が見られる。その後、M. リットマンによるプリンツ・レゲンテン劇場（1901年）で、この扇型の客席形態が借用され、ドイツの近代劇場の理念が確立された。19世紀末から20世紀初頭において、演出家であり舞台照明家であるアドルフ・アッピア（1826－1928）は、舞踊家エミール・ジャック・ダルクローズとともに、ドレスデンにダルクローズが設立したダルクローズ学校内（1911年）ホールにおいて、ルネサンス以来初めて、舞台空間と客席空間を区切るプロセニウムアーチを取り除いた空間を実現した。そこには、照明のリアリズムが「観念の存在に根拠を置く」^{xi}としたアッピアの演出理念は、舞台と客席のそれぞれの構造を心理的に結びつける。加えて重要なのは、劇場技術とダルクローズの身体表現に基づいた「演劇創造と劇場空間との協力関係」である。

4. まとめ

「劇場」が常に舞台と客席が一体となった空間の中で、観客が現実の時間軸とドラマの中の時間軸とを交差させながら、共通の劇的空間が創造される場であるならば、観客が存在し鑑賞するだけで「参加」の意義は達成される。江戸時代当時の観客にとっては、芝居小屋とは、興奮した観客も舞台の世界と融合し、日常と非日常表裏一体となった場であったと思う。しかし、明治の欧風化政策の流れの中で開場した「帝国劇場」は、それまで芝居小屋がもっていた風紀の乱れや経営システムの近代化など脱芝居小屋を謳った劇場建設であり、我が国を代表するような劇場づくりを目的としたものだった。民間資本ではあったが「国力」目線であったことがいまの公立文化施設の運命を決定づけている。作品創造と空間の関わりというよりは歌舞伎もオペラも近代演劇もどのジャンルでも上演するという我が国独自の行き方を容認した、いわゆる「多目的」ホールの原型が誕生した。舞台と客席が対向型になる劇場空間に矯正されたのである。

注

- i 建築思潮研究所・編『[[建築設計資料] 63 演劇の劇場プロセニウム形式とオープン形式の相克]、株式会社建築資料研究社、2006年、p.16-24
- ii 服部幸雄『大いなる小屋』平凡社、1994年、pp.247-255
- iii 太田雅雄『木下幸太郎全集』第十九巻（「地下一尺集」を定本）、岩波書店、1982年、pp.329-334
- iv 末松謙澄『演劇改良全』、文学社、1886年、pp.36-37
- v 清水裕之『劇場の構図』、鹿島出版会、pp.48-49

- vi ドナルド・キーン、吉田健一・松宮史朗訳『能・文楽・歌舞伎』、講談社、2009年、p.215
- vii 小山内薫『芝居入門』、プラトン社、1924年、p.149
- viii 前掲vii、pp.152-153
- ix 前掲i、pp.7-8
- x 永井聡子・清水裕之「明治末期より昭和期に至る劇場空間の近代化に関する研究」日本建築学会計画系論文集、第513号、1998年、pp.135-142
- xi 永井聡子・清水裕之「アドルフ・アッピアの演出理念における舞台と客席の関係性 20世紀初頭における劇空間に関する研究 その1」日本建築学会計画系論文集、第487号、1996年、pp.79-86

【参考文献・文献】

- 永井聡子「劇場空間と演出空間の総合関係に関する考察ー築地小劇場の劇場空間その1」日本建築学会東海支部研究報告集、第35号、1997年
- 永井聡子・清水裕之「明治末期より昭和期に至る劇場空間の近代化に関する研究ー前舞台領域の空間的変遷」日本建築学会計画系論文集、第513号、1998年
- 永井聡子、博士論文「日本における劇場の近代化に関する研究」名古屋大学、2001年
- 永井聡子「特集・地域をプロデュースするための方法と課題」、『ESTRERA』、統計情報研究開発センター、2011年10月号 pp.2-7
- カール・ハアゲマン、新関良三訳「舞台芸術 演劇の実際と理論」、内田老鶴圃（初版）、1920年
- 坂本俊一編『帝国劇場案内』、1911年
- 上野芳太郎編『帝国劇場案内』、1918年3月
- 小山内薫『芝居入門』、プラトン社、1925年
- 横河民輔追想録刊行会「横河民輔追想録」、株式会社技報堂、1955年
- 『横河民輔追想録』、横河民輔追想録刊行会、1947年
- 渋沢栄一「帝国劇場の創立」
- 青淵回顧録刊行会編『青淵回顧録』上、同刊行会、1927年
- 稲垣栄三『日本の近代建築[その成立過程]（上）』、鹿島出版会、1993年
- 歌舞伎座復興記念限定版『歌舞伎座』、株式会社歌舞伎座出版部、1951年
- 島村抱月「抱月全集」日本図書センター、1919年6月28日初版発行／昭和54年9月30日複製発行
- 「帝国劇場創立の計画」『建築雑誌』第20号、237 1906年9月
- 「帝国劇場」『建築世界』第五巻第四号、1911年
- 上田敏「国立劇場の話」『新小説』1906年2月初出
- 小谷喬之助『現代の劇場空間』、新建築技術叢書4、彰国社、1975年
- 遠山静雄『舞台照明五十年』、相模書房、1966年
- 遠山静雄『舞台照明学下巻』、リポレポート、1988年
- 河竹繁俊「歌舞伎演出の研究」、早川書房、1951年
- 伊原敬郎『日本演劇史』、藤森書店、1904年
- 吉見俊哉『博覧会の政治学 まなざしの近代』、岩波書店、1991年
- 小谷喬之助『現代の劇空間（新建築技術叢書4）』、彰国社、1975年
- 明治45年（1912年）4月7日『読売新聞』掲載
- 菅井幸雄『築地小劇場』、未来社、1974年
- 浅野時一郎『私の築地小劇場』、芸能発行所、1981年
- 嶺隆『帝国劇場開幕』、中公新書、1996年
- 帝劇史編纂委員会編『帝劇の五十年』、東宝、1966年
- 田中彰『明治維新と西洋文明ー岩倉使節団は何を見たか』、岩波新書、2008年
- 久米邦武編、田中彰校注『特命全權大使 米欧回覧実記（一）（二）（三）』、岩波文庫、2007年
- 佐藤武夫『公会堂建築』、相模書房、昭和1972年
- 遠山静夫「多目的単一劇場と群劇場」J I T T機関誌No.9、1977年
- 清水裕之『劇場の構図』、鹿島出版会、1988年
- 清水裕之『21世紀の地域劇場』、鹿島出版会、1999年
- 編集日本の美学編集委員会『日本の美学 第一六号』、株式会社ペリカン社、1991年
- 藤波隆之『傳統演劇の再発見』、株式会社白水社、1998年
- 布野修司『建築論集 - 都市計画という幻想 - 』、彰国社、1998年

カリキュラムを横断した各専門分野協同によるプレゼンテーション

Design English: Collaboration and presentation across the curriculum

高山 靖子

デザイン学部生産造形学科

Yasuko TAKAYAMA

Department of Industrial Design, Faculty of Design

マーク D. シーハン

文化政策学部国際文化学科

Mark D. SHEEHAN

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

ジャック・ライアン

文化政策学部国際文化学科

Jack RYAN

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

峯 郁郎

デザイン学部生産造形学科

Ikuro MINE

Department of Industrial Design, Faculty of Design

古瀬 敏

デザイン学部空間造形学科

Satoshi KOSE

Department of Space and Architecture, Faculty of Design

本稿では、静岡文化芸術大学デザイン学部上級生の英語能力、特にプレゼンテーション能力向上のためのプロジェクトについて述べる。このプロジェクトは、デザイン学部生産造形学科と文化政策学部国際文化学科 English Diploma Course (以下、EDC) の学生による協働プログラムである。これは継続的プロジェクトであるが、ここでは最初の二つの段階について報告する。まずコラボレーションの理論的根拠(意義)を述べ、2011年と2012年の実施の詳細について解説する。このプロジェクトでは、デザイン学部生とEDCの学生がチームを組んで製品提案のプレゼンテーションを作成し、最終的にデザイン学部生が英語によるプレゼンテーションを行った。本稿では、両学部学生が何を経験し何を得たかについて述べ、このプロジェクトに対する学生の評価についても言及する。そして、従来のカリキュラムの枠組みを超えた専門分野協同による教育について、初期段階の検証を今後のプログラム研究に反映させて、中長期的な目標を提案する。

This report describes the first two stages of a multi-stage project to improve the English skills, in particular the English presentation ability, of upperclassmen in the Faculty of Design at Shizuoka University of Art and Culture (SUAC). The project is a collaborative effort between students in the Department of Industrial Design and the English Diploma Course (EDC) at SUAC. After explaining the rationale for the collaboration, details will be provided about how the project was implemented in 2011 and 2012. The endeavor involved Faculty of Design majors and EDC students working in teams to produce an English presentation of a product or product concept. The design students ultimately delivered the presentations in English. This report will describe the educational experiences and benefits received by students in both faculties. Furthermore, students' perceptions of the project will be provided. Following a reflection on the progress of the early stages of this cross-disciplinary educational experiment, mid- and long-term goals will be explained.

Introduction

Many Faculty of Design professors come to SUAC from real-world backgrounds and, as a result, know how essential good English skills are to a successful career in the design field. Despite this realization arrived at from first-hand experience by design faculty, some design majors at SUAC have yet to become fully aware of the role that English may play in their future careers. In fact, many incoming freshmen in the Faculty of Design view English as an obstacle or a burden that is best overcome as quickly as possible. As a result of this view of English, many design students enroll in English communication courses in their first year, complete their foreign language requirements and have no other contact with English during their time at SUAC. These educational conditions are unfortunate and deprive students of many

opportunities to not only see the relevance of English to their field of studies, but also to get practical English training as upperclassmen that may either help them in job placement, or inspire them to become internationally-minded designers. The aforementioned situation was the impetus for the project described in this report. The project endeavors to give Department of Industrial Design upperclassmen an opportunity to improve their English skills, specifically presentation skills, in the context of a design course. The collaboration with the English Diploma Course students was designed to be mutually beneficial to both faculties: Design and Cultural Policy and Management. Students in the English Diploma Course are generally recognized as the most proficient and motivated English-speaking students at SUAC; nonetheless, much of their study is classroom-based and academic.

It was thought that giving the Department of Industrial Design students a chance to explain and refine their product concept while giving English Diploma Course students an opportunity to work with future design professionals on a real-world design project would be beneficial for all concerned. By recognizing areas for improvement in both faculties, it was hoped that the two sides could complement one another. The project is currently in its second year and has accomplished a number of short-term goals. After demonstrating these successes and explaining the activities that took place in the first two years, hereinafter referred to as the first stage and the second stage respectively, some of the long-term goals will be presented.

Design and EDC Collaboration: The first stage

The first stage of the Design and EDC collaboration began in the Spring semester of 2011 with nine students from the Department of Industrial Design and twenty one EDC students participating. In addition to helping the future professional designers gain skills in presenting their ideas in English, another goal of the first stage was to promote an awareness of global issues. Therefore, the design instructor chose the theme of food-related global issues. For the first eight weeks of the semester, design students worked on developing their product concepts and prototypes with the guidance and support of their instructor. The collaboration really began in the ninth week of the semester when the two groups of students actually came together for the first time. On the first week of the collaboration, each design student did a trial run of his or her presentation in Japanese. Instructors then paired off one design student with two or three EDC students based partially on the results of a survey asking EDC students which product they found most interesting. Weeks two and three of the collaboration were devoted to a workshop in which students worked together to refine what is now becoming their joint presentation. The mutual benefits of the collaborative nature of the project really start to show themselves during this part of the semester. The EDC students play a valuable role by asking detailed, probing questions which often require the design students to think more deeply about their product and how to best communicate their concept (see Figure 1). The EDC students also benefit greatly both by being exposed to the process designers go through when developing and refining a

concept and by experiencing firsthand the level of professionalism expected of budding professional designers. Both design and EDC students also profit by gaining a greater awareness of the practical matters involved in tackling challenging global issues related to food and poverty. Based on discussions during the two weeks of concept refining workshops the collaborating students also begin to think about how to best communicate the product concept in English. Weeks four and five of the collaboration are devoted to rendering both the design student's presentation and their slides into English. This stage can be deceptively challenging for students as they come to realize they cannot simply directly translate the presentation and slide text from Japanese to English. This stage also requires diligence from instructors in stressing repeatedly that the final English product cannot just simply be a mirror translation of the original Japanese text. Cultural factors and differences in discourse styles between Japanese and English communication styles must sometimes be explained and taken into consideration as the presentation takes shape in English. Fortunately, good collaborative working relationships usually have been developed by this stage allowing the groups to overcome any stress or philosophical disagreements about how to best express concepts both in grammatically correct and natural sounding English. The penultimate week of the collaboration was devoted to a rehearsal for the final presentation. At this stage, the design student is no longer presenting by themselves; they are joined on stage and assisted by their EDC peers whose names are now deservedly on the slide presentation. This rehearsal stage is a chance to fine-tune presentation language, work out any timing issues, correct any spelling errors on slides, and practice fielding questions. The final presentation of the collaboration was



Figure 1. English workshop to refine presentations

publicized and made open to SUAC faculty, staff, and students; it was well attended by Faculty of Design instructors, administrative staff, and Department of International Culture instructors. The hard work put in during the previous weeks paid off as design students and their EDC partners made polished, well-prepared presentations and successfully fielded sometimes challenging questions in English from Department of Design instructors without hardly missing a beat (see Figure 2). The sense of accomplishment expressed by virtually all participants upon completion of the first stage of the Design English collaboration was gratifying for instructors to see. After all, being able to see groups of students set challenging goals and devote many hours of hard work to achieve them is one of the reasons that many people become teachers. The success of the first stage of the collaboration was confirmed by the results of a course survey asking students for their responses to a number of questions about the course (see Figure 3). Responses were overwhelmingly positive, particularly to questions asking students if they found the collaboration beneficial and if they had developed a greater awareness for global issues. Further encouraging feedback came from a few graduating fourth-year EDC students who stated that the Design and EDC collaboration was the most rewarding educational experience they'd had in their entire career at SUAC. The uniformly positive experience of the first stage of the Design and EDC collaboration left everyone involved excited about expanding and developing the program even further in 2012. The next section of this paper will explain the second stage of the collaboration program and how this even more ambitious stage in the ongoing Design and EDC collaboration was managed.

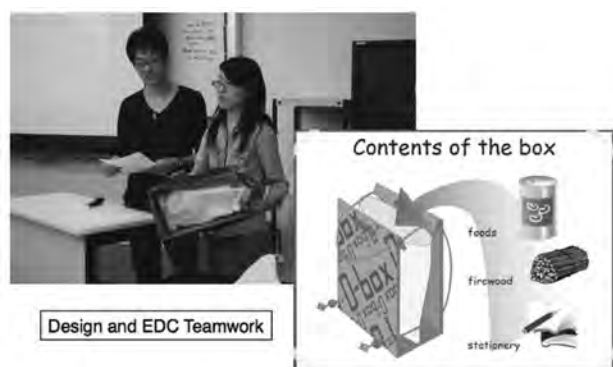


Figure 2. Delivering English presentations

Design and EDC Collaboration: The Second stage

The success of the first stage of this project allowed the founding members to expand its scope, add additional goals, and get official support from SUAC. Improvements at the second stage of this collaboration included adding more members to the team: Ikuro MINE from Department of Industrial Design, Satoshi KOSE from Department of Space and Architecture, and Kaori SUGIURA from the Department of International Culture. A special research grant was received from SUAC to allow the six-member team to continue managing the project, to write and publish a Design English textbook, and explore the possibilities of establishing relationships with design schools abroad. The relationships may entail either having design students study abroad, or arranging an online component so that students can participate in virtual lessons and discussions with students and teachers from design faculties abroad without having to leave Japan. The aforementioned plans are slated for the latter stages of the project. In the meantime, other innovative improvements were implemented in 2012.

The popularity of the collaboration in the first stage caused an increase in the number of design students interested in participating in 2012. This increase in participants was managed more easily due to the addition of Professor MINE to the team. Nonetheless, an increase in design students resulted in a shift in the balance between design students and EDC students. Consideration of student balance will be given when future classes are planned. Needless to say, ongoing adjustments to the project will be implemented to

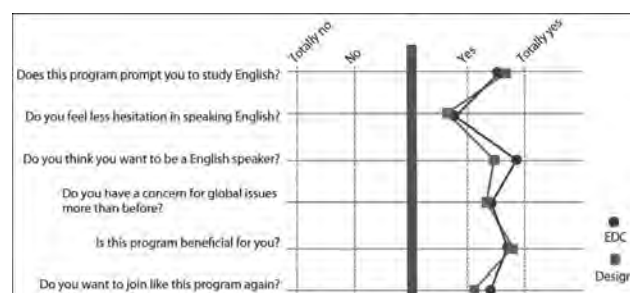


Figure 3. Positive survey results from the first stage of the collaboration

suit the needs of the students and project goals.

Two significant changes to the project from stage one to stage two involved having all students present their products to the class in English one time, and having some teams chosen for a second presentation. The large number of students in 2012 resulted in the need to schedule presentations over two days. After the initial presentations, six teams were selected to present again during exam week at the end of the semester. This second chance to present would allow the teams to revise their work and be more polished presenters. This was a significant consideration given the fact that two foreign guest designers, one from Denmark and one from France, were invited to be audience members and give advice to the students.

Perhaps the most exciting new feature of this collaboration was the inclusion of the two foreign designers as audience members during the final presentation. After the select group of students presented their projects in English, the guest designers from Yamaha Music gave students advice on their products and presentations and later participated in a discussion and Q&A session. The benefits of this experience to both teachers and students alike were immense. From an educational perspective, students were able to get real-world information and advice from experts in the field; they were also able to see excellent language learner role models because both guests were not native speakers of English, yet were fluent speakers and adept at communicating their ideas in their second language. Furthermore, students were able to learn about the design business from young professionals quite close in age to themselves. Cross-cultural exchanges also took place regarding our special guests' experiences living and working in Japan. Having successfully completed two years of the Design and EDC collaboration, it is an ideal time to reflect on what has been accomplished in this short time, and also to think ahead toward what can be done in the future.

Design and EDC Collaboration: The next stages

The first steps toward improving the English educational experience for design majors at SUAC have been described above. The next stages in the project will be outlined in this section. As alluded to above, special research funds

have been provided for the team to write and publish a Design English textbook. Two years of collaborative classroom experience has given the instructors a good idea of the types of language necessary to develop and refine a presentation. The two foreign guest designers who participated in the second stage final presentation as audience members also gave valuable, practical feedback that can be incorporated into the textbook. Design instructors have a clear and well-organized framework within which they have their students work to develop and realize concepts. This framework will constitute the foundation of the Design English textbook within which the body will be filled in. Once the structure of the textbook is finalized and an English corpus of design terms and transactional language is created, the team will work together to begin organizing and ordering the content and learning tasks. It is envisioned that the design textbook will allow students to work from a starting point to create a professional presentation and a physical prototype entirely in English.

In addition to the design textbook, another exciting part of this ongoing collaboration is the goal of establishing relationships with design schools abroad. Team members are currently researching a number of universities in various countries to find schools that best meet the needs of SUAC design students and to which SUAC students could contribute to most productively. Our hope is that the relationships will entail either having design students study abroad, or arranging an online component so that SUAC students can participate in virtual lessons and discussions with students and teachers from far away without having to leave Japan. Exposure to design instructors and students overseas may provide a creative and intellectual stimulus to SUAC design students that would be sure to aid their growth and development, and increase their motivation to study English.

Conclusion

Having successfully completed two years of the Design and EDC collaboration, it is an ideal time to reflect on what has been accomplished in this short span, and also to think ahead toward what can be done in the future. What became quite obvious from this collaboration is that it takes a team of diverse people from all areas of expertise to ensure success for a project of such ambition and uncharted territory. The steps taken to

accomplish the project goals included first giving instruction to design students and EDC students separately in their area of specialization. Secondly, students were brought together in teams so they could share their expertise and learn from one another and their instructors. Finally, design students were given the opportunity, with the support of their EDC counterparts, to present their products or product concepts in English. Further measures were taken to expose students to ideas and language of English-speaking design professionals. All of these measures have already

combined to succeed in being mutually beneficial and expanding the horizons of both design and EDC students. The collaboration project will continue as the dynamic individuals of the team synthesize their talents and work together to complete the English design textbook and forge links with universities overseas. The authors of this report hope that their work will inspire other members of the SUAC community to work on cross-disciplinary projects that make use of the special talents of SUAC teachers and students.

海野 敏夫

デザイン学部空間造形学科

Toshio UNNO

Department of Space and Architecture, Faculty of Design

デザイン学部の学生に構造力学や構造計画を教えることはかなり困難なことであることを、筆者は日々実感している。力学や建築の構造の説明をするとき、どうしても数式を伴う。高校で物理を学習していない学生や数学が苦手な学生にとって、これはかなりの苦痛である。そこで、力学の世界が目に見えればだれでも直観的に理解ができ、少しでも学習に役立つのではないかと考えるのは自然である。有限要素法を用いて簡単な力学モデルを解析し、これをスクリーンに投影することは容易であるが、学生は力学そのものに興味をあまり示さない。解析モデルが自分の作品であったり、歴史的に有名な建築であったら、学生の関心を惹くだろうと考えた。本稿は、学生制作の椅子と有名建築2点の解析を行い、椅子の部材や建物全体の変形と応力の強弱をカラーリングで表示し考察を加えている。

This paper is a trial which is visualization of displacement and stress. Generally speaking, students belonging to a faculty of design are not skillful at dynamics.

So they become to dislike learning the dynamics. If students can see the current of force, they may be interested in the dynamics. Recently we can analyze various complex structures with Finite Element Method. Therefore, I tried to analyze some works. For example, there are the chair designed by student and two famous architectures, the Skyhouse and Villa Savoye. I show displacement and stress of these three constructions by analysis with FEM. We can understand easily meaning of displacement and stress by expression with coloring.

1. はじめに

建築を学びながら構造を知らない学生や、建築設計を夢みながら構造になじめない学生は多い。また、物理学の基礎である初歩のニュートン力学すら学ばずに入学する学生が半数を超える。デザイン系の大学において力学を教えることは、このような困難を前提としなければならない。

ある物体に外力が働いたとき、その物体には内部応力が発生する。その応力の大きさを知るためには数式を解かなければならない。多くの学生にとってはこれが苦痛である。少しばかり複雑な形状を持つ構造物になるともうお手上げである。構造を学ぶことから逃れたいのが次の反応である。

そこで、目に見えない力の状態が可視化できたら少しは理解の助けになるのではないかと考えるのは自然の流れである。応力の可視化の手法として、古くは光弾性実験があったが、アクリル板で実験モデルを作成するため多くの時間と労力がかかった。今はパーソナル・コンピュータを使って簡単に応力の視覚化ができる優れた解析ソフトがある。

本稿は、この解析ソフト（MIDAS GEN）を使用して単純な架構形状をもつ歴史的に有名な建築物や学生の作品をモデル化し、その解析結果を示すものである。

2. 解析ソフト・MIDAS GEN の構成

MIDAS GEN は、FEM により構造物の応力や変形を解析する汎用構造解析ソフトである。FEM は、有限要素法と訳される Finite Element Method の略語である。汎用の意味するところは、あらゆる形状の構造物を有限な要素に分割することで、さまざまな外力に対する応力や変形が分割した要素毎に得られる。あらゆる形状とは、複雑な

形をもつ建築をはじめ、車の曲面ボディ、航空機の機体やロケットまで含んでいる。

しかし、ある構造物の応力を解析するためには、これを適切にモデル化しなければならない。複雑な形態ほどモデル化に時間と労力を有する。ここでは、簡単なトラス構造物を例に、応力・変形の可視化を示す。

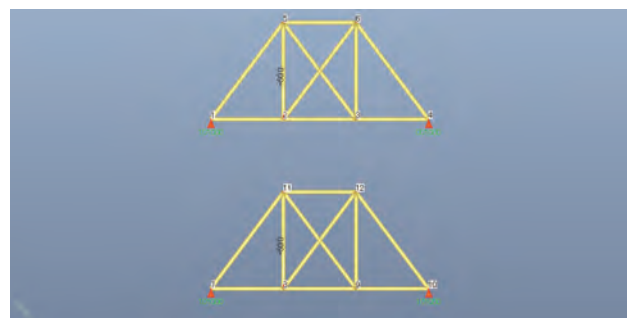


図1. トラスモデル図

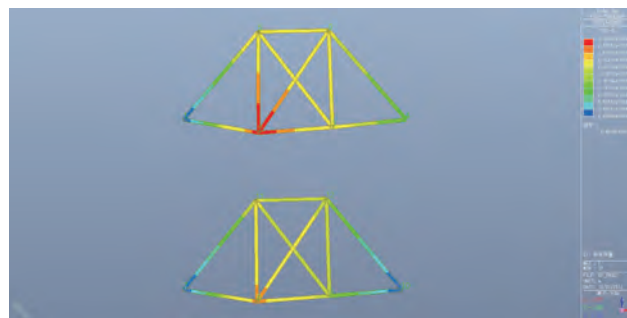


図2. トラス変形

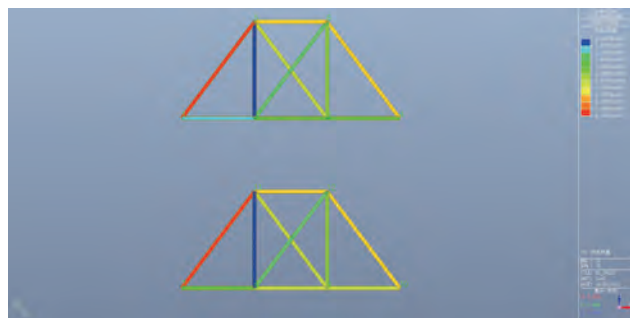


図3. トラス応力

図1はトラス構造の形態を示している。両端を支承で支持した鉄橋に、左下の支点の一つ右側の節点に下向きに集中荷重を与えている。上下のモデルの違いは、支点の条件が異なっている。上が単純梁（左支点：ピン、右支点：ローラー）で下は両端ピンで支持されている。

図2において上のモデルの方に濃い赤色が出ていることは、右側の凡例に示すように、下のモデルより変形が大きいことを示している。また、図3の応力図の凡例は、青色から赤色に色が変化しているが、青は引張力を示しその色が濃いほど応力も大きいことを示しており、赤は圧縮力とその大きさを表している。

台形の上辺を上弦材、下辺を下弦材というが、上のモデルの下弦材の色の方が青と緑で下のモデルの色より青側に偏っている。これは、上のモデルの下弦材の方が下のモデルの下弦材より引張力が大きいことを示している。

この2つのモデルの違いは、支点の条件しかも右側の支点差異だけであるが、変形、応力とも異なった結果になる。計算すれば数値で表されるのでその差は理解できるが、このように視覚化できるとさらに理解しやすくなる。

このトラスの例は分かりやすいが、形態としてあまり学生の興味を惹くものではない。そこで、学生が実際に制作した作品や誰でも知っている有名建築をとりあげ、解析を試みた。次にその実例を示す。

3. 解析例

3-1. 椅子



写真1. 椅子

この椅子は、デザイン研究科（生産造形学科卒）・江畑潤君の学部卒業作品である。

細い針金で座面を支えるため、針金よりさらに細いテンション材であるワイヤーで補強をしている。

一般に、スチール（細い針金）は強度が高いのである荷重を支えるのに必要な断面積が小さくてすむ。しかし、薄

いプラスチックの定規を上から押すと、薄い面の方向に湾曲するように、弱い方向に曲がる性質がある。これが座屈現象であり、スチールのような強度の高い部材を用いる時には圧縮力に注意しなければならない。

椅子の構造を見てみよう。

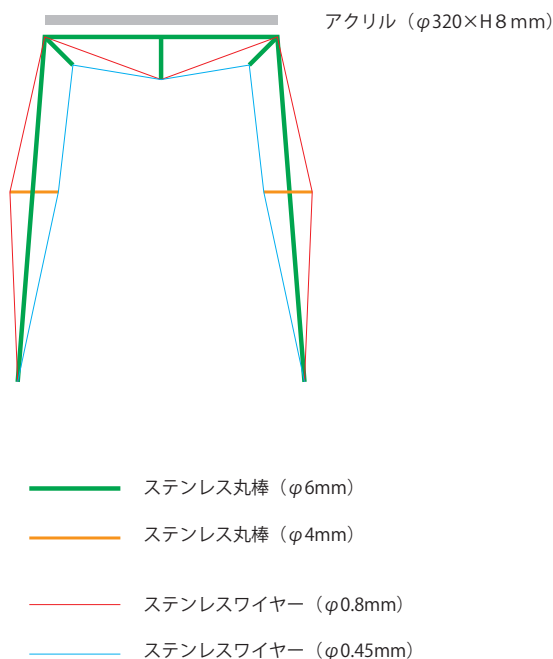


図4. 部材の構成



図5. モデル図（座面有り）



図6. モデル図（座面無し）

座面の荷重を受け止めるために、十文字にクロスした針金の中央下部に突起を設けその先端と端部をワイヤーで結んでいる。トラスの例でも分かるように下弦材は引張材となるので座屈は考えなくてよい。従って、引張材は細いワイヤーが合理的である。つまり、十文字形に組んだ2つの

張弦梁が座面荷重を支えている。

脚の構造を見てみよう。針金中央部に3か所の突起があり、この先端と脚の両端は座面を支える部材と同じワイヤーで結ばれている。さらにそのワイヤーは座面側のワイヤーと連続している。

力の流れは次のようになる。人がこの椅子に座ると座面に荷重が伝わり、それを十文字に組んだ張弦梁が受け止める。この荷重は、張弦梁の端部で繋がっている脚に伝達され床で受け止められる。このときのワイヤーの働きは、張弦梁の引張力が脚の針金の3本の引張材に伝わり脚の針金の座屈を拘束する。

脚の3本の突起の存在は、圧縮材が座屈に抵抗するためには中央部の断面を大きくすることが効果的であることと、座屈に対して弱い方向を作らない最少断面が三角形であることの二重の合理性を意味している。

単純な構造原理を用いることで、製作者が意図した最少の部材で構成されたシャープな形態を持つ椅子が実現できた。

次に、変形と応力を見てみよう。



図7. 変形

1本の柱脚が赤くなっているのは、この脚が外に開こうとしていることを示している。座面中央部は下側に変形しているが、その値は小さい。全体の安定は確保されているが、脚の開きに改良の余地があることが分かる。



図8. 応力

針金の色は黄緑から薄い青で、ほぼ均等に力がかかっていることを示している。座面を支える張弦梁の下弦材であるワイヤーは赤から橙で、引張材として正しく働いていることが分かる。開こうとする脚のワイヤーは橙色となっており、開き止めとして働いていることが分かる。その他の脚のワイヤーは黄緑から薄い青であるので、座屈押えとしてはまだ力を発揮していない。一人の荷重では座屈しないこともこれから分かる。

3-2. スカイハウス



写真2. スカイハウス

菊竹清訓の自邸である。循環更新システムであるメタボリズムを提唱した建築家の思いがすべて内包された住宅である。1958年竣工、このとき菊竹は30歳。床を持ち上げる4本の壁柱、床を支える格子梁、ピロティから2階に上がる階段、開放的な居室、HPシェルの屋根。建築を構成する要素を単純明快な形態のなかで表現している。壁柱と床梁はあたかもそれぞれの存在を主張するかのように一面でしか接していない。また、耐震部材であり床と屋根を支える壁柱は、四隅ではなく正方形の辺の中央にありコーナー部の解放感を強調している。一見してバランスのよい構成であるので耐震的には問題がないことが予想されるが、壁柱と床梁の接合部付近がどのような応力状態になっているか以前から興味があった。柱と梁の接合部を仕口というが、このような接し方の仕口をもつ架構は通常の解析ソフトでは解けない。まさにFEMの活躍の場面である。

どのような結果になるか見てみよう。



図9. スカイハウスモデル図

屋根のHPシェルは寄棟に簡略化したが、版であるので梁は入っていない。肝心の壁柱と梁の仕口部は正しくモデル化している。

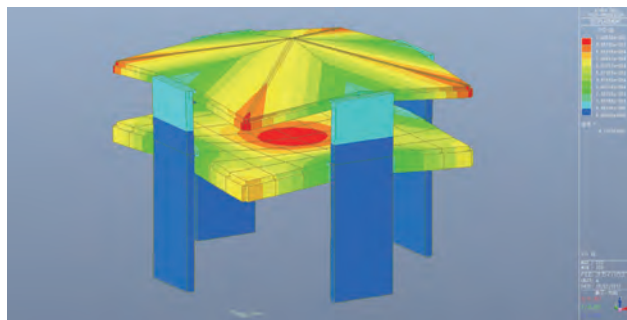


図10. スカイハウス変形（鉛直荷重時）

鉄筋コンクリート構造の部材変形は微小であり、そのままの状態では変化が分からないので、変形の傾向が分かりやすくなるように実数値に倍率を掛け強調した表示にして

いる。最大値を示す赤色で変位は1mm程度である。

鉛直荷重時（自重）の変形は、2階床の中央部が最も大きく、次に屋根のコーナー部先端、2階床のコーナー部先端となっている。予想としては、2階床の先端が最もたわむと思われたが、2階は格子梁で構成されているので屋根の版より曲げ抵抗力を意味する剛性が高いことが分かる。

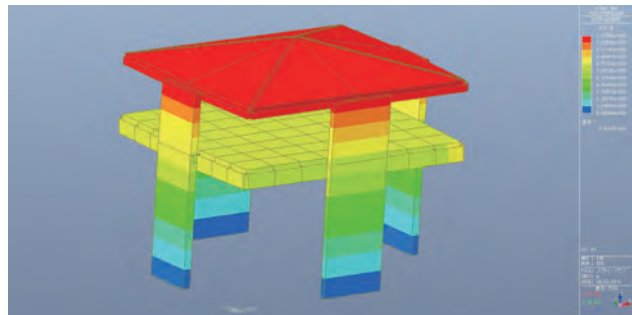


図11. スカイハウス変形（地震荷重時）

図11は、画面左から右側に力がかかった場合の変形を示している。屋根の変位（移動）に比較して2階床の変位が小さいことが分かる。これは、壁柱と2階床、屋根の接合の状態の違いから予想できる。屋根には梁がないが2階床には梁があるので剛性が高く、荷重は大きい（屋根+2階）のに変形は小さくなっている。通常と違う壁柱の配置に関わらず、非常にバランスがよい形態であるといえる。

次に、応力状態を見てみよう。

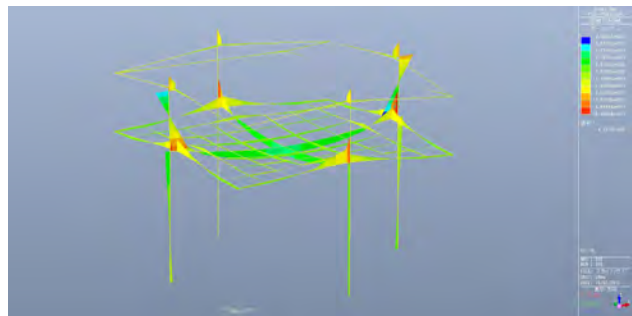


図12. スカイハウス応力（鉛直荷重時）

この図12から分かることは、屋根、2階床梁とも壁柱との接合部に大きな力がかかっていることである。これは容易に想像がつく。支える部材が存在しない位置では応力が生じないことを意味している。もう一つの特徴は、2階床を支える中央部十字の格子梁の応力が最も大きいことであるが、この位置で壁柱と接合されていることから、これも理解できる。壁柱は屋根、2階とも接合部で面外（扁平）方向に曲げを受けている。

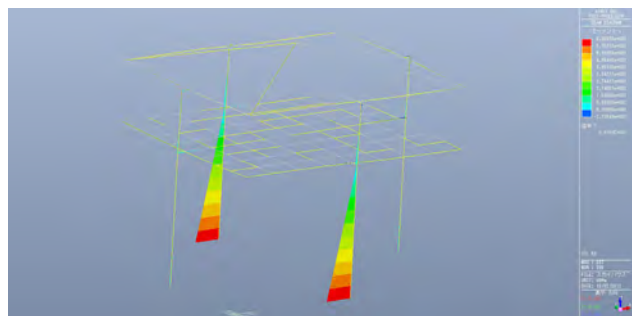


図13. スカイハウス応力（地震荷重時）

図13も図11と同様、画面左から右側に力がかかった場合の応力を示している。加力方向に平行な2か所の壁柱の柱脚の応力が最も大きくこの2か所だけで地震力を受け止めていることが分かる。また、興味の対象である接合部の曲げ応力は大きくない。すべての力は、柱を通して最終的に基礎に伝わり大地がこれを受け止めるのであるが、この接合部で小さな曲げ応力しか発生していないことは意外であった。この事実から、今さらながら思い込みがいかんに発想の妨げになるか思い知らされることになった。ただし、2階の床はこの壁柱でしか繋がっていないので、この位置で力を伝えているのは間違いない。この接合部では、曲げ応力は小さいがせん断力（ずれようとする力）が最大なのは当然である。

3-3. サヴォア邸



写真3. サヴォア邸

ル・コルビュジェの代表作の一つである。1931年完成、コルビュジェ44歳の作品で、彼が主張した近代建築の五原則を明快に表現した作品として評価されている。即ち、①ピロティ、②屋上庭園、③自由な平面、④水平連続窓、⑤自由な立面。

この建築については、写真や図面（平面図・立面図）は多くあるが構造部材が分かる図面は手に入らなかった。そこで、手に入ったアクソメトリック図を参考に、構造部材は耐震部材として標準的な断面を想定してモデル化した。

実際の建築は、一部に門型の架構があるもののほとんどの柱が独立したフラットスラブ構造（床梁がない構造）である。したがって、耐震性は考慮されていないのでそのままでは構造検討に適したモデルにはならない。一般的な架構と同じく直行2方向に梁を入れ、地震時の変形、応力がどのようなになるか検証してみた。

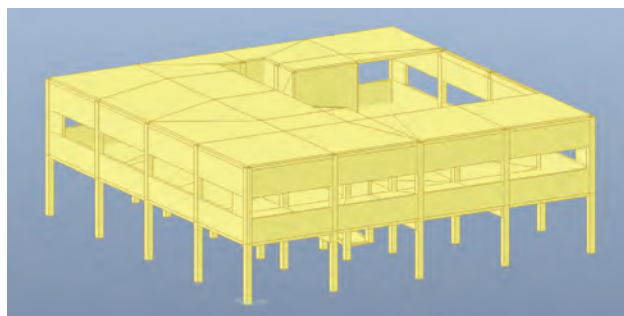


図14. サヴォア邸モデル図

屋上の施設は省略している。柱脚はピンとした。

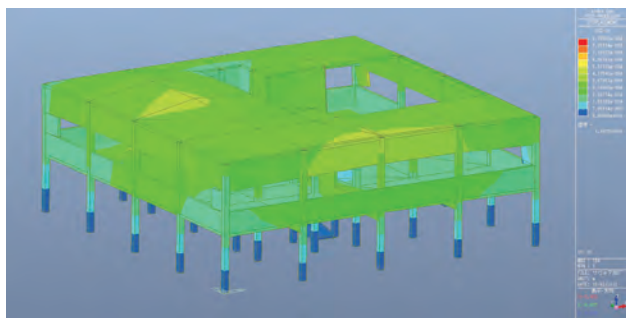


図 15. サヴォア邸変形（鉛直荷重時）

鉛直荷重に対しては、特に偏った変形は存在せず、安定した構造であることがわかる。

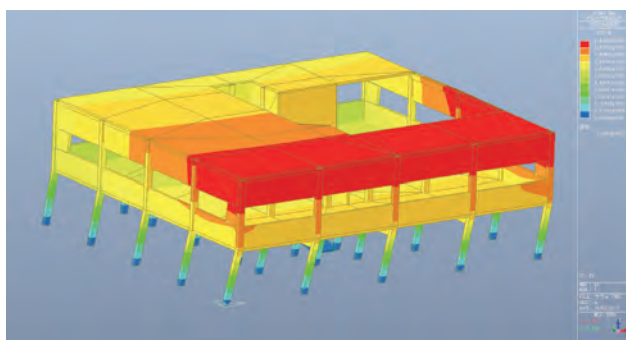


図 16. サヴォア邸変形（X方向地震荷重時）

左から右方向に加力したX方向地震時の変形は、画面手前が赤くなっていることからややねじれが生じていることが分かる。これは、屋根荷重にやや偏りがあることが原因である。

続いて、Y方向（画面手前から奥の方向）加力時の変形を見てみよう。

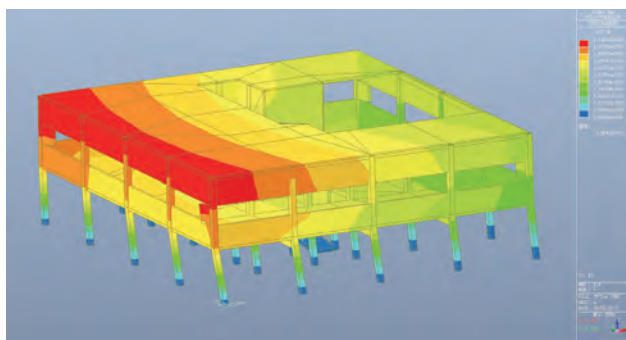


図 17. サヴォア邸変形（Y方向地震荷重時）

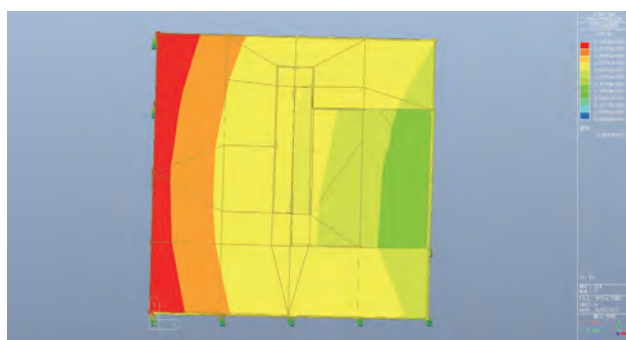


図 18. サヴォア邸変形（Y方向地震荷重時）

図 17を上から見た図

これも明らかに変位に偏りがあり、地震時に建物がねじれるように変形することが分かる。屋根荷重の偏りが偏心を生み、地震時に加力方向に対して平行ではなく回転するように変形していることを示している。阪神淡路大震災の時、多くのピロティ建築のコーナー柱が崩壊した事実と整合する。やはり、地震国で建築を設計するときには注意が必要である。建築雑誌を見ることは大いに推奨するが、外国の建築を模倣することは危険であることがこの例でもわかる。地震国では常に耐震性の視点を忘れてはならない。

次に、応力を見てみよう。

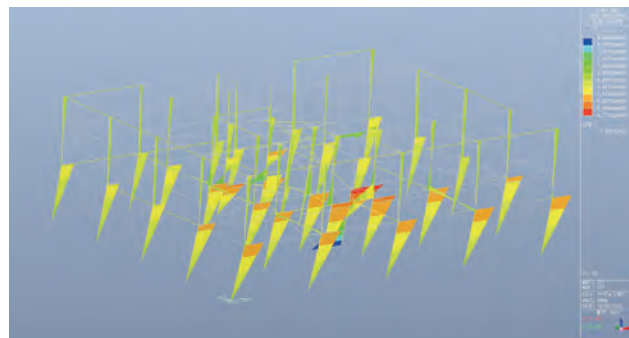


図 19. サヴォア邸応力（X方向地震荷重時）

X方向地震荷重時の柱応力はほぼ均等であるが、ねじれにより手前側の柱の曲げ応力が奥の柱より少し大きいことが分かる。また、2階は壁が有効に働いているため、柱・梁の曲げ応力は小さい。ピロティ建築は、1階のピロティ柱の耐震性を高めなければならないことがよく分かる。

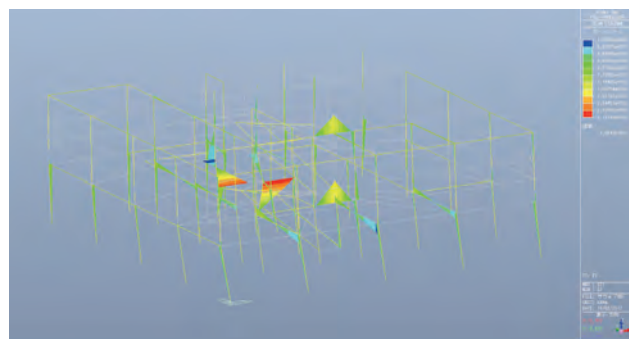


図 20. サヴォア邸応力（Y方向地震荷重時）

X方向と比較して一部の門型架構に曲げ応力が発生しているが、全体にその応力は小さい。この理由は、中央にスロープがあるためこれがブレース（筋交い）として地震力を受け止めているからである。耐震性を考慮していない建築計画で、この建築のシークエンスを演出する重要な要素であるスロープが、耐震部材として働いていることに驚きと面白さを感じる。



図 21. サヴォア邸1階平面図

4. まとめ

学生の作品である椅子・菊竹清訓のスカイハウス・ル・コルビュジェのサヴォア邸と、3例の変形・応力を見てきた。FEM 解析ソフトによる鉛直荷重時・地震荷重時の解析結果は色彩豊かに表示されており、本研究の目的である「見える力学」が、些少なから提示できたのではないかと思う。この手法は、デザイン学部の学生に構造力学や構造計画を理解させる有効な一つの方法であることが証明された。

3例の解析によって、様々な発見があった。椅子の脚の開きに対する改良点、スカイハウスの優れた構造、サヴォア邸のスロープの動きは、解析してみなければ分からないことであった。

筆者は、構造計画をするとき常にバランスを考慮している。このバランスは、平面的・立面的なバランスであるが、必ずしも整形なシンメトリーな形を意味するものではない。各階の重量の中心である重心と変形に対する抵抗要素

である剛性の中心すなわち剛心になるべく近づけることであり、これが構造計画の要である。サヴォア邸の荷重偏心（平面的バランス）・ピロティ柱（立面的バランス）は、要となるバランスの悪しき例であることが面白い。勿論、地震国における話であるから、フランスのパリ郊外にあるこの建築の価値は変わらない。

「構造物を形作るすべての部材は、引張か圧縮の状態にあるか又は両方の状態にあるかのいずれかである。」という簡潔な真理にあらためて感動を覚える。複雑な解析技術が日々進歩しているおかげで、複雑な構造物の構造解析が可能になったが、最後はすべてこの真理に行きつく。ただし、この真理もニュートン力学の中のできごとであって、素粒子の世界の量子力学ではまったく役に立たない。しかし、我々の日常世界とミクロの世界は現実として繋がっているのである。なんとロマンチックなことであろうか。

【参考文献】

近代建築の空間再読 ―富永 譲編著― 彰国社 1986 年

外国語活動・英語活動を通じた大学と小規模小学校との連携 —授業支援、学習教材の製作を通して—

Cooperation between a small elementary school and a university through foreign-language activities: the support of lessons and collaboration on English learning materials creation

杉浦 香織
文化政策学部国際文化学科

Kaori SUGIURA
Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

マーク D. シーハン
文化政策学部国際文化学科

Mark D. SHEEHAN
Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

本稿では静岡文化芸術大学の教員、及び、学生（教職課程履修者や英語に関心のある学生）と地域の小規模小学校との外国語活動・英語活動を通じた連携とその成果について報告する。2011年度より小学校において外国語活動が必修となっている中、静岡文化芸術大学が地域に根ざす大学として、学部・学科の専門性を生かし、地元小学校からの外国語活動実践支援に関する要望に応えることは極めて重要である。さらに、本学生にとっても講義で学んだことを、実社会で生かすことができる貴重な経験となる。連携方法は、新学習指導要領に則った授業案作成の支援、大学教員による研修開催、小学校教員と学生によるチーム・ティーチング(T-T)、大学教員または学生による授業実践であった。本連携がきっかけで、英語学習教材の共同製作・ワークショップも開催されるなど、着実に小学校と大学教員間の連携が強まっている。また、児童や学生にとっても本活動が有意義であることがアンケート結果からも見て取れる。横山小学校と静岡文化芸術大学の外国語活動・英語活動を通じた連携は、2012年度で4年目を迎え、双方にとって教育効果のある支援・交流を継続している。

This paper reports on the cooperation between a small elementary school and students and teachers at Shizuoka University of Art and Culture through foreign-language activities (*Gaikokugo Katsudo*) and English activities. This cooperation is meaningful for both schools: the elementary school needed the support on how to conduct foreign-language activities, as it wanted to provide this educational opportunity to their students to foster their communication skills by having them interact with various types of people in society. For the university, it was an opportunity to support a school in the community with its educational resources. Also, the university students benefited from putting what they learned in their studies into practice. The collaborative effort included support in making lesson plans, lectures provided by university teachers, team-teaching by elementary school teachers and university students, university student participation in communication activities, and lessons conducted by university teachers or students. Furthermore, this partnership helped the participants create English learning materials including CDs and a text; a workshop was held for elementary school teachers that presented information on the use of the materials and other teaching methods. This paper concludes that the cooperation has been successful, with the style of the cooperation changing according to the needs of the participants.

1 はじめに

本稿では静岡文化芸術大学の教員、及び、学生による浜松市立横山小学校との外国語活動を通じた支援・交流について報告する。外国語活動は2011年度より小学5、6年生において必須となっているが、本支援・交流は外国語活動実施の移行期間である2009年度に始まった。2009年度当初、大学の役割は、担任による5、6年生対象の外国語活動実践支援であったが、2010年度より、1年生から4年生を対象に、英語活動を通じた交流も行っている。なお、交流活動は年3回程度である。

連携初年度の2009年度、横山小学校は外国語活動の実践研究事業指定校（詳細は2.1.3を参照）となり、小学校教員は外国語活動の実施方法や教材の活用方法についての助言を必要としていた。また、同校は、小規模校で児童の絶対数が少ない。そのため、児童のコミュニケーション能力を育てる機会を増やすことも必要としていた。これらのニーズに応えるため、地域の教育資源である静岡文化芸術大学の教員と学生が外国語活動を支援・実践することは意義があると考えた。

一方で、中学校・高等学校の英語教員を志して勉強する静岡文化芸術大学の学生が小学校の授業に参加し、教育現場を体験すること、また、国際関係、多文化共生、第二言語習得などを専門として学び、英語力向上にも力をいれて

いる静岡文化芸術大学の学生が、蓄えた知識やスキルを実社会で生かすことは大変有意義だと考えた。

以下、横山小学校の紹介、連携の経緯、支援・交流方法の実際、支援・交流から発展した英語学習教材の製作プロジェクトについて報告する。

2 横山小学校について

2.1 所在地

浜松市天竜区横山町にある浜松市立横山小学校は、浜松市内から電車で30分乗車後、自動車で約15分のところに位置する。学校は天竜川と山に囲まれ、豊かな自然に恵まれた環境にある。

2.2 児童の実態

2012年度的全児童数は27名（2011年度は26名）で、複式学級の学年もある。児童は、大変素直で元気である。昼休みは、学年を交えて仲良く運動場で遊んでいる。教員によると、児童は幼稚園以来からの仲間であり、互いのこと、また、その家族のことを大変良く知っている。

英語活動や外国語活動の実際では、認知的に発達しはじめた3、4年生が、一番積極的な傾向にある。高学年になると恥ずかしいという気持ちが先行するのか、活動（特に発声活動）の際、多少の消極さ見受けられるが、活動自体

には大変一生懸命取り組む。

2.3 外国語活動への取り組み

横山小学校の外国語活動への取り組みは、2009 年度、文部科学省の「外国語活動における教材の効果的な活用及び評価の在り方などに関する実践研究事業（平成 21 年度）」、2010 年度は浜松市の「外国語活動実践研究事業（平成 22 年度）」の指定校」の助成を受けて進められてきた。教職員数が少ないからこそ可能になる団結力と機動力を生かし、研究主任を中心に有意義な研究実践が行われていた。

3 連携の経緯

前述したように 2009 年度、横山小学校が文部科学省の外国語活動に関する実践研究事業の指定を受けた。それにあたり、横山小学校から静岡文化芸術大学に要請があり、連携が始まった¹⁾。2010 年度は、横山小学校が浜松市の実践研究事業の指定を受け、継続して協力を行った。主な支援方法は、授業案作成の支援、研修における静岡文化芸術大学教員による講座、小学校教員と学生による T-T 授業実践、授業におけるコミュニケーション活動時の教員・学生による参加、等であった。

また、筆者らが、2010 年度に静岡文化芸術大学学部長研究費（「小学校外国語活動を指導する教員の資質向上のための教材製作：教室英語と『英語ノート』における表現の口頭練習 CD」）を得て、横山小学校の協力をもとに、小学校教員を対象とした英語口頭表現練習のための学習教材（CD および冊子）を製作した。また、製作した教材を用いて、小学校教員の英語学習を支援するワークショップを、横山小学校の協力を得て開催した。

これらの流れを受けて、2011 年度は静岡文化芸術大学学部長研究費（「大学生による地域の学校支援活動の組織化に関する研究」の一環）、2012 年度はイベント・シンポジウム等開催費（「小学校外国語活動支援：学生による国際理解のための英語（外国語）授業実践」）の助成を得、連携を続けている。2011・2012 年度は、5,6 年生の外国語活動だけでなく、1 から 4 年生を対象にした英語活動の授業実践を、大学教員・学生が中心となって行っている。

以上のように、本連携は、研究事業の指定を受けた小学校における外国語活動の支援として始まり、現在は外国語活動・英語活動を通じた全児童との交流に至っている。連携の在り方は変化しているが、双方の教育の充実を図るために、実践可能な方法で交流を続けていることが大事だと考えている。次節では、具体的な支援・交流方法について紹介したい。

4 支援・交流の実際

4.1 大学教員の専門知識を生かした支援

2009・2010 年度は、大学教員による支援として、小学校の研究主任が作成した授業案における授業展開や自然なダイアログ作り等に関する助言を行った。2009 年 11 月には、小学校の校内研修にて、大学教員が、児童用の英語教材について（勝浦範子教授：当時）、英語の音

声仕組みや、授業に活用できる口頭練習方法等（杉浦）についての講座を実施した。

4.2 授業支援

4.2.1 担任中心の授業における学生ボランティアの活用

上記同様、2009・2010 年度を中心に行った、静岡文化芸術大学の学生ボランティアを活用した授業支援について説明したい。下記に示す授業例は、外国語活動の目標²⁾のうち、「外国語を通して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ること」に重きを置いたものである。教員志望かつ小学校で英語活動ボランティア経験のある学生 1 名が、モデルダイアログの提示のためにロールプレイを担任と行い、その後、口頭練習としてチャンツを中心に実践した。その他の学生は、児童が学生に慣れるためのアイス・ブレイキング活動や授業終盤のインタビュー活動に参加した。

このような授業実践の支援をするために、事前の打ち合わせを小学校の研修主任（6 年担任）、大学教員、学生も交えて行った。特に、児童の実態や普段の授業展開を聞きながら、どのように学生が参加したら授業が円滑に進み、クラスが良い雰囲気になるのか、また、一方で、学生にとって意義のある経験になるのか、ということ話を話した。このようにして、右記の授業案を研修主任と大学教員が共同で作成した。授業案に記載されている活動についてまず説明したい。

キーワードゲーム

単語やアルファベットの定着のための活動。例えば、食べものに関する単語で行う場合、学習する単語中、教師がキーワード（例 orange, apple）と決める。児童は、4、5 人の組になり、机の真ん中に消しゴムを置く。教師が言った単語を児童は繰り返して言い、手を 2 回たたく。これをしばらく続けていく。教師がキーワードを言った場合、児童は手をたたき代わりに真ん中においてある消しゴムを争奪する。

本授業では、児童と学生との間の緊張感を軽減するためのアイス・ブレイキング活動として実践。本活動は担任による通常の外国語活動でもよく実施されており、児童にとって親しみのあるゲームである。

ロールプレイ：モデルダイアログ（一部抜粋）

担任と学生のロールプレイにおけるダイアログである。大学生と担任のやりとりが、児童にとっては印象深いと考えた。ロールプレイは英語母語話者の Assistant Language Teacher が来た際に実施しているようで、児童に親しみのある活動である。

担任（児童役）: Hi. My name is (Hiroyuki). Nice to meet you.

学生 N（児童役）: Hi. My name is (Hitomi). Nice to meet you too.

担任 : I like ～ . Do you like ～ ?

学生 N: Yes, I do. / No, I don't.

担任 : I don't like ～ . Do you like ～ ?

チャンツ

Do you like apples? Yes, I do. のフレーズを、食べ物の種類を、次々に変えながらリズムに合わせて歌う。チャンツを歌う前に、食べ物に関する単語の言い方を、教師の後について十分に練習してからチャンツに移行することが大切。

本授業では、コミュニケーション活動においてスムーズな言語産出を促すために、十分な口頭練習を楽しく行う事を目的とした。

4.2.2 成果

児童の声

- ・初めて会った学生さんの自己紹介であまりいっていることがわからなかったけど、交流していくうちにちゃんと話せたので楽しかったです。
- ・(好き嫌い調査で) はじめは緊張したけど終わったときは全然緊張感がありませんでした。外国へ行っても勇気を出してあいさつしたいです。

(横山小学校 HP より)

学生の声

- ・私はあえて自分から行くことはしなかったけれど、児童のほうから来てくれて嬉しかった。英語も上手に話せていた。ただ、話しているときに目を見て話すことができ

参加者：5年生 14名、6年生 12名（別々に実施）/ 担任、大学教員（2名）、学生（4名）

ねらい：(1) 人と関わることに楽しさを感じる。

(2) 積極的に声をかける。

(3) I like, I don't like, Do you like などを使用して自分のことを伝える。

過程	教師・学生の活動	児童の活動	備考
自己紹介	自己紹介 My name is ～. I am from ～. I like/ I do not like	・自己紹介を聞く	
アイス・ブレイキング	キーワードゲーム (1) 説明 (2) ゲーム開始	・大学生を交えて 3-5 人のグループで活動	◆学生が自己紹介で用いた絵を使用。 ・児童が慣れているゲーム活動で、学生との交流に対する児童の緊張感をほぐす。
導入	チャンツ Do you like apples? T2 学生中心	・手拍子をしながら歌う	◆視覚・聴覚教材の提示 ・機械的練習により口ならしをさせる。
展開	好き嫌いを調査 (1) ロールプレイ： モデルダイアログ (T1 担任 -T2 学生) (2) 活動カード配布 (3) 口頭練習 (4) インタビュー活動 (5) インタビュー結果	・モデルを聞く ・好き嫌いを記入 ・ペアで練習 ・インタビュー ・結果を報告 	◆視覚・聴覚教材の提示 ・本物のコミュニケーションを想定。 ・英語表現を安心して使えるようステップを踏んだ練習。 ・教員・学生による児童の支援。 ・T1 による児童の活動の評価。
まとめ	あいさつ	・あいさつ	

たらもっと良いのではないかと感じた。

- ・児童 1 人 1 人が積極的に話しかけてくれ、英会話らしい反応をしていたことが一番印象に残っている。
- ・なるべく英語で会話をし、日本語は交えないように心がけた。時々、児童が学習していない英語で伝えても（カードに名前を記入するスペースがもうないなど）状況を理解してくれていたように感じた。

以上の感想より、児童は人と関わることに楽しさを感じ、積極的に声をかけようと努力していたことがわかる。また、自分の伝えたいことを伝えようとしていたことも伺える。このように学生の授業への参加は、授業目標を達成する上で多に貢献していたとことが伺え、本授業のような支援方法はおおむね成功だったと言える。

4.3 大学教員による授業

4.3.1 授業実践内容

外国語活動指導要領 3 本柱の中の 1 つである、「外国の言語や文化について体験的に理解を深める」の一環として、英語母語話者の大学教員による授業実践も行ってきた。下記に挙げる例は、担任の提案で、『英語ノート 2』（文部科学省が作成した外国語活動のための補助教材）の Lesson3 と関連づけた「アメリカの文化的年間行事」に関する授業を大学教員（シーハン）が行った。（図 1、図 2）事前に担任により行われた Lesson3 にて、児童は日本の伝統的な行事について色々と調べていた。そのため、大学教員による授業において、児童はアメリカの行事や祝日（例 Christmas, New Year's and Valentine's Day.）について、日本の行事と比較しながら学ぶことが可能になった。また、授業では、児童が行事に関連する単語を、付随的に学ぶことができるようなゲーム活動も取り入れた。以上のような工夫をし、「外国の言語や文化について体験的に理解を深める」ことができる授業となった。授業は、ほぼ英語での実践であるため、児童の授業に対する不安を軽減、内容理解を促進するため配慮をした。具体的には、スライドに豊富な写真や絵を組み込むこと、ジェスチャーを交えたティーチャートーク、さらには、ゲーム活動等を行った。

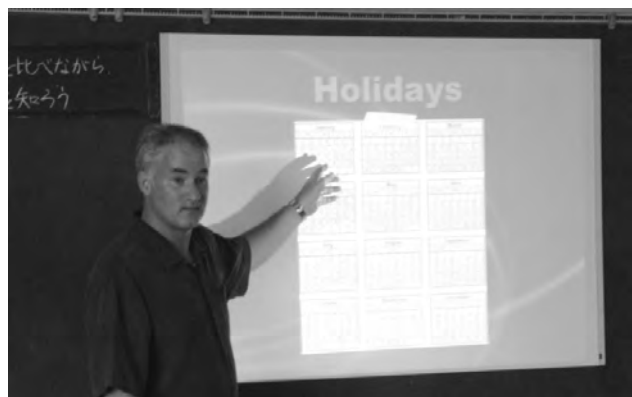


図 1 スライドを利用した授業の様子

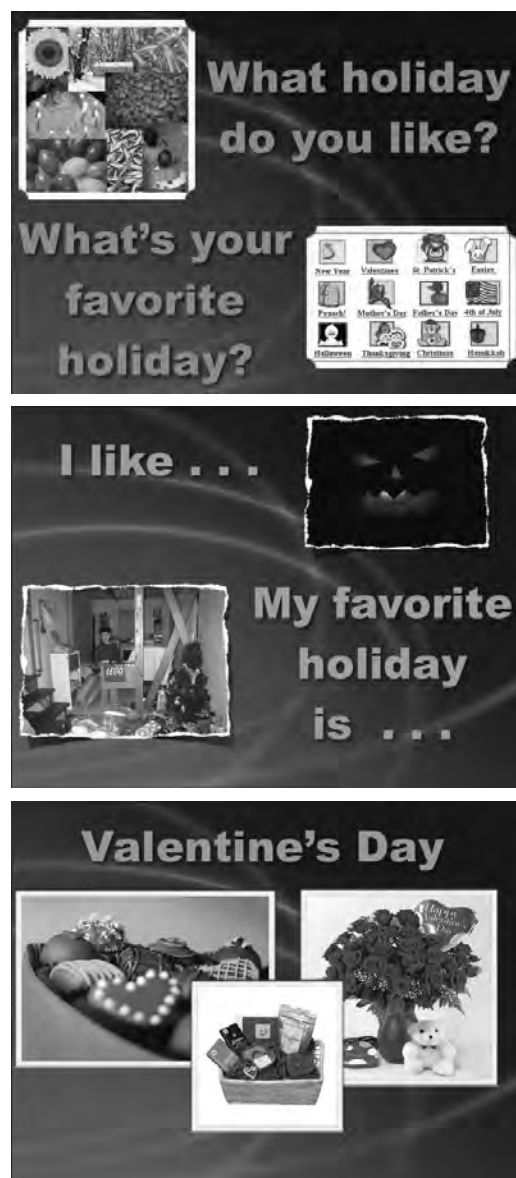


図 2 アメリカの行事についてのスライド（一部抜粋）

4.3.2 成果

- ・年数回の訪問のため、1 回の授業でも十分な文化的な刺激を与えることができる授業実践が必要であると考えた。その観点から、アメリカの文化について、英語母語話者から英語で学ぶことができたのは意義があると思われる。
- ・今回のような単発的な訪問による授業でも、小学校側と連携することで、訪問による授業が学級担任による事前の授業とつながり、児童にとって、より意義ある授業となったと言える。

4.4 学生による授業実践

4.4.1 授業実践にあたって

大学教員による授業や、学生ボランティアによる授業補助だけでなく、学生が中心となった授業実践も、2011 年度以降、行われるようになった。学生が主導になって授業実践するということは、大学で学習していることを実践できるという点で大変貴重である。授業実践内容については大学側に任されているが、その分、授業実践をする大学

側の責任も大きいため、学生への事前指導として配慮する必要がある。以下は、事前指導の際に配慮している主な事項である。

- (1) 外国語活動の目標について認識させる
学習指導要領における外国語活動の目標について説明する。教職課程必修・選択科目の講義のみならず、事前にも、外国語活動の主旨を学生に伝える。
- (2) 第二言語習得について一定の知識を与える
講義を通して第二言語習得のメカニズム等を正しく理解させる。特に臨界期前の学習者が第二言語を学ぶ際の特徴についての知識を得てもらう。
- (3) 授業以外での児童との交流の大切さを理解させる
昼やすみの時間を利用して、児童との交流を深める大切さを伝える。授業以外の場で児童と触れ合うことは、学生を安心な存在と感じさせることだけでなく、学生にとっては、児童の理解にもつながる。これらは授業をスムーズに行う上で、重要であることを理解させる。

4.4.2 授業実践内容

下記は、横山小学校を訪問し、授業実践する際の1日のスケジュールである。大学生は、低学年・中学年・高学年のそれぞれにおいて授業実践をする機会を得ている（前節で述べたような授業を大学教員が行う場合もある）。授業案作成については、学生の意見を尊重しながら、大学教員と共同で作成している。次頁に5,6年生を対象に行った授業実践の1例を紹介する。新学習指導要領、外国活動の目的のうち、「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」の前半の部分に重き、ストーリーテリング（絵を見せながらお話を読み聞かせる）を中心に据えた授業を行った。ストーリーテリングの事前には、登場人物や使用される単語に慣れ親しむ活動を実施し、事後には、話の内容と児童の経験に結びつけながら、無理のない程度で産出活動を行った。

横山小学校訪問時のスケジュール

時 刻	○=活動内容 ※ =備考
～10:00	○ 文芸大先生・学生 横山小着 ※ 文芸大の先生と学生の控え室は、1F校長室（会議室）です。
10:15～11:00	○ 3校時・・・1・2年生「ハッピーワールドタイム」 ※ 2F1年教室で行います。
11:10～11:55	○ 4校時・・・3・4年生「ハッピーワールドタイム」 ※ 2F3・4年教室で行います。
11:55～13:30	○ 昼食・休憩 ※ 小学生は給食、昼休み（当日はロング昼休み、清掃なし）です。 よろしかったら、子どもたちと一緒に活動してください。
13:30～14:15	○ 5校時・・・5・6年生「外国語活動」 ※ 2F5・6年教室で行います。
～14:30	○ 文芸大職員・学生 横山小発

参加者：浜松市立横山小学校 5,6 年生 7 名

内容：A New Dog (Oxford Reading Tree) を使ったストーリーテリング

ねらい：

- (1) 日本語と絵の補助を得ながら、英語で聞いたストーリーを理解することができる
- (2) 犬の特性に関する形容詞 (big, little, strong, happy, smart, shy) の意味を聞いて理解することができる
- (3) 形容詞を用いて自分の欲しい動物について英語で表現できる (I want a small snake.)

過程	児童の活動	教師の働きかけ
(学生 H) 導入 15 分 ★絵本にでる犬に関する形容詞を練習 ★ペットに関する背景知識を活性化	(1) 自分のペットについて言う (2) 絵カードを見ながら、教師の後に続いて形容詞を発音する  (3) カルタゲーム：形容詞の学習 各グループ 6×3 セット=18 枚 ・日本語で聞いてとる ・英語で聞いてとる ・英語で聞いて英語で言う	(1) ペット（犬など）について児童に聞く Do you like dogs?, Do you have a dog? What's her name? Is she a big / small dog? (2) 6 枚の絵カードを 1 枚ずつ読みながら張って発音練習させる * 形容詞 (big, little, strong, happy, smart, shy)  (3) カルタゲーム ・児童と学生を 3 つのグループに分ける (4 人組位) * 日本語で言う - 英語で言う - 英語で言う * 各チーム、一番多くとった人に拍手
(学生 I) 展開	(4) ストーリーテリングを聞く ・話を聞く ・ページをめくるときに一斉に声を出す「バウワウ」(犬の鳴き声)  ・教師からの問いかけに答える ・リピートする ・欲しいペットについて英語で答える	(4) ストーリーテリング ・登場人物の紹介 Biff, Kipper, Chip, 子ども達の名前 ・絵本を読み聞かせる (1 回目) Today, we are going to read this book in English. The title is a new dog. * センテンスは 2 回繰り返して読む * センテンス以外に、絵から想像できることを英語で聞く * 児童のことにも結びつけながら ・CD を流してリピートさせる (2 回目)
(学生 H) まとめ	(5) 欲しいペットについて ・ I want to _____	

4.4.3 成果

- ・授業実践に興味関心をもっている学生が主に実践していることもあり、児童の反応を見ながら授業ができていた。特に、授業案通りに進まない場合でも、臨機応変に授業を修正しながら実践できていた点がよかった。このように、実際の授業では、予期せぬ事が生じたり、思うように進まないことが通常である。今回はそのような経験ができるよい機会になったと言える。
- ・児童は事後アンケートにて、おおむね、お話の内容を理解できたと答えていた。よって、「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる」という目標は、ある程度達成できていたと思われる。

5 英語学習教材の製作

5.1 経緯

横山小学校との交流を重ねて行く中で、児童が生き生きと外国語活動で活動するためには教師が率先して英語を話し、児童と共に英語活動を楽しむことが大切であるということ、教師が自信を持って授業運営を行うためには、教師自身が基礎的な英語に慣れ親しむことは大切ではないか、ということが話題となった。そこで、教師が気軽に楽しく、英語表現力や発音を向上することができる教材製作は意義あるものではないかということで互いが合意し、2010年度、CD付教材製作の企画・実行に至った。本プロジェクトは小学校の研修主任の協力を得ながら、静岡文化芸術大学の勝浦範子教授（当時）が中心となって行われた。

5.2 教材について

製作した教材（図3）の特徴を下記にまとめる。

(1) 対象：

小学校外国語活動に携わる方で、英語の基礎を振り返りたい方。

(2) 内容：

- ・『英語ノート』との関連表現について示し、授業に反映しやすいような配慮がされている。
- ・2部構成でPart1「ニューヨーク編（旅行での会話）」Part2「浜松編（ALTとの会話）」。
- ・英語だけでなく文化についての知識も学ぶことができる。
- ・ダイアログや場面は、小学校教員の意見を反映し、実践でも使用できるように工夫。
- ・相手の返答に応じた表現が学習できるよう、ダイアログにバリエーションを持たせている。

(3) 仕様：

- ・日本語のナレーションが入っているので通勤電車や車でも気軽に、楽しく聞けることができる。
- ・写真を豊富に使用し視覚的にも楽しむことができるよう工夫。

本教材は、浜松市立横山小学校の教職員の皆様、ワークショップ（詳細下記）に参加してくださった皆様、静岡新聞に掲載された本教材製作に関する記事を見て希望された方々、県総合教育センター、静岡文化芸術大学の学生、教職員など、約300部、配布された。

5.3 成果

教材について、使用後のアンケートを30部程度回収した。アンケート結果における記述部分の一部を紹介する。

1) お気づきになった点がございましたら、ご自由にお書きください。

- ・とても細かいところまで配慮されたテキストで良いと思った。
- ・会話のバリエーションがいろいろとあって英語に慣れない人にとってはわかりやすい内容だと思う。
- ・自分の住んでいるところを、発信していくことは大切なので地元編があるのがよい。
- ・写真が多く視覚的に大変捉えやすく興味深いテキストだった。
- ・ナレーションがラジオのDJのようで良かった。
- ・続編を期待する（多数）。

2) 今後どのような教材があるとよいですか。

- ・ALTとの授業のやり方を話し合うときにどんな英文で話したら良いかももう少し詳しく、具体的な内容を知りたい。
- ・子どもたちへの指示の仕方が手軽に身に付く教材があるとよい。
- ・英語のスキルアップはさることながら、日々の実践にすぐ役立つノウハウを身につけたいと感じている。
- ・チャンツ集があっても面白いと思う。子どもたちと先生が交替にチャンツをしながら英語の授業を行っているようなものとか。
- ・英語の歌があってもよい。
- ・授業中のT-Tの場面、授業後の授業評価場面などがあるとよい。

以上のアンケートより、本教材の特徴が、ある程度評価されていることがわかる。一方で、今後期待する教材として、現場で即利用できる表現や活動に焦点をおいたものが望まれていることもわかった。

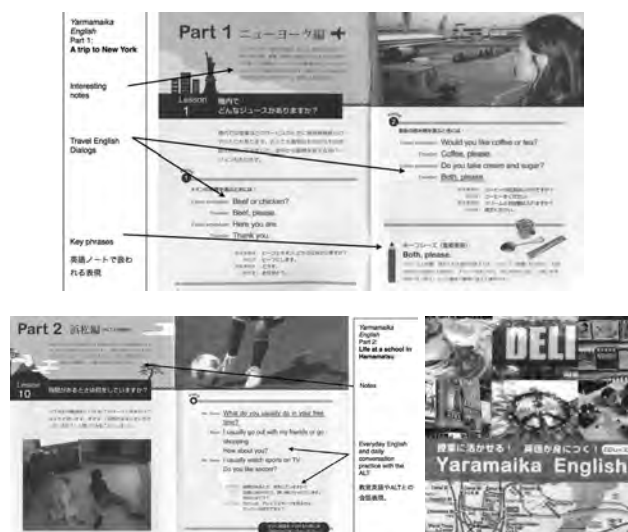


図3 製作した教材：『授業に活かせる！英語が身につく！Yaramaika English』

6 英語ワークショップ

6.1 開催内容

2011年3月5日、静岡文化芸術大学にて、製作した教材を用いた小学校教員に対する英語ワークショップを開催した。テーマは、「小学校教員のための英語学習ワークショップ教師用英語学習CD教材『授業に活かせる!英語が身につく!Yaramaika English』で効果的な英語学習」であった。開催にあたっては、静岡県教育委員会、浜松市教育委員会の後援、浜松市立横山小学校の協力を得た。当日は、静岡県下から50名ほどの方が参加し、製作した教材の効果的な使い方について、実践体験してもらう講習を実施した。

6.2 成果

下記にアンケートに記述された参加者の感想の一部を紹介する。

- ・英語に接する機会を設けていただき、その後、通勤の車の中で聞くようにした。無理がないので(練習が)毎日続いている。
- ・授業に活かせるという、ワークショップのほうが良いかもしれない。小学校教師に英語運用能力を身につけることを全面に出した研修はあまり効果的ではないように思う。

外国語活動に関するワークショップで、「教師の英語力向上」を強力に推進することは、教師の負担となり、必ずしも好ましいことではないだろう。しかしながら、今回のワークショップは、現場の先生の声から実現したものであったということ、大学卒業後ほとんど英語に触れておらず、外国語活動実践に不安な先生方にとって、英語の再学習を促すきっかけとなったこと、また、英語に関心を高めていただく機会であったこと、という点で意義があったと考える。

7 まとめ

本稿は、静岡文化芸術大学と浜松市立横山小学校の外国語活動・英語活動を通じた連携について報告した。具体的には、大学教員による専門的助言、学生ボランティアによる授業参加、大学教員や学生ボランティアが中心となった授業実践、小学校教師を対象としたCD付き英語学習教材の製作とワークショップ開催について紹介した。2009年度に開始した横山小学校と静岡文化芸術大学の連携は、5,6年生対象の外国語活動の支援という形から出発し、現在では全学年を対象に広げ、外国語活動・英語活動を通じた交流活動となっている。概観してきたように本連携は、双方の教育充実を図る有意義な機会として継続できている。これは、横山小学校の教職員の皆さんの教育に対する

熱意、臨機応変な対応・機動力、そして我々の訪問を快よく迎えてくださる温かさのお陰である。

今後も、本実践の経験を生かし、微力ではあるが、静岡文化芸術大学が地域の学校教育の支援をしていくことができればと考える。

謝辞

本実践は、2009・2010年度浜松市立横山小学校の研修主任(6年担任)であった二橋宏之教諭(現・静岡県立観音山少年自然の家指導主事)の大変な熱意、2011年度より5,6年担任の中谷勝久教諭のご協力、また、元・浜松市立横山小学校小出一人校長、現・関塚壽恵彦校長、元・山下勝久教頭(現・浜松市立城北小学校教頭)、太田直哉教諭、また、全教職員の皆様方の多大なるご理解・ご協力があってなし得たことです。ここに記して感謝申し上げます。

また、2009年度、横山小学校での授業実践において数々の助言をくださり、教材製作においては、中心となって完成まで導いてくださった元・静岡文化芸術大学の勝浦範子教授に、心より感謝申し上げます。学生ボランティアとして本交流活動に協力してくださった、静岡文化芸術大学の教職課程(英語)の学生のみなさん、杉浦ゼミのみなさん、にも感謝の意を表したい。

本実践は、2010年度の静岡文化芸術大学学部長研究費(「小学校外国語活動を指導する教員の資質向上のための教材製作:教室英語と『英語ノート』における表現の口頭練習CD」)、2011年度の静岡文化芸術大学学部長研究費(「大学生による地域の学校支援活動の組織化に関する研究」の一環)の支援をうけて行われた。2012年度も、イベント・シンポジウム等開催費(「小学校外国語活動支援:学生による国際理解のための英語(外国語)授業実践」)の助成を受けて、交流活動を継続できていることに感謝する。

注

- 1 当時、教職課程担当の勝浦教授が引き受け、筆者らは、協力者として参加させていただいた。
- 2 外国語活動の目標は、外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う(2011年全面実施新学習指導要領より)、という3本柱により構成されている。

参考文献

「文部科学省 新学習指導要領生きる力第4章外国語活動」
 <http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/gai.htm>(2010/09/10アクセス)
 「浜松市立横山小学校 HP」
 <<http://www.city.hamamatsu-szo.ed.jp/yokoyama-e/>>(2010/09/12アクセス)

「大学生による地域の学校支援活動の組織化に関する研究」報告（その1） —平成23年度「地域の小・中学校における学習支援ボランティア活動」の現状と課題—

Organizing School Support Activities by University Students Volunteers (Part1): Present Conditions and Problems of Learning Support Activities at Primary and Middle Schools in 2011

瀬戸 知也

文化政策学部国際文化学科

Tomoya SETO

Department of international Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

本稿は、平成23年度に大学の近隣に位置する小学校と中学校で実施された大学生による学校支援ボランティア活動の結果の報告である。学校支援ボランティア活動の意義は、(1) 小中学校にとっての「開かれた学校づくり」への貢献、(2) 教職課程履修学生にとっての教育現場体験の機会の確保、(3) 新しい学校文化の創出の可能性である。今後の課題は、(1) 学校支援ボランティアの活用の可能性の再検討、(2) ボランティア・コーディネーターの役割の再検討である。

This paper is record of the result of school support activities by university students volunteers at primary and middle schools in 2011. Significances of school support activities by university students volunteers are as follows. (1) A contribution to school management which is open to the local community. (2) Acquisition of opportunities to experience school education scene for student teachers. (3) Possibilities of creation of new school cultures. Issues for the future are as follows. (1) Reexamination of active use of volunteers of school support activities. (2) Reexamination of roles of volunteer coordinators.

1. はじめに

現在の日本社会では、多様な児童生徒のニーズへの対応や地域の特性に応じた教育課程の編成など、学校教育が担うべき役割が拡大してきている。そのような状況の中で、学校教育を支援する活動として、地域社会における学校支援ボランティア活動に期待が寄せられている。地域社会との連携や地域社会への貢献が社会的に期待されている大学においても、地域の学校における学校支援ボランティア活動への参加は重要な社会的役割の1つであると言える。大学による地域貢献にもつながるという意味で日本の高等教育行政の動向とも合致する重要な事業として位置付けることができる。

また一方で、大学生による学校支援ボランティア活動は、地域の学校教育の支援というだけでなく、教職課程を履修している学生にとっては、教育実習や介護等体験学習以外で教育現場を経験する貴重な機会であり、教員養成における重要な体験活動の機会となる効果が期待される。

本研究は、大学生による学校支援ボランティア活動を組織的な活動として発展させていくための実践と研究及び研究担当者の専門領域を生かした地域の学校教育への支援をおこなう事業等を組織化していくための基礎的な研究を目的としている。

今回の報告（その1.）では、現在実施されているいくつかの学校支援ボランティア活動の中から、平成23年度に本学の学生が近隣の小学校・中学校において実施した「学習支援ボランティア活動」の現状と課題を報告する。

2. 平成23年度「地域の小・中学校における学習支援ボランティア活動」の概要

2-1. 活動の背景

静岡文化芸術大学に隣接する小学校である東小学校及び近隣の中学校である中部中学校においては、本学開学以来

今日に至るまで、両学校の各種活動に対して、継続的に大学生による学習支援ボランティアの派遣をおこなってきた。

この学習支援ボランティア活動は、大学側からみれば、教職課程を履修する学生にとっての教育実習や介護等体験学習以外で教育現場を経験する機会としての意味がある。

一方で、地域の小学校・中学校側からみれば、各学校での活動における地域社会との連携活動として意味がある。

また、平成22年度から浜松市内のすべての小・中学校で取り組みが開始された「小中一貫教育」の推進にとっても、大学生による小・中学校における学校支援ボランティア活動は有力なサポートとなることが期待される。

2-2. 活動の概要

（1）東小学校における学習支援活動の概要

東小学校においては、これまで授業での学習支援活動や校外活動の支援、運動会の手伝い、読み聞かせボランティア等を実施してきたが、平成23年度においては、日常の授業での学習支援活動を中心におこなった。

実施手順は、東小学校側から提示された年間行事予定表と授業時間割表にもとづき小学校側が作成したサポートを希望する時間帯一覧にもとづき、学習支援活動参加希望ボランティアを募集し、名簿を作成し、それぞれの時間帯の授業の学習支援活動に従事させた。

募集対象の学生は、主として教職課程科目受講生（1年生～4年生）である。また、通常の授業時間以外での活動への支援（たとえば体力テストの手伝い等）の依頼が生じた際にはそれに応じて随時学生を募集し、支援活動に従事させた。

平成23年度東小学校における学習支援活動

・参加学生数：7名（内訳は、4年次生5名、3年次生2名）

- ・活動時期：平成23年10月25日～平成24年1月19日
- ・参加学生の活動日数（合計）：17日（1名）、16日（1名）、8日（2名）、5日（1名）、4日（2名）

（2）中部中学校における学習支援活動の概要

中部中学校においては、これまで、平成21年度、22年度と継続して「放課後補充学習会」（1年生～3年生までの「英語」と「数学」を中心とした放課後補充学習、約1時間程度）の支援に協力してきており、平成23年度も同様の事業への協力をおこなった。

実施手順は、中学校側が作成した年間行事予定表にもとづき、学生の支援を必要とする日程表を確認した上で、中学校側が作成した前年度のサポート学習内容のサンプルをもとに、学習支援活動参加希望ボランティア学生を募集し、名簿を作成し、それぞれ放課後の学習支援活動（「放課後補充学習会」）に従事させた。募集対象の学生は、主として教職課程科目受講生（1年生～4年生）である。

平成23年度中部中学校における学習支援活動

<A. 前期実施分>

- ・参加学生数：18名（内訳は、1年次生12名、2年次生1名、3年次生5名）
- ・活動時期：平成23年6月2日～7月11日
- ・参加学生の活動日数：5日（4名）、4日（5名）、3日（1名）、2日（7名）、1日（1名）

<B. 後期実施分>

- ・参加学生数：14名（内訳は、1年次生4名、2年次生4名、3年次生2名、4年次生4名）
- ・活動時期：平成23年10月31日～平成24年1月31日
- ・参加学生の活動日数：7日（3名）、6日（2名）、5日（4名）、4日（3名）、3日（2名）

（3）学習支援ボランティア活動参加学生へのアンケートの結果

A. 参加した理由（自由記述）

- ・教員を目指すにあたって学校現場・子どもたちの様子を肌で感じたかったから（4年生）。
- ・実習前に教育現場を自分の目でみて体験したいと思ったため（4年生）。
- ・ボランティアに参加することによって、地域の小・中学生と触れ合える貴重な機会になると思ったのと、自分自身にとっても良い勉強・経験になると思ったから（4年生）。
- ・小学生と触れ合い、授業のサポートができるととても良い機会だと思い、参加しました（4年生）。
- ・塾業界を志望していたので。教え方やコミュニケーションの取り方を知る機会になればと思い、参加しました（4年生）。
- ・子供のものづくりに興味があり、図工の授業の様子や教え方等が知りたかったから（3年生）。
- ・中学校の現場の受験に対しての状況を見てみたかったからです（1年生）。
- ・社会貢献、教えることに興味があったから（1年生）。

B. 今回の学習支援活動に関する感想（自由記述）

- ・最初は中学生となじめるか自分が教えたことを分かってもらえるかが不安でしたが、回数を重ねていくうちに色々な生徒と話をすることができました。勉強の方もヒントを出しながら生徒に考えさせてみた結果、徐々に分かってもらえたような気がします。自分が教えたことによって分かってもらえるということは、想像していた以上に嬉しかったです。と同時に、教えること、自分は分かっている相手に分かりやすく伝えることの難しさを感じ、とても勉強になりました。中学生と接した時間はとても充実していて、貴重な経験になりました（4年生）。
- ・生徒の人数も少なく、1対1で教えられたのでじっくりできて良かったです。生徒が求めている解説（レベル・内容をできる限りピンポイントで）を考えるのが大変でしたが、とても勉強になり、教える事の醍醐味でした。はじめはお互いに緊張していましたが、徐々に慣れてきてとても楽しい時間でした（4年生）。
- ・ボランティアで生活科や理科の授業を見学させていただく機会があり、それが大変参考になりました。低学年の子はなついてくれて嬉しかったです。高学年の子にはなかなか接し方がつかめず苦労しましたが、「ありがとうございます」と言ってくれた時は嬉しかったです（4年生）。
- ・児童たちは学ぶ意欲があり、間違えてもがんばる力があり、教えていてとても楽しかったです。今回とは別の機会ですが、運動会のボランティアもしたことがあり、とても良い経験になりました。大学生のうちに学校に入っただけで教えることができる機会があるということは本当にうれしく思いました。もっともっと多くの授業に行ってみたかったです。ありがとうございました（4年生）。
- ・同じ学年（友達）目線と、教師側の目線両方の立場で子供たちと接することができてよかった（4年生）。
- ・学校・子どもたちの様子をボランティアという立場で眺めたが、先生の発問の仕方、児童への提示、時間配分（問題の）など学ぶことが多かった。児童も様々な子がいて、楽しかった反面、付き合い方の難しさを感じた。言ってもなかなか言うことを聞かない児童、勉強を放棄している児童（放棄という言葉の方が悪いが）に対する働きかけは難しいと思った（4年生）。
- ・子供の想像をなるべく邪魔せずに作業をうながすことや、もっていきたい方向への導き方（興味をもたせ方）などが少し勉強になった（3年生）。
- ・生徒さんがまじめに取り組んでくれたことがよかったです。また、マンツーマンで対応した時に、理解するプロセスみたいなものを、少しですが、感じることができたように思いました（1年生）。
- ・中学校における英語教育の難しさを痛感しました（1年生）。

3. 地域の小・中学校における学校支援ボランティア活動の意義と課題

3-1. 活動の意義

（1）地域の小・中学校における「開かれた学校づくり」への貢献

「学校支援ボランティア活動」の意義については、平成8年7月の中央教育審議会答申（「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」）や平成9年の「教育改革プログラム」において「開かれた学校づくり」における意義が示されている。また、平成11年6月の生涯学習審議会答申（「学習の成果を幅広く生かす生涯学習の成果を生かすための方策について」）においては、生涯学習の視点から、学校を「地域に根ざした学校」にするために、地域住民による多様な「学校支援ボランティア活動」の充実が重要であると述べられている。

地域の教育資源の一つである大学の学生による地域の小・中学校における学習支援活動には、地域の小・中学校における「開かれた学校づくり」の一環をになう活動としての意義がみられる。

（2）教職課程を履修する学生における教育現場体験の機会の確保

教職課程を履修している学生にとっては教育実習や介護等体験学習の機会以外で教育現場を経験する貴重な機会であり、教職課程の学習経験を補強する意義がある。

現行の「教育職員免許法」にもとづく教員免許取得のための必修科目として規定されている教育実習の期間は、小・中学校の教員免許については4週間、高等学校については2週間が最低基準として設定されている（小・中学校の教員免許についてはその他に特別支援学校及び社会福祉施設において介護等体験学習を7日間履修することが規定されている）。それらの期間は、ヨーロッパ諸国における教育実習期間に比べると短期なものでしかない。日本における教員養成改革の結果として設置された「教職大学院」では長期にわたる教育実習が必修として課されているが、学部段階における「教育実習」期間を補強するための一つの方策として、教職課程を履修している学部学生による「学校支援ボランティア活動」に参加することの意義を見出すことができる。

（3）「学び続ける教員像」の確立と新しい学校文化の創出の可能性

平成24年8月の中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」では、「優れた教員の養成、研修や確保は、大学や学校の中だけで行うのではなく、学校支援に関わる関係者をはじめとする社会全体の力を結集して取り組んでいくことも必要である」と述べられており、随所で「学び続ける教員像」の確立が強調されている。

地域の小・中学校において、将来の教員を目指す大学生が学校支援ボランティア活動に従事することは、その「学び続ける教員像」の確立を促進する機会の提供ともなることが期待される。

「学校支援ボランティア活動」は、教員養成段階にある学生にとってもだけでなく、学校支援ボランティアを受け入れる小・中学校側の教員にとっても研修としての意味をもっているものと思われる。

小学校と大学または中学校と大学という学校間連携の中で「協働」することによって支援活動に従事する大学生も、支援活動を受け入れる小・中学校の教員側も、ともに互いの文化を交流させ、「学び続ける」ことによる新たな文化の創出に関わる可能性を見出すことができる。「学校支援ボランティア活動」を媒介として「学び続ける教員」たちは、新しい学校文化を創出していく可能性をもっている。

3-2. 活動の課題

（1）学校支援ボランティアの活用の可能性の再検討

現在の東小学校や中部中学校での活動は、放課後や通常の授業における学習支援ボランティア活動を中心におこなっているが、それ以外にも、「総合的学習の時間」や「特別活動」の時間、部活動等における学校支援ボランティアの積極的な活用の例が全国各地でみられる。今後の課題の1つは、放課後や通常の授業以外の場での、学校支援ボランティア活動の活用の可能性を探ることにある。

たとえば、平成22年度から浜松市内のすべての小・中学校において実施されている「小中一貫教育」の実践においても、学校間連携による教育効果の向上という観点からみると、同様な効果をもつ学校支援ボランティア活動の導入によって、相乗効果がもたらされることが期待される。

（2）学校支援ボランティア活動の組織化におけるボランティア・コーディネーターの役割の再検討

現在の東小学校や中部中学校での活動は、教育委員会等の教育行政機関によって調整された活動ではなく、それぞれの学校と地域の大学との間の学校間連携による活動として個別に実施しているものである。

全国的にみても、学校支援ボランティア活動のタイプは、教育委員会によってボランティア活動を組織するタイプと各学校が各地域で学校独自にボランティア活動を組織するタイプの2種類に大別されるが、どちらの場合も、重要になってくるのは、ボランティア活動の調整者（ボランティア・コーディネーター）の果たす役割である。

現在は、東小学校にしても中部中学校にしても、学校支援ボランティア・コーディネーターが設置されているわけではなく、各学校の教員が、ボランティア・コーディネーター役を兼ねている。大学の側にも、地域の学校支援活動を支援するボランティア・コーディネーターが設置されているわけではなく、現在は、教職課程担当教員がボランティア・コーディネーター役を兼務している状況である。

今後、安定した学校支援ボランティア活動の維持を考えるためには、地域の活動の中心となる「学校地域支援本部」等の組織体制を整備し、ボランティア・コーディネーターを中心とした活動の調整が必要になるものと思われる。

（注記：本報告は平成23年度に配分を受けた学部長特別研究費に対するものである。）

【参考論文・文献】

明石要一他編著『学校支援ボランティア " する側 " の心得帳』（明治図書、2002 年）

佐藤晴雄編著『学校支援ボランティア―特色づくりの秘訣と課題―』（教育出版、2005 年）

霜田浩信他著『学校支援ボランティアハンドブック』（ほんの森出版、2011 年）

生涯学習審議会「学習の成果を幅広く生かす―生涯学習の成果を生かすための方策について（答申）」（1999 年）

中央教育審議会「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について（答申）」（1996 年）

中央教育審議会「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」（2012 年）

イタリア語教育の拡充とイタリアの大学との学術交流協定に向けた研究報告

Proposals for improving the teaching of Italian and plans for an academic exchange agreement with the University of Bologna

土肥 秀行

文化政策学部国際文化学科

Hideyuki DOI

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

本稿では2011年度より実施されている表題研究の報告がなされる。その研究が目指すところは、静岡文化芸術大学内でのイタリア語教育の充実化と、ボローニャ大学との学術交流協定の締結である。

In this article I discuss the research done in the year 2011/2012 for the improvement of the teaching of Italian at Shizuoka University of Art and Culture (SUAC) and plans to begin an academic exchange agreement between the SUAC and the University of Bologna.

はじめに 研究の目的

表題研究は、平成23年度学長特別研究として実施され、年度があらたまってもなお関連する試みが継続的に行われている現在進行形の課題である。高田和文教授が研究顧問、深田てるみ准教授が現地調査担当（2011年11月にミラノ工科大など）を担当。研究代表として全体の統括を行った土肥から当報告は行われる。

研究目的は2つある。

第一に、静岡文化芸術大学における「イタリア語教育の拡充」が挙げられる。本学では「イタリア語I,II,III,IV」においてイタリア語教育が行われているが、現行の内容は、国際文化学科の専門科目「地域言語」のひとつ¹として、2年生以降、週2コマ、1年間に限り、初級のみ、というものである。報告者が担当することになった2009年度以降の2年間で大幅な履修生の増加がみられた。初年度（2009年）が年間を通して15名であったところ、次の2010年度は34名、2011年度は32名となった。2012年度は26名と「安定期」に入っている。制限のある条件下であっても、履修者が従来の2倍となる状況に対し、イタリア語教育を広めつつ（履修生の数だけでなく、学内と県内でのイタリア語教育の認知度の向上も意図する）、充実させることが必須である。学内（学生・教職員）における高い関心と、学生の学習意欲をかきたててそれに応える語学教育環境を整えるのが当研究の目的である。

第二の目的として、イタリアの大学との学術交流協定の締結が挙げられる。未だ本学は欧州大陸のいかなる大学とも協定をもち、国際文化学科を擁する大学としては未整備の状態にある。ボローニャ大学総合芸術学科（通称ダムスDAMS）、フィレンツェ大学外国語学科、ミラノ工科大学に関して現地調査を行った結果、まずは実現可能性が高く意義深いボローニャ大学との提携に目標を絞る方針をとった。本論においてもボローニャ大学についての記述を中心とする。目指すは、学生・教職員にとって双方向的、包括的な協定である。一般に、海外の大学との協定のメリットとして、教員にとっては短期またはサバティカルによる長期の滞在、さらには国際シンポジウムの共催などの研究活動、職員にとっては短期もしくは長期の研修活動、学生

にとっては一年未満の留学、各大学の外国人センターでの短期語学研修、ワークショップ参加などが挙げられる。そもそも海外の大学との協定締結は、大学にとって、以前から寄せられている「海外の提携大学が少ない」との声の払拭につながる。また本学の位置する浜松の街が、イタリアとの関係から益することは少なくない（「おわりに」で触れる）。研究開始から2～3年度内、つまり2014年度までのボローニャ大学との協定締結を念頭に研究を行っていく。

1. イタリア語教育に関する研究実施内容

現状では、イタリア語の初級の授業が週2コマ、1年間続くだけであるが、限られた場であるからこそ、難関多き初級であるにせよ、脱落させない、挫折させない努力が担当講師には求められる。講義に変化をもたせ、常に魅力的であるようにする、そのための2つの方策を次に挙げる。

まずはネイティブ講師の招聘である。本学でイタリア語を担当するのは土肥のみであることから、その講義はどうしても「話す・聞く」の要素に欠けてしまう。そこで外部からネイティブのゲスト講師を招く。半期につき最低でも2回あるとよい。2011年度は、アンドレア・フィオレッティ氏（東京外国語大学博士課程、2011/5/19と6/22）、ディエゴ・マルティーナ氏（東京大学留学生、2011/12/1）、エドアルド・ジェルリーニ氏（東京大学特別研究員、2012/1/25）らを特別講師として招いた。一年を通じて4回、おおよそ2ヶ月に一度の割合である。受講生にとってイタリア語に慣れる恰好の機会となっている。イタリア語の場合、浜松近郊にネイティブは少なく、どうしても東京圏から招聘することになる。その経費を個人研究費で賄うには限界があり、大学の予算内に教育補助費のような枠が設定されることが求められる²。

第二に、オリジナル参考書の作成である。毎回の講義のはじめに、出欠を兼ねて、予め暗記してきてもらったイタリア語会話のスキット3、4つをミニテストで確認をするようにしている。その暗記のためのフレーズ集を2011年度来まとめている。最終的には『イタリア語会話表現集』

として都内の出版社から発表される予定である。「イタリア語」の講義では文法の学習がメインであるが、「実用性」のあるフレーズをそのまま覚えるという作業によって変化をつけている。

以上が講義のなかでできる「工夫」であるが、これまで繰り返し述べてきたようにそもそもカリキュラムによる制約があり、イタリア語学習の場はカリキュラム外にも求められる。外国語学習には目標策定が肝要であるといわれるが（目標があれば挫折しない）、具体的にはイタリア語検定と全日本学生イタリア語弁論大会へのチャレンジが挙げられる。

イタリア語検定については、5級さらには4級の取得が、到達可能と目される。毎年10月と3月に実施されており、浜松近辺の試験会場は、東京、横浜、名古屋である。検定料の上に遠征費がかかることから、チャレンジ奨励のためにも、少なくとも検定料（5級4000円、4級5000円）に関しては補助がなされるよう大学と交渉したが、このような名目で学生個人にお金を支給するのは無理との回答しか得られなかった。英語については、TOEICを本学で受験する場合、受験料が50パーセント割引されるのに対して、不平等であろう。イタリア語に限らず、外国語検定を受ける場合の大学による費用補助の仕組み作りの努力は続けられるべきである³。実績として、2011年度はイタリア語検定5級取得者が3名いる。

もうひとつのチャレンジの場は、全国学生イタリア語弁論大会である。これは毎年12月に京都外国語大学の主催により同大学で実施されている（後援にはイタリア大使館、在大阪イタリア総領事館、在日スイス大使館、NHK出版、毎日新聞社ほかが並ぶ）。ちなみにイタリア語のスピーチコンテストは、2011年に第5回をむかえた同大会と、東京で行われ2011年で21回目を数える「イタリア語スピーチコンテスト」（主催は公益財団法人日伊協会とイタリア文化会館、後援にイタリア大使館、朝日新聞社、NHK）、以上の2つが存在する。後者には学生に限らず一般の参加もあり、またスピーチだけでなくネイティブとの質疑応答も審査のポイントに含まれるため、「ハードル」が高めである。報告者が薦める全国学生イタリア語弁論大会は、1位から3位までにイタリア往復航空券が支給されるという、より魅力的な設定ゆえに挑み甲斐がある⁴。2010年度には本学から3人が出場したが（全19人中）、2011年度は本学からのチャレンジを2人に絞ることにした⁵。その選定については、「イタリア語」受講者のうち、希望者は800字以内のスピーチ要旨（日本語）を提出し、教員が審査するという形式をとる。2011年度は2人が希望し、審査の結果、両者共に弁論大会に申し込むことになった（本戦出場が決まる際にも、主催者側による書類と原稿審査を経ている）。チャレンジ奨励のために、浜松＝京都の交通費を大学は負担している⁶。2011年12月10日に京都外国語大学で開催された大会に出場したのは次に挙げる国際文化学科3年の2名である。仁科十志子「新撰組—最後の忠士たち Shinsengumi: gli ultimi samurai fedeli」、藤井優里香「動物と共に生きる Vivere con gli animali」がそれぞれの題目であるが、前者は全15人中5位で在日スイス大使館賞を受賞した（画像1）。外国語を専門とするわけではない本学の学生が2

年続けて入賞することに、本学の外国語教育のポテンシャルをみてもよいだろう。こうした結果が、同年代や、続く「イタリア語」受講生の励みとインセンティブになっている。



画像1 イタリア語でスピーチする仁科十志子さん
(2011/12/10、京都外国語大学 941 教室)

本章の最後に、広い意味での「教育」、大学全体（加えて一般市民）にむけた、イタリア語・文化への誘いとなるイベントへの取り組みについて触れたい。言語とは常になにかに至るための道具であり、文化を理解するには必須であろう。そこでイタリア語学習者と一般にイタリア文化への興味を喚起するために、声楽のコンサートを催した。主催者であるわれわれは「イタリア語教育の拡充研究プロジェクト」と名乗り、すでに数々の演奏会を催した実績のある「静岡文化芸術大学の室内楽演奏会」との共催で、東日本大震災被災者応援のための会とした。2011年12月22日、本学講堂において、『ナターレ 2011 声楽の夕べ Natale 2011 - una serata lirica』（「ナターレ」とはイタリア語でクリスマスのこと）と銘打ったコンサートが開かれた。出演は藤井泰子（ソプラノ）、セルジョ・ペトルツェッラ（テノール）、マッシモ・スカピン（ピアノ）の3氏であり、イタリアの芸術普及、被災者支援との趣旨に賛同し、無報酬で出演している。いずれもイタリアでは中堅の実力派アーティストである。一般市民も含め入場無料に設定し、会場での募金は「SUAC for Japan」浜松から大船渡へ「音楽活動支援」に充てられた。150余名の来場者からの募金は9万円弱にのぼった。曲目は名作オペラからのアリア、そして有名な歌曲が中心であった。オペラ『蝶々夫人』より「ある晴れた日に」、『トスカ』より「星は光りぬ」、『ノルマ』より「清らかな女神よ」、『トゥーランドット』より「誰も寝てはならぬ」、歌曲は「カテリー（つれない心）」、「オー・ソレ・ミオ」、「帰れソレントへ」、「フニクリ・フニクラ」などである。当日の土肥の解説でも触れたが、アリアは優れた詩（つまり文学）としても鑑賞可能である。旋律だけでなく、イタリア語自体の響きも聴衆は感じ取り、一層イタリア語に対して興味をもったはずである（画像2）。



画像2 コンサート《ナターレ 2011 声楽の夕べ》
(2011/12/22、静岡文化芸術大学講堂)

カリキュラムの限界ばかり嘆いていても始まらない。制度についての再考は機をみてなされていくべきである。2015年度のカリキュラム改変にむけて、外国語に関する議論は、英語と中国語の重点化の方向で進められている。複数外国語の重要性をうったえる立場からみて残念な状況であり、ありうべき「イタリア語上級」新規設置の可能性はゼロである⁷。代わりに制度を変える必要のない、自己完結型のカリキュラム改変ならばできる。具体的には、2012年度に入ってから「イタリア語」について、「週2回で単年学習」という現在の運用方法を、「週1回で二ヶ年学習」に変更するよう学内調整してきた。そこで2013年度からは、「イタリア語Ⅰ」(前期)と「イタリア語Ⅱ」(後期)を初級レベルとし、「イタリア語Ⅲ」(前期)と「イタリア語Ⅳ」(後期)を中級レベルとするよう決定した。1年目に週1回、初級を学んでから、2年目に週1回、中級を学ぶ。こうして、学生から寄せられる「初級から中級へと段階的に学びたい」という少なからぬ要望に応え、学習意欲をかき立てていく。

以上述べてきたイタリア語教育の拡充の先には、当然、学生・教職員のためのイタリアの大学での研修の道も用意されなければならない。次章でその取組について述べる。

2. イタリアの大学との学術交流協定に向けた研究実施内容

学生、教員、職員のそれぞれに対して研修の場を可能とするような協定作りの可能性を、ボローニャ、フィレンツェ、ミラノの大学で模索するため2011年11月に現地調査を行った。土肥は11/6～12の期間にボローニャとフィレンツェに赴いた。

フィレンツェ大学では、組織として独立性の高い外国人センターが、本学学生の短期&長期の語学文化研修先として適当であるが、そのセンターと協定を結ぶところまで至らなくともよいと判断した。その理由は3つあり、毎年コンスタントに留学生が渡るわけではないだろうし、当方は大学であるのに対し先方は大学付属センターとアンバランスであり、なによりイタリアから日本に来る留学生の望めない双方向性に欠けた関係となるためだ⁸。フィレン

ツェ大学においては外国語学科との協定が考えられる。実際、2012年秋から国際文化学科3年生1名が、通年で同学科に留学している。

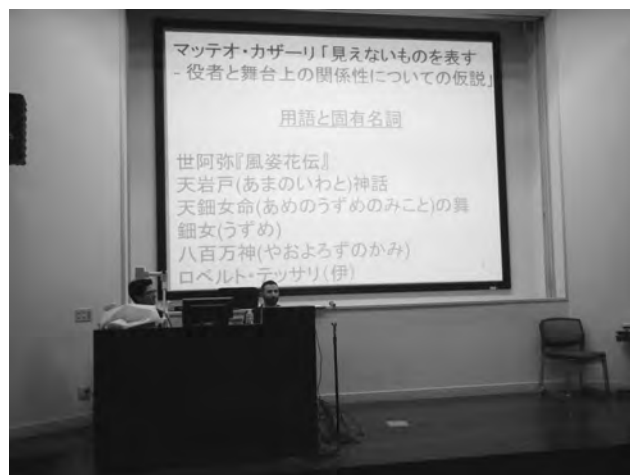
協定の可能性が感じられるのが、ボローニャ大学との場合である。すでに同大学とは協働体制の構築がはじまっている。2011年度学長特別研究「身体芸術論研究Ⅰ」の枠内で、本学の梅若猶彦教授が、ボローニャ大学で能楽・現代劇ワークショップ(2011/11/4-10、於・大学ラボラトリ)を開き(画像3)、また国際シンポジウム「新たな能—非連続の連続」(2011/11/10、於・総合芸術学科)では議論をリードした(画像4)。同時期に出張した土肥は、これらのイベントをフォローしつつ、ボローニャ大学教員と共に協定の可能性について話し合った。開催されたワークショップやシンポジウムが共同研究の実績となる以上、2大学のコラボレーションはすでにはじまっており、その延長線上に協定締結がありうるとの共通認識にいたっている。シンポジウムに続いて、2012年3月には報告集が、ボローニャ大学出版局からボローニャ大学と本学の共同出版で発刊された(伊語)⁹。シンポジウムと報告集を通じて、ボローニャ大学のジェラルド・グッチーニ教授は東西の中世劇にみられる儀式性、マッテオ・カザーリ講師は東洋の伝統演劇における秘伝、ジョヴァンニ・アッザロー二名誉教授は歌舞伎と能の様式性、日本文学の翻訳家のリディア・オリリア氏は三島由紀夫の『近代能楽集』、土肥は逆説的な能の身体性、梅若教授は虚構としての身体性について論じた。国際シンポジウム第2弾として2012年10月19日には本学で「見えるものと見えないもの—能をめぐる」が開催された(画像5)。初回のシンポジウムにも参加した梅若教授は不可視を可視化するパラドクスについて論じ、同じくカザーリ講師は『風姿花伝』を例に「見えないもの」を扱う演者の役割について検討した。今回から新しく参加した本学の高田和文教授は能が東西の前衛劇に与えた影響についてスポットをあて、フィリピン大学ディリマン校国際センター准教授で本学の客員研究員でもあるアンパロ・アデリナ・ウマリ氏はフィリピンでの能の実践について報告した。また、シンポジウムにあわせて来日したマッテオ・カザーリ講師と今後の協定交渉は進められることとなっている。



画像3 ワークショップ最終日、梅若猶彦作『イタリアン・レストラン』公演(2011/11/10、ボローニャ大学ラボラトリ)



画像4 シンポジウム「新たな能—非連続の連続」
(2011/11/10、ボローニャ大学マレスコッティの間)



画像5 シンポジウム「見えるものと見えないもの—能をめぐる」
(2012/10/19、静岡文化芸術大学278大教室)

それではここでボローニャ大学と結ばれる協定のアウトラインを描いてみたい。あくまで大学本体同士が結ぶものである。これまでも土肥はボローニャ大学の国際交流担当の副学長ならびに国際交流事務局とコンタクトを保ってきた。実際の交流は、窓口となる学科と教員を通じて行われる。本件においては総合芸術学科のカザーリ講師と本学国際文化学科の土肥である。学生、教職員が研修を行う際には、費用は基本的に元の所属大学が負う。ただし学生の一年未満の留学の場合には、先方からの留学生に対し、授業料の免除、必要最低限の保険料負担を保証し、住居の確保

や費用補助については努力目標として対応する。基本的に、留学生を受け入れるか、受け入れないかはその時々状況に応じて双方の合意のもと判断する¹⁰。イメージとしては、本学にすでにある協定のうち、韓国ホソ大学校とのものを緩くしたかたちに近い。

おわりに 協定のメリット

当研究のアウトリーチ活動として、本学公開講座の範疇で、2012年5月26日に「イタリアの大学と都市—最古の大学を擁するボローニャの例から」と題するレクチャーを行った¹¹。そこで強調したのは、いま浜松の町がボローニャに寄せる関心である。浜松市は、市長が中心となって「音楽のまち」をさらにPRするために、ユネスコ創造都市ネットワーク(音楽部門)に加盟申請している。そのネットワークのメンバーのひとつがボローニャ市であり、先例に学ぶために、たとえばマウロ・フェリコーリ氏(ボローニャ市経済・振興局長、ボローニャ大学特別教授)が、招待者として「創造都市フォーラム2011」(浜松アクト、2011/11/19)において講演を行った。この運動には本学の教員がブレインとしてこれまで関わってきた。地方自治体同士の結びつきには、パラレルにおかれるボローニャ大学と静岡文化芸術大学の大学間交流から益することもあるだろう。よって町と大学が一体となってボローニャとの関係醸成にむかうよう提案し当報告を終えることとする。

基本データ

ボローニャ Bologna

- ・エミリア・ロマーニャ州の州都、人口38万人、イタリア第7の都市。
- ・第一次産業、第二次産業(中小企業)ともに盛ん。オートバイメーカーのドゥカーティとマラグーティ、殺虫剤メーカーのVAPE(ヴァーベ)、ファッションブランドのフルガが本社をおく。見本市地区は建築家・丹下健三の手による。

ボローニャ大学 Alma Mater Studiorum - Università di Bologna

- ・1088年創立、「世界最古の大学」ともいわれる。
- ・ペトルルカ、エラスムス、コペルニクスなどが学ぶ。
- ・建築学部以外はすべての専門を擁する国立の総合大学(イタリアの大学はほとんど国立で、その数は61であり、その他20ほどの大学がある)。
- ・在籍学生数8万人超
- ・主な日本の提携校に創価大学、早稲田大学、東京大学、慶應大学。数年前までレオナルド・ダ・ヴィンチ・プログラム(学生の派遣プログラム)の派遣先に指定されていたのは早稲田と東大。
- ・日本に留学するのは外国語学科、歴史学科、翻訳・通訳コースの学生。
- ・本学にとって本質的なテーマであるアートマネジメント研究の分野においては、ボローニャ大学総合芸術学科(通称ダムスDAMS、1970年創立)は先進的研究拠点である。

注

- 1 学科専門科目であるため他の6言語のように全学レベルでの履修が想定されておらず、基本的に他学科・他学部にはひらかれていない。本学で学べる8外国語のうち、イタリア語と同じ扱いなのはインドネシア語のみ。
- 2 費用を個人研究費から捻出する2012年度前期は、ゲスト講師招聘は1度に留まった(エドアルド・ジェルリーニ、2012/5/10)。後期も同様であろう。
- 3 加えて2015年度にはじまる新カリキュラムにおいて、外国語検定の結果に応じて単位が付与されるようにするアイデアもある。
- 4 2010年12月に出場した芸術文化学科4年生は3位となりイタリア往復航空券を得た。また2012年の第6回大会では国際文化

- 学科 2 年生が準優勝し、航空券とペルーシア外国人大学短期語学コース奨学金を得ている。
- 5 エントリーは大学推薦に依るという規定はないが、実質、所属大学教員のサポートが必要なため。
 - 6 2012 年度からは、「学生の諸活動に対する支援経費」として大学より、交通費から自己負担分 5000 円を引いた額が 2 人分支給されることになったが、これは教員が毎年申請していかなければならない。
 - 7 来るカリキュラム改変においては、国際文化学科専門科目ではなく全学共通科目とし、加えて 2 年次からではなく 1 年次から履修可とすることで、「イタリア語」をよりひらかれたものとすべきだろう。
 - 8 フィレンツェ大学外国人センターの事務局ジョヴァンナ・ヴィテッロ氏の話によれば、カナダの 3 大学と協定が結ばれている。現在、本学においてはフランスのディジョンにあるブルゴーニュ大学国際フランス語研修センター CIEF との協定を検討中である。毎年数名の研修希望学生が出る見通しのなか、協定を結ぶ意義はあろう。
 - 9 同時期にカザーリ講師とアッザロー二名誉教授が監修した、演劇専

- 門雑誌《Hystrio》の日本演劇特集号（2012 年 1 月）に、本学の高田和文教授と土肥が寄稿している
- 10 開学から十余年、いまだ本学はヨーロッパからの留学生をむかえたことがない。出身国にこだわるわけではないが、イタリアからの留学生をまずは一人実現したい。
 - 11 2012 年 5,6 月の公開講座「イタリアの創造力」で、土肥の回に続いたのは、谷川憲司教授「イタリアのデザイン—魅了する造形美、ものの作りの心を探る」、高田和文教授「現代都市ローマー—永遠の都—のさらなる変貌」、エドアルド・ジェルリーニ氏（東京大学外国人特別研究員）「日伊の恋愛詩—愛を叫ぶイタリア人、恋を思う日本人」、根本敏行教授「イタリアの産業と都市—北イタリアの工場都市と第三のイタリア・ボローニャ vs 浜松」である。全 5 回の聴講者はのべ 492 名にのぼり、前年度「フランス編」に続くシリーズとして、大きな反響を得た。谷川、根本両氏の回については、講師自身がまとめた要旨が『文化と芸術』（本学文化・芸術センター発行、第 16 号、2012 年 9 月）に掲載されている。

旅行ガイドブック・ブログの中のイギリス産業遺産 —観光のまなざし論からのアプローチ—

Industrial heritages of UK to be introduced in Japanese travel guidebooks and blogs -For thinking the tourist gaze from role of the media-

加藤 裕治

文化政策学部文化政策学科

Yuji KATO

Department of Regional Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

本稿では、イギリスの産業遺産—特に世界遺産でもある7つの遺産が—日本の旅行ガイドブックとインターネット上の個人ブログにおいて、どのような情報や関心に基づき、その遺産が紹介されているかを見ていく。観光のまなざし論では、ある対象が観光地として認知され、イメージ形成されていく過程において、メディアの影響が大きいと論じられてきた。海外にある遺産の認知やイメージ形成には、特にこうしたメディアの影響が大きいと考えられる。また近年は、インターネットによる個人的な情報発信が盛んになり、遺産の観光地化のプロセスにおいて、旅行ガイドブックと異なる情報や関心で観光地が紹介されている可能性が高い。こうしたメディア環境の変化が観光のまなざしに与える影響を考察するためには、各メディアにおける情報発信の視点や関心の違いを対比し、各メディアの役割について考えていくことが必要である。

This paper considers the difference in information between Japanese travel guide books and blogs about industrial heritages (especially 7 world heritages) of UK. The aim of this investigation is for reconsidering the tourist gaze theory. In the theory, it is thought that media have important role in the process of being regarded as tourist spot for a certain place. When getting to know especially an overseas tourist spot, the influence of media is important. Recently, It can be said that private blogs are forming the alternative tourist gaze. Thus, I think that it is required to consider the influence of a change of media environment and the different role of each media in order to reconsider the tourist gaze.

1：はじめに～メディアと世界遺産について

本稿では、日本の一般的・大衆的な旅行ガイドブックとインターネットのブログにおいて、イギリスの産業遺産—特に世界遺産でもある7つの遺産（コーンウォールと西デヴォンの鉱山景観、アイアンブリッジ峡谷、ダーウェント峡谷の工場群、ソルテア、ブレナヴァン産業景観、ポントカサステ水路橋と運河、ニュー・ラナーク）が—どのように紹介され、どのような情報が提供されているのかをみていく。またその事例をもとに、世界遺産でありかつ産業遺産・本来観光とは別途の位置づけを与えられて成立する近代的な遺跡—が、ツーリズム的な関心から、現時点でどのように紹介され、意味付けられているかという「観光のまなざし」とメディアの関係について考える。

ところで、まず最初に世界遺産の概要について簡単に確認しておきたい。周知のように世界遺産とは1972年の第17回 UNESCO 総会で採択された世界遺産条約（正式には『世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約』⁽¹⁾）に基づいて世界遺産リストに登録された物件のことを指す。そのため本来、世界遺産とはその条約の名の通り遺産の保護 (conservation and protection) のための枠組みである（この段落は山村 2011、佐滝 2009 参照）。

しかし、多くの論者が指摘しているように、世界遺産は単に保護の対象物ということだけではなく、観光の資源としても大きな位置を占めていることは、日本にある世界遺産を見ても明らかだろう。現在、世界遺産は極めて大きな「経済的仲介物」(Audrerie, Souchier and Vilar 1998=2005:8) となっている。それは別の言い方をすれば、「世界遺産ブーム」ともいうべきもの、つまりある対象が一旦、世界遺産となると、一躍、観光地とし

て多くの人々の注目を集めるものになるということである。

ところで、このように観光対象として世界遺産が認知されていくことに、大きく貢献しているのはメディアの力であろう。佐滝剛弘は伝搬力のあるメディアの影響が世界遺産のブームに大きな力を持ったと論じている。特に日本において世界遺産を紹介するエポックとなったのが、1996年4月から放映されたTBS系列のテレビ番組「世界遺産」であると推察している。またNHKでも数多くの世界遺産関連の番組が放映され、さらに「シリーズ世界遺産100」は、DVDマガジンのシリーズとして刊行されている。またテレビだけでなく、各種の旅行ガイドブックは世界遺産をこぞって紹介し、また一般雑誌、旅行系会員誌、ムック、あるいはインターネット上の旅行サイトやブログにおける口コミなどでも、盛んに世界遺産が紹介されている⁽²⁾（この段落佐滝 2009：19-24 参照のこと）。

このように人々が観光地として世界遺産の情報を取得し把握する際には、メディアによる認知形成や情報紹介による「啓蒙」が大きく関与している。そのなかでも、特に本稿で取り上げるイギリスの7つの遺産は、海外の世界遺産であることに加え、近代の産業遺産という、比較的近年になって、急速に観光の視点から取り上げられはじめた遺産のため⁽³⁾、特にメディア上での紹介が、その遺産の認知や理解に大きな役割を果たしていると考えられる。

そのため、本稿ではこうした海外（イギリス）の産業遺産の紹介や情報提供の状況を把握するために、多くの人々が一般的に入手しやすく、通常市販されているマス向けの旅行ガイドブック（雑誌）と、近年、旅行情報や観光地情報を入手する際、個人的な見地から観光の体験が語られているインターネット上のUGCサイト、特にブログを事例として具体的な内容を分析する。またその結果にもとづき、

メディアと観光のまなざしに関する考察を深めることを目的とする。

ところで、こうした具体的な調査、分析に入る前に、まず既存の理論において、観光とメディアがどのような関係にあると論じられてきたのかを簡単に整理し、今回、マスの旅行ガイドブックとインターネットのブログを具体的に对比させたことが持つ意味を、観光のまなざしというキーワードを軸に簡単に整理しておきたい。

2:「観光のまなざし」論におけるメディアの位置づけ

周知のように「観光のまなざし」は J.Urry によって提唱された概念である (Urry 1990=1995)。この概念はさまざまな批判にさらされつつも⁽⁴⁾、観光を捉える際のキーとなる概念として重視されてきた。Urry は観光のまなざしを「日常から離れた異なる景色、風景、町並み」に対して投げかける視線として定義する。ただし、それは個人的な主観に留まるのではなく、「社会的に構造化され組織化 (Urry 1990-1995: 2)」されたものであるという。つまりこのまなざしは誰か特定の個人に帰属するものというより、社会的、集合的なものとして形成される。

さて、こうした集合的な観光のまなざしの形成において、大きな役割を果たすものがガイドブックである。Urry によれば、近代的な観光の誕生、いわゆる 19 世紀に生じた (トーマスクックに代表されるような) パッケージツアーにおいて重要であったのは、旅行のガイドブックの出現であるという⁽⁵⁾。「旅行体験の視覚化ということが生じた、というか「まなざし」の発展が生じたというべきで、これを助長し支えたのがガイドブックの発達であった。ガイドブックは新しい見方を奨励していくのである。(Urry 1990-1995:8)」Urry のこうした指摘のように、ある場所を観光地とする際、旅行用のガイドブック (=メディア) はまなざしの形成に非常に大きな影響を与える。つまり、それはある場所の観光地としての見方や楽しみ方の枠組を与え、その場所の観光地としての意味を人々に構築していくのである。

ただし一方で、こうした近代的な観光のまなざしの出現は、その場所の捉え方を固定化してしまい、旅行者はそれに対し受動的にしか反応できず、メディアが創り出すイメージ通りに場所=観光地を見て、ただ消費するだけの存在になってしまうという批判がなされてきた。特に Boorstin による「疑似イベント」の概念は、こうした「観光=近代ツーリズム」が、旅行(者)の主体的な経験の契機を奪うと論じている (Boorstin 1962=1964)。故に、観光のまなざし概念において、メディアの位置づけは、両義的なものであるといえる。つまりある場所を「観光地」として形成する際の重要な媒介物であると同時に、その場所が「どのような観光地」であるかということを固定化してしまうものとなるからだ。

しかし、こうした観光のまなざしとメディアの関係の両義性について、遠藤英樹 (2005) は、送り手=「メディア」による観光地の意味付けに対し、受け手=「旅行者」がその意味付けの受動的受容だけでなく、自ら能動的に意味を作り出す微細な「変換作業」をしていることを観光客に対

する具体的な調査から指摘している。多くの旅行者は、観光ガイドが創り出す観光地のイメージを、そのまま体験=消費するだけでなく、そこから「交渉的」(S. Hall) な読解をすることにより、イメージ化をすり抜ける契機をもっているという。

こうした遠藤の指摘からすれば、ある観光対象に対するまなざしは、ある場所を観光地として意味づける送り手イメージの生産/再生産に基づいて形成されつつも、それを受容した受け手の変換作業との集積として形作られていくものといえる⁽⁶⁾。

本稿で産業遺産をとらえる際にも、こうした観光のまなざしが含む送り手の情報発信と受け手の変換作業の集積 (=相互作用) が、「観光地という場所」としての意味付けやイメージを創り出す、という観点に立つ。そのため、まずは送り手側の視点として、マス向けの旅行ガイドブックの記述内容を見ていく。またもう一方で、実際に観光をしたと思われる旅行者=受け手が、産業遺産にどのような意味付けや変換作業を与えるかについての契機を捉えるために、インターネットのブログに注目して、産業遺産への書き込みをみていくこととした。

そしてその具体例をもとに、イギリスの産業遺産が日本の(観光)メディアにとってどのような位置づけにあり、どのように理解され、そしてどのようにイメージされているかについて、送り手/受け手の情報形成の違いを確認していきたい。特に、インターネットのブログという、近年、観光の情報収集にとって欠かせないメディアが⁽⁷⁾、観光のまなざしの形成—産業遺産をどのような場所として捉えているのか—に対して、どのような役割を担っているかを考える。

3: 調査の方法について

具体的な調査として、今回はイギリスの世界遺産の中の産業遺産の7つ(コーンウォールと西デヴォンの鉱山景観、アイアンブリッジ峡谷、ダーウェント峡谷の工場群、ソルテア、ブレナヴォン産業景観、ポントカサステ水路橋と運河、ニュー・ラナーク)に関わる旅行ガイドブックとインターネットのブログ上の紹介記事を収集し、各産業遺産がどのように紹介されているかを比較、検討した。

まずマス向けの旅行ガイドブックは、日本国内で市販され日本語で読めるイギリス(およびスコットランド)関連タイトルの旅行ガイドブック、および世界遺産関連誌の中から上記7つの遺産が紹介されているものを選んだ。そしてその中で産業遺産が雑誌内のどのようなコーナーで紹介されているのか、そのキャッチコピー、紹介・説明文の内容を比較検討した⁽⁸⁾。

なお、今回はそれぞれの旅行ガイドブックで記載されている内容の特徴を比較できるようにするために、世界遺産検定の公式テキスト(『世界遺産大事典<下> 世界遺産検定公式テキスト』NPO 法人世界遺産アカデミー監修 2012)において、7つの産業遺産が説明されている項目のキャッチコピーと紹介情報を参照軸として選んだ。これにより一定の「常識」といえる情報に対し、各旅行ガイドブックが、どのように情報を縮減したり、逆に付加しているのかを、この参照軸の情報をもとに比較することとした。

次に個人による産業遺産へのまなざしを調査する際に、適当と考えられるものとしてインターネット上の個人ブログを調査対象とした。

ただしブログはインターネットの特性上、検索することで、無数のブログがヒットする。また内容についても、玉石混交の状態である。そのため閲覧者が多く日本のポータルサイトの代表でもあるYahoo! JAPAN サイト内のページを参照することとした⁽⁹⁾。Yahoo! JAPAN ドメイン内にあるYahoo! トラベルの「世界遺産ガイド」において、該当する7つの産業遺産情報を選択した際、その観光地を紹介する口コミ情報として同一画面に掲載されている(リンクが張られている)個人ブログを調査対象として設定した。(ただし、これらのブログはYahoo! JAPAN と協力関係にある旅行サイト、フォートラベルのドメイン内のものである。)またブログは、容易に改変、削除等されるため、調査開始後、2012年9月27日においても現存していたものを、調査対象のブログとして選んだ。

また、上記以外にGoogleにて各産業遺産名を検索した際、上位30位までに検索結果として出てくるサイトやページをすべてチェックし⁽¹⁰⁾、単なるリンクのみのサイトや、ユネスコ等の情報がそのまま記載されている情報ページは除外し、一定の情報量(個人的な文章記述)があるものを選んで調査対象のブログとした。この際、各プロ

グの記述(文章として書かれているもの)に何が書かれているかを把握するため、内閣府が平成15年8月に調査した、「自由時間と観光に関する世論調査」から海外旅行先の目的として調査項目に上がっている項目等を検討し、最終的に14項目の指標を設定し一覧表にまとめた(表1参照)。そしてこの表1をもとにブログ情報の傾向を把握した⁽¹¹⁾。

4: 旅行ガイドブックにおけるイギリス産業遺産の位置づけ

(1) 旅行ガイドブックの全体概要/産業遺産の取り上げられ方

まず、イギリスを紹介する一般的な旅行ガイドブックを見ると、イギリス観光の注目すべきポイント=「見どころ」として「コッツウォルズ」「湖水地方」「ロンドン」の3つが中心として取り上げられているものが目立つ⁽¹²⁾。特に「コッツウォルズ」であれば「田園風景」、「湖水地方」であれば「詩と物語」、また「ロンドン」であれば「王室」や「ショッピング」がテーマとして紹介されている。この組み合わせは表現がやや違うものの、3つの出版社の旅行ガイドブックにおいてイギリス観光の基軸として取り上げられている。例えば『まっぴる イギリス・ロンドン』では、「旅のプランニング」「充実のルート」として、この3つの

調査対象ブログ名	URL	ブログに記述してある内容(項目の記述があるものは○)														写真枚数
		訪問の経緯	遺産の保存状況など	遺産周辺の景観への言及	自然景観への言及	歴史・建造物への言及	博物館・施設についての言及	イベントの見学	レストラン・食事への言及	ショッピング・土産物関連への言及	ホテル・宿泊施設などの言及	遊ぶ・ウォーキングなどの言及	現地の人との交流	交通・ルート・所要時間などの情報	主観コメント(気持ち、感想など)	
■アイアンブリッジ峡谷																
英国～アイアンブリッジ峡谷	http://4travel.jp/traveler/momitsu/album/10455306/	○	○	○	○				○		○					14
アイアンブリッジなどの橋です	http://4travel.jp/traveler/the0041/album/10429915/		○	○	○											3
Ironbridge	http://4travel.jp/traveler/ma2oka/album/10420603/					○										5
世界遺産 Ironbridge の路面は舗装されていた	http://4travel.jp/traveler/nomocoma_pant_europe/album/10346638/		○	○											○	22
Telford の町で産業革命の歴史の一端をみる	http://4travel.jp/traveler/nomocoma_pant_europe/album/10346641/		○	○												10
(25) イギリス旅行	http://4travel.jp/traveler/tabi-jin/album/10182503/	○			○	○										1
Wonder's World-Wide (WWW)	http://blog.goo.ne.jp/wonderthunder/e/1429733a02c3c0a4916b4a2239f		○	○	○	○			○		○			○	○	15
■コーンウォールと西デヴォンの鉱山景観																
ペンザンス、コーンウォール	http://4travel.jp/traveler/antoniofox/album/10484089/	○		○										○		1
イングランド[レヴァント・マイン]	http://4travel.jp/traveler/andre3000/album/10348445/	○	○	○	○							○			○	16
■ソルチア																
チョイ不夜オヤジの欧州世界遺産攻略日記 PART11-1	http://4travel.jp/traveler/Tocan7seas/album/10346616/	○	○	○		○	○				○			○	○	17
ソルチア	http://4travel.jp/traveler/fururununu/album/10199054/	○	○	○										○	○	26
Japan + England (日本とイギリスいろいろ) Diary	http://yaplog.jp/12whiteroses/archive/134		○	○	○				○							5
イギリスからの旅日記	http://ameblo.jp/lemon-na/entry-11246585845.html	○	○	○		○	○		○						○	5
■ダーwent峡谷の工場群																
「天空の城ラピュタ」のモデル地を訪ねて	http://4travel.jp/traveler/pochumi/album/10331437/	○		○	○		○	○						○	○	44
世界遺産旅行記[89]ダーwent峡谷の工場群	http://4travel.jp/traveler/classical.city/album/10220300/	○	○	○			○								○	14
■ニュー・ラナーク																
チョイ不夜オヤジの欧州世界遺産攻略日記 PART7-15	http://4travel.jp/traveler/Tocan7seas/album/10346670/		○	○		○								○		7
スコットランド[ニュー・ラナーク]	http://4travel.jp/traveler/andre3000/album/10269647/	○	○	○	○	○				○		○	○	○	○	30
グラスゴー紀行(3)	http://4travel.jp/traveler/giosblue/album/10271645/		○			○									○	5
世界遺産旅行記[51]ニュー・ラナーク	http://4travel.jp/traveler/classical.city/album/10135160/	○	○	○		○	○				○					11
世界遺産旅行記[51]ニュー・ラナーク	http://4travel.jp/traveler/gokurakucho/album/10042555/	○	○	○	○		○			○					○	8
スコットランド放浪記2	http://4travel.jp/traveler/sa2sasaki/album/10063484/		○													5
ホットチョコレート飲む?	http://white-hot-chocolate.com/archives/4052354.html		○	○	○	○	○								○	22
ロンドン留学後「まえあいらいふ」	http://london2000.exblog.jp/11099858/	○		○	○	○									○	9
大阪[無名]レトロビルディング案内	http://blogs.yahoo.co.jp/tamazo_building/22273434.html		○	○	○	○	○		○	○	○				○	49
■ブレナヴァン産業景観																
世界遺産旅行記[80]ブレナヴァンの産業景観	http://4travel.jp/traveler/classical.city/album/10163867/	○	○	○		○									○	12
かさこワールド	http://www.kasako.com/1005londonfoto5.html								○					○		52
■ポントカサステル橋と運河																
ポントカサステル橋と運河	http://4travel.jp/traveler/adekat2905/album/10483803/			○	○				○	○					○	37
世界遺産 ポントカサステル水道橋 他 3日目	http://4travel.jp/traveler/melroo/album/10486916/	○		○	○					○						19
塩たらず	http://salinelake.blog91.fc2.com/blog-entry-218.html	○	○	○	○	○									○	9
カーディフキッチン	http://cardifkitchen.blogspot.jp/2011/06/blog-post_15.htm			○		○									○	13
運河の海外旅行話	http://blogs.dion.ne.jp/abram1863in/archives/1037345.html	○	○	○		○									○	0
日々の暮らし	http://yaplog.jp/xiaosjp/archive/1209	○		○	○	○							○			11
ポントカサステル水道橋	http://blogs.yahoo.co.jp/yutabond/51843560.html			○	○										○	10
■複数遺産																
はぎのサラダ感	http://ooby-haggy.jp/whucornwall1.htm	○	○	○	○	○			○						○	23

表1: 調査対象としたブログとその記述内容の一覧

ポイントを中心に、旅のプランが提出されており、観光ガイドの中ではイギリス観光の定番ルートとなっている。

このように旅行ガイドブックには定番ルートの情報がフォーカスされやすいため、観光地や世界遺産はそうした定番ルートの中に存在すると、情報としての取り上げも多くなる。例えば「コッツウォルズ」ルートであればストーンヘンジ、「湖水地方」ルートであればリヴァプールなどが取り上げられている。これらの定番ルートの存在は、遠藤が指摘するようにイギリスの観光地イメージを一定の枠組において提示する「再生産」が行われているものといえる（遠藤 2005）。

こうした安定的な観光地イメージの「再生産」が存在する一方で、産業遺産は上記の3つの定番ルートに含まれることはなく、各雑誌において7つの産業遺産の取り上げられ方は「世界遺産」という括りで紹介されることが多い。

各旅行ガイドブックは世界遺産を特別なまとめページで紹介しているものが多いが、その中で産業遺産は遺産名のみで、コピーや紹介記事が無いこともある。ただし、『わがまま歩きイギリス』（実業之日本社 2012）のように、「英国をもっと深く味わう 3つのテーマで英国を掘り下げる」として、先にあげた「湖水地方」「コッツウォルズ（イングリッシュガーデン）」に加え、「世界文化遺産」を見どころとして取り上げているケースもあった。そのサブテーマは「産業革命の軌跡をめぐる」と名付けられ、産業革命の歴史という観点から産業遺産が取り上げられている。

その際、この旅行ガイドブックの中では「イタリアやフランスと比べれば、英国の世界遺産は決して多くはない」とされる一方、イギリスの独自性として「世界に先駆けて起こした産業革命」があったために産業遺産の価値は高いと説明される。そして産業遺産は観光地としては「遠隔地」にあり「華やか」ではないものの、「世界的な変革」を物語る遺跡としての価値があると紹介されている。つまり、この旅行ガイドブックの記述から読み取れるのは、産業遺産は観光地として些か利便や魅力に欠けるが、歴史的な位置づけからは重要であるという指摘である。ただし、詳細を交え紹介されている遺産は「ダーwent峡谷の工場群」「ポントカサステ水道橋」「ソルデア」「アイアンブリッジ峡谷」そしてあとは「リヴァプール」となっており、「ブレナヴォン産業景観」「コーンウォールと西デヴォンの鉱山景観」、またスコットランドにある「ニュー・ラナーク」の情報は取り上げられていない。

また、旅行ガイドブックの中でも、『地球の歩き方』は、観光地の取り上げ方に特徴的な編集視点がある。これは山口誠が指摘しているように、『地球の歩き方』が1970年代のバックパッカーブームの際に成立し、「ひとりで旅行を続ける方法を提供する」ガイドブックであったことが（山口 2010:112）影響しているといえるかもしれない⁽¹³⁾。『地球の歩き方 イギリス』は冒頭に「イギリス 旅のヒント」というコーナーを設けており、イギリスを5つの地区（ロンドン、南海岸地方、イングランド中部・北部、ウェールズ、スコットランド）と四季を掛け合わせたイベントカレンダーから紹介し、そこに観光のテーマをすすめる特集（保存鉄道の旅、スポーツの聖地を巡って、など）を掲載している。『地球の歩き方』は、おすすめプランを勧めるテーマ型の記述ではなく、地名と見所、交通アクセスを伝える

情報提供型の体裁をとっている。そのため世界遺産や産業遺産は、他の観光地と同じ体裁で紹介され、その情報は他の遺跡と並列的に提供されている（世界遺産としての特別な取り上げ方はされていない）。特に、その中では「アイアンブリッジ」への言及がかなり手厚くなっている。また「コーンウォールと西デヴォンの鉱山景観」が、「イングランド南西海岸に行く」という「旅のヒント」のルートに組み込まれ、もう一つの世界遺産であり自然遺産である「ドーセット及び東デヴォン海岸」とあわせて取り上げられている。他の旅行ガイドブックと比較し『地球の歩き方 イギリス』は、産業遺産に関する情報が詳細である場合が多い。

このようにイギリスの観光地を紹介する旅行ガイドブックにおいては、産業遺産は僅かな例外を除き、イギリスの定番化した観光ルートに組み込まれて紹介される事は少ない。ただし、『地球の歩き方 イギリス』『わがまま歩きイギリス』などに見られるように、「産業革命」という視点から観光対象としての価値付けを与えられる。つまり、産業遺産はイギリス観光の「定番とは異なった」旅のあり方として紹介され、情報が掲載される傾向にある。

（2）各産業遺産の紹介について

次に、産業遺産の個々の紹介記事を見ていく。ここでは、「ニュー・ラナーク」「アイアンブリッジ」「ブレナヴォン」の3カ所について、それぞれガイドブックの中で、どのように取り上げられているのかを見ていきたい。これらの施設は世界遺産という背景に加え、博物館や見学施設、またアトラクション等の観光資源が取り上げられることで、「観光客に人気」であることが強調される傾向がある。

ニュー・ラナークは、ロバート・オーウェンによる理想的な産業コミュニティとして形成されていく歴史的経緯の説明が、旅行ガイドブックの定番の説明となっている。その一方、例えば『旅名人ブックス スコットランド』（日経BP社 2006）では「博物館としてテーマパーク化した紡績工場」、また『まっがる イギリス・ロンドン』（昭文社 2012）では「アトラクションとしても有名」といった、一種の娯楽性を喚起させるような視点から遺産を取り上げている。これはニュー・ラナークが「アニー・マックラウド・ストーリー」というホログラムの少女による解説の視聴覚プレゼンテーションや「マジカル・ニューミレニアム体験」という2人乗りのライドにのって23世紀の未来からやって来た少女によるニュー・ラナークの過去、現在、未来を説明するというアトラクションがあり、また多数のショップやレストラン、ホテルがある、集客施設面でも充実したものとなっている事実を踏まえたものと考えられる（根本 2006）。

またアイアンブリッジは、1986年に世界遺産に登録されたこともあり、「世界最初の鋳鉄橋」という観点から取り上げられることが多い。また旅行ガイドブックによっては、その周辺がテーマパーク化した現状を取り上げているものもある。例えば『地球の歩き方 イギリス』では「産業革命にスポットを当てた一大テーマパーク」として紹介されている。確かにアイアンブリッジ周囲には製鉄業関連の多数の産業遺産があり、また多数の博物館や、プリッツ・ヒル・ビクトリアン・タウンというイギリス最大規模の屋外博物館があり、産業革命当時の町が再現されている（根

本 2006)。またそれに加え、数多くの集客施設や教育効果をねらったアトラクションがあり、相当の「見どころ」がある。『地球の歩き方 イギリス』ではそのため、橋そのものに加え「峡谷博物館」「鉄博物館」「ダービーハウス」「ブリスツ・ヒル・ビクトリアン・タウン」が見どころとして取り上げられ、またブリスツ・ヒル・ビクトリアン・タウンはおみやげ選別に最適な場所であることが紹介されている。

また『わがまま歩き - イギリス』は「もうひとつの旅」というコーナーにおいて、アイアンブリッジに「9つの博物館とアトラクション」があることを紹介している。ただし、このガイドブックに特徴的なのは「時間があるならばここ（コールブルックデール鉄博物館）と橋だけでも見れば、「産業遺産の歴史」が知る事ができる」という示唆情報が提供されていることである。このガイドブックにおいて、アイアンブリッジは「産業革命」の歴史を知るための、「もうひとつの旅」＝「定番と異なる旅」をする場所として位置づけられているのである。

またブレナヴァンもアイアンブリッジと同じように、製鉄所の遺構をはじめ、ウェールズの炭坑として有名なビッグピット (Big Pit) や、ビッグピットの見学ツアーなど体験型のプログラムもある場所となっている。しかし、これらの情報は、ほとんどの旅行ガイドブックでは触れられていない。しかし例外的に『地球の歩き方 イギリス』には、こうした一連の炭坑に関係した博物館や坑道体験などの情報が記載され、「観光客に大人気」の地であることが強調されている。

5：産業遺産を紹介する個人ブログの内容と役割

では、個人的な旅行記が記述されているといえるインターネットのブログにおいて、イギリスの産業遺産はどう紹介されているのか。まず今回閲覧したブログ全体の傾向（表 1）からみると、「遺産の保存状況」、また「遺産周辺への景観」、および「歴史説明・情報」は、多くのブログで記述されている。また他に、「交通・ルート・所要時間」を説明しているブログも多かった。ただし、これらの情報の量にはブログごとにかなりのばらつきがあり、1行で情報提供が終わっているものもあれば、数行にわたって書き込まれているものもある。また交通情報を例にとれば、大半が通常の旅行ガイドブックほど明確に記述されているわけではなく、情報としての有用性は低いといえる（なお、上記のすべての項目の情報の真偽はわからない）。また個人の主観的なコメント（面白い／楽しい／迫力がある、など）は個人ブログということもあって記述が多い。

ただしその一方で、その遺産に併設される博物館や観光要素となりえるショップ、お土産、食事、また宿泊などに関する情報はあまり言及されていない。特に「アイアンブリッジ」では、実際には先にも述べたように、各種の博物館や商店、飲食店、パブが集積する場所であり観光地化が進んでいる。しかし、パブやホテルに言及したブログは見つかったが、博物館について言及しているブログは調査対象の中には無かった。ただしニュー・ラナークについてはビジターセンターやアトラクションについて簡単に触れているものが若干存在している。

こう見ていくと、個人ブログは「有用な情報」を提供するという側面については、情報不足や情報の真偽が不明確なものが多い。これには確かに当然といえば当然ではある。撮影の禁止箇所の問題、実際の現地の状況、時間の制約、観光した場所の限定性、ツアーか否か等々、各ブログ執筆者の旅行の条件による制約で、伝えることのできる内容は異なる。そもそもブログは、各個人の関心から記述されているといえるため、正確性や情報性を意識しているわけではないだろう。しかし、そうだとすると、こうした各個人のブログとは観光のまなざしにとって、旅行ガイドブックに劣るか、せいぜい補完的なものとして扱われるに過ぎないのだろうか。

ここで改めてブログの特徴を見てみると、注目すべきものとして写真の存在があることに気付く。各ブログは記述だけでなく多くの写真が掲載されている（先に述べたように記述がほとんどなく、ほぼ写真のみのブログもある）。この写真の量は、マス向けの旅行ガイドブック以上の分量である⁽¹⁴⁾。

ここで指摘しておきたいのは、こうしたブログの特徴こそが、観光のまなざしにとって非常に重要なものであるということである。Urry は（観光の）まなざしの鍵となる要素として、写真をはじめとした視覚的要素を重視していた。Urry によれば、こうした視覚的要素は「通常日常生活」から「異なる社会的なパターン認識」を与える重要性を持つという（Urry 1995=2003:217）。

つまり視覚的要素とは「観光地」と「日常生活」の間の差異を表出する。写っている対象は「日常」と異なる「観光地であればこそ」のものとして扱われる（例えば、観光地の道路の表面は、写真に撮られるとそれは家の前の道路の表面と違うものとして扱われる）。Urry は、もともと視覚的要素を、観光地を日常生活と異なる場所であることを限りなく再生産してしまう批判的な対象として論じていた。しかし、この Urry の見解を受け入れれば、逆に旅行者の（ブログ）写真とは、その旅行者が普段の見慣れた日常の景色と異なる観光地として認めた特徴が現れている視覚的な証拠ということになる。つまりブログ写真は、その個人が遺産とその周辺の特徴と感じたもの＝その観光地ならではの主観的に感じた特徴の風景・情景を伝達しているのである。

例えばダーwent峡谷の工場群を紹介するブログは⁽¹⁵⁾、著名なアニメ「天空の城ラピュタ」⁽¹⁶⁾のモデルの地であるとして、そのアニメのシーンと絡ませて遺産を説明する。しかしそのアニメと遺産の対応は個人的な思い込み（ブログの当事者も、スタジオジブリでは、ウェールズがモデルの一つと言っているに過ぎないことに触れている）で記述されており、当然これは情報という観点からすれば、限りなく「偽」に近い。しかし、それはその産業遺産を訪問する動機や、ブログ記者の個人的な「情景」が投影された産業遺産紹介になっているといえる。

またアイアンブリッジを紹介したブログでは⁽¹⁷⁾、例えば「近くにあるゴミ箱もアイアンブリッジの絵が描いてありました。」というキャプションとともに、そのゴミ箱の写真が掲載されていたり、パブの店の紹介でも、その壁にアイアンブリッジの絵が描かれていることが写真つきで掲載されている。これらは、マス向けの旅行ガイドブックで

は掲載されていない細部の事柄にすぎず、歴史性や交通情報のような有用な情報を伝えてはいない。しかし、こうした何気ない細部が、その地域の情景を伝えるまなざしを与えるものになっている。またニュー・ラナークを紹介するブログ⁽¹⁸⁾は、ラナーク駅から遺産に至るまでの道にある道路案内の看板写真をいくつか掲載している。それは道案内にとって有用な情報とはいえないのだが、その駅から遺産までの道筋の雰囲気伝える写真として機能している⁽¹⁹⁾。

このように、イギリスの産業遺産を紹介したブログへの調査で明らかになってきたのは、ブログが「情報」や「知」による新しい見方を補完するというより、日常と異なる「これが産業遺産の特徴である」という風景／情景によって、マスのな旅行ガイドブックによる「情報」や「観光の見方」では伝わらない産業遺産やその周囲の「情景」や、周囲の「雰囲気」というべきものを伝える機能をもっているということである。このように、有用な情報といえないものを伝える機能は、旅行ガイドブックが創りだす観光地のイメージ通りの体験＝消費をするだけでなく、「交渉的」な読解の結果であり、微細なイメージを利用した観光地イメージの「変換作業」を通して、遺産やその周辺地域の魅力を伝える要素になっている可能性がある。

6：まとめ～遺産紹介とメディアの役割

今回の調査から、マス向けの旅行ガイドブックでは、イギリスの産業遺産がイギリスの定番観光ルートからはずれるものの、「世界遺産」「産業革命」の二つを紹介のポイントとしながら、歴史的な重要性を持つ観光対象といった位置づけから紹介することが多いことがわかった。

しかし一方で、「アイアンブリッジ」や「ニュー・ラナーク」のように、そうした歴史性からの紹介だけでなく、現在の遺産周辺の状況（各種の博物館の存在など）が取り上げられ、「テーマパーク」的な観光資源としての扱いも見受けられた。

一方、個人ブログは、そのメディア的特性により、各産業遺産の情報紹介という面では、非常にばらつきが大きい。またアイアンブリッジを例にとれば、旅行ガイドブックで取り上げられている博物館などへの言及は少なく、有用な情報提供という面では、旅行ガイドブックを超えるとはいえない。しかし、ブログは写真の掲載などを通して、その遺産周辺の現状の景観や雰囲気といったものを伝えている。これらは正確な情報としては「有用」なものと言えないが、その遺産の場所の魅力を伝える一端として機能していることがわかった。

それ故に、こうしたブログの役割は、橋本和也が指摘しているようなツーリズムに不可避に生じてしまうこと、つまり個人々が観光対象に勝手な思い込みを投げかけ、観光対象を「ものがたり」化し意味付けしてしまう態度に対して（橋本 2011:19）、親和性が高いのではないだろうか。というのも、ブログによる遺産の紹介は、その情報の確実さや真偽が曖昧ではあるが、思い思いの産業遺産のイメージを喚起させるものであった。こうしたブログの写真という素材は、そのブログの受け手達に、旅行ガイドブックだけでは想起できない遺産への意味づけを引き起こす資源を

提供するからである。

しかしこうしたブログによる産業遺産／観光対象の変換作業には注意を払う必要もある。こうしたブログといった新たなメディアの紹介は、産業遺産に対して旅行ガイドブックでは伝えきれない、個人的なイメージを喚起させるものとなる。それは観光地の魅力や良いイメージを伝える啓蒙機能を果たしているといえる。しかし一方で、ブログはその掲載情報の真偽の曖昧さや主観的な情景化により、産業遺産の真正性に関わる情報への誤解や、観光対象としての魅力を逆に失わせてしまう可能性もある。こうしたブログの両義的な役割の影響はインターネットでの情報収集が増加する中で注意すべき点と言える。

本来、こうした点を論じるためには、旅行ガイドブック／ブログ情報に接した受け手への質的調査・量的調査といった、実証的な検証作業も必要となるはずである。しかし、本稿では、まずメディアごとの記述や機能の違いを整理し、日本語で読めるイギリスの産業遺産紹介の状況を見てきた。今回のこのようなマスメディアとブログの観光地紹介の対比は、観光地の紹介や広報におけるメディアの利用法や、その情報提供の在り方の一つのヒントになるのではないかと考えている。

注

- (1) <http://whc.unesco.org/>, <http://www.unesco.or.jp/isan/about/> (2012年9月27日現存) 参照のこと
- (2) TBSの「世界遺産」は2008年で終了し、その後「THE 世界遺産」として放映されている。イギリスの7つの産業遺産を取り上げたメディアでテレビは大きな役割を果たすと思われるが、映像とナレーションで遺産を紹介する動画は、雑誌やネットなどとメディア特性が異なるため、別の方法論にてその内容を取り上げる必要がある。またインターネットでいえば、2012年5月よりGoogleはストリートビューを利用し世界遺産を見ることのできる“World Wonders Project”を立ち上げている。この概要については、国立国会図書館カレントアウェアネスのページを参照のこと。（<http://current.ndl.go.jp/node/21000> 2012年10月1日現存）、また実際のページは<http://www.google.com/intl/ja/culturalinstitute/worldwonders/>を参照のこと。ただしこうしたGoogleをはじめとするAR（拡張現実）技術の観光情報提供についても今回は扱っていない。これらの技術が観光のまなざしにとってどのような役割を果たしているかは、今後検討が必要な課題といえる。
- (3) 欧州先進国において、鉱山や工場の跡地、運河や鉄道などの産業関連の敷地、建物、工作物が、単なる歴史遅れの遺物ではなく、「西欧の発展の歴史を象徴的に残すかけがえのない貴重な遺産」としての動きが起こり始めたのが1970年代後半から80年代のことであるという（根本 2006：pp.1-2）。
- (4) 例えば安村克己（2004）はFoucaultが『臨床医学の誕生』において指摘した「医学的まなざし」の概念と、Urryの「観光のまなざし」の概念を比較し、後者の「知的戦略」の不備を指摘し、その概念の意義と限界を論じている。
- (5) 遠藤英樹（2005）は、そもそも「ある場所」が、「出かける場所」としての「観光地」として意味付けられていなければ、そこに向かって「観光行為」が発生しないことを指摘し、その際、「ある場所」が「観光地」としてイメージ形成されていく過程において、メディアが果たす役割の重要性を論じている。また、有山輝雄（2002）は、観光における「期待や願望」の形成において、旅行のガイドブックやパンフレットの重要性をはじめ、メディアやそれを利用した宣伝が、重要な役割を果たすことを指摘している。また中西裕二（2011）もマストツーリズムにおけるメディアの重要性、また逆にメディアが観光地化を促す点を指摘している。
- (6) このことはつまり、観光資源について「見てほしい意味・内容」と観光客にとっての「見方」にズレが生じていることを示唆する。ただしそのために、ある意外な対象が観光地の魅力につながるという

た、観光地の「供給」と「受容」のズレを考える契機となる、ということでもある。

- (7) 平成 15 年(2003 年)8 月の内閣府大臣官房政府広報室による「自由時間と観光に関する世論調査」において、国内旅行が対象ではあるが、「国内旅行のための情報入手方法」が調査されている。<http://www8.cao.go.jp/survey/h15/h15-jiyujikan/index.html> (2012 年 9 月 27 日現存) この調査によれば、最近 (この 1 年くらいの間)、観光、レクリエーション、スポーツなどのための 1 泊以上の国内旅行に行ったとした者 (1,142 人) のその旅行情報の入手先は以下の通りである。「家族、友人、知人等の紹介 (口コミ)」44.8%、「旅行業者のポスター、パンフレット、案内書等」(35.8%)、「旅行雑誌、ガイドブック等」(23.2%)、「インターネット等の旅行情報」(15.1%)、「新聞、一般雑誌」(14.5%) (複数回答、上位 5 項目)。
- またこの調査の 4 年前の平成 11 年の調査と比較すると「インターネット等の旅行情報」(3.5%→15.1%) が 4 倍以上の伸びを占めているという。このため平成 15 年から現在までの間には、さらに利用者が増えていると想定される。
- (8) 今回は、特に一般でも入手しやすい市販の雑誌を対象としたため、航空会社等の会員誌や旅行代理店のパンフレット、また世界遺産を学術的に探求した著作は、今回の分析の対象から除外した。また産業遺産に触れていない雑誌もあったためそれらも分析の対象からは除外した。結果下記の 8 誌からの情報を取りまとめた。『旅名人ブックス 58 スコットランド 歴史と文化、自然を満喫する』日経 BP 社 2006 / 『マップルマガジン まっぷる イギリス・ロンドン』マップル 2012 / 『新個人旅行 イギリス』マップル 2010 / 『るるぶ情報版 るるぶイギリス』JTB パブリッシング 2011 / 『地球の歩き方 イギリス』ダイヤモンド社 2011 / 『地球の歩き方 スコットランド&湖水地方』ダイヤモンド社 2010 / 『わがまま歩き イギリス』実業之日本社 2012 / 『ワールドガイド イギリス』JTB パブリッシング 2009
- (9) Yahoo! JAPAN (<http://www.yahoo.co.jp/>) は年間推定接触人数が年間 5311 万人に上るとされ日本における推定接触者数が第一位のサイトである (電通総研 2012)。また年間の一人当たり平均滞在時間は 20 時間 40 分で、推定接触者上位 20 社の中でも、10 時間以上の滞在時間があるのは Yahoo! JAPAN のみとなっている。
- (10) インターネットコムとメディアインタラクティブ (アイリサーチ) による、2009 年 11 月「検索エンジンに関する定期リサーチ」<http://japan.internet.com/wmnews/20090811/2.html> (2012 年 7 月 29 日現存) によれば、ユーザが検索結果に対して何ページ目まで調べるかという調査では 3 ページまで調べるというユーザが、調査対象の 7 割になるという。そのため、今回は検索結果で 3 ページ目までのサイト (1 キーワードあたり 30 サイト) を閲覧して調査対象とするブログを捜す際の参考とした。
- (11) なお、インターネットのブログは執筆者が不明確なことに加え、掲載情報や記載内容の真偽が検討しにくい。またそこに記載されている文章や掲載されている写真も、どこまでが「そのブログ執筆者のオリジナルの記述であるか、また撮影した写真」なのかわからない。そのため、今回の調査では、産業遺産についてどのようなカテゴリの情報や文章が記述されているのか、またどんな写真を掲載しているのか、内容の真偽は関係なく、そのブログの記述内容を指標化し、それを把握した。しかし、こうしたインターネット情報を事例としてどのように扱うかについては、そもそも「ネット上の情報とは何か」という問いとして検討を要する。
- (12) コッツウォルズはロンドンの北西 200km あたりの丘陵地帯一帯で、ガイドでは主にパイプリー、ボートン・オン・ザ・ウォーター、ブロードウェイなどが紹介されることが多い。また湖水地方はイングランド北西部に位置するウィンドミア湖を中心とした一帯。ガイドではピーターラビットの故郷、ウィリアム・ワーズワースゆかりの地であると紹介される。
- (13) なお『地球の歩き方』の成立から現在までの経緯については、山口さやか・山口誠 (2009) が詳細なインタビューをもとに論じている。また今回の資料として使用した「るるぶ情報版」のような写真を多

用した雑誌サイズの大型ガイドブックは日本特有のものであり、こうした旅行ガイドブックによる情報提供と日本人の観光行動のつながりを考えることが重要なテーマであることを山口誠 (2011) が論じている。

- (14) ただし、注意しておかなければならないのは、先の註 (11) でも述べたように、これらの写真が、遺産周囲のどこなのかなどの正確な表記がないものもあり、どこまでが遺産周辺の情報であるのか検証できない場合がある。だが、この曖昧さこそが個人ブログの特徴ともいえる。
- (15) 「天空の城ラピュタ」のモデル地を訪ねて <http://4travel.jp/traveler/pochumi/album/10331437/> (2012 年 9 月 27 日現存)
- (16) 天空の城ラピュタは、1986 年スタジオジブリ制作、宮崎駿監督によるアニメーション作品。
- (17) 「Wonder's World-Wide (WWW)」<http://blog.goo.ne.jp/wonderthunder/e/1429735db0b03ec3e84491b0b4a223f5> (2012 年 9 月 27 日現存)
- (18) 「ホットチョコレート飲む？」<http://white-hot-chocolate.com/archives/4052354.html> (2012 年 9 月 27 日現存)
- (19) この他にも、例えば「世界遺産を示すプレートがある」とか、「現地の看板にはウェールズ語表記がある」と書かれているなど、「情報」としては何気ないものではあるが、現地で体験した一端が垣間みれる写真などが掲載されている。これらは旅行の「ものがたり」を語るものであると共に、現地の「痕跡」を私達に伝え、それ故に旅行記述のリアリティが増す機能を果たしていると推察される。

参考文献

- 有山輝雄. 2002 『海外観光旅行の誕生』 吉川弘文館
- Audrerie, Dominique. Souchier, Raphaël and Vilar, Luc. 1998 "Le patrimoine mondial" P.U.F., Paris=2005 『世界遺産』水嶋英治訳 文庫クセジュ白水社
- Boorstin, Daniel. 1962 "The image; or, What Happened to the American Dream", Atheneum=1964 『幻影の時代』星野郁美、後藤和彦訳 東京創元社
- 電通総研. 2012 『情報メディア白書 2012』ダイヤモンド社
- 遠藤英樹. 2005 『観光という「イメージの織物」 奈良を事例とした考察』『観光社会学 ツーリズム研究の冒険的試み』須藤廣、遠藤英樹 著 明石書店
- 橋本和也. 2011 『観光経験の人類学 みやげものとガイドの「ものがたり」をめぐる』世界思想社
- 中西裕二. 2011 『メディア - 観光地の創造』『観光学キーワード』山下晋司編 有斐閣双書
- 根本敏行. 2006 『研究の概要・研究の背景と目的』『イギリスの世界遺産 (産業遺産) と地域整備』『都市・地域研究 003』静岡文化芸術大学 文化政策学部 文化政策学科 文化政策研究科 都市・地域学研究室
- 佐滝剛弘. 2009 『「世界遺産」の真実』祥伝社新書
- Urry, John. 1990 "The Tourist Gaze", Sage=1995 『観光のまなざし』加太宏邦訳 法政大学出版局
- . 1995 "Consuming places", Routledge=2003 『場所を消費する』吉原直樹、大澤善信監訳 法政大学出版局
- 山口誠. 2010 『ニッポンの海外旅行』ちくま新書
- . 2011 『ガイドブック その変遷と可能性』『よくわかる観光社会学』安村克己、堀野正人、遠藤英樹、寺岡伸悟編著 ミネルヴァ書房
- 山口さやか・山口誠. 2009 『地球の歩き方』の歩き方 新潮社
- 山村高淑. 2011 『世界遺産 - その理念とツーリズムについての意義』『観光学キーワード』山下晋司編 有斐閣双書
- 安村克己. 2004 『観光の理論的探究をめぐる 観光まなざし論の意義と限界』『「観光のまなざし」の転回 越境する観光学』遠藤英樹、堀野正人編著 春風社

負の遺産を包含した都市文化政策事例研究 ～ 英国¹⁾、ドイツ、アイルランド²⁾の事例 ～

ICase study of urban cultural policy that encompasses the negative legacy ～ U.K., Germany, Ireland ～

根本 敏行

文化政策学部文化政策学科

Toshiyuki NEMOTO

Department of Regional Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

今日、先進諸国の都市では、新しい創造的な諸活動の受け皿として、近代以降の産業遺産を活用した都市政策が展開されている。一方、先進国の近代化の過程には、戦争や民族紛争、奴隷貿易、強制労働などの負の文化遺産も同時に存在する。本論考では、英国、ドイツ、とりわけアイルランドにおいて、負の文化遺産にも正面から真摯に取り組み、新しい都市や地域の発展に結び付けようという試みについての事例を取り上げている。(文化政策研究科長研究委 2011 による調査報告／根本担当分を含む)

Today, within urban policies in developed countries, a modern industrial heritage is utilized as incubators of new creative activities. On the other hand, in the process of modernization, there are also negative cultural heritage like war, ethnic conflict, the slave trade and forced labor.

This paper picked up some cases in the UK, Germany, and especially in Ireland, in which we can observe pioneer attempts of confronting negative heritages as well as positive ones, and bravely linking both to the development of new cities and regions.

1. 背景と傾向

21世紀、とりわけ先進諸国の都市政策において創造的な文化政策が重要となっている。先進諸国と呼ばれる国々の20世紀を振り返ると、産業革命に続く製造業中心の経済・社会の発展と、帝国主義や軍国主義、あるいはイデオロギーの対立と結びついた幾多の国家を挙げての戦争がその大きな特徴となっている。今世紀、製造業の重心は新興国に移りつつあり、先進諸国は製造業に代わる新しい経済・社会の発展の手がかりをサービス産業や観光といった文化的な産業に求めている。こうした新しい脱工業化時代の経済・社会の発展のフロンティアは、郊外の工業団地やコンビナートではなく、都市を中心とする歴史・文化や人的資本といった地域資源の蓄積の上に展開する創造的な人間の活動にその基盤を置くもので、創造都市論といったアプローチも一般的になりつつある。

グローバル化は様々な競争の条件を均一化する傾向もあり、多くの都市は生き残りあるいは勝ち残りのための激しい国際競争に巻き込まれつつある。こうした競争の中で、他都市にはないユニークな、あるいは国際的にアドバンテージを持つ地域資源を有効活用することは、多くの都市に共通する都市政策の一つの大きな柱となっている。我が国を含む先進諸国の都市が、世界の新興国や離陸しつつある途上国の都市との差異化を図るためには、その個有の地域資源に焦点をあてる必要がある。先進諸国を先進諸国ならしめた20世紀の工業化や帝国主義の歴史は、その良し悪しは別として非常に重要な手がかりとなるものである。

従来、都市の個性を強調する場合、近代以降よりも近世以前の歴史に目が向いていたくらいがある。例えば都市の観光においては、各地の寺院など宗教施設、権力中枢や文化芸術活動のための施設といった記念碑的な建造物、広幅員で緑豊かなブルバールや都市内緑地などのハードウェア、各種の歴史的な祭典、芸術祭などのイベントと伝統的な衣食住といったソフトウェアが重要な観光資源となって

いた。近代化は、自然科学という人類に普遍的な原理を基盤とするがゆえに、近代化の過程で登場した工場や交通施設は世界中どこでも同じ設計思想で作られており、都市の個性という面では長い間見過ごされてきたと言える。

しかし、近年では、工場や鉱山、電源施設、鉄道、港湾、運河といった近代以降の産業遺産についても、その都市の歴史・文化、個性を特徴づける重要な地域資源として改めてその評価が高くなってきており、ユネスコ世界遺産にも登録されるようになった。

先進国においては、途上国との産業発展のタイムラグがあるため、同じ近代科学技術を基礎としていてもその技術水準やデザインなどは途上国や新興国のそれとは大きく異なっている。また、「人類最初の」という形容詞が付いたり、ニュートンやエジソン、スチーブンスンなどの学者や技術者、さらには小説家のディケンズのような歴史上の著名人の物語と結びついている各種の近代科学技術や工業の発祥の地は基本的に先進国に限られる。これらは、観光政策上も重要な聖地巡礼(発祥の地詣で)や歴史探訪といった面では新興国や途上国には存在し得ないアドバンテージを有していると言える。

一方、こうした先進国を先進国ならしめた近代化の歴史は、欧米列強による植民地支配、奴隷貿易、他国からの資源や労働力の簞奪、労働者の搾取、公害問題など、負の側面もまた同時に抱えている。これまで近代以降の産業遺産があまり重要視されてこなかった背景には、こうした負の側面を併せ持っており、かつその記憶がいまだ風化していないということが影響していたこともあると考えられる。

今日、文化相互の絶対的優劣ではなく多文化の共生や、人類共通の人道的価値観の共有などが進む中であって、改めてこうした負の側面にも真摯に目を向けつつ、したたかに都市観光などの実利的な都市間競争力の強化にもつなげてしまおうという試みが各地で始まっている。

本論考では、産業遺産の利活用、博物館の整備に焦点をあてて、英国、ドイツ、アイルランドにおける近年の新しい

い動向を取り上げる。

2. 英国

近世から近代にかけて世界の工場と呼ばれ、また海洋覇権を握っていた大英帝国あるいは英連邦は、世界中に植民地を広げて豊かな富を収奪し続けてきた。そして本国にはその富の集積を足掛かりとして、壮麗な建造物や世界をリードする文化が集積した。これらは今日に至っても貴重な観光資源として存続し、また世界中の近代的生活様式や芸術文化の発祥の地であり続けている。

これまで、英国の観光資源や博物館などは、産業革命や国際貿易の成功者、列強各国との覇権争いの覇者、対ファシズム戦争の正義の勝者としての側面を前面に打ち立てたものが中心であった。具体的には王宮や大英博物館、王立植物園、ウェリントン博物館、トラファルガー広場やロンドンの帝国戦争博物館などである。

しかし近年では、覇者としての表の顔だけではなく、その陰の部分にも光を当てた取り組みが進みつつある。

(1) 国際奴隷博物館（リバプール、マージーサイド地区）

リバプールは、単に主要な国際貿易港であるだけではなく、かつて奴隷貿易の中心的な役割を担った拠点港湾でもある。マージー河の河口に発展した港湾都市で、各種港湾施設と都市機能が集中する中心地区はマージーサイド地区と呼ばれる。港湾地区のシンボルでもある中心施設はアルバート・ドックで、大英帝国最盛期のビクトリア女王の夫アルバート公の名前を冠している。

1846年、大きな船溜まり（船渠）を囲むように建設された巨大な建物は、鋳鉄、レンガ、花崗岩の複合構造で、世界最初の耐火倉庫や貨物用の水圧式昇降機（1848）など、当時の最新鋭設備を擁していた。

このマージーサイド地区は、第二次大戦後、船舶のコンテナ化、英国と植民地間の貿易航路から英国とEU域内を結ぶ貿易航路への貿易航路の転換、造船などの重厚長大産業の国際競争力の喪失、施設本体の老朽化などが重なり、その拠点港湾としての機能が衰退、老朽化した遊休施設と失業者の蟄集する危険で荒廃した地区になりつつあった。地区のシンボルであるアルバート・ドックは1920年代頃から徐々にその機能を失い、単に倉庫として存続していたが、歴史的な価値を有する指定建築物であったことから辛うじて解体撤去は免れていた。それが今日では各種博物館、美術館やレストラン、カフェ、土産物店やアパートの集積するにぎやかな集客拠点として蘇っている。

最初の変化のきっかけは、1980年代のいわゆるサッチャー改革である。英国病とも言われた経済の衰退と財政赤字、高失業率を解決するため、思い切った中央政府の地方への介入と規制緩和が断行された。マージーサイド地区は国の直轄地として都市開発区域に指定され、1981年には国が直轄する都市開発公社がいち早く設立された。同公社は第1期指定の第1号で一連の施策のリーディング・プロジェクトでもある。そこでは、地元リバプール市の行政権限を一旦棚上げするかたちで都市計画の自治の及ばない区域を設定し、直接国の補助金等を投入して、都市開発公社が独占的に不動産開発や環境整備事業を展開した。た

だ、公社は地域崩壊の危機回避、緊急避難の観点からこうした特権的な権限を法によって付与されているが、民主主義や地域自治の観点からは課題の多いイレギュラーなもので、10年間存置後は清算され、地元自治体に権限を委譲（返還）することとなっている。

目玉プロジェクトであるアルバート・ドック再生事業では、国費を投入して民間事業が採算をとれるレベルになる水準まで老朽化した施設の整備や環境改善事業を行った。次いで、戦略的な事業誘致と、国や自治体サイドの裁量の働きやすい博物館のような公的な文化施設・集客施設の誘致や新設を行った。

第1号の都市開発公社が存続していた1980年代は、伝統的に労働党の強い自治体に、頭ごなしに国の保守党政権が落下傘部隊のような直轄事業を投入したことから地元の反発も強く、地元リバプール市の協力は得られず苦戦を強いられた。都市開発公社は単独で国際庭園博覧会の誘致などイベント戦略にも注力したものの、レバレッジ（投入した公共投資に対する誘発された民間投資の割合）は事業成否のぎりぎりのラインである1.0付近で低迷していた。この第1号の事例の反省から、それ以降の同様の事業では入念に地元自治体との合意形成をするように運用に変更が加えられており、以後の事例ではレバレッジも2.0以上の高いパフォーマンスをあげた事例も多い。³⁾

1990年代から2000年代にかけては、都市開発公社による都市基盤の再生と民間資本導入の基本的条件が整備された上で、その受け皿にどのようなコンテンツを盛り込むかについて国、自治体（リバプール市）の連携のもとで政策的指導、誘導が働いた。都市開発公社の頃からマージーサイド海事博物館、テート近代美術館のリバプール分館（ロンドンにある本家のテート近代美術館（さらに本家の伝統美術の「テート・ギャラリー」の姉妹館）も産業遺産である旧発電所を改装してオープンした）、ポップカルチャーではビートルズの足跡をたどる博物館であるビートルズ・ストーリーといった博物館や集客施設が整備されてきたが、その後はこれらに加えて各種イベントや水陸両用バスによるクルーズ・ツアーなどのソフト施策も展開、そして奴隷貿易廃止200周年にあたる2007年にはアルバート・ドックの海事博物館に隣接して国際奴隷博物館が一部開館し、2011年には拡張整備された。

これらの文化施設の立地の背景には、国や自治体側に文化を核とした都市再生を目指す一貫した政策があった。その基本方針は、創造都市という言葉こそ用いていないが、歴史的建造物群を含む地域に固有の資源を生かし、そこに創造的な文化施設や創造性豊かな人材、それを支える民間投資を呼び込むということである。

そのための援護射撃として2004年にはアルバート・ドックなどのウォーターフロント地区一帯を「海商都市リバプール」の名称で世界遺産（文化遺産）登録に持ち込んだ。そして2008年の欧州文化首都⁴⁾の指定を得て、1年間にわたって各種の文化イベントを複合的に繰り広げるに至った。もともと、ロンドン以外で劇場や博物館、美術館等の数が一番多い都市であり、文化イベントの受け皿は十分に用意されていたことも背景にある。2007年に一部先行オープンという形で開館した国際奴隷博物館も、イギリスの奴隷貿易廃止200周年ということだけではな

く、翌年の欧州文化首都と連動させようという意図も働いたものと推察される。

リバプールの都市の歴史と奴隷貿易について、種田の論考の一部を引用する。⁵⁾

「諸説の中で一致している事実は、リバプールがイギリスの、さらにはヨーロッパの奴隷貿易の「首都」であったことである。人権侵害・人種差別を言うまでもなく、奴隷貿易はリバプールの「汚点、負の遺産」である。しかしながら奴隷貿易による発展こそ、リバプールに都市としての固有の歴史的文化的性格を付与し、都市インフラの背骨となったもので、これを抜きにしてリバプールを語ることはできないのである。」

奇しくも（皮肉にも、ではない）、大西洋奴隷貿易の「首都」が、21世紀の「欧州文化首都」に指定され、世界遺産登録された地域再生の輝かしいシンボルであるアルバート・ドックに奴隷博物館がオープンしたわけで、表と裏の両面の文化史が共存することとなった。「汚点、負の遺産」にも真摯に向き合うという姿勢は、今日の多文化共生の時代にふさわしいものであるが、名称が「大西洋奴隷貿易博物館」や「英国奴隷貿易博物館」ではなく、「国際」を冠した「奴隷博物館」としているあたり、歴史事象の相対化を図り、奴隷制度の悪者は英国だけではない、という言い訳じみたうしろめたさのようなものも感じられる。

国際奴隷博物館の前哨戦とも言えるプレゼンテーションは、すでに海事博物館に1994年開設された「大西洋奴隷制ギャラリー」から始まっていた。この種の（奴隷制という負の歴史を正面からとらえた）博物館展示としては世界最初とされる。いわばこれを引き継ぐような形で隣接して国際奴隷博物館が開設され、その後の拡張に至っている。その間、2007～2008年には海事博物館のリニューアルが行われている。⁶⁾

国際奴隷博物館の理念として博物館は「大西洋奴隷貿易が現代に遺した歴史的意味について探求し、」「リバプールが奴隷貿易にどのような役割を果たしたのかを考察し、」併せて「人権問題にかかるリソースの国際的なハブ（拠点）となることを目指す。」としている。

主な展示内容は、黒人奴隷の故郷であるアフリカの文化の紹介（もともといかに豊かな文化を持っていたかという視点）、奴隷貿易の実態、リバプールとの関わり、プランテーションでの奴隷の生活、黒人開放の歩み、そしてオバマ米大統領を初めとする世界で活躍する黒人たちの紹介などである。⁷⁾

展示内容によっては「閲覧注意」のような但し書きが付いたりするが、客観性を重視した冷静な展示内容となっている。

2011年には、隣接する19世紀の歴史的建築物「港湾運輸局」をリニューアルして同博物館の「研究教育センター」がオープンした。アルバート・ドックの本体とはガラス張りの連絡橋でつながる。当初、展示施設として始まった同博物館に、その開館理念にある世界の人権問題のセンターを目指すための研究、教育機能が追加された。同センターはまた、地元コミュニティとの協働による活動推進も担うことになっており、講演、討論会、舞台公演、ミュージカル、各種パフォーマンス、実演会、読書会、コミュニティ・イベントといった幅広い文化活動の拠点として位置

づけられている。⁸⁾ 世界でも有数の多民族・多文化共生の都市であるリバプールの今日的な文化活動の拠点でもあり、多様な文化への寛容性を担保する中で、新しい創造的な産業の育成も視野に入っているだろう。

(2) 戦争博物館

その他の英国の事例として、帝国戦争博物館北館（Imperial War Museum North）と王立武器博物館（Royal Armouries）の例を取り上げる。

一般的に、戦争博物館や武器博物館は、国家の威信や技術レベルの高さを誇り、戦勝を記念する施設であることが多い。一方敗戦国である日本やドイツでは目立つ形で戦争や兵器を主体とした博物館をつくることは遠慮されてきた。日本の場合は平和憲法を有していることも、軍隊や武器を目立つところに出そうとしないことの背景にある。

英国でも、従来の戦争博物館は自国の兵器開発の自慢や勝利した戦争の正当性をアピールするようなものが多かったが、ここにあげる2つの事例は少し趣が異なる。

もともと帝国戦争博物館はロンドンにあり、第一次、第二次世界大戦、朝鮮戦争、冷戦、フォークランド戦争、湾岸戦争からイラク戦争、今日のアテロ戦争に至る英国の軍事関連の展示が主体である。⁹⁾ 特にナチスドイツのホロコースト展示は充実しているが、内容は、英国の敵ナチスが、いかに邪悪で非人道的であるか（だから武力で成敗しなければならなかったのだ）というような視点で古いタイプの展示内容が主体である。

それでも近年は、世界の国際紛争を広く取りあげ、戦争の勝敗（勝利の正当性）ではなく、もっと普遍的で人道的な教訓をいかに読み取るか、といった内容が追加されつつあり、新しい北館もこうした新しいタイプの展示になっている。¹⁰⁾

マンチェスター大都市圏のソルフォードに建てられた北館は、ロンドンも含む4つの帝国戦争博物館グループのひとつで、戦争と科学、戦争と女性、戦争が残した遺産などのテーマで構成されている。モダンアートのオブジェのような特徴的な外観の建物は建築家ダニエル・リベスキンド¹¹⁾設計で、2001年に竣工、2002年7月にオープンした。

ダニエル・リベスキンドは、後述するベルリンのベルリン・ユダヤ博物館の設計も手掛けており、博物館の新しいコンセプトの具現化の面で共通する。

館内は天井の高い大空間となっており、ジェット戦闘機や戦闘車両も各一つ展示されているが、これはあくまでもシンボルとしてのオブジェであり、展示のメインは壁一面にコラージュのように投影される世界の紛争のドキュメンタリー映像とナレーションによるインスタレーションである。これ見よがしに兵器を陳列するというのではなく、人類の宿痼とも言える暴力による紛争の非人道性を訴える内容がメインとなっている。

ソルフォード地区は、マンチェスター西部のマンチェスター・シップ運河沿いの内陸港湾で、かつては物流拠点として栄えたものの、戦後は運河の物流機能を失って急激に衰退、荒廃していた地区である。リバプール同様、サッチャー改革では産業構造の転換で衰退した地域の再活性化事業対象地域で、1981年には企業進出の規制緩和を行

うエンタープライズ・ゾーンが指定され、1987年にはこれに重ねて都市開発公社が設立された。リバプールの場合と異なり、地元自治体のソルフォード市が開発のイニシアチブをとり、都市開発公社の開発とは別に国やEUの補助金などを活用してソルフォード埠頭地区を再整備し、オフィスやホテル、住宅などの整備を誘導した。そして、北館の建設は、これらの都市再生戦略の一環でもあり、文化資源を活用した集客施設としても位置付けられる。¹²⁾ ただし、そのテーマが劇場や遊園地といった楽しいものではなく、戦争という重たいものである点が際立っている。ロンドンに本拠地のある博物館を、新規開発地区の目玉施設として誘致するというのは、次にあげる王立武器博物館でも共通する戦略である。

王立武器庫（ロイヤル・アーマリー）という名前の王立武器博物館は、1996年、イングランド北部の地方都市リーズの再開地区に建設された。同地区はソルフォード地区同様、運河による物流の拠点であったドック地区で、リーズ市の都心に隣接しているにもかかわらず、衰退・荒廃して放置されてきた場所である。ここもサッチャー改革の中で1988年に都市開発公社が設立されたのだが、地元リーズ市の都市政策が先行しており、国策会社の都市開発公社は市の2006年までの開発構想のマスタープランに沿って事業を展開した。ちなみに、リーズ都市開発公社は1995年に解散しているが、開発のレバレッジは6.2でトップであるシェフィールド都市開発公社の6.6に次いで全英2位のパフォーマンスをあげた。¹³⁾

同博物館はもともとロンドンのロンドン塔の中にあったもので、手狭になったために移転してきたものである。展示内容は、基本的には古代、中世から現代にいたる各種兵器や武器を展示するものであるが、シンボリックな吹き抜けの鋼鉄ホール（歴史的な剣や槍、甲冑など）、「戦争、トーナメント、護身術、平和（武器よさらば?）、東洋、狩猟」の6ジャンルのギャラリー、そしてライブ・パフォーマンスのためのアリーナからなり、もとのロンドン塔の時よりも格段に充実した内容となっている。単に武器を展示するのではなく、ライブ・パフォーマンスも含む歴史や文化の学習、平和の希求といったテーマが反映されている。野外競技場（アリーナ）では中世の騎士のトーナメントのほか、鷹匠の実演、日本の流鏑馬などのパフォーマンスが繰り広げられ、そのための馬場や厩舎、禽舎、そして甲冑鍛冶の実演工房が併設されている。¹⁴⁾ 建物裏手のドック地区のロック（閘門）なども復元・整備され、すぐ隣にはレストラン併設の地ビール工場もあるので、ちょっとしたテーマパークのような魅力もある。ちなみに、日本の武道関連の収集展示は特筆される。

同館は、広くEU域内からも集客する地域振興の目玉施設となっている。総工費4200万ポンドの博物館は、リーズ市も強くその誘致を希望していたが、中央政府直轄の都市開発公社が事業に関与していたことも誘致に有利に働いたと見られている。¹⁴⁾

3. ドイツ

(1) ベルリン

最初にベルリン・ユダヤ博物館を取り上げる。

2001年にオープンした同博物館は、東西統一（1990）後のドイツの首都ベルリンの象徴的プロジェクトの一つである。英国のホロコースト展示とは異なり、加害者側によるプロジェクトであるが、ナチスのユダヤ人迫害だけではなく、1千年前から今日までのドイツにおけるユダヤ人の歴史や生活の記録を収集・研究・展示している。特徴的な建築デザインは英国の帝国戦争博物館北館と同じ建築家ダニエル・リベスキンドによるもので、隣接する旧ベルリン高等裁判所建物も博物館の一部になっている。

1933に開設された旧ユダヤ博物館は1938年ナチスにより閉鎖。戦後改めてユダヤ博物館再開の動きが続き、1978年のベルリン歴史博物館でのユダヤ人歴史展をきっかけにユダヤ人史部門が博物館内部に誕生。その後ベルリンの壁が崩壊した1989年、新ベルリン市は歴史博物館の分館として新ユダヤ博物館建築設計コンペを告知、翌1990年にダニエル・リベスキンドの案が採用された。

一時ドイツ再統一の費用がかさむことなどから建設取りやめの市議会決議がなされたりしたが、世界中のユダヤ系政治家や文化人の支持を得て1992年から建設が始まった。¹⁵⁾

これに続き、2005年にはブランデンブルク門の南に「虐殺されたヨーロッパのユダヤ人のための記念碑」通称ホロコースト記念碑が開設された。基本は、大量虐殺されたユダヤ人犠牲者を悼むためのもので、墓石や棺を思わせるような直方体のコンクリート製の石碑2,711基が整然と並び、その地下はホロコーストに関する情報センターとなっており、犠牲者の氏名や資料などが展示されている。¹⁶⁾

両者ともに、ナチスのホロコーストの非人道性を正面から真摯に取り上げる厳粛なものである。しかし、一方でこれら施設は非常に多くの来訪者を吸引しており、東西再統一の後に混乱したベルリンの再生のシンボル事業にもなっている。これらの来訪者がもたらす地域の経済効果や文化的波及効果は決して小さくない。いささか不謹慎であることを恐れずに言えば、負の文化遺産への取組みと地域の活性化とが連携しているという側面があることは否定できない。むしろ、負の遺産から目をそらさずに向き合うことにより、より良い将来の発展へのきっかけをつくるという役割もあるに違いない。

(2) ルール工業地帯

ドイツ最大の工業地帯であるルール地域も、英国と同様に鉄と石炭の時代が終わりをつげた戦後、一貫して衰退の道を歩んだ。ノルトライン＝ヴェストファーレン州政府は、ルール地域の主要部分となるエムシャー河流域¹⁷⁾の広域自治体連合を組織し、州政府直轄の事業会社IBAエムシャーパーク社¹⁸⁾を設立、国やEUの補助金を得ながら民間活力を生かして地域再生を進めた。その中でも重要なプロジェクトは、各地に分散する産業遺産を活用した地域再生事業で、「ルール地域産業遺産回廊」と名付けられている。¹⁹⁾ ドイツの近代化をリードし、今日では遊休化

した工場や炭坑、近代以前からの手工業が担った産業集積、港湾、運河や鉄道といった各地に点在する社会基盤施設を、新しい産業の受け皿として改修、再整備し、ネットワークとして結びつけるというものである。

新しい産業の中身は、観光、レジャー・レクリエーション、芸術活動といったサービス産業からハイテクの新産業育成、住宅供給、ショッピングモールの誘致など多岐にわたるが、特徴的な産業遺産を活用した博物館のネットワークが核となっている。²⁰⁾

ルール工業地帯は、ドイツの近代化をリードした輝かしい歴史を持つ一方、域内にはユダヤ人追放や、ナチスによって占領された東欧諸国の労働者と戦争捕虜の強制労働といった負の歴史の跡も残っている。産業遺産の再利用にあたっては、こうした負の遺産とも対峙する必要があるが、ルール地域ではこれに目をそむけずにプロジェクトの一環として取り込んでいる。

例えば、デュイスブルク内陸港湾地区には、かつて裕福なユダヤ商人やユダヤ系ドイツ人が多数居住していた。ナチス時代にはこれらのユダヤ人コミュニティは、建物も地域社会もともに文字通り破壊されて荒廃地が残されていた。この一角は、エムシャーパーク社による大規模な再開発の中で、迫害されたユダヤ人を悼む「思い出の庭」という公園として整備された。緑の芝生の中に破壊されたユダヤ人の住居跡が残されているデザインは、彫刻家 Dani Karavan の手によるものである。また隣には定住ユダヤ人コミュニティのための文化施設「デュイスブルク、ミュールハイム、ルール／オーバーハウゼン・ユダヤ人地区センター」(Zvi Hecker 設計) が建設された。

また、軍需工業を担ったクルップ社などでは、工場内や周辺に強制労働に従事させていた外国人や捕虜の住宅団地、労災で亡くなった労働者の追悼施設などが残っている。これらはドイツ人にとって触れてほしくない暗い過去の遺物であり、解体撤去してしまうという意見もあった。しかし、産業遺産保全の活動の中では、後世への記憶のためにあえてこれらを残すこととしており、ルール産業遺産回廊の中の貴重な産業遺産の一部として位置づけられている。

4. アイルランド

アイルランドは、もともと生産性の低い農業国で、産業革命から近代化、帝国主義が世界を席巻した時代には長らく英国に併合されていた。その間、多くのアイルランド移民が大英帝国の版図を中心に世界中に出稼ぎ労働者として流出し、「白い奴隷」と呼ばれるなど差別的な扱いを受けてきた。²¹⁾ その後の独立運動のあとも北部はイングランドへの併合を望む住民が多数を占めて、独立したアイルランド共和国と別に北アイルランドとして残り、つい最近までIRAによる英国からの分離独立を目指したテロが続いていた。²²⁾

このため、特に北アイルランドは1960年代から1990年代まで、観光地としての魅力が薄く、全般的に観光などの新しいサービス産業の発展が遅れていた。

しかし、1998年のベルファスト合意²³⁾によって暴力による応酬には一応の決着がつき、2012年にタイタ

ニック号100周年²⁴⁾を迎えることもあり、ここにきて俄かに観光開発への期待が高まってきている。

アイルランド島の中では最も工業化の進んだ北アイルランドでは、新興国の追い上げなどで製造業の競争力は低迷し続けており、近年では工場の海外移転により失業率も上昇傾向にある。そこで、新しい成長産業としても観光に大きな期待がかかっている。

集客するための地域資源としては、古代ケルトの遺跡や中世から続く城や教会などが残るものの、タイタニック号100周年というのは世界最大の豪華客船の沈没という未曾有の悲劇が契機であり、その他の観光資源も移民や独立運動といった厳しい歴史を背負ったものばかりである。数々の負の遺産を抱えながらも、民兵組織と英国軍特殊部隊が市街地で交戦状態にあった状況は終わり、都心には文化施設やカフェが多数立地、若者があふれる親しみやすい界隈に変貌しつつある。

一方、アイルランド共和国は、独立後しばらく経済的には低迷していたが、英国に先んじていち早くユーロ圏に参入し、若い人口構成による相対的低賃金、公用語の英語、高い教育水準などを背景に、1990年代はIT関連産業で急成長した。『ケルトの虎』と呼ばれる目覚ましい経済成長で、1986年に17.2%にも及んでいた失業率は1990年代には4～5%にまで減少した。しかし、急激に集まった富で膨らんだ不動産バブルが弾け、2000年代の欧州経済危機では破綻の危険性の高い4か国の一つに数えられている。²⁵⁾

アイルランド共和国においても、次の経済成長を牽引する新しい産業として、観光やイベント、コンベンションといったサービス系のビジネスに期待がかかっており、南北アイルランドで共通して観光関連産業の発展を狙っているという状況がある。

(1) コーヴとタイタニック

タイタニックに関連する観光開発としては、タイタニック号が最後に出港したコーヴがベルファストに先行している。コーヴは、イングランドに併合されていた時代にクイーンズタウン(クイーンはビクトリア女王を指す)と呼ばれた、アイルランド共和国では首都ダブリンに次ぐ第二の都市コークの外港である。

当時、タイタニック号だけではなく大西洋航路を担った客船は、英国やフランスで金持ちの1等客を乗せて、大西洋に出る直前にコーヴに寄港して最後の石炭と水とともに、大勢のアイルランド人の出稼ぎ労働者を3等船室に詰め込んでから出港した。²⁶⁾ ²⁷⁾ タイタニック号も、英国のサウサンプトン港にある専用埠頭「オーシャンドック」からニューヨークに向けて出港し、フランスのシェルブールに寄港してからコーヴにやってきた。

コーヴの埠頭には、ここからアメリカに渡った(1892年)最初の移民であるアニー・ムーア(Annie Moore)とその幼い兄弟の記念碑がある。

コークからコーヴまでは鉄道が敷かれ、ターミナル駅は埠頭の客船ターミナルと一体化しており、スモーズに乗り換えられるようになっていた。今日、この客船ターミナルの1等船客待合室だった建物は博物館となっており、多くの来訪者がある。船運を主体とする海事博物館といった趣

であるが、アイルランド人移民の歴史について詳しく紹介している。もちろん、タイタニック号関連の展示が目玉であり、来訪者の多くもそれが目当てではあるが、ミュージアム・ショップには他ではお目にかかれないものがある。それは「ご先祖探訪」グッズと同申し込みコーナーである。

ケネディ元大統領を挙げるまでもなく、世界中、とりわけアメリカ、カナダとオーストラリアにはアイルランド系移民が多く、彼らの2代か3代前のご先祖様の多くはアイルランド生まれで、その足跡をたどるというのが観光旅行の大きな目的となっているのである。²⁸⁾

ショップでは、風光明媚な景観をアピールする観光案内ビデオと並んで、「アイルランドであなたの先祖を探しましょう」といったタイトルのビデオ等も売られている。そしてレジカウンターではご先祖探索サービスの申し込み手続きも受け付けており、派手な服装が目立つアメリカやオーストラリアからの観光客が列をなしていた。

移民の歴史は、人道的な観点からはほとんど悲劇の歴史とも言える重たいテーマであるが、世界中にアイルランド系移民の子孫がいるということが、逆にアイルランド観光振興の重要な手がかりにもなっており、アイルランド共和国の側でも積極的にこれを活用しようという意図があることがわかる。

コークには、客船ターミナルのほかにもタイタニック号ゆかりの史跡を訪ね歩く「タイタニック・トレイル」や、タイタニックという名前のレストランなどもあり、悲劇の象徴であるタイタニックではあるものの、ハリウッド映画のヒットもあり、ちゃんと観光集客のための材料として使っている。

(2) ベルファスト

北アイルランドの首都ベルファストは、タイタニック号の建造に象徴される造船業の盛んな工業都市でもあり、農業主体のアイルランド島の中で、最も工業化の進んだ地域であった。今日、2012年のタイタニック号100周年を契機に、各種のイベントや観光的な都市開発が急ピッチで進んでいる。一連の観光振興により、市はベルファストを世界一流の観光地にし、2020年までに観光収入を倍増させる計画を策定している。

こうした状況に拍車をかけるように、2012年にユネスコは、大西洋の海底約4千メートルに眠るタイタニック号の残骸を、海底の遺跡などを守る「水中文化遺産の保護に関する条約」の対象とすることとした。タイタニック号の沈没場所は公海であるため、どの国にも管轄権はないが、今後は残骸の略奪や破壊、売却などについて、条約加盟国が規制を行うことができるようになる。

英国に併合されていた時代は、一方で産業革命以降の近代化が進んだ時代でもあり、英国の強い影響のもとで造船を中心とする製造業の集積が進んだ。タイタニック号は、植民地扱いされていたアイルランドで、宗主国をものぐ世界最大で最新の不沈の豪華客船として建造された。アイルランドのプライドのシンボルであった一方で、大量のアイルランド移民を船腹に閉じ込めたまま処女航海で沈没してしまった悲劇のシンボルでもある。ただし、イングランドに起源をもつ造船業に従事するアイルランド人は、宗教的には宗主国イングランドと同じプロテスタント

系がマジョリティで、カトリック系は非常に少ないとされる。²⁹⁾

ベルファスト臨海部には、タイタニック号とその同型の姉妹船であるオリンピック号、ブリタニック号を建造したハーランド&ウルフ社³⁰⁾の巨大な造船所跡があり、H&Wのロゴが入った鮮やかな2基の黄色のガントリークレーン(サムソンとゴリアテ)は遠くからも見える都市のランドマークとなっている。その足元には世界最大の乾式ドックとポンプ場などの付帯施設があり、ポンプ棟(乾式ドックの排水用)には簡単なビジターセンターも作られていたが、2011年から2012年にかけて、タイタニック号にちなんだ新しい記念館などが急ピッチで整備されつつある。

なお、100周年といっても、悲劇を祝うわけにはいかないことから、表向きはあくまでもタイタニック号進水100周年記念ということになっている。しかし、建造直後の処女航海で沈没したので沈没事故100周年でもあり、一般的には沈没の悲劇によって世界中にその名が轟いていることから、実質的には沈没事故100周年として認識されており、負の遺産としても扱われていることとなる。

① タイタニック特別展

ベルファスト近郊にある屋外博物館(オープンエア・ミュージアム)である「アルスター民俗・交通博物館」では、2011年にタイタニック号に関連する大規模な特別展示を行っている。³¹⁾

同博物館は、広大な敷地に、屋外展示の民俗博物館部分と、屋内展示が主体の交通博物館部分とで構成されるが、この屋内展示のかかなりの面積を裂いて建造の様子から事故の詳細な紹介、亡くなった有名人の紹介、事故の様子ジオラマ、海底から引き揚げられた備品などが展示された。これらは、タイタニック号にちなんだ明らかに悲劇的事故をテーマとして集客を狙ったものである。また、屋外展示エリアにおいても「Titanica The Peoples' Story」というテーマを掲げて、当時の労働者住宅などを使って造船労働者の生活の様子などを再現する展示を行った。

こうしたイベントは、翌2012年にドックの隣にオープンする記念館の前宣伝といった役割も担っていたものと推察できる。

また、市内各所でタイタニック号にちなんだイベントや土産物の販売が行われていた。

② タイタニック・ベルファスト

ザ・ワシントン・ポスト誌2012年3月30日は、「悲運の豪華客船が建造された都市でその記念館がオープン」と報じている。

「タイタニック・ベルファスト」と命名された記念館は、ラガン河河口のベルファスト臨海部のドック地区(クイーンズ・アイランド)にある、タイタニック号が建造された世界最大の乾式ドックの隣に建設された。³²⁾

記念館を含む一帯では、「タイタニック・クォーター」と呼ばれる臨海部都市再開発プロジェクトが展開されており、記念館もこの一環である。

記念館はおよそ1億ポンド(約130億円)かけて建設された6階建てで、延べ床面積は約14,000㎡、ビジター

センターと博物館から成る。外観は高さ 27 m のタイタニック号の船殻を模した構造体が 4 つ組み合わされた特徴的なデザインで、表面は酸化銀皮膜のアルミパネルで覆われる。

展示内容は、最新のエレクトロニクスの特殊効果を駆使した多次元展示で、Dark rides（テーマパークの乗り物のようなもので、照明を落としたジオラマを数人乗りのかごに乗って回る）も導入され、直感的な体験型の展示となっている。

近年の博物館の新しい動向を反映して、こうした展示はテーマに沿って、原寸大の再現、インタラクティブ性を重視し、全体に「ストーリー」性を持たせている。ストーリーは、1900 年代初頭のベルファストの町の様子から始まり、タイタニック号の建造から進水、そして処女航海の悲劇的な終末、事故が引き起こした余波（社会への）、沈没船の発見、現在も継続する海底探査の各展示ギャラリーを通じて展開される。

《展示ギャラリーとテーマ》

ギャラリー 1：新興都市ベルファスト（Boomtown Belfast）

20 世紀初頭のベルファストの社会経済情勢、なぜタイタニックが建造されたか、なぜベルファストだったのか、なぜこの時代だったのか など

ギャラリー 2：「アロル・ガントリー」と造船所（The Shipyard）

どのように建造されたか、それだけで当時世界最大の建造物だったガントリークレーンや造船所のオリジナル・スケールを体感する

ギャラリー 3：タイタニック号の進水（The Launch of Titanic）

ガラス越しに乾式ドックが見える窓を利用し、どのように船台に乗って、どのように進水したかといった様子の画像が合成される

ギャラリー 4：タイタニック号の艤装（Fitting Out the Ship）

一等から三等客室、公共施設、エンジンルームなどの船内の様子を忠実なレプリカで展示、体感できる

ギャラリー 5：処女航海（Maiden Voyage）

どんな人々が乗っていたか など

ギャラリー 6：タイタニック号の沈没（The Sinking）

音や映像を用いて沈没の様子を体験する

ギャラリー 7：沈没事故の余波（The Aftermath）

建造側の英国、船会社の米国の両サイドからの調査結果、レポートなどの資料を見学

ギャラリー 8：神話と伝説（Myths & Legends）

タイタニック号にちなんだ小説、映画、メディアを通じた数々の伝説とともに、何が正しいのかを問う判断材料を提示

ギャラリー 9：沈没船を探検する（Visit & Explore the wreck）

4,000 メートルの海底に沈むタイタニックの様子

その他：海洋調査センター（Oceanic Exploration Centre）

世界各地の海底探査の様子がリアルタイムで紹介される

タイタニック・スイート（Titanic Suit）

タイタニック号内の大階段室を再現した着席定員 750 人の宴会施設

タイタニック・ベルファストの施設は、官民共同出資のタイタニック財団（Titanic Foundation）が所有している。出資したパートナーは

・北アイルランド観光庁（Northern Ireland Tourist Board）

・ベルファスト市（Belfast City Council）

・ベルファスト港（Belfast Harbour）

・タイタニック・クォーター社（Titanic Quarter）

で、タイタニック・クォーター社はタイタニック・ベルファストを含むベルファスト港湾のドック地区全体、「タイタニック・クォーター地区」の再開発プロジェクトを担うデベロッパーである。

タイタニック・ベルファストでは記念館としてのオープンに合わせて各種イベントも開催、周辺の関連事業も次々に展開され、地域振興の波及効果を狙っている。

2012 年 4 月 7 日のオープニング・イベントでは、建物の特徴的な大面積の壁面を使って、「プロジェクション・マッピング（高精細画像投影）」と花火と音楽のコラボレーションによる 40 分間の光と音楽のインスタレーションが行われた。総予算 9,700 万ポンドの大イベントである。

③ タイタニック・クォーター

「タイタニック・クォーター地区」の再開発は、ラガン沿岸のドック地区、すなわち造船所跡とその周辺 185 エーカー（約 752,000 m²：7.5 ha）で展開される水辺の特性を生かした混合用途の大規模な面的開発全体を指し、2012 年現在、欧州最大規模の水辺空間（ウォーターフロント）の再開発事業である。

開発全体の目的は、ベルファストの独自の歴史や特性に根ざして、高レベルの投資や開発を促進することで、脱製造業を進めて観光・レクリエーションやイベント、コンベンションといった文化的な事業への転換を狙っており、言葉こそ使っていないが「創造都市論」に基づいた都市政策と見ることができる。歴史の蓄積があり、かつ都心の直近という立地条件で人とビジネスの一大交流拠点の創出を目指している。

その内訳は、

・7,500 戸以上の住居（集合住宅）

・ビジネス、教育、研究開発機能の立地を見込んでいる 90 万 m²以上の賃貸床

・ホテル、レストラン、カフェ、バーをはじめとする各種宿泊・飲食・娯楽施設

・画廊、劇場、野外演劇スペース、水上スポーツなどの文化施設

から成っており、要するに、横浜のみなとみらい 21 地区

の三菱ドック跡や赤レンガ倉庫の再開発と東京湾岸お台場地区の開発を混合したようなイメージである。³³⁾

向こう 15 年間で 70 億ポンド (約 9,100 億円) の投資により、一連の再開発が完成した暁には、少なくとも 2.5 万人の新規雇用創出、年間 40 万人の入込客 (うち 15 万人は海外から) を見込んでいる。

地区内では各種イベントも企画されており、2011 年の 10 月から 11 月にかけては「ベルファスト・フェスティバル」の 50 周年記念イベントが開催された。同フェスティバルは、もともとはクィーンズ大学 (1849 年設立) のキャンパスの小規模なイベントからはじまり、ベルファストの重要な文化イベントになっているもので、幅広いジャンルの音楽、演劇、映画、ダンス、コメディ、トークなどが繰り広げられる。2012 年 4 月には「タイタニック 100 年祭」が開催され、一か月間かけて音楽、光のショーや各種展示イベントが展開された。

また、直近の計画では新しくメモリアル・ガーデン (追悼あるいは祈念公園) を整備する予定である。³⁴⁾

④その他の取り組み

ベルファストのイメージを刷新する契機、きっかけになったイベントとして、2011 年 11 月 6 日にドック地区にできた複合施設「オデッセイ・アリーナ」で開催された「MTV EMA (European Music Awards)」がある。テロリストのいる怖い都市、というイメージから、安心して楽しいイベントが開催できる都市へ、というイメージチェンジである。

受賞者のレディ・ガガをはじめ、世界中のスターが式典に参加し、ベルファストやタイタニックの名前が世界のメディアに登場することとなった。アメリカのアカデミー授賞式もそうであるが、こうした著名人を巻き込んだイベントでパブリシティ効果を狙っている。

2012 年 4 月 20 日には、オープンしたての「タイタニック・ベルファスト」を会場として、世界中から 140 以上のツアー・オペレーターを招いたツーリズム振興イベントを開催した。地元新聞 (ベルファスト・テレグラフ) では日本、中国、インドからも参加があったと紹介されている。今までの海外旅行のトレンドから見れば非常にマイナーな北アイルランドの動向であるが、これを受けて日本の旅行代理店の WEB 情報にもいち早くタイタニック・ベルファストが紹介されている。

「Titanic GO Awards」は恒例の北アイルランド最大のイベントで、通称「GONGS」とも呼ばれる。毎年、商業、観光、ホスピタリティ、エンターテインメントの各分野で、活躍した企業などのベストを選ぶ。14 のカテゴリー別で、およそ 25,000 人以上の市民が一斉にウェブ投票し、サイバー空間でも話題が盛り上がっている。

以上、近況を概観すると、音楽やアートなどの文化関連イベントのイニシアチブが目立つ。こうしたイベント開催の受け皿としてウォーターフロント・ホール、オデッセイ・アリーナ、タイタニック・ベルファスト、メトロポリタン・アーツ・センター (MAC arts centre) などの箱モノが整備されてきたわけで、ハードとソフトの施策がうまく連携している。

新規建設だけではなく、既存のアルスター博物館、シティ・ホール、アルスター民俗・交通博物館と植物園も、2012 年の集中イベントに向けて 2010 年ごろから次々と新たに改装されてきた。

⑤経済波及効果など

現在進行中のプロジェクトであるので、公式の統計はまだ入手できないが、マスコミ等で入手できる情報からは立ち上がり時期の熱気のようなものが伝わってくる。

各種メディアの伝える反響の中から、いくつかのトピックを取り上げてみる。

海外からの入込客数は、2011 年の 9 ヶ月間で、2010 年の 6% 増、120 万人、観光収入は 20% 増で 291 百万ポンドへ。これを受けて通商相アーリーン・フォスターは 2020 年までに観光による歳入を 10 億ポンドとする構想を発表した。

政府首脳部は、2012 年に相次いで外国を訪問し、観光の振興を後押し、ピーター・ロビンソン、マーティン・マクギネス、アーリーン・フォスターの 3 名で既にインド、ドバイ、カナダを訪問、年内には中国訪問の予定している。(日本に来る予定はない)

ベルファスト・ウェルカム・センターは、開設 2 週間で訪問者数、旅行の問い合わせ数で記録を更新中である。電話問い合わせ 163% 増、4 月の前半だけで前年同月比 96% を達成した。

北アイルランド観光局のキャンペーン「北アイルランド 2012」は、およそ 2 百万ポンドの予算でテレビ・映画の広告、オンライン・ビデオやバナー広告を展開中。

2011 年、インターネットの低コスト旅行料金比較サイトの「TripAdvisor」は、ベルファストが英国 (UK) 内の都市で最もお買い得であるとしている。

2011 年 12 月時点で、ナショナル・ジオグラフィックの旅行誌 "Traveler" が推薦する "Best of the World 2012" において、トップは南米のペルー、入選した 19 の都市や地域の中にロンドンなどと並んでベルファスト (北アイルランド) が入っている。同誌は、ベルファストの魅力を「信じられないほどの魅力をもった宝石のような都市」と評価している。

英語圏で圧倒的シェアを誇る旅行ガイド「ロンリープラネット」最新刊では、ベルファストを「課題の多い過去を流し去って、ヒップで快楽主義的な祝祭都市に生まれ変わった "hip and hedonistic party town"」と評価。

ロンリープラネットと並び称せられ、年 5 万部以上を発行する Fodor's の海外旅行ガイドの「アイルランド」最新刊では、世界で訪れるべき場所トップ 21 のひとつにベルファストをあげている。

⑥ミューラルとピース・ウォール

北アイルランドをめぐる暴力の応酬には一応の決着がついたとはいえ、宗教や歴史上の対立関係が完全に解消したわけではない。インドのガンディーやチベットのダライ・ラマのように、非暴力で北アイルランドの英国からの分離を目指す活動は依然続いている。

長い対立関係の続くベルファストの市街地は、多様な市民が混在する地区もあれば、イングランド併合派のプロテ

スタント系と、アイルランド独立派のカトリック系の住民が集住してコミュニティを形成している地区もある。

前者は、部外者が街並みを眺めただけではその片鱗も窺うことはできないが、市の西部に広がる後者の場合、部外者が一歩立ち入っただけでその町並みからは一種異様な雰囲気を感じる。

プロテスタント系のコミュニティでは、祝日でもないのに各戸の玄関には英国旗のユニオンジャックが掲揚され、シャンキル・ロードというメインストリートには道路上を覆い尽くすようにワイヤーでつられた小さな英国旗がひしめき合っている。教会や事務所ビルなど目立つ建物ではひととき大きな英国旗を掲げている。

一方、カトリック系のコミュニティではアイルランド共和国の3色旗が街角に多数掲揚されている。やはりメイン・ストリートのフォールズ・ロードに多い。

そして、両コミュニティともに、表通りやコモン（共有緑地）に面した建物の壁面には、色鮮やかなペンキで各種の政治的メッセージを伝える壁画（壁絵）が描かれているが、これらは「ミューラル」と呼ばれる。絵がほとんどなく文字が主体のものはグラフィティとも呼ばれる。名のああるアーティストが描いたものがあるがほとんどは地元のアマチュア・アーティストが描いている。³⁵⁾

テーマは様々であるが、プロテスタント系コミュニティではイングランドの象徴の赤十字や英国旗、赤十字に赤い手首の北アイルランド旗、英国軍人、オレンジ公ウィリアムの姿が目立つ。中には大きなクロムウェル（アイルランド総督）の肖像と彼を称賛する壁画もある。韓国のソウルに日本人入植者コミュニティがあってそこで伊藤博文を称賛しているようなものであるが、同じ総督でも聖戦と称して多数の市民を虐殺したクロムウェルの方が伊藤よりはるかに悪辣である。

カトリック系コミュニティでは、圧倒的に目立つのはアイルランド独立運動の犠牲者（ブライアン・スチュアート：享年13歳、バディ・ティアなど）、ウルフ・トーンやマクラケン、バーナデット・デブリンといった革命の志士、チェ・ゲバラなどの革命の戦士などで、デザインにはケルトの十字架や唐草模様が目立つ。全般的に反体制的なテーマが多い。

プロテスタント系とカトリック系の地区が隣接している市の西部フォールズ・ロードの近くには、1969年の紛争をきっかけに、市街地を一直線に分断して高さ5.5mの「ピース・ウォール（平和の壁）」というベルリンの壁のような高い壁が築かれている。ピース・ラインとも呼ばれる。両コミュニティ間の小競り合いを防止する目的のものであるが、平和の壁とは皮肉な名称である。

近年では、治安の改善もあり、こうしたコミュニティ分断を物語る壁画や壁が、観光資源として取り上げられる動向が見られ、市内観光の目玉になりつつある。

観光客向けに、壁（ピース・ウォール）、かつての紛争地跡、ミューラルなどの観光スポットを巡る観光バスも多い。また、個人や少人数向けに、ブラックキャブ（黒塗りのロンドンタクシー）のドライバーがガイドをして解説を聞きながら壁画を見て回る「ベルファスト・タクシー・ツアー」もある。

かつて西ベルリンにあったベルリンの壁見学ツアーや、

韓国側から南北朝鮮の軍事境界線（38度線）を訪問するツアーと同じような発想で、観光の対象としてはいささか抵抗感のある厳粛な危険な対象ではあるが、単なる興味本位を越えて歴史の真実に向かい合うという重要な意味もある。

負の遺産を観光に組み込む場合、この真剣な歴史理解や教養的側面と、珍しいもの、怖いものを見たいという興味本位の関心とのバランス、あるいは社会的な理解を深めることと観光ビジネスの収益をあげることとのバランスをいかに整合させるか、が我々に課せられた重要な課題である。

今日では、以前と比べて壁画のテーマはマイルドなものに変化してきている。アイルランド紛争の政治的プロパガンダに代わって、世界中の紛争や差別、世界平和やアイルランド紛争以前の歴史的トピック、あるいは日本のアニメのようなイラストなどが増えている。

また、政治とは距離を置き、住民の草の根のアート表現を通じて地元コミュニティ活動を活性化させる試みとしてミューラルを活用するケースも出てきている。

平和的な環境に変化しつつあることは好ましいことなのであろうが、先鋭的な切迫感のある図柄が消えて世界中どこにでもある広告や落書きのようになってしまうと、貴重な歴史の一コマが失われていくという面では残念なことで、観光資源としての魅力も色あせてしまうかもしれない。しかし、歴史的事実は記録に残すなどして、現実の住民のニーズに合わせた創造的なコミュニティ活動の一環として新しい姿に変化していくことも、積極的に評価できるのではないだろうか。

(3) デリー（ロンドンデリー）³⁶⁾

北アイルランド第2の都市デリーは、フォイル河口に開けたまちで、16世紀からプロテスタントの入植地として発展してきた歴史がある。入植したプロテスタントがカトリックの攻撃を防御するため1613～1618年に築いた城壁も残る。英国軍の発砲で14人の市民が亡くなった「血の日曜日事件（1972）³⁷⁾」など数々の紛争の舞台となった都市で、公民権運動の中心都市としても有名である。

しかし近年ではだいが雪解けの様相が見られる。2011年5月にはフォイル河を挟んで対峙していたプロテスタント側とカトリック側を繋ぐ歩行者・自転車専用橋「ピースブリッジ」が掛けられた。また、真相が公表されないまま長らく闇の中であった「血の日曜日事件」について、ブレア政権の1998年に再調査が始まり、2012年6月によりやく英国の非を認める結論が出され、キャメロン首相が議会で謝罪している。

こうした治安の向上やタイタニック100周年などを背景に、北アイルランドは文化振興を起爆剤とする新しい発展に向けて積極的に政策を展開しつつあり、デリーもこれらの動きに同調している。その起爆剤として期待されているのが「英国文化都市（UK City of Culture）」で、同市は、2013年には新しく発足する同施策の第1号として指定された。英国国内の他の候補都市、バーミンガム（Birmingham）、ノーリッジ（Norwich）、シェフィールド（Sheffield）に競り勝ったということで大きく報道さ

れている。

英国文化都市は、2008年にリバプールが指定された欧州文化首都の成功に触発されて、その英国版として始まった施策である。欧州文化首都と同じように、複数の候補都市から選出されると、その名誉とともに、1年間は各種の文化活動を集中的に行い、都市の発展を期するというものである。英国政府から、直接特別の予算がつくわけではないが、観光や民間投資の面で大きな期待が持てる。

市はこの期間中、アイルランドの伝統音楽の祭りや演劇などを中心にイベントを展開し、200万人の入込み客と、4,000万ポンドの収入を見込んでいる。さらに、こうした機会を生かして和平の機運を高めるとともに、新たな投資を呼び込みたい考えだ。

デリーにもベルファスト同様、市内には政治的なメッセージを描いた壁画がある。これらの壁画やボグサイドの「デリー解放区」³⁸⁾のモニュメントなど、紛争を象徴する遺産は、今日では観光資源となっており、観光客の撮影ポイントになっている。

長く辛い紛争の傷跡が色濃く残るデリーで、文化のチカラによって新しい未来志向の都市の発展が期待されることは素晴らしいことである。しかし、IRAから分離した強硬派「真のIRA」など一部のグループは、北アイルランドの英国帰属を認めない立場から、英国政府が指定する英国文化首都のイベント自体に反発している。BBC北アイルランドの電子版によると、2011年10月には英国文化首都のデリー事務所前で爆弾事件が起きるなど（負傷者は出なかった）、いまだに残念な事件も続いている。

5. おわりに

以上、戦争や民族紛争、奴隷貿易、ホロコースト、強制労働などの負の文化遺産、特に近現代のそれを抱えながら、これから目をそらすことをせず、むしろ正面から真摯に取り組むことにより、暗い過去を清算して新しい都市や地域の発展に結び付けようという試みについての事例を紹介した。

そこから共通して読み取れる文化政策のアプローチとして、(1)今日の繁栄を築いた先人の営為とは不可分の裏の面として、その両面を受け止めざるをえないという側面、(2)暗い過去をあえて白日の下に晒すについては、他者から批判される前に先んじて取組み、世界平和や人道主義、多文化共生といった人類共通の未来志向の価値観に昇華させるというしたたかな側面、(3)さらに踏み込んでそうした負の遺産を積極的に観光振興や集客戦略にまで結び付けようという側面も見られた。そしてそこには世界遺産の登録、欧州文化首都や英国文化都市、各種の文化イベント、斬新な建築デザイン、草の根のアート活動を通じたコミュニティ対策など、随所で文化芸術を都市発展の重要な手がかりとする創造都市論の考え方が浸透してきている。

ここに挙げた負の側面をも包含する文化政策、暗い過去に目をそむけるのではなく、むしろ積極的に包含することでより効果的な政策効果を狙うという試みは、現代の日本にとっても非常に重要な示唆に富むものではないだろうか。

例えば、世界遺産となった広島原爆ドームは、世界平

和と核廃絶という普遍的な理念を訴えてはいるが、世界で唯一の被爆国、人道的に理不尽な一般市民の大量虐殺の被害者としてのまなざしが強く意識されている。日本単独の被害者意識・贖罪意識に止まらず、世界平和と核廃絶の情報発信基地としての役割を充実させるという発想もあるだろう。

中国韓国との歴史認識をめぐる論争が続く今日、相手の言い分に反応して防戦に回るのではなく、むしろ加害者である日本の側から先手を打って強制連行などの事象を正面から取り上げ、さらにこれを人類普遍の人道観に結び付けて積極的に平和や人権の重要性についての情報発信をするといった文化政策の戦略性が望まれる。

注・参考文献

- 1) U.K.の日本語表記について、正式名称は「グレートブリテン・北アイルランド連合王国」であるが、本論考ではU.K.を「英国」と表記する。
- 2) アイルランド島は、一般的にはアイルランド共和国と北アイルランドに分かれるが、北アイルランドの帰属については英国とアイルランド共和国とでその主張が異なっている。本論考では、英国の主張する北アイルランド地域を「北アイルランド」、これを除くその他の領域全体を「アイルランド共和国」、アイルランド島全体のことを述べるときは「アイルランド」と表記する。
- 3) イギリス都市拠点事業研究会「検証 イギリスの都市再生戦略 都市開発公社とエンタープライズ・ゾーン」112頁（風土社、1997）
- 4) 欧州文化首都（European Capital of Culture）1985年、当時のギリシアの文化相メリナ・メルクーリが提唱したEU内の都市活性化プログラム。2004年度までは欧州文化都市（European City of Culture）と称し、2005年度から現名称。EUの付託に基づき、EU加盟国の中から毎年1都市（原則として）を選定し、その都市特有の文化遺産や歴史を一般公開することにより文化や歴史の多様性と重要性という共通認識を持ち、継承・促進させることを目的とする。背景にあるのは「真のヨーロッパ統合には、お互いのアイデンティティーとも言うべき、文化の相互理解が不可欠である。」という提唱。
- 5) 種田明「リバプール、海商都市の歴史観光」静岡文化芸術大学紀要 Vol.10 117頁（2009）
- 6) リバプール海事博物館 <http://www.liverpoolmuseums.org.uk/maritime/>（参照日 2012/08/20）
- 7) 国際奴隷博物館 National Museums LIVERPOOL "International Slavery Museum" Aug.2007（参照日 2012/08/20）
- 8) 国際奴隷博物館 <http://www.liverpoolmuseums.org.uk/ism/>（参照日 2012/08/20）
- 9) 帝国戦争博物館 <http://www.iwm.org.uk/>（参照日 2012/08/25）
- 10) 帝国戦争博物館 北館 <http://www.iwm.org.uk/visits/iwm-north/about>（参照日 2012/08/25）
- 11) ダニエル・リベスキンド：1946年ポーランド生まれ。イスラエルで音楽を学び、その後アメリカ、英国の大学で建築を学ぶ。1970年代末より旧来の建築への批評精神に富んだ革新的なドローイングや都市計画案を次々と発表。その後欧米各地の大学で教鞭をとり、デコンストラクティヴィズム建築の代表的存在とされた。しかしそのコンセプトがあまりに斬新なため実際の建築としてはほとんど実現されなかった。
- 12) 文献3） 92頁
- 13) 文献3） 136頁
- 14) 王立武器博物館 <http://www.royalarmouries.org/visit-us/leeds>（参照日 2012/08/25）
- 15) ベルリン・ユダヤ博物館 <http://www.jmberlin.de/>（参照日 2012/08/25）
- 16) 虐殺されたヨーロッパのユダヤ人のための記念碑 <http://www.holocaust-mahnmal.de/>（参照日 2012/08/25）
- 17) エムシャー川流域の総面積 800 平方 Km（東西約 80Km・南北約 10Km・居住人口 220 万人）
- 18) エムシャーパーク国際建築展覧会 (Internationale

Bauausstellung Emscher Park : 略称 IBA エムシャーパーク) : 博覧会という名称の意味は、エムシャー川流域という領域を限定し、およそ 10 年間という限られた時間で、流域の総合的な再生を国際コンペ方式で実施することを表現したもの。パークという名称は、重工業で汚染された地域の環境を回復し、「全地域を公園化しよう」という意図が込められている。

- 1 9) 種田明「ドイツの産業遺産と地域振興」都市・地域研究 003 Vol.1 No.3 23 頁 (2006)
- 2 0) 根本敏行「国際建築博覧会エムシャーパークと地域政策」都市・地域研究 003 Vol.1 No.3 29 頁 (2007)
- 2 1) 根本敏行「特集：拡大 EU 時代の欧州地域政策の比較研究 (その 2) ～アイルランドとオーストリア～ II . アイルランド」都市・地域研究 008 Vol.1 No.8 17 頁 (2007)
- 2 2) 「アイルランドは、ふたつの国にわかれている。ひとつは、1921 年にアイルランド議会・政府発足以来イングランドに帰属する道をたどったアルスター地方 9 州のうち 6 州を指す北アイルランドである。もうひとつがイングランドからの自治・独立を果たしたアイルランド共和国である。このように南北で分断されたアイルランドであるが、IRA (Irish Republican Army、アイルランド共和軍) が、全アイルランドを統一した共和国の成立を目指し、時として過激な手段も辞さない。」木下卓、窪田憲子、久守和子「イギリス文化 55 のキーワード」世界文化シリーズ 1、8 頁 (ミネルヴァ書房 2009)
- 2 3) ベルファスト合意：ベルファストにおいて、1998 年 4 月 10 日に英国とアイルランド間で結ばれた和平合意。この日が復活祭の前々日、聖金曜日 (グッド・フライデー) であったため、聖金曜日協定 (Good Friday Agreement) と呼ばれることもある。この合意のあと、アイルランド共和国は国民投票により北アイルランド 6 州の領有権を放棄することになった。同時に北アイルランド議会が成立、アイルランド共和国と北アイルランド議会の代表者からなる南北閣僚評議会が作られた。
- 2 4) タイタニック号は 1912 年 4 月 14 日、英南部サウサンプトン港から米ニューヨークに向かった初航海中、ニューファウンドランド沖で氷山に衝突、15 日未明に沈没。乗客乗員約 2,200 人のうち約 1,500 人が犠牲となった。
- 2 5) 論文 2 1) 21 頁
- 2 6) 19 世紀にアイルランドを襲った大飢饉やイングランドによる圧政をきっかけに、およそ 600 万人がアメリカやカナダ、オーストラリアなどに新天地を求めて移住していった。うちおよそ 250 万人はコーヴから出港したとされる。
- 2 7) 論文 2 1) 18 頁
- 2 8) 大飢饉の前からアイルランドから海外へ出た移民は多く、本国 (約

400 万人) よりはるかに多くのアイルランド系市民が北米やオーストラリアなど海外で暮らしている。アイルランド人を先祖に持つ人々の総数は推定で約 6 千万人程度と考えられている。うち約 4 千万人がアメリカ、カナダとオーストラリアに約 5 百万人ずつ、英国に数百万人と見積もられている。

- 2 9) 主にイングランドから入植し、北アイルランドの英国編入を支持している人々を「ユニオニスト」「セクトリアン」と呼び、ほぼプロテスタント系と同義である。一方、アイルランド島全域の独立を支持している人々は「ナショナリスト」「リパブリカン」と呼ばれ、ほぼカトリック系と同義である。なお、英国では英国国教会をプロテスタントと呼んでいるが、これはローマのカトリックと対立して独自の宗派を建てたという意味で、三位一体などの教義の基本はカトリックと同じである。教義そのものが異なる大陸のルターやカルヴァンのプロテスタントとは別物である。
- 3 0) ハーランド・アンド・ウルフ (Harland and Wolff) は英国の重工業メーカー。北アイルランドのベルファストで造船業を始めて、数多くの船を建造した。その中で最も有名なのはタイタニック (RMS Titanic) である。現在は船の設計、修理、改装と橋の建設も手がけており、ベルファストに世界最大のドックを保有している。
- 3 1) アルスター民俗・交通博物館 <http://www.nmni.com/uftm> (参照日 2012/09/10)
- 3 2) タイタニック・ベルファスト <http://titanicbelfast.com/Home.aspx> (参照日 2012/09/10)
- 3 3) タイタニック・クォーター <http://www.titanic-quarter.com/> (参照日 2012/09/10)
- 3 4) 英語のメモリアルは追悼や祈念など人の死を悼むという意味で、これを日本語で「記念」と訳すのは誤訳。記念は英語でコメモラティブ。
- 3 5) 佐藤亨「北アイルランドとミューラル」水声社 (2011)
- 3 6) 「ロンドンデリー」の名は、17 世紀にこの地がロンドン市領となったことに由来する。北アイルランドおよびアイルランド共和国では英国的とも屈辱的とも言えるこの名は嫌われ、単に「デリー」と称する。
- 3 7) 血の日曜日事件 (Bloody Sunday) は、1972 年 1 月 30 日、公民権運動デモ行進中の北アイルランド、デリー市民 27 名が英国陸軍落下傘連隊第 1 大隊に銃撃された事件。14 名死亡、13 名負傷。市民は非武装で、5 人は背後から射撃された。事件のあった地域の名を取って「ボグサイドの虐殺」とも呼ばれる。IRA 暫定派は、1970 年から英国統治に対する反対運動を行っていた。軍が非武装の市民を殺傷したこの事件は、現代アイルランド史における重要な事件。
- 3 8) 1969 年にカトリック系の住民たちがバリケードを築いた。



写真 1 アルスター民俗・交通博物館のタイタニック特別展
(根本撮影：2011 年 8 月 13 日)



写真 2 建設中の「タイタニック・ベルファスト」記念館と
H&W 社のクレーン
(根本撮影：2011 年 8 月 13 日)



写真 3 タイタニックが建造された世界最大の乾式ドック
(根本撮影：2011年8月13日)



写真 4 カトリック側のミュール
(ラジオのアイランド語放送)
(根本撮影：2011年8月14日)



写真 5 カトリック側のミュール (パレスチナ紛争について
「これは戦争犯罪だ!」と書かれている。)
(根本撮影：2011年8月14日)



写真 6 カトリック側のミュール (詩人ボビー・サンズ))
(根本撮影：2011年8月14日)



写真 7 ピース・ウォール (植え込みの影には「英国人に死を!」
といった下品な落書きもある)
(根本撮影：2011年8月14日)



写真 8 プロテスタント側のミュール
(オリバー・クロムウェル)
(根本撮影：2011年8月14日)



写真 9 プロテスタント側のミューラル（対IRA組織）
（根本撮影：2011年8月14日）



写真 10 プロテスタント側のミューラル
（Every child deserves the right to PLAY.
全ての子供には遊ぶ権利がある。意識すれば
「遊びをせんとや生まれけむ」と書かれている。）
（根本撮影：2011年8月14日）

南ウェールズの世界遺産ビッグ・ピット Big Pit — 炭坑の歴史と国立石炭博物館のマネジメント

Big Pit (National Coal Museum in south Wales; The World Heritage) : The history of the colliery and the management of the Museum

藤田 憲一

文化政策学部文化政策学科

Kenichi FUJITA

Department of Regional Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

南ウェールズのブレナヴォン Blaenavon 産業遺産群が、2000 年にユネスコから世界遺産の指定を受けた。この中で、主要なものは、炭坑遺産としてのビッグ・ピット Big Pit とブレナヴォン製鉄所である。私は共同研究者とともに、2011 年に大学院研究科長の特別研究費の助成を受けて、この世界遺産を訪れ、視察・調査を行った。この論文では、特にビッグ・ピットに焦点を当てて、炭坑の立地・歴史、炭坑で働いた人々の姿、国立石炭博物館の遺跡建物とマネジメント、などを概観し、分析する。

Blaenavon Industrial Landscape in South Wales was designated as a World Heritage Site by UNESCO in 2000. The most important industrial heritages of this site are Blaenavon Ironworks and Big Pit. In 2012 I visited this site with my colleagues and surveyed the industrial heritage of colliery and ironworks. This paper, focusing on Big Pit, describes the history of the colliery and the life of the people who worked there, and discusses the buildings and management of Big Pit as National Coal Museum.

はじめに

19 世紀末、ウェールズは世界で最も主要な石炭産出国のひとつであった。1913 年、これは 600 以上の炭坑から、6 億トン以上が生産されていた時期であるが、ウェールズの人口の 10 分の 1 以上が石炭産業に雇用されており、それより多くの人々が石炭業に生存を依拠していた。

しかし、石炭産業は衰退し、20 世紀末にはウェールズにはたったひとつしか炭坑が残っていないという状態になってしまった。ここ 2 世紀以上にわたって、ウェールズの何百もの炭坑が閉鎖され、その痕跡も消えてしまった。ただし、ブレナヴォンのビッグ・ピットは例外である。ここはかつては 1300 人を雇用し、1 年に 25 万トン以上の石炭を生産した炭坑であるが、今では世界的な博物館として子孫のために保存されている。すなわち、ビッグ・ピットは、1980 年に閉山となったが、1983 年に国立石炭博物館として再出発したのである。

現在も炭坑の機能を部分的に残している。巻上機関は今でも稼働している。ただし、現在は縦坑に入っていくのは炭坑労働者ではなくツーリストである。ビジターはもと炭坑労働者のガイドに伴われ、ツアーに加わり、炭坑労働の追体験をすることができる。

2000 年には、ブレナヴォン製鉄所跡とともにビッグ・ピットはユネスコから世界遺産に指定され、産業革命を支えた産業遺産としての重要性はいつそう広く知られるようになり、内外から多くのビジターを集めている。

本稿では、まずビッグ・ピットの立地と炭坑産業の歴史を辿る。次に、炭坑で働く人々の姿を概観する。最後に、産業遺産としてのビッグ・ピット石炭博物館の建物とそのマネジメントを分析していくことにする。

メインの参考文献として、National Coal Museum (2005), Big Pit : A Guide, National Museum of Wales を利用した。また、その他利用した文献は本稿の末尾に挙げてある。

I ビッグ・ピットの炭坑産業

1. 石炭の生成

「悪魔が石炭を作った。自分と同じく真っ黒な色にして地中に隠した。人間に必死で探させるためだ。」——これは、19 世紀のウェールズの炭坑労働者の言葉として、よく引用される表現である。それは楽しい空想であるが、実際は、石炭のもとは植物である。

石炭は、3 億年ほど前にこの地に生えていた植物の圧縮された遺物にはかならない。その頃ウェールズは、赤道に近く暑く湿っていた。森が沼地や川の土手に育った。枯れて腐った植物が、泥炭の厚い層を形成した。植物の成長、洪水、埋没そして再生のサイクルが何万年にもわたって繰り返され、泥、砂、そして泥炭の層を形成した。上の層の重みで圧縮され、泥炭の層は石炭となったのである。

2. ウェールズの炭田

ウェールズには南北に 2 つの重要な炭田がある。北ウェールズの炭田は、長さ 45 マイル、一番広いところで幅 9 マイル、そして Bala 断層によって分断されている。

北ウェールズの炭田は、この地域の鉄工業の隆盛に依拠している。1870 年～1913 年の間、年間採炭量は 200～300 万トンだった。しかし、産業は次第に衰退し、1974 年には 2 つの深い炭坑のみが残って採掘をしていた。Point of Ayr が北ウェールズ最後の炭坑で、1996 年に閉山した。

南ウェールズの炭坑は、東はポンティプール Pontypool から、西は St. Bridges Bay の東まで広がっている。それは、長さおよそ 90 マイル、幅が一番広いところで 16 マイルである。地域全体で、およそ 1,000 平方マイルとなる。

炭田は周辺から中心に向かって沈み込む窪地を形成している。周辺部は、石炭層が比較的容易に得られ、それゆえ採炭活動が始まった場所である。炭田の中心部の石炭層は最後に採掘されることとなった。そこは比較的深くて、採

炭が難しいからである。

3. ウェールズの炭坑

19世紀の後半は、南ウェールズにとって、好景気の時代だった。1913年には、炭坑は5700トンという最高値に至り、23万2800人の労働者が、620の炭坑で働いていた。しかし、1920年代の初めから、長い不況に苦しむことになる。1936年までに241の炭坑が閉山し、炭鉱労働者は、半減して13万人となった。

石炭産業は南ウェールズにとって重要な産業であり続け、1947年の国有化の時までに、135の大きな炭坑があった。しかし、緩慢な衰退は続き、2004年までに、現役炭坑はたった一つになってしまった。

北ウェールズの石炭は、ほとんどが高揮発性で、鉱物製造に使われるコークスの材料となり、また家庭の暖房に使われる。

南ウェールズはもっと多様なタイプの石炭を有している。この地の石炭は、家庭用、ボイラー用、コークス用（金属精錬のため）、ガスの製造用、などを含む広い範囲の利用方法がある。

ウェールズでは、30億トンの石炭を掘ったが、しかし、80億トンがまだ地中に残っていると推計されている。（1957年、イギリス石炭庁推計による）

11の異なった石炭層が、ビッグ・ピットで採掘されてきた。その石炭は、コークス用に適していた。しかしボイラー用石炭としても適していた。

ブレナヴォンの石炭は、低灰で硫黄分も少なく、それと相まって、高度のスチーム発生能力を持っていた。スパークリングがまったくなく、鉄道にはもっとも重要であった。また、かなりの石炭が、蒸気船に使われた。当時のウェールズの2つの鉄道は、どちらもお得意様だった。最初のフランスの鉄道会社も同様だった。ブレナヴォンの石炭は、南アメリカとインドにも定期船で輸出された。採炭地から積み出し港までの交通手段は、最初は馬の背で、後には、運河、トラム、鉄道が使われた。

4. ビッグピットの経営

1787年に英国中部からやってきた3人のビジネスマンが現在ブレナヴォンとなっている土地を、地主であるアベルガヴニー卿 Lord Abergavenny からリースした。そこに3基の溶鉱炉が造られ、1789年には鉄の初生産が行われた。1796年にはウェールズで2番目に大きな溶鉱炉となった。これらの製鉄所が、この地域で最初の大量の石炭需要を生み出した。そして、多くの炭坑がこの需要を満たすべく開設され、162の横坑、34の縦坑を記録した。

ビッグ・ピット（当時はKarsleyピットと呼ばれた）は、1860年に開設され、それは、いくつかの別個の炭坑が融合したものであり、とても複雑な歴史を持っている。1880年にKarsleyピットは、直径と深さを増して、ビッグ・ピットと名前を変えた。

ビッグ・ピットの名称は、縦坑の幅から取られている。それは長円形で、最長径は5.5メートルあり、ブレナヴォン地域で最大だった。ほとんどのケージは一度にトロッコ dram 1台を巻き上げるように設計されていたが、ビッグ・

ピットの形状とサイズにより、2つのトロッコを隣合わせに積むことができた。

1896年に528人がガス用、家庭用、ボイラー用の石炭を生産するために雇われていた。1908年には、労働者の数は1145人まで増えた。この同じ年の12月11日には、ビッグ・ピットの部分的な爆発で3人が亡くなった。

1947年に、ビッグ・ピットは国有化され、イギリス石炭庁の一部分となった。1967年、ビッグ・ピットは、完全に機械化された方法で、ある石炭層を採掘し始めた。同炭坑は、1973年にブレナヴォン新炭坑と名称を再度変更された。この石炭層は、最大30インチの厚さしかなく、1980年には採炭を停止した。

II ビッグ・ピットで働いた人々

ビッグ・ピットで働き、生活をしていた人々の様子をここで描写しておきたい。炭鉱労働者、女性・子ども、労働組合の順に見ておく。

1. 炭坑労働者

① ビッグ・ピットの炭坑労働者の気質

Aubrey Flynn というビッグ・ピットの鉱山次長 under-manager が、1970年代に概略次のように書いている。

＜ビッグ・ピットで働くということには、何か特別なものがあつた。それはひとつには炭田の端っこという位置取りの故である。離れたピットなので、他のどこよりも家族的だった。労働者は皆交流し合い助け合った。そして、職人魂は最高レベルだった。仲間意識はレジャー面にもあふれていた。ラグビーの試合やコンサートにも一緒に出かけたものだ。＞

ビッグ・ピットの労働者はみなニックネームをつけるのが大好きだった。たとえば、いつも走り回っているのは Hot Feet、また別の人は仕事に行くのに深い雪をかき分けて歩くので Snow Shoes だ。採炭は大変な仕事だ、肉体的につらいばかりでなく、心理的にもつらい。身の回りには危険が一杯だから。ユーモアのセンスは、大きな財産だ。

社員と炭坑労働者の関係はとてもよかった。炭坑労働者の1970年代初期のストライキの間も厳しさはまったくなかった。ピケ衆と一緒にお茶を飲んだものだ。私は病気でここを辞めなくてはならなかった。ピットが閉められる3年前だった。多くの幸せな思い出と共に去った。＞

② 炭坑災害とレスキュー

南ウェールズの炭田の南の端に位置するというブレナヴォンの地域特性のゆえに、縦坑は浅く、危険なガスが比較的少なかった。しかし、災害がなかったわけではない。ブレナヴォンで最悪の災害が、1838年に起こった。すなわち、Cinder 縦坑が出水し、15人の炭坑労働者が溺死したのである。1908年に、火山性ガスの爆発で3人の男の人が亡くなった。1913年には、3人の炭坑職員が窒息死した。

その他の災害や傷病もあった。爆発よりも、落盤や輸送

事故での死者の方が多い。炭坑労働者は、灯りが乏しいので眼病に、重い者を持ち上げるのでヘルニアに、やかましい道具を使うので聴覚障害に、苦しむことになる。すべてのうちで最悪なのは、炭坑の粉塵の吸引による数千人の死亡、そして後々まで続く緩慢な死である。

19世紀における炭坑災害の増加にもかかわらず、炭坑のレスキューは、常設ではなく、ボランティアベースのものであった。1911年になってやっと、炭坑法が炭坑オーナーに、レスキュー・ステーションを開設することを義務付けた。そして1911年と1918年の間に、南ウェールズで5つ、北ウェールズで2つのステーションが開設された。第一次世界大戦までに、通常の炭坑災害のひどい時代は終わりを迎えた。もっとも、20世紀になっても大きな災害はやはり無くなったわけではない。

1947年の石炭産業の国有化の後、炭坑レスキューは発展させられた。レスキュー・ステーションは、よく訓練された隊員と十分な設備を整えた専門的なものになった。ウェールズの最後に残ったレスキュー・ステーションは、ロンザ Rhondda の Dinas に置かれている。

③ 労働着

白いヘルメットとオレンジ色の衣服が今日の炭鉱労働者の特徴であるが、しかしこの姿は、比較的最近のものである。昔から1970年代半ばに至るまで、炭坑労働者は自前の労働着を整えなければならなかった。それは普通、その時々ファッションに従ったものだった。

衣類は丈夫でなければならず、しかもあまりタイトなものではいけなかった。汚くても差し支えなかった。1970年代には、炭坑労働者はラップズボンのジーンズ、絞り染めのTシャツを着ていた。帽子は1930年代末には安全ヘルメットに取って代わられた。最初圧縮カーボンでできていたが、1960年代にはプラスチックヘルメットに替わった。今ビッグ・ピットの地下ツアーで使われているのもこれである。

オレンジ色の労働着と無料の洗濯サービスの導入とともに、家で汚れた衣類を洗濯するということは終止符を打った。3組の衣類が与えられた。一組は着るため。もうひとつは洗濯するため。もうひとつは、非常用である。

④ 労働時間

1842年には、炭坑労働者は、1日あたり12時間働いていた。1890年にはおよそ10時間に減った。1908年の8時間労働時間法が通った後は、炭坑では月曜日から金曜日まで8時間労働のシフトを5つ、土曜日には4時間のシフトを1つ、となった。1947年に週5日労働制が導入され、1960年には炭坑労働者は週あたり37時間働いていた。祖父世代のほぼ半分ほどの労働時間ということになる。

⑤ 経営者

炭鉱労働者に関連して、経営者についても触れておこう。製鉄業者は例外なくイギリス人であったが、初期の炭坑オーナーの方は、ふつうウェール人であった。彼らは、地域に住み、ウェールズ語を話し、そして宗教的には非国教会派で、政治的にはリベラルであった。多くは、学校・

図書館・病院・チャペルなどを開設し、自社の労働者たちのために福利厚生につとめた。しかし、20世紀までには、ほとんどの炭坑保有者は、コミュニティを離れてしまい、労働者から距離を取り始めた。1947年に石炭産業は国有化されて、オーナーは歴史上の存在となった。

2. 女性・児童

19世紀半ばまで、女性と子どもが英国の炭坑で働くのは普通のことであった。

5歳から11歳の間のほとんどの子どもは、「ドアボーイまたはドアガール（つまり、通風口開閉係 trappers）」になった。彼らは、炭坑労働者や石炭が通過するのを通すため、換気ドアを開け閉めするのである。暗闇の中で長時間の労働をした。もっと年長の子どもたち（普通14歳から17歳）は、よくトロッコ曳き trammers として働いた。石炭の入ったトロッコや轎を、坑外に通じる幹線道まで運んだ。

児童労働の問題に対処するため、児童雇用委員会が1840年に設置された。委員たちは、児童労働のみならず、女性労働者たちの仕事の実態にもショックを受けた。その結果、女性や子どもの保護のため、1842年に坑内労働を禁止する法律が制定された。しかし、違反行為は跡を絶たなかった。児童は1860年代----議会が学校への出席を義務的なものにした年代----まで、違法に地下で働き続けた。20世紀の初頭においても、子どもたちは11歳という早い年齢で労働を開始した。その後、卒業の年齢は1944年になって15歳に引き上げられた。

女性の状態はどうであったか。ロンザにおいては、10歳以上の女性のわずか14%しか、賃労働者として記録されていない。しかし、炭坑コミュニティにおける女性は重要な労働の一翼を担っていた。

家事は風呂沸かし、掃除、子育て、家計保持など、重労働であった。1940年代の後、炭坑に軽工業が導入されるにつれて、女性の雇用はより普通のこととなった。このことは、炭坑労働者の妻が工場やオフィスで自分のシフトをこなし、さらに帰宅後に掃除や料理や育児をこなすということの意味した。負担はいわば二重となるわけである。

3. 労働組合

個人ではないが、炭坑で働く人々にとって重要な役割を果たした、人の集団としての労組について、概観しておく。

1898年に、南ウェールズ炭坑労働組合が設立され、1914年には、組合員およそ20万人を抱える、英国で最も大きな単一労組となった。1944年に、それは炭坑労働者全国ユニオンの南ウェールズ支部となった。それは常に最も戦闘的な労働組合のひとつで、全英国規模の争議において、指導的な役割を果たした。

南ウェールズ炭坑労働組合は、炭坑における生活の中で、より広い役割を果たした。第二次世界大戦の後まで、炭坑住宅は、事実上単一の産業のコミュニティであった。石炭産業の中で、この炭労はコミュニティを統括し、コミュニティの守護者としての役割を果たした。したがって、炭労は通常の労働組合としての活動を行いながら、人々の家庭生活や社会生活の中に組み込まれてもいた。

第二次世界大戦後の組合の機能のふたつは、炭坑労働者

のガラ Gala (お祭り、運動競技会) と炭坑労働者のアイステッズヴォッド Eisteddfod (文化大祭) である。後者は、1948 年に始められたもので、この種の労働組合主催の唯一のものである。ガラは 1953 年の本質的には政治的な集会だったのが、ブラスバンドやジャズバンドつき、スポーツコンテスト、アートやクラフトの展示会などのついた、家族ぐるみの遠足行事へと変化していった。

Ⅲ ビッグ・ピット石炭博物館の建物とマネジメント

1. 世界遺産の指定

ビッグ・ピットやブレナヴォン製鉄所を含むブレナヴォン産業ランドスケープが、2000 年にユネスコから世界遺産に指定された。このエリアの産業遺産は、石炭と鉄の生産を通して産業革命がはかられるプロセスを、社会的、経済的および技術的な面から総体的に学び・理解することができる、世界的に重要な価値を持ったものである。

ブレナヴォンの町とランドスケープは、産業革命の多くの記念碑的なものを含んでおり、そのうち、多くのものがすでに公衆に開放されている。また、将来追加的に開放される見込みのものも存在している。



ブレナヴォン製鉄所跡
(著者撮影 2011.8.17)

2. ビッグ・ピットの建物

ビッグ・ピットを訪れると、有料ながら 64 頁の詳細なガイドブック (National Coal Museum (2005), Big Pit: A Guide, National Museum of Wales) が入手できる。

その末尾に施設内ツアーの地図が載っており、①から⑳までの番号がふられている。順に見ていくと次のとおりである。①受付・ショップ、②待合室、④地下ツアー／ピットヘッド、⑤トラムサーキット／ランブルーム、⑥のこぎり工場、モルタル工場、⑦巻上機関建屋、⑧炭坑ギャラリー、⑨ファン・ハウス、⑩炭坑風呂と展示、⑪食堂、⑬観望室、⑭爆薬庫、⑮鍛冶屋、⑯教育室、⑰カフェ、⑱操作および資材室、⑳保存工場およびストア。(③⑫⑮はトイレ)

これらのうち、この炭坑遺跡として特に重要な意味を持つのは、④、⑤、⑦、⑨、⑩であろうと思われる。これらについて、以下に少し詳しく記述しておく。



ビッグ・ピットとブレナヴォンの市街
(著者撮影 2011.8.17)

1) 地下ツアー

このツアーには、退職した炭鉱労働者がガイドとして同行してくれる。ビジターはメインの縦坑 shaft を 90 メートル (300 フィート) 下降した後、本物の地下採掘の一部を 50 分ぐらいかけて歩いて回る。そこには馬屋、エンジンハウス、切り羽などが含まれており、ガイドたちはそれぞれの体験などを交えながら、説明をしてくれる。ツアーの間、ガイドもビジターも、かつて炭坑労働者が使ったのと同じ機器を使う。すなわち、ヘルメット、キャップランプ、ベルト、バッテリー、などである。バッテリーはかなりの重量があり、子どものビジターには少し辛いかもしれない。トンネル内は、かなり湿気が多く、天井からの浸み出しや、地面のぬかるみに遭遇することもある。



地下ツアーへの入り口
(著者撮影 2011.8.17)

2) ピットバンク、トラムサーキット、ランブルーム

縦坑の上のあたりは、「ピットバンク」と呼ばれており、地下ツアーに出かけるあるいは戻るビジターでごったがえしている。もともとピットバンクは、炭坑労働者と資材が下ろされ、石炭がトロッコに乗せられて上がってくる、うるさい場所であった。

トラムサーキットは石炭が詰め込まれたトロッコがたど

るルートである。トロッコは、ケージで地上まで持ち上げられて、回転箱 tippler の所まで自重でレールに沿って走る。回転箱は、トロッコを上下に揺さぶり、石炭をぶちまけて選鉱ベルトの上にのせる。ここで石炭はマーケットの需要に合わせて様々なサイズに選り分けられる。空になったトロッコは、もっと高い場所に運ばれる。そして、ピットの支柱材を載せられ、重力でピットヘッドに戻ってくる。これで、サーキットが完了する。

ランブルームは、最近の建造物である。1960 年代に消失した元の建物の基礎の上に建てられた。現在の建物は、現在ビジターとスタッフの両方によって使われている電気キャップランプの維持と充電を行っている。炭坑では、炭坑労働者はシフトの最初にランブルームに入り、自分のランプ預かり札を提出する。そして自分の電気キャップランプを受け取る。シフトの終わりに、彼はランプを充電ラックに返却し再度充電をしてもらう。そうするとランプマンが、ランプ預かり札を返してくれる。預かり札はランブルームに保管され、ある時点で誰が地下にいるかを判断することができる。これは事故の際には、決定的に重要な情報である。ビッグ・ピットのランプマンは、安全ランプのメンテナンスもしている。今日では炭坑の職員によってガス発見機として持ち運びされるだけだが、かつてはこのランプが炭坑労働者の唯一の光源であった。

3) 巻上機関ハウス

巻上機関 winding engine は、炭坑の心臓部といえる施設である。石炭、人、資材を載せたケージを、縦坑に上げ下げするものである。ビッグ・ピットの巻上機関は 50 年以上経っているが、現代的な部品で十分にアップグレード化され、多くの安全システムと、作動を調整・監視するいくつかのコンピューターが組み込まれている。巻上機関を扱う者の仕事はとても責任が重く、したがって集中力を必要とするものなので、施設見学ツアーの際、ビジターが写真撮影のためフラッシュをたかようなことをしないようにと要請されている。

現在の巻上機関は、1952 年に建造された。1947 年の石炭鉱業の国有化に続くビッグ・ピットの改善の一部として行われたものである。以前の蒸気機関の巻上機関は、現在の電動式のものに取って代わられた。巻上機関の作動で、人・物が移動する。ビッグ・ピットの最盛期には、午前・午後のシフトの労働者がそれぞれ 400 人、そして夜のシフトがおおよそ 200 人に上った。また、すべてのシフトを合計して、おおよそトロッコ 500 台分の石炭が運び出された。

なお、火薬庫の近くに再建された水衡機 water balance は、Brynpwlllog 炭坑(または Roger ピット)で、19 世紀半ばから使われてきた巻上機関であった。この水衡機は、カーディフの国立博物館&ギャラリーで、長年屋外で展示されていたのを、ビッグ・ピットに移転したのである。この方式の巻上機関は、ウェールズでは 19 世紀の前半にきわめて一般的なもので、ビッグ・ピットを含むブレナヴォンのいくつかの炭坑で用いられたタイプのものである。

4) ファン・ハウス fanhouse (送風室)

これは、どの炭坑でも最も重要な建物のひとつである。換気システムは、酸素を炭坑の中に送り、有害なガスやちり、煙などを取り去るか、あるいは希釈する。そして炭坑で働く労働者のためにより涼しく乾燥した環境を提供するのである。

ビッグ・ピットの元々の換気システムは、Koity の縦坑の底辺近くの暖房炉に依存していた。暖房炉で温められた汚れた空気はこれらの縦坑を登っていき、他方でビジターが現在降りていく縦坑を新鮮な空気が入って行って入れ替わるのである。

元々のファン・ハウスは、1896 年暖房炉に替わる蒸気エンジンのファンを収容するために建設された。そのファン・ハウスは現在の建物に取って代わられた。これは、1910 年に今日見られる電気エンジンのファンを収容するために建てられたものである。

ファンの操作者は、2 時間ごとにファンのチェックをするだけだが、ファン・ハウスは 24 時間人がついていなければならない。ほとんどの炭坑で、ファンの操作者は他の仕事も併せて与えられる。ビッグ・ピットのファン・ハウスでは、電話交換の作業や空気圧縮機の操作を兼任した。

5) 炭坑風呂 pithead bath

今では、炭坑風呂が炭坑労働者とその家族に与えた大きなインパクトを想像することは難しい。この風呂ができる前は、炭坑労働者は汚れたまま家に歩いて帰って、暖炉の前あるいは裏庭においたブリキの風呂に入って体を洗うしか他にやり方はなかった。その準備と後始末をしなくてはならない女性の労働は、たいへんだった。ビッグ・ピットの炭坑風呂は、1939 年に開設された。この炭坑風呂の導入の背後には、もっと公正な社会を創り出そうとするより広い社会改革運動が存在していた。この社会改革運動には、高齢年金の導入、女性の選挙権、国営の健康サービス、および戦略産業の国有化などが含まれていた。

炭坑風呂は、大陸のモダニズムのスタイルで建てられた。モダニズム建築は、炭坑労働者福祉委員会 Miners' Welfare Committee (こうした建物の建築に責任を負っていた団体) の建築家たちに好まれたのである。

風呂はどのように使われていたのかを述べておこう。炭坑労働者は、それぞれ、建物の中の違った場所に設けられたふたつのロッカーを与えられていた。炭坑労働者は普段着を自分の「クリーンな」ロッカーの中に置いておく。それから弁当箱やタオル、石けん箱を持って、「汚い」dirty ロッカーに歩いて行く。そこで彼は労働着を着て、シフトのため縦坑の上に歩いていく。シフトの終わった後には、炭坑労働者は「汚い」ロッカーで労働服を脱ぐ。そこで衣服はロッカーを常時吹き抜ける暖かい風によって、次のシフトに間に合うように乾かされることになる。風呂が終わると、彼は服を着て家路をたどった。

現在、炭坑風呂の遺跡の中には 4 か所、展示スペースが設けられている。物や画像を使ってウェールズの採炭の物語を説明するためである。

3. ビッグ・ピット石炭博物館のマネジメント

既に述べたように、ビッグ・ピットの炭坑保存の特長は、歴史遺産を、できるだけ当時の姿のままに、しかも関連施設を含めて包括的に保存しようと努めているところにある。ばらばらに保存・展示するのでは、産業化の実現に炭坑が果たした役割を総体的に捉えることは難しいであろう。世界遺産指定を受けた後も、以前に埋めてしまった施設を再び元に戻そうという試みがなされていることは、高く評価できる。

また、ビジターが訪問しやすいように様々な工夫がなされていることも注目される。そのひとつの例が、身体の特性上、各サイトへのアクセスが難しい人たちに対する施設構造の工夫や対応である。たとえば、車いす利用者が地下ツアーに参加を希望する場合には、そのようなツアーに適したタイプの車いすを貸し出すサービスを行っている。

さらに、誘導ループシステム（客のヘッドセットにループアンテナで音声を送信）が、ビッグ・ピットのさまざまなポイントに設置されていて、ビジターの理解を助けている。

情報発信も充実しており、ウェブサイトや受付で、あるいは郵便で、請求すればアクセスガイドブックを手に入れることができる。学校などのグループ訪問のために、「Planning your visit」という小冊子を発行し、これも無料で配布している。

2001年以降、ウェールズのすべての博物館は入場無料となった。ウェールズ国民議会 the Welsh Assembly

Governmentの援助によって無料化されたのである。このことによって、ビッグ・ピット、ブレナヴォン製鉄所を主要な構成要素とするこの地域を訪れるビジターの数も次第に増えていくのではないだろうか。無料化は、ひとつの文化政策の展開として、意義深いことと思われる。

このように、ビッグ・ピット石炭博物館には、日本の産業遺産の保存・展示、マネジメントに関して、参考になる点が多々あると思われる。

（この研究報告は、平成23年度文化政策研究科長特別研究「産業遺産の利活用による地域振興戦略について：イギリス・アイルランド・ベルギーの事例を題材に」の研究成果の一部をなすものである。）

注・参考文献

- Chris Barber (2002) , Exploring Blaenavon Industrial Landscape World Heritage Site, Blorenge Books
- David Owen (1999) , Images of Wales: Maerdy Rhonda Valley, Tempus Publishing Ltd.
- John Cornwell (1993) , Collieries of Blaenavon & the Eastern Valleys, Landmark Publishing
- John O' Sullivan (2011) (first published in 2001, and this new paperback edition first published in 2011) , A Photographic History of Mining in South Wales, The History Press
- National Coal Museum (2005) , Big Pit : A Guide, National Museum of Wales
- National Museum of Wales (2010) , The Pithead Baths Story, National Museum Wales Books
- Peter Wakelin (2006) , Blaenavon Ironworks and Heritage Landscape, Cadw Welsh Assembly Government

日中連携による実践型のデザイン教育展開の可能性

Possibility of deploying a practical design education through cooperation between Japan and China

磯村 克郎

デザイン学部生産造形学科

Katsuro ISOMURA

Department of Industrial Design, Faculty of Design

迫 秀樹

デザイン学部生産造形学科

Hideki SAKO

Department of Industrial Design, Faculty of Design

佐井 国夫

文化政策学部国際文化学科

Kunio SAI

Department of Industrial Design, Faculty of Design

黒田 宏治

デザイン学部生産造形学科

Kohji KURODA

Department of Industrial Design, Faculty of Design

2012年3月に上海市を訪ね、二つの大学と一つのデザイン事務所のヒアリングと現地調査を行い、大学発の日中連携による実践型の製品デザイン教育展開の可能性を探った。それぞれの訪問先で産学連携や実践的教育のしくみや場が工夫されており、日中の連携を導入する契機もいくつか確認された。ここでは、その調査報告と今後の展開に向けた提言を行うこととする。

Visit the city of Shanghai in March 2011, we conducted a field survey and interviews with two universities and one design firm. We explored the possibility of deploying a practical product design education through cooperation between Japan and China from university there. Mechanism and field of education and practical business-academia collaboration has been devised in their visited, it was confirmed some opportunity to introduce the cooperation of Japan and China. Conduct its investigation report, in this paper, we make recommendations towards future development.

1. はじめに

2012年3月に、上海市にて大学のデザイン系学科とデザイン事務所へのヒアリングと現地調査を行う機会を持った。中国の大学のデザイン教育に関しては、黒田、佐井による「中国の大学教育におけるデザイン教育の動向(その1)」 「中国・海南省における大学デザイン教育の現状 - 中国の大学教育におけるデザイン教育の動向(その2)」が、それぞれ2008年と2010年に、静岡文化芸術大学研究紀要VOL.9及びVOL.11にて報告されており、本研究もその延長線上に位置づけられる。また、中国の大手電

機メーカーのハイアール社との交流訪問において、日中教育研究連携の可能性が言及された経緯(黒田、佐井、磯村、迫、伊坂、木下「日中連携型デザインビジネスの生成と展開 - 青島海高設計製造公司(QHG)の設立・運営をめぐる」静岡文化芸術大学研究紀要VOL.12, 2011)も鑑み、2つの大学、並びにハイアール社と連携しているデザイン事務所を訪問先とした。

今回訪問した相手先は次の通りである。

- ・上海工程技术大学 高科学技术園
- ・复旦大学 上海视觉艺术学院
- ・上海芸凱設計有限公司(GK 上海)



写真.1 上海工程技术大学周辺の街並



写真.2 上海工程技术大学にて
佐井教授の師・劉教授(中央)と左は馬教授

前述の研究では、中国のデザイン教育の動向や実務の現場を概観し、変化が急な状況やカリキュラムの特色、産学連会の可能性等を把握することができた。今回の研究では、そのような状況を前提として、日中連携によるデザイン教育の可能性を探ることとした。それぞれの現場で、交流や教育の起点に活用可能な活動状況や組織を抽出し、現状調査や関係者へのヒアリングを行った。

交流や教育の起点として、ここでは教育と実務の連携の視点に焦点を当てた。デザイン教育においては、実務的要因の重要性が高いこと、摩擦の面がクローズアップされがちな両国の産業要因において交流という切り口を見いだせないかということ、筆者らによる実務や産学連携プロジェクトの実績を活用できるのではないかということ、等の理由からである。

将来的には、日中の学生による日中産学連携デザインワークショップ、相手国デザイン現場へのインターンシップ、それらの成果発表の場としてのギャラリー活用と相互訪問等が考えられる。

2. 現状調査

2012年3月26日に上海工程技术大学と复旦大学、3月27日に上海芸凱設計有限公司（GK 上海）を訪問し、現地視察とヒアリングを行った。

2-1. 上海工程技术大学

上海工程技术大学では、高科学技術園という大学敷地内にあるデザイン企業誘致および産学連携の施設等を訪問した。そして、その責任者である馬教授と自らのデザイン事務所を入居させている劉教授にお話を伺った。（劉教授は、上海市からCI、VI、パッケージデザイン分野の大師としてオーソライズされており、本学佐井教授の上海勤務時代の元上司でもある。写真.2 参照）

高科学技術園は、大学と企業が連携して国際的なデザインの基地として、また実戦的な学生人材育成の場として、大学敷地内の建物を改装して企業を誘致している施設である。デザイン各分野や工学系のオフィスが一般より安い賃料で入居できるようになっている。

劉教授のデザイン事務所は、劉維亞大師工作室といい、



写真.3 学内に誘致された劉教授のデザイン事務所

CI、VI、パッケージデザインを中心とした業務を行っている（写真.3）。施設内に400㎡のオフィスフロアをもうけて、デザイン事務所としてのフロアゾーニングを行っている。

フロア中央に、個人ブースのワークデスクをレイアウトし、周囲にミーティングスペース、重役個室、事務室、印刷室、応接室、サンプル・資料室を配置した典型的な開発・デザイン業務型オフィスである。受付の外側にはプレゼンテーションルームとともに、学生の作業ルームがセットされており、大学との連携をとった実務業務が可能な構成となっている（写真.4）。学生作業ルームを受け付けの外側に配置することで、参加性と実務のセキュリティをコントロールしているものと推察される。

所員は20名程度勤務しているということであるが、上述のような学生作業ルームを機能させた学生参加型のデザインオフィスである。参加学生は、大学院修士やOBが半年間、約8人程度業務に参加するとのことである。

劉教授は、ここでは実務家として実務による学生のデザイン教育への貢献をすることで、ローコストなデザインオフィスを運営している。一方で、別の建物内には、彼の研究室もあり、大学での教育・研究者としての拠点となっている。劉教授は、実務型デザイン教員として、教育と実務を効果的に回転させ、大学も彼の環境を整えることで、学生の参加性や教育効果を高めているのである。

2-2. 复旦大学

复旦大学は、中国を代表する文理科総合大学であるが、文化芸術の大学設立の流れに乗り、2004年に準備委員会を設置した後、2005年に上海視覚芸術学院を設立した。当初300人程度だった学生が2012年では、約3700人になっているということである（写真.5）。

ヒアリングは、学院長の張同教授、陳講師（陳講師は、武蔵野美術大学への留学経験と、次の訪問先の上海芸凱設計有限公司（GK 上海）での勤務経験がある。）、張少俊教授（張少俊教授は、多摩美術大学への留学経験がある。）に対して行った（写真.6）。

学院の設立経緯は前述の通りであるが、学院はデザイン学院、美術学院、パフォーマンス学院、ニューメディア学院、ファッション学院、文化産業学院に大別される。さらにデザイン学院は、視覚伝達、広告、パッケージ、ディス

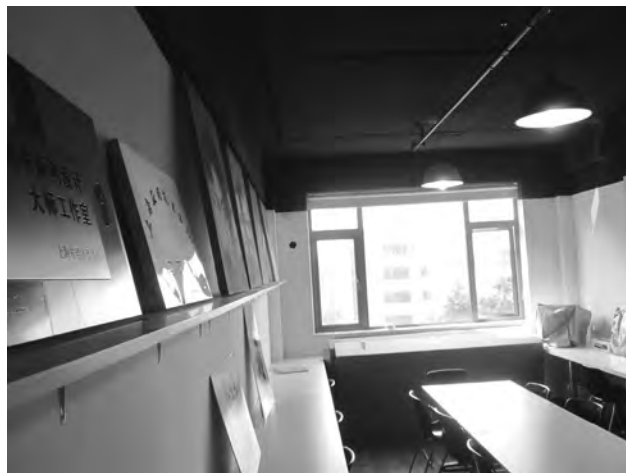


写真.4 デザイン事務所に隣接する学生作業ルーム

プレイ、インテリア、プロダクトの各デザイン分野があり、実践型の教育が指向されている。

教育上の特色として、専任教員に加え、社会人講師として実績がある著名なデザイナーを招聘することが挙げられる。この社会人特別講師は、スタジオ付きの待遇が与えられ、実践的な教育の場となっているようである。日本からも、黒川雅之氏や中西元男氏が客員教授として招聘されている。他に、アウディのデザイナーや上海万博にかかわったデザイナーなども挙げられた。

企業との連携は盛んなようで、上海の企業 50 社程度とインターンシップ形式で交流を持っているとのことである。キャノン（中国）もインターンシップ受け入れをしているようである。

学生の就職率は、口頭で 98% ということであるが、陳講師からの内情のヒアリングでは、必ずしもデザイン関係への就職とは限らないようである。また、近年のデザイン系学院とデザイン系学生の増加による飽和感は、企業からも国家教育部からも指摘されているようであり、これは、前述の黒田、佐井による調査結果とも整合性がある。

大学の施設は、広大な敷地に短期間で建設されたそうであるが、現在の 3700 人の学生数に対して、25000 人分の延べ床面積は確保されているということである。教員の研究室棟の廊下には、学生の課題成果が展示されていた。当日はグラフィックス系の課題のようであったが、基礎的なタイポグラフィからその展開に至るプロセスが何え、割合オーソドックスなプレゼンテーションだったように思われる（写真 .7）。

最後に、課題作品や産学協同の活動などの展示をおこなうギャラリースペースに案内された（写真 .8）。ここは、キャノンとアップルがスポンサーとなっている施設で、吹き抜け中二階に両社の展示がある。一階のフロアは企画展示スペースになっており、当日は大学と企業との産学連携のワークショップの成果が展示されていた。周辺には、学生の課題作品やプレゼンテーションコーナー、喫茶機能があるカウンターやテーブル等が配置されている。

この他にも、上海市中に 1933 年の建築を改装して、ギャラリー・研究室・バーを複合した M30 という施設（約 1200 ㎡）を持ち、社会や都心への接点としているようである。



写真 .5 広大な敷地の復旦大学

これらは、復旦大学上海視覚芸術学院が目指す、実践的教育や企業とのコラボレーションを実現し、それを表現する施設であり、学内の教育と連動させることで当大学のデザイン教育の成果を高めようとするものであろう。

上述の大学内のギャラリースペースで見学後、喫茶カウンターからのコーヒーをいただきながらヒアリングする中で、先方教員から「アジア」等のテーマで本学との協同テーマ交流展を開き、学生も相互交流するような企画の打診も受けた。日本への留学希望の学生も同席しており、学生の留学希望先の 1/3 は日本であるという。ここはまさに、デザイン交流を発生させる施設であったといえよう（写真 .9）。

2-3. 上海芸凱設計有限公司（GK 上海）

上海芸凱設計有限公司（GK 上海、以下 GK 上海と記述）は、日本の栄久庵憲司率いる GK デザイングループと中国のハイアール社との合併による本格的総合デザインオフィスである。上海中心部のオフィスビルに 20 数名の事務所を構えている。

ここでは、在中 10 年のオフィスマネージャー橋本氏と当社デザイナーで 2-2. の復旦大学上海視覚芸術学院にてプロダクトデザインの非常勤講師でもある徐氏にヒアリングを行った（写真 .10）。

GK 上海は、インダストリアルデザイン、商品企画、調査計画、グラフィックデザイン（CI 計画、パッケージデザイン、環境サイン）、都市環境設計を主要業務としている。口頭のデータではあるが、業務のうちプロダクトデザインは約 50%、グラフィックデザイン系はサインデザインの成果が多く、都市環境設計では日本のグループ会社の GK 設計とタイアップし、コンセプトを受けて実施デザインを行うケースが多いようだ。

プロダクトデザインではハイアール社とのプロジェクト、グラフィック系の上海万博サイン計画、都市環境系での地方ディベロッパーとの開発などの実績はあるが、デザイン料の下降傾向や商業系開発プロジェクトへの参入促進等の課題も多いようである。このような実績を持ちつつも国内での知名度はまだ十全ではないためもあってか、人材の確保には苦労しているようである。

人材確保は、中途採用が多いということである。就業者



写真 .6 復旦大学上海視覚芸術学院でのヒアリング

は、学生からの新卒を含め、企業の将来性や教育体制等を価値判断し、積極的に転職するのが通常であるようだ。グラフィックデザイン系、特に人気があるアニメーション分野の学生はレベルアップしているが、プロダクトデザイン系はそうでないケースも多く、さらに仕事に対する意欲が低下した層もシェアが大きく社会問題とされているそうである。

前訪問先で顕著であったように企業と大学の連携は盛んだと彼らも認識しているが、GK 上海は大学との連携はあまり行っていない。人材的に、インターンシップの学生や新人を教育指導する者が少ないことが一つの要因ということである。これは会社内の教育体制等で流動しやすい中国雇用事情の中では、人材確保・組織安定化に関する課題でもある。

もしも、このような企業事情に対して大学発のデザイン交流を考えるなら、復旦大学上海視覚芸術学院への徐非常勤講師の働きかけを得つつ、本学デザイン実務系教員のインターンシップ指導、産学協同プロジェクトのワークショップ指導等は効果的なのではないかと考えられる。学生も本学からの参加も行えば、今後有望な中国デザイン市場の現場を勉強することもできよう。企業を介した日中大学交流としても位置づけられる。つながりがあるハイアール社とその場を活用した交流も視野に入れることができる。また、本学教員には GK グループ出身者が数名おり、企業事情やノウハウを踏まえた教育指導が可能なのである。

3. まとめ

以上のように、上海市におけるデザイン交流や教育の起点として、3つの異なった現場を調査した。それぞれで工夫されたしくみや施設が認められた。改めてそれらを列挙する。

- まず、大学教員を媒介とした中国の実践的教育の事例である。これは、以下のようなしくみと施設になっている。
- ・大学内施設への兼業教員のデザイン事務所の誘致、すなわち、施設の仕様や低コスト化によるインセンティブで、実務と教育の近接と連携を実現する。
- ・そのような事務所隣接の学生作業ルームで学生による実

務を行うことで、実践的教育とする。

- ・教員は、場所的人材的な優位性を持って、教育研究と実務を両立させる。
- ・学生が大学内で身近に実務に接すること、複数でまとまって参加することで大学としての安定した実践的教育となりうる。

このような場に対して、例えば、日本のデザイン事務所が入居し、学生も指導しながら、中国での出発点にするといった日中連携も可能だろう。

次に、大学施設を媒介とした中国の実践的教育の事例である。これは、以下のようなしくみと施設になっている。

- ・大学内にデザイナーのスタジオを用意し、魅力的な客員教員としての場をつくることで、著名なデザイナーによる実践的教育を行う。
- ・大学内に企業と連携した展示・交流スペースを設け、実践的教育のチャンスを増やし、社会へ発信する。
- ・このようなケースでは、デザイナー招聘や連携案件を流動的かつ多様に発生させることが可能となり、フレキシブルな実践的教育となりうる。

既に、日中大学の交流展の提案を受けたように、手持ちのコンテンツを展示交流させるような実現が比較的容易なものから、日中学生同士のワークショップ、さらに企業と連携したプロジェクトに至るまで、様々な実践的教育が可能であり、日中連携がスタートしやすい環境があると考えられる。

最後に、中国現地の企業を媒介とした実践的教育の可能性である。

- ・中国の企業のデザイン現場と日本の教育研究人材が連携することで、企業の人材教育環境を整える。
- ・それによって企業の雇用安定性を高めるとともに、学生のインターンシップの場に展開する。
- ・環境が整ってくれば、日本からの学生のインターンシップも可能になろう。

今回訪問先（GK 上海）では、企業と日本の教育研究人材のマッチングが認められるため、このような発想が可能となった。



写真.7 復旦大学研究室棟廊下の学生作品



写真.8 復旦大学上海視覚芸術学院の交流施設

4. おわりに

製品デザインの分野では、台頭著しい中国企業・市場との連携を視野に入れた教育プログラムは重要な課題の一つである。

日中両国の現状に思いを馳せるとき、経済的な面、製造業的な面における優位性の変遷は歴史の流れでもあるだろう。また、領土という国の境界の面では外交上の摩擦の関係もあろう。しかし、デザインの面については、単純な優劣に目を向けるのではなく、双方の特性や融合性の視点から、共感・融合関係を築くことが重要ではないだろうか。また、そのような場にデザイン学生が参加することで、新しい市場における実践的なデザインの学びが可能になるのではないかと考えられる。

本稿は、平成 23 年度デザイン学部長特別研究「日中連携による実践型の製品デザイン教育展開の可能性」を得て実施した調査報告と提案である。今後のより具体的な提案に向けて、研究を継続する予定である。

ヒアリングの調査結果については、可能な限りバックデータを確認しているが、ヒアリング先からの主観的な情報や確認困難な情報は、妥当と思われる範囲において伝聞調の言い回しで表現した。

参考文献

- 1) 黒田宏治、佐井国夫「中国の大学教育におけるデザイン教育の動向（その 1）」静岡文化芸術大学研究紀要 VOL.9, 2008
- 2) 黒田宏治、佐井国夫「中国・海南省における大学デザイン教育の現状 - 中国の大学教育におけるデザイン教育の動向（その 2）」静岡文化芸術大学研究紀要 VOL.11, 2010
- 3) 黒田宏治、佐井国夫、磯村克郎、迫秀樹、伊坂正人、木下理郎「日中連携型デザインビジネスの生成と展開 - 青島海高設計製造公司（QHG）の設立・運営をめぐって」静岡文化芸術大学研究紀要 VOL.12, 2011
- 4) 上海視覚芸術学院（大学概要案内冊子）
- 5) 復旦大学上海視覚芸術学院「2011 届優秀卒業作品集」, 2011
- 6) 復旦大学上海視覚芸術学院学術委員会「視覚・言説 - 復旦大学上海視覚芸術学院 建校五周年展」, 2010
- 7) 上海工程技術大学公式 HP <http://www.sues.edu.cn>
- 8) 復旦大学上海視覚芸術学院公式 HP <http://www.sues.edu.cn>
- 9) GK グループ公式 HP <http://www.gk-design.co.jp>



写真.9 復旦大学、張少俊（右）除講師（左）と一緒に



写真.10 GK 上海にて（左から、橋本氏、徐氏）

浜松の民芸運動の現代的評価に向けて

Towards the Evaluation of the MINGEI Movement in Hamamatsu

黒田 宏治

デザイン学部生産造形学科

Kohji KURODA

Department of Industrial Design, Faculty of Design

阿蘇 裕矢

文化政策学部文化政策学科

Yuya ASO

Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

浜松の民芸運動は、浜松の新たな文化やデザインのアイデンティティとなる可能性がある。本稿では、浜松の民芸運動について、郷土史家へのインタビューと地元資料に基づく概略年表整理を行った。浜松の民芸運動の現代的評価に向けて、引き続き研究調査を行ってきたい。

The MINGEI Movement in Hamamatsu may become a new identity of culture and design of Hamamatsu. In this paper, we performed the interview to native district historiographer and the outline chronological table rearranging based on some local documents, about the MINGEI Movement in Hamamatsu. Towards the evaluation of the MINGEI Movement in Hamamatsu, we like to continue to do the research.

いま民芸という言葉からは、地方の民具や骨董、古道具など、やや古臭いイメージをもつ向きも少なくないだろう。確かに古い民具の発掘・収集は民芸運動の一面ではあるが、いささか歪曲して捉えられているようなところもあり、そのような解釈の範囲に留まっては民芸の本来的な意味内容の理解に欠くと言わざるをえないだろう。

そもそも民芸とは、大正末期（1920年代中頃）に柳宗悦らが生み出した言葉である。民衆の工芸を略して民芸としたものであり、貴族的な工芸美術に対比される民衆の工芸を指す概念であった。柳宗悦が、民衆のなかで普段使われてきた無名の職人の作の器具に美を見出し、はじめは雑器や下手物と呼んでいたが、いささか語感上の問題もあり、そこに民芸の語が生み出されることになったわけである。

そして、柳宗悦を中心に組み立てられた民芸の発掘・収集、展示・公開、新たな民芸品の創作・普及などの一連の活動展開が、民芸運動と呼ばれている。大正15年（1926年）の「日本民藝美術館設立趣意書」の発表、昭和6年（1931年）の月刊雑誌『工藝』の創刊、昭和11年（1936年）の「日本民藝館」（東京・駒場）の開館などが民芸運動の草創に位置づけられ、それらを契機に全国各地に民芸館が順次開設されてきた。現在、全国各地に29の民芸館が数えられるに至っている。¹⁾

ちなみに、2012年7月に、「日本民藝館」の5代目館長に工業デザイナーの深澤直人が就任したが、冒頭に記したような古風なイメージを払拭するとともに、民芸運動への新風を期待されてのことだろう。新館長就任にあたっての深澤の「『民芸』を現代の言葉に置き換えれば、『デザイン』そのもの。人のために美しいものをつくるということに変わりはない」²⁾との発言は、民芸の新たな現代的解釈を示唆するものでもある。

しかしながら、そのような民芸運動の発端をなす最初の民芸館が浜松に建てられたという歴史的事実はあまり知られていないようである。柳宗悦の提唱する民芸運動に共鳴

した高林兵衛、中村精、内田六郎らの尽力もあって、積志村（現在の浜松市有玉）の高林邸内に日本で最初の民芸館である「日本民藝美術館」が開設されたのが、昭和6年（1931年）4月のことであった。この民芸館は2年ほどで閉館することとなり、久しく忘れられた存在となってきたが、1980年代以降に伊東政好、鈴木直之らの郷土史家の努力もあって、関係情報資料の発掘・編纂や民芸運動史の中への位置づけなどが進められてきた。そのような経緯もあってのことだろうか、浜松市における新美術館構想において、「浜松の民芸運動」は美術館建設に連なる市民文化ムーブメントの一大契機として記述されている³⁾。

いま、日本で初めての民芸館を立ち上げた浜松の民芸運動は、浜松の一つの文化のアイデンティティであり、デザインのアイデンティティであると、改めて位置づけることができるのではないだろうか。そのような考えのもと、まずは浜松の民芸運動に詳しい伊東政好へのインタビュー調査（第1次）を行うとともに（→【資料1】参照）、関連資料の収集に努め、浜松の民芸運動の概略年表を試行的にとりまとめた（→【資料2】参照）。

これら調査作業を出発点にして、引き続き関係のインタビュー調査や情報資料の調査・収集、関連の論文・資料の収集・考察などを行い、近代デザイン運動史との関連なども勘案しつつ、浜松の民芸運動の現代的評価に向けての調査研究を行っていきたく考えている。

【資料1】浜松の民芸運動について（その1）

（伊東政好（遠州民芸同好会会長））

私は生前の平松実、ざざんざ織の創設者といろいろと縁がありました。その平松実から浜松にあった「日本民藝美術館」の話聞いて、これは資料を集めなければいかんと思い、それで集め始めて「遠州民芸運動資料展」を昭和56年4月にやったんです。それで翌5月に遠州民芸同好会を設立して、民芸関係の勉強会を始めました。それ以来のことになりますでしょうか、私が浜松の民芸運動につ

いろいろな調べ始めましたのは。

民芸運動の中心人物は柳宗悦です。彼は明治 22 年生まれ、彼の父は少将で裕福な家庭でした。東大では哲学を専攻し、白樺派の同人として活動する中で、陶芸とか美術に関心をもつようになります。それで朝鮮に行ったときに李朝の陶芸の美に出会い、それで雑器に目覚めることになります。そして大正末期になりますが、河井寛次郎、浜田庄司、富本憲吉らと議論する中で、民衆的工芸という意味で民芸という言葉をつくりました。ですから、民芸という言葉はできてから 90 年くらいないんですね。そして、河井寛次郎、浜田庄司と柳宗悦の 3 人で紀伊半島に木喰仏を探しに行く途中でしたか、高野山の宿坊で「日本民藝美術館設立趣意書」というものを起草するに至ります。

その趣意書が、浜松にいた平松実の弟で中村家に養子に行った中村精に伝わったんですね。柳宗悦と中村精は宗教哲学が縁で文通をしていたらしいんです。中村精は設立趣意書を見て感激して、柳宗悦を一度浜松に呼ぼうということになりました。それで昭和 2 年 1 月 12 日のことです。浜松の尾張町の中村家で中村精や内田六郎らが柳宗悦の民芸論を聞くことになりました。その翌日、中村精は柳宗悦を有玉の大庄屋である高林家に案内することになりました。柳宗悦の話を聞いて高林兵衛も感銘を受けたわけで、それで日本民藝美術館は高林家の場所を使ったらどうかという話が出て、それが契機となって昭和 6 年 4 月 18 日に浜松において「日本民藝美術館」が開館することになるわけです。

でも本当は、柳宗悦は日本民藝美術館を東京につくりたかったみたいですね。だけど片田舎の浜松に開館することになり、浜田庄司や黒田辰秋はじめ柳宗悦の関係で見に来た人はいたと思いますが、浜松といっても駅から電車に乗り換えて有玉まで行くかたちで、当時はほんとうに寂しいところでしたから、たぶん見学者はそんなに多くなかったでしょう。民藝美術館になった長屋門と草屋は、茅葺きを銅版に葺き替えられましたが、いまでも有玉の高林家に残っています。当時は柳宗悦が書いた木札が長屋門にかかっていたようです。

少し遡りますが、昭和 3 年の御大礼、そのとき東京の上野公園で大博覧会（御大礼記念国産振興博覧会）があって、柳宗悦らは日本のこれからの民家というか、食器や什器等調度品揃えた一般大衆の家のモデルを展示するんです。そのときに建物は高林兵衛が担当し、大工や瓦師などを全部高林家出入りの職人から連れていったんです。それで上野の博覧会に民藝館が開設されました。その建物が博覧会終了後に大阪に移設され、後の朝日ビール社長の山本為三郎に引き取られて別荘になっていくわけです。それが有名な三国荘です。

そうこうするうち高林兵衛は事業家ですから、作った民芸品を百貨店で販売するよう柳宗悦に提言していくんです。それから高林兵衛は和時計のコレクターでも有名でしたが、和時計の縁で益田孝や松永安左衛門といった財界人につきあいができ、民芸村構想への資金協力を呼びかけるわけです。そのあたりから柳宗悦との間に軋轢が生まれ、高林兵衛は柳宗悦との関係が切れていくことになります。そんな経緯もあってか、浜松の日本民藝美術館は開館から 2 年しか続きませんでした。昭和 8 年の夏頃に閉館とされ

ていますが、展示品がさみだれ式に持ち出されていったようで、実は何日が閉館だかよくわからないんですね。

その後ですが、現在の「日本民藝館」が昭和 11 年に東京の駒場にできるんです。柳宗悦は財界には協力を求めないと言っているながら、倉敷レーヨンの大原孫三郎の資金援助のもとつくったわけです。開設にあたり、あくまでも柳宗悦の求めたのは民衆的工芸なので、美術という名称に非常にこだわり出すんですね。美術を外さねばいかん、実用品ですから、そういうことで最終的に日本民藝館の名称になったようです。いま全国に 29 館ある民芸館の中で名称に美術が入っているのは鳥取民藝美術館、あそこだけです。浜松に残っていれば二つだったかもしれません。

昭和 6 年に開館した日本民藝美術館の功労者は高林兵衛ですが、中村精が浜松の民芸運動では一番の中心人物だったといえます。中村精は、慶応を卒業して浜松に戻り、創設されたばかりの遠江商業学校の教員を経て、誠心高等女学校の教員になります。そこで丘の上工芸クラブをつくって工芸の指導にもあたります。その間に静岡の芹沢銈介とも知り合い、浜松で展示会なども手掛けるなど、民芸運動にも携わります。それが昭和 14 年に慶応に呼び戻され、それで浜松の民芸運動の主になる人がいなくなったみたいなのところがあります。中村精は、東京に行ってから雑誌「民芸手帖」（昭和 33 年刊）の編集や東京民芸協会（昭和 29 年発足）の活動など、民芸運動にはかかわっていましたが、少しずつ遠州とのつながりが切れていきました。

そういえば後になって、柳宗悦が民芸運動を振り返って『民藝四十年』（宝文館、昭和 33 年）という本をまとめるんですが、その中の年表に浜松のことが一行も出てこないんです。結局、日本民藝美術館当時の高林兵衛との軋轢というか、そういう気持ちが柳宗悦の気持ちにあったんだと思いますね。柳宗悦に師事した鈴木繁男という磐田の人がいましたが、最後に柳宗悦が鈴木繁男に「遠州の人に悪いことをしたな」と言ったようなことを聞いたこともあります。まあ、いろいろ関係者からの指摘もあったようで、民芸運動の年表のこのごろの版（『民藝四十年』（岩波文庫））では浜松に開館したことぐらいのことは書かれるようになりましたが。

そういう中で、私たちも東京の日本民藝館（日本民藝協会）とは交流はしていましたから、民藝館の方で夏期学校というのを全国各地で昭和 48 年から毎年やってるんですけど、遠州は民芸発祥の地でもあるのでやってくれないかという話が来て、それでは夏期学校はよろうかと平成 3 年にお手伝いさせていただきました。奥山の方でやりましたが、柳宗理も来ましたね。そのときに東京の日本民藝協会の支部のようなかたちで遠州民芸協会ができて、私の主宰する遠州民芸同好会とは別の団体ですが、そちらは近年はあまり活動はしなくなっているようです。

さて、戦後の浜松における民芸品のものづくりの関係ですが、ざざんざ織の平松実とはこつこつと自分のざざんざ織を織っていきますが、終戦後に浜松に帰ってきた高林兵衛の弟の水野良知にも教えていき、そちらは後に伊兵衛織になっていきます。ですから現在は、同じ絹織物で、浜松にはざざんざ織と伊兵衛織があります。ただ両方ともいまは細々と活動しているといった感じです。遠州綿紬はすいぶん頑張っていますね。あと民芸運動の関係では、芹沢銈介

について勉強した山内武志のぬいや工房が板屋町で染織をやっていますし、木工関係では佐藤町に丸東工芸舎、各種民芸品を扱う渥美ゴザ屋が鴨江にあります。いま浜松での民芸運動の系譜で残っているのはそんなところですか。今後、浜松で民芸運動をどう評価し、位置づけていくかは課題だと思っています。(文責：黒田)

*本稿は、2012年9月8日に伊東政好氏のオフィス(浜松市中区板屋町)で行ったインタビューの記録である。



写真1：伊東政好氏インタビュー風景

(写真右奥が伊東政好氏、左手前が黒田、撮影は阿蘇)

【資料2】浜松の民芸運動に関わる動き(年表)

大正15年(1926年)～昭和元年

- 4月 『日本民藝美術館設立趣意書』を発表・配布(4月1日付、富本憲吉、河井寛次郎、浜田庄司、柳宗悦の4名の連名)
発表の後に、浜松市在住の中村精が設立趣意書を受け取る。

昭和2年(1927年)

- 1月 柳宗悦が浜松市(尾張町中村家)に招かれ小講演「工芸品の美」を行う(1/12)。
→講演要旨を中村精が浜松仏教会機関誌「開発」に掲載(1/15)。講演翌日(1/13)、中村精が柳宗悦を積志村(現浜松市有玉)の高林兵衛邸に案内。
*民藝品の蒐集依頼と和時計等収集品紹介のため、高林は民芸運動に感銘。
- 2月 柳宗悦『工芸の協団に関する一提案』を執筆・配布。
- 3月 京都に上加茂民藝協団発足。
→約2年で解散に至る。
→発足後、高林兵衛が、鳥谷成雄(日本楽器)の木工デザイン指導のため協団の黒田辰秋を浜松に招聘。京都に出かけ協団の実態調査を行う。
- 6月 「第1回日本民藝品展覧会」東京銀座・鳩居堂で開催(日本民藝美術館主催)。

この年に、高林兵衛、内田六郎が静岡の芹沢銑介を柳宗悦に引き合わせる。

昭和3年(1928年)

- 3月 柳宗悦ら民芸同人、上野公園の御大礼記

念国産振興博覧会に「民藝館」を出展。

*建築は高林兵衛が遠州の大工や瓦職人を連れて上京し陣頭指揮。什器類の製作は主に上加茂民藝協団が担当。

*博覧会終了後、山本為三郎が「民藝館」を購入し大阪の自邸内に移設(三国荘)。

このころ、高林兵衛、中村精のすすめで平松実手織物を始める。

昭和4年(1929年)

- 3月 「第2回日本民藝品展覧会」京都会館で開催(日本民藝美術館主催)。

*ここに高林兵衛蔵、内田六郎蔵、芹沢銑介蔵の民芸品も展示される。

このころ、高林兵衛が旧自宅の古材を活用して自邸内に民藝館を建設。

この年の秋、浜松市中島町に民芸織物の平松実工房を創設。

*上加茂協団の青田五良と共同で手織物の研究を行う。両氏は昭和9～10年に作品二人展を東西ギャラリーで開催。

昭和6年(1931年)

- 1月 月刊雑誌『工藝』創刊。当初は芹沢銑介が装幀を担当。

- 4月 高林邸内(現浜松市有玉)に「日本民藝美術館」開館(4/18)。

中村精、誠心高等女学校に転任。学校に工芸部をつくる。

- 5月 水沢澄夫の手で民芸店「水沢」が東京・京橋に開店。→約半年で閉店に至る。

- 9月 民芸店「水沢」主催で浜松市鴨江寺真言院で「諸国新工芸品展覧会」開催。

- 10月 浜松誠心高等女学校が「染織染色展覧会」を開催。

*展示品は「日本民藝美術館」(高林邸内)の所蔵品が主。

昭和7年(1932年)

- 1月 高林兵衛出資の民芸店「みなと屋」が東京・銀座に開店。

*鳥谷成雄作の木工品等を取り扱う。柳宗悦には不評。約2年で閉店に至る。

- 4月 外村吉之介(山口在住、後の倉敷民藝館館長)、柳悦孝(京都在住、柳宗悦の甥)が平松実工房に入る。

- 6月 民芸店「水沢」主催で浜松市鴨江寺真言院で「第2回諸国新工芸品展覧会」開催。

- 7月 積志村に西ヶ崎工房を設置(外村吉之介、柳悦孝の染織の仕事場)。

*高林兵衛の斡旋で元銀行支店建物を工房に利用。

この年末、浜松市紺屋町に平松実が民芸織物工房「あかね屋」を出店。

このころより、高林兵衛は民芸運動を離れ、農村医療制度確立に打ち込む。

*中心は高林兵衛(積志村産業組合長)、鈴木正一(富岡村産業組合長)。

昭和8年(1933年)

- 1月 あかね屋主催による「染織物大展覧会」

- を浜松商品陳列所で開催。
 * 芹沢銈介、外村吉之介、柳悦孝、平松実が出品。高林兵衛、内山六郎ら推薦文。
- 3月 東京・高島屋で「新興工芸総合展」開催（日本民芸美術館主催）。
- この年夏頃、「日本民芸美術館」（高林邸内）閉館。
- 8月 浜松商品陳列所主催で芹沢銈介を招いて型染講習会開催。
- 昭和9年（1934年）
- 2月 芹沢銈介の東京転出を機に静岡市で芹沢銈介染色作品頒布会開催。
 * 発起人は高林兵衛、中村精、内田六郎、柳悦孝、平松実等浜松関係者。
- 4月 外村吉之介、柳悦孝、西ヶ崎工房から袋井町大門に転出。
- 9月 芹沢銈介（当時静岡市在住）、東京に転出、東京・蒲田に工房を構える。
- 昭和10年（1935年）
- 8月 誠心高等女学校の工芸部主催、芹沢銈介を招いて個展と染色講習会開催。
- 昭和11年（1936年）
- 6月 浜松民芸運動十周年と日本民藝館開館を記念して、浜松民芸同好会主催「日本民藝品展覧会」が浜松商品陳列所で開催。
 * 同好会は内田六郎、高林兵衛、中村精、平松実、山本気太郎、吉沢純道。既に「日本民藝美術館」は閉鎖、高林、平松、中村、内田所蔵品を主に展示。
- 6月 中村精『民藝と濱松』（私家版）を発行。
 * 10年にわたる遠州の民芸運動について執筆したもの。
- 10月 東京・駒場に「日本民藝館」開館（10/24）。
- 昭和13年（1938年）
- 10月 浜松市常盤町に遠州病院開院。
- 昭和14年（1939年）
- 4月 中村精、慶応義塾大学に招聘され、商工学校の教員になる。

* 鈴木直之『幻の日本民藝美術館——遠州の民藝運動とその群像』（種月文化集団、1992年）を基本に、『民藝四十年』（岩波文庫、1984年）、『教育と民芸につくした中村精』（浜松読書文化協会、1995年）、『遠州民芸運動の資料展』（遠州民芸同好会、1991年）なども参考に、黒田が作成した。

注

- 1) 日本民藝館 HP <http://www.mingeikan.or.jp/>
- 2) 「日本民芸館館長にデザイナー深沢直人氏」日本経済新聞 2012年7月27日
- 3) 新美術館基本構想策定委員会『浜松市 新美術館基本構想』浜松市、2010年

参考資料

1. 『教育と民芸につくした中村精』浜松読書文化協会、1995年
2. 『遠州民芸運動の資料展』遠州民芸同好会、1991年
3. 『開発 中村精遺稿集』平松実、1974年
4. 鈴木直之『幻の日本民藝美術館——遠州の民藝運動とその群像』種月文化集団、1992年
5. 「特集：柳宗悦 心眼の美」『季刊銀花 第54号』文化出版局、1983年
6. 「特集：日本の民芸」『太陽 No.74』平凡社、1969年
7. 熊倉功夫『民芸の発見』角川書店、1978年
8. 熊倉功夫、吉田憲司編『柳宗悦と民藝運動』思文閣出版、2005年
9. 岡村古右衛門『柳宗悦と初期民藝運動』玉川大学出版部、1991年
10. 柳宗悦『民藝四十年』宝文館、1958年
11. 柳宗悦『民藝四十年』岩波文庫、1984年
12. 柳宗悦『工芸文化』岩波文庫、1985年
13. 柳宗悦『工芸の道』講談社学術文庫、2005年
14. 竹原あき子、森山明子監修『日本デザイン史』美術出版社、2003年
15. 日本民藝館 HP <http://www.mingeikan.or.jp/>
16. 新美術館基本構想策定委員会『浜松市 新美術館基本構想』浜松市、2010年

メディア造形学科における研究制作活動、情報発信活動の紹介

Creative and Publicity Activities in Media Design Fields

的場ひろし

デザイン学部メディア造形学科

Hiroshi MATOBA

Department of Art and Science, Faculty of Design

和田 和美

デザイン学部メディア造形学科

Kazumi WADA

Department of Art and Science, Faculty of Design

メディア造形学科では、様々な方法で、メディア造形に関する研究・教育を行い、その成果を発表している。我々は、それらの活動において、「学外との連携」「広範な情報発信」の二つの点を特に重要と考え、平成23年度に6つの施策を行った。本報告では、これらの施策、およびこれらの活動において制作された作品について説明を行う。

The Department of Art and Science at Shizuoka University of Art and Culture has been presenting the results of research and education activities in various ways over the years. Collaborations with companies or institutes outside the university, and publicity activities outside the region where the university exists especially have been promoted. In 2011, six projects have been realized as a result of these practices. This report describes the details of the six projects and the individual works that appeared in those projects.

1. はじめに

静岡文化芸術大学デザイン学部メディア造形学科では、メディア造形に関わる様々な領域で作品制作が行われている。これらの活動は、学科の正規科目における課題遂行の形で行われる場合もあれば、教員の指導を受けながら自主制作活動として行われる場合もある。いずれの場合においても、デザイナーとしての基礎的な能力の涵養の観点から、作品の企画、設計、制作、発表、評価のプロセスを学生が実際に経験することが重要と考えられる。しかし、これまでの活動の問題点として、以下の二点が指摘できる。

- ・大学内部に閉じた形での制作活動が多いため、独りよがりな作品に陥る危険を持っている
- ・静岡県西部地区の唯一のデザイン系学部という本学部の特徴から、競合する大学との比較を受ける機会が少なく、質の向上を図りにくい

これらの問題を改善するために、我々は、学外機関との連携に基づく作品制作と、大都市圏等、本学の所在する地域以外での情報発信活動を重要と考え、平成23年度に6件の具体的な施策を行った。本報告では、これらの施策について詳細を説明する。

2. メディア造形分野の研究・教育

メディア造形の研究・教育の範囲は多岐に渡る。近年では、コンピュータの発達により、その対象領域が一層広がりがつつある。コンピュータと通信技術の発達により産み出されたWEBは、企業あるいは個人にとってコミュニケーションデザインの重要な要素となっている。また、動画や音声の制作、編集作業は、コンピュータの発達により効率的に行えるようになり、一般のデザイナーが扱うことのできる領域となった。そしてさらに、「インタラクション」と呼ばれる、ユーザと対象物の間に発生するやりとりのプロ

セス自体も、デザインの要素として扱われるようになり、多くの企業でそのようなスキルを持つ人材へのニーズが大きくなっている。ここで述べた、WEB、映像（動画・音声）、インタラクションの各領域は、メディア造形学科が扱う重要な分野であり、今後もその重要性が一層増していくと考えられる。

3. 学外機関との連携による研究制作活動について

3.1 学外機関との連携の意義

学外機関との連携による研究制作では、一般的な授業では扱いにくい現場のニーズに基づくリアルな課題設定ができる、学外機関とのやりとりを通じてデザイナーに必要なコミュニケーション能力の教育効果が期待できる、制作した成果に対してリアルなフィードバックが得られる等の特長がある。例えば本学科ではこれまでに、浜松科学館で実施された特別展「サイエンスホラスクール」（平成22年7月24日から8月31日）において、特別展実行委員会との連携により、メディア造形学科で制作したインスタレーション作品の出展を行った事例があり、静岡文化芸術大学紀要12号で活動内容を報告している。本章では、平成23年度に学外機関との連携によって行った3つの事例について以下に説明を行う。

3.2 「はままつ映画祭」広報WEBサイト制作

はままつ映画祭は、浜松市出身の映画監督である木下恵介の顕彰から誕生した映画祭である。2011年11月19日から27日に開催された第10回ははままつ映画祭では、商業映画の上映、公募により集められた自主制作作品の上映、トークショー等が、市内の映画館「シネマイーラ」で行われた。本学科では、はままつ映画祭実行委員会

と連携して、第10回はままつ映画祭の広報WEBサイトの設計、制作を行った。これらの作業は、和田和美准教授の担当する3年生前期開講の学科専門科目「エンターテインメントシステム論」の選択課題として設定され、3年生の榊原理沙、杉村美希、鈴木歩実、三瓶彩花、横打陽香の6名が参加した。委員会より提供される多様な素材を効果的に活用できるWEBサイトのデザインを実現するために、委員会との協議が綿密に行われた。WEBサイトには、上映予定の映画の予告編を閲覧するためのストリーミング映像と、各映画の詳細説明ページにスムーズに遷移できるスケジュール一覧を設けた。また、映画作品、監督、イベント等、多様な情報を提供する約60ページのコンテンツが、内部リンクにより相互に密接に接続されている。SEO（サーチエンジンに対する最適化処理）を施し、「映画祭」等のキーワードによって検索しやすいサイトとした上で、10月23日からサイトの公開を行った。



図1 はままつ映画祭WEBサイト

3.3 「鈴木康広展」広報WEBサイト等の制作

浜松市出身の若手アーティストの鈴木康広氏の個展「産官学連携プロジェクト 鈴木康広展 BORDER- 地球、まばたき、りんご、僕」が、2011年10月22日から11月23日まで、浜松市美術館で開催された。本学科は、浜松市美術館及び鈴木康広氏と連携して、本展覧会の広報WEBサイトの設計、制作と、浜松市役所に展示されたインスタレーション作品「偶然のホトトギス」に関して制作協力を行った。

WEBサイトのプロジェクトは、はままつ映画祭の場合と同様に、専門科目「エンターテインメントシステム論」における選択課題として設定され、3年生の坂本茜、高橋奈津希の2名が参加した。WEBサイトの内容は、展覧会を中心として、浜松市内で行われる関連プロジェクト全体を網羅する方針をとり、プロジェクトのアウトライン、各イベント詳細、各作品解説等、多岐にわたるページ構成となった。WEBサイトのデザインは、鈴木康広氏の味わいのある手描きイラストを効果的に用いたシンプルなレイアウトを基調としている。なお、制作作業の過程では、WEBサイト制作に関わる学科内外の協力体制が多方面に渡るため、鈴木康広氏本人をはじめ各スタッフが、クラウドをベースとした、共有ストレージサービスを活用することで、円滑な情報共有とコンセンサスの形成を図った。本サイトは、一部のイベントが先行して開始される時期に合わせて、8月7日から一般に公開された。

インスタレーション作品「偶然のホトトギス」の制作協力プロジェクトには、授業科目とは独立した自主制作の位置づけで、2年生の山田千聖、桑原靖子、大川千尋の3名が参加した。このプロジェクトでは、鈴木康広氏の作品を構成する一機能として、一般の参加者が投稿する俳句の自動表示システムをFlashと呼ばれるツールを用いて構築した。一般の参加者は、ホトトギスを季語に持つ俳句を自由に作り、用紙に記入し窓口に提出する。オペレータの手により、俳句はテキスト情報としてコンピュータに入力される。このようにして蓄積した俳句のテキスト情報を、一定時間毎にランダムに選び画面に表示する。このシステムは、10月4日から11月25日の期間に、展覧会の関連イベントとして、浜松市役所に設置、運用された。また、このインスタレーションと連携して、ランダムなタイミングで鳴き声を発するホトトギスのアニメーションを、鈴木康広氏から提供された静止画と音声を基にしてFlashを用いて制作した。このアニメーションは、浜松市役所に設置された、鈴木康広氏の制作による全長8mの巨大ホトトギスのオブジェの鳴き声として、また、今回の展示会の広報WEBの一部をなすコンテンツとして公開された。

これらのプロジェクトを通じて、増田館長を中心とする美術館スタッフおよびアーティスト本人とのやりとりを行い、大学内に閉じた形で行う授業課題からは得にくい、リアルな制作の感覚を学生が体験できた意義は大きいと考えられる。

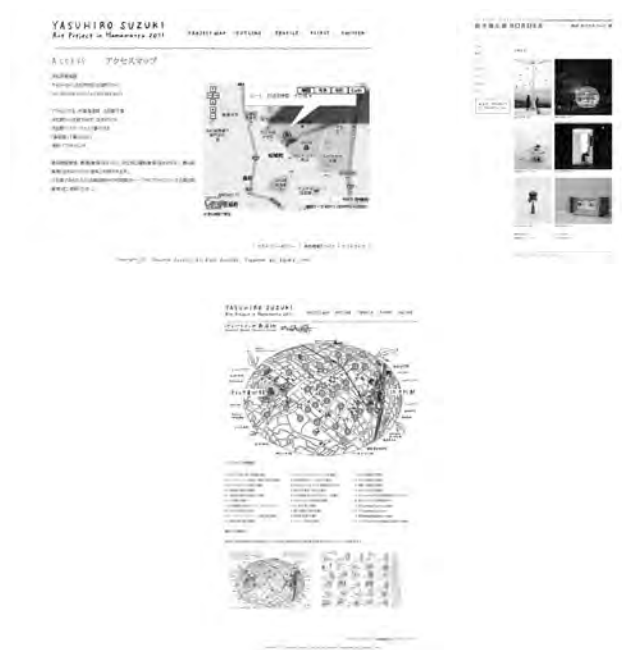


図2 「鈴木康広展」広報WEBサイト



図3 「偶然のホトギス」

3.4 店舗内デジタルサイネージ向けコンテンツ制作

近年、屋外で電子的なディスプレイを活用する、デジタルサイネージと呼ばれる広告媒体の活用事例が増加している。一般的には、ビルの外壁等に巨大なディスプレイを設置する事例等がよく知られているが、POPと呼ばれる店内の販促システムの一部としての活用にも可能性が検討されている。この店内デジタルサイネージの実験プロジェクトをとりまとめる広告代理店の電通と連携して、サイネージ向けの映像コンテンツの制作を行った。このプロジェクトは、的場ひろし教授の担当する3年生後期開講の学科専門科目「メディア産業論」の課題として設定され、3年生の履修者25名全員が6グループに分かれて取り組んだ。

本プロジェクトでは、栄養ドリンク商品の訴求を行う目的で、栄養ドリンクを陳列する棚の最上段にデジタルサイネージ装置を載せて運用することが前提とされていた。この装置は、8インチ液晶画面3台を横に並べた構成で、スピーカにより音声も出力できる。このプロジェクトで各グループは、極端な横長画面を効果的に活かす、互いに連携する三系統の映像、および一系統のステレオ音声で構成される約20秒のコンテンツを制作した。これらのコンテンツは、学内での制作の後に、電通社内の選考を経て、最終的な4作品が実地検証に利用されることに決まった。この検証は、授業期間終了後の2012年5月より7月までの間、東京都千代田区大手町のコンビニエンスストア「ナチュラルローソン大手町店」にて実施され、期間を分けて4つの作品が実際に店頭で上映された。

以下に4作品の概要と、制作過程で制作した絵コンテ



図4 デジタルサイネージの外観

の例を示す。

作品A：
手書き風アニメーションによって、20代女子の会社員生活の中で、栄養ドリンクが必要になるシチュエーションをユーモラスに描いた作品（担当者：坂本茜、中野瞳、榊原理沙、斉藤梨菜）。

作品B：
わかりやすいイラストとナレーションで、栄養ドリンクの成分や効能を説明するアニメーション（担当：高橋奈津希、八木麻美、福田有季子）。

作品C：
若い女子社員が栄養ドリンクを飲みながら、様々な悩みを克服し元気になっていく様子を、軽快な音楽とナレーションとともに描く実写ベースの映像（担当者：則兼智志、松井詳）。

作品D：
「一週間」の替え歌に合わせて、曜日で色分けした、文字主体のモーショングラフィックを使って、栄養ドリンクを飲むシチュエーションを曜日毎に説明するアニメーション（担当：曾根光揮、松田涼、林美緒）。



作品A



作品B



作品C



作品D

図5 デジタルサイネージ向け映像コンテンツ
(各作品のシーケンスを縦に並べたもの)

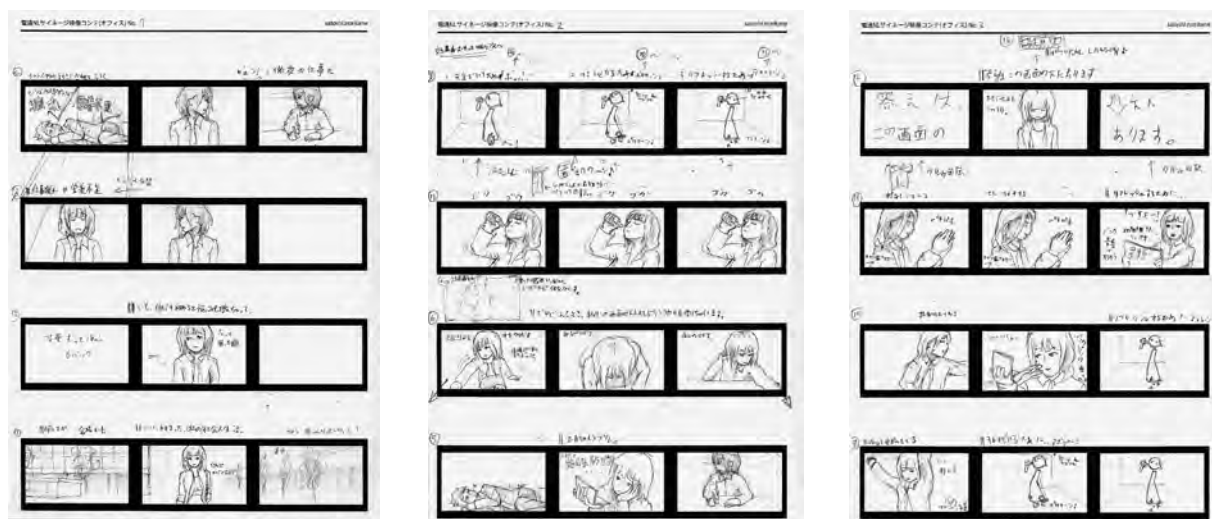


図6 作品Cの絵コンテの例

マルチ画面映像自体は、アベル・ガンツ監督の映画「ナポレオン」(1920年)における3面スクリーンや、チャールズ&レイ・イームズによる博覧会向け映像コンテンツ「アメリカの1日」(1954年)における7面スクリーン等、古くから実施例が知られている映像提示のスタイルである。しかし店舗内のPOPとしての活用は新しい考え方であり、そのようなコンテンツを実際に企画し、制作できることは、学生にとって非常に貴重な機会であった。実際の運用による、売り上げへの効果については、電通により分析が行われ、実験期間において他の店舗よりも栄養ドリンクの販売実績が向上したと報告されている。

4. 学外での情報発信について

4.1 効果的な情報発信の意義について

前章で扱った学外機関との連携の事例においても、それぞれの活動の中に学外への情報発信の要素が含まれている。はままつ映画祭や鈴木康広展において制作したWEBは不特定多数の閲覧者の目に触れる媒体であり、また、鈴木康広展のインスタレーション作品は多くの来場者によって実際に体験された。デジタルサイネージ向けのコンテンツの場合も、コンビニエンスストアの顧客に対する情報発信となっている。これらの情報発信は、大学が関与した制作物であることは明示的に示される形態をとっていなかったが、大学における作品であることを明確にした情報発信の形態を取ることは、大学の広報効果の点で重要であるとともに、制作者が明確なフィードバックを得やすい点により意義があると考えられる。成果物を公の場で公開し、多くの人の目に触れ、それらに対する意見を聞くことは、今後の改良点の発見や、次の制作物に活かすヒントを得るための重要な機会であり、研究制作の中の重要なプロセスの一つとなる。特に、体験型のメディアアート作品の場合には、実際に作品を体験することで初めてその新規性や作品の意義が理解できることが多く、動態展示の形態で情報発信を行うこと、及びそのフィードバックを直接得られることが重要である。本学では、学内のギャラリースペースや市内の施設等を活用することで、一般の来場者に成果を開

示する機会を作ることが可能である。しかし、静岡県西部地区に位置する本学の場合、実際に訪れる体験者の規模は限られている。そこで、他地区においても様々な形態で制作内容を公開することが重要であり、特に大都市圏で行うイベントには、高い広報効果が期待できることから積極的に参加すべきと考えている。このような背景から、2011年度には、地域、規模、形態の異なる三種類の、情報発信の機会を設けた。本章では、これらについて、情報発信の方法および、そこで扱われた作品に関して説明を行う。

4.2 静岡科学館におけるワークショップ

静岡市により2004年に設置された静岡科学館と、報告者の一人的場ひろし教授とは、開館時から現在に至るまで密接な関係を維持している。静岡科学館では、的場のメディアアート作品「デジタルフクワライ」「ダンスダンス」が常設展示されており、2008年に静岡科学館の企画展「錯覚ワールド」においては、本学科の展示コーナーを作り学生作品の展示を行った事例もある。

この静岡科学館において、2011年10月10日に、大学での研究内容を紹介するワークショップを開催した。今回のワークショップの対象は、小学生を中心とする一般来館者であり、大学での研究成果をわかりやすく紹介する必要があった。そこで、的場が指導に関わった学生作品の中から、子供向けという点を考慮した、2作品を会場に持ち込み、作者である学生自身が参加者に対して、作品を説明し、体験させるインストラクター的な役割を演じた。ここで扱った作品は、大学院デザイン研究科2年生の見崎央佳の「otodama」と、同じく大学院デザイン研究科2年生の前田侑穂の「つながるヒト」である。最終的には、子供向けのメディアアート作品という趣旨に基づいて他大学に出展を依頼した作品も併せ、合計3作品を展示した。

4.2.1 otodama

「otodama」は、手の上で弾ませたり、軽く叩くことで、光と音を発する15個で一組のボールである。それぞれのボールには特有の光の色と音階が与えられているが、光と

音を発していない状態ではいずれも白いボールに見えるため見かけ上は区別がない。光の色は7種類(赤、緑、ピンク、白、黄色、青、紫)であり、音階は低い「ソ」から2オクターブ高い「ソ」まで、八長調の15音階であり、オクターブ違いの同じ音階には同じ色が割り当てられている。弾力のある素材でつくられた表面の内部にはマイコン、振動センサ、電池、スピーカ、LED等がコンパクトに収納されている。振動センサが振動を検知すると、マイコンがそれぞれのボールに割り当てられた音声ファイルを再生し、スピーカから音声を出力するとともに、LEDを一定時間だけ発光させる。単純な仕組みだが、年齢を問わず楽しめる玩具として、2008年の完成以来、これまでに様々な動態展示の機会(第14回学生CGコンテスト佳作受賞による、文化庁メディア芸術祭内での展示等)に好評を博してきた。電子楽器として見た場合には、ハンドベルに近い操作方法になるが、二人のプレーヤがお互いに otodama を軽くぶつけることで、和音が発生する等、otodama に固有の特徴も持っている。

今回のワークショップでは、最大6名の来場者が丸テーブルに着席し、作者による指導の下で、otodama を一つずつ手に持って全員で合奏を行う、という形の体験を提供した。参加者は、otodama が、通常の楽器とは異なり単純であるため、長期間の練習を必要とせず、誰でもすぐに合奏を行うことができることを、体験を通じて理解していた。



図7 otodama を使ったワークショップ

4.2.2 つながるヒト

「つながるヒト」は、卓上型の照明装置である。照明装置でありながら、手で操作するスイッチ等を持たず、二つの「つながるヒト」を隣り合せて置いたときに初めてそれぞれが点灯するという特徴を持つ。一人では決して生きてはいけないう人間の特性を象徴的に表現した照明装置である。表面はプラスチックで、内部に電池、LED、磁石、リードスイッチ(磁力に反応してONになるスイッチ)、電子

回路が組み込まれている。本作品の完成は2010年であり、2010年に大垣で開催された展示会、MAKEにて初めて公開している。今回のワークショップでは、来場者は、合計7個のつながるヒトを使い、接触によって初めて点灯する本作品の動作を実際に体験した。



図8 つながるヒトを使ったワークショップ

4.2.3 県内他地区の文化施設における情報発信の意義

静岡科学館は、静岡県中央部に位置する施設であるが、これまで、本学からこの地域への情報発信を行う機会はいくつとも言えない状況であった。今回のワークショップの参加者数は数十人の規模ではあるが、教育的活動を通して行う社会への寄与と、制作者自身が教育的な活動から得られる作品についてのフィードバックの意義は大きいと考えられる。今回のような活動によって、科学館等の県内文化施設との連携を今後も一層強め、静岡県内における継続的な情報発信を実践したいと考えている。

4.3 東京デザイナーズウィーク 2011

東京デザイナーズウィーク(TDW)は、年1回秋に神宮外苑で行われる、デザインに関する日本最大規模のイベントである。企業や個人デザイナーの出展に加えて、学生部門が設けられ、基本的に大学の学科単位でブースを出展することができる。2011年には、本学デザイン学部の3学科がそれぞれ参加し、メディア造形学科からは学生10名が、的場ひろし教授と和田和美准教授の指導の下に、メディアアートのジャンルに参加し、6作品の展示を行った。それぞれの作品について説明を行う。

4.3.1 トビラエ

3年生の曾根光揮の作品。来場者が紙に描いた絵をカメラにかざすことで、プロジェクターで壁面に投影された映像の中に、来場者の描いた絵が紙から抜け出し漂い始める。たくさんの来場者が描いた様々な絵が漂う壁面からは、不思議な生き物達の暮らす海に居るような感覚を味わうことができる。ブース内で最も人気を博し、多くの来場者が体験した作品である。



図9 トビラエ

4.3.2 Hug Us

1年生の金澤厚恵、駒井佐和子、坂上友理の3名による作品。直径80cmの白色のクッションの上に、海に住む魚の群れのアニメーション映像が投影されている。クッションの両脇にはスイッチが組み込まれていて、座った姿勢でクッションを横から抱きかかえることで、両側のスイッチがONになり、投影されるアニメーション映像が切り替わる。来場者に抱きしめられた魚たちが、鑑賞者からの愛情を感じ、それに反応するという想定で、群れとしてハート型を形成する等、合計で6つの反応パターンをランダムに提示する。



図10 Hug Us

4.3.3 一緒に歩こう！

4年生の加藤香名子の作品。細長い白色のカーペットの端に立つことで、動物のシルエットの映像が数秒間投影され、その後その動物の足跡が現れ、来場者の前を歩き進んでいく。来場者は足跡について歩くことで、実際には親密に接することが難しい種類の動物であっても、彼らと一緒に散歩をしているような感覚を体験することができる。動物の足跡形状、歩幅、ステップの時間間隔等は、できるだけ実際の動物に近づける方針で制作された。



図11 一緒に歩こう！

4.3.4 カゲと遊ぼう

3年生の中川千春の作品。テーブル上に置かれたデッサン人形の向こう側に、プロジェクターによって影が投影されている。来場者はデッサン人形の手足を自由に動かすことができるが、デッサン人形の動きに合わせて、影の形状も変化する。よく見ると、デッサン人形のポーズによっては、影の動きはぎこちなくなり、苦労しながらポーズを作り、あるいは完全に同じポーズを取ることをあきらめたかのような態度を見せる。高度な技術を使ったメディアアート作品を数多く目している来場者にとっては、この影をCGにより自動生成されたものと考えがちである。しかし会場内を見回すことで、実際には、デッサン人形のポーズにあわせて姿勢を変える黒い服装の生身の人物が居て、その映像が投影されていたことがあきらかになる。影に備わっていた不思議な人間味が、実は単純な仕掛けと、実際の人間の努力によって産み出されていたと知ることが、デジタルに置き換えることの難しいアナログ的な価値の存在を再認識させるきっかけとなっている。



図12 カゲと遊ぼう

4.3.5 TDW2011における情報発信の意義

上記4作品に、前章で述べた「otodama」と「つながるヒト」を加えた合計6作品が、メディア造形学科のブースにて動態展示された作品である。本学科の展示は、会場内で好評を得ることができ、結果的に様々な賞を受賞することができた。まず、曽根光揮の「トビウエ」が、メディアアート・ファインアート部門個人賞を受賞。また、学科のブース全体として、メディアアート・ファインアート部門ブース賞を受賞するとともに、全24ブースの中からスポンサー企業が1ブースを選ぶ「chintai賞」もあわせて受賞した。なお、「otodama」と「影と遊ぶ」の2作品も、ファインアート・メディアアート部門の選考段階で、ノミネート作品として選ばれている（本学科の受賞の他に、空間造形学科の出展から準グランプリと、生産造形学科からプロダクト部門のノミネート作品が選出されている）。



図 13 TDW2011 授賞式の様子

今回のTDW2011への参加は、デザインに関連する業界に広くアピールすることのできるデザイン専門のイベントにおいて、多くの来場者に展示を体験していただき、また数々の賞を受賞してテレビ番組を始め各種メディアで扱われたこと等、大学及び学科にとって大きな意義があったと考えている。

4.4 京都のギャラリースペースでの情報発信

本学では、学内にギャラリースペースを持ち、年間様々な展示を行っているが、他の大学においては、よりアクセスが便利な地域に学外のギャラリースペースを持つ例が増えている。京都市立芸術大学が京都の中心部に有するギャラリーアクアは、中京区に2010年4月に開催され、現在は年間約20本程度の展覧会が企画され、年間約20000人が来館するギャラリースペースである。年間予算は、企画展予算と運営費として1900万円程度（光熱費込）である。嘱託のキュレーターが1名おり、卒業生、在学生の作品発表展のほか、学外の作家が扱われることもある。さらに、京都市立芸術大学美術学部総合芸術学科のキュレーション活動の実習の場としても活用されている。

このような、一般の方がよりアクセスしやすい地域に学外ギャラリーを持ち、効率的に情報発信を行うことは、本学にとっても検討すべき課題である。そのような観点から、ギャラリーアクアの企画展の一つとして、同大学の博士課

程在籍者を対象とした作品展が催された際に、的場ひろし教授が社会人として在籍していた関係で、このスペースを使った作品展示を行い、情報発信の効果についての実践的な調査を併せて行った。本件は、教員作品の展示であり、この報告で主に扱う学生による制作物とは異なる案件であるが、今後の学生作品の展示につながる試みとして本報告の中で扱うものとする。

この展示会において、「歪みの部屋（ひずみのへや）」というインスタレーション作品を、ギャラリーアクア施設内のスペースCにて、1月30日から2月10日までの期間に展示を行った。この作品は三つの部屋で構成され、最初の二つの部屋が「空間の歪む部屋」、最後の部屋が「時間の歪む部屋」である。

まず鑑賞者は、「空間の歪む部屋」を構成する隣り合った二つの部屋のいずれか一方に案内される。この二つの部屋には、間に仕切りがあるためお互いの部屋の様子が直接は見えないが、二つの部屋の前面に共通の壁がある。そこにはそれぞれの部屋の映像が両方の部屋から見える形で横に並べて投影されており、映像を通してお互いの様子を知ることができる。映像の上では、一見全く同じ造りに見える二つの部屋だが、それぞれの部屋に鑑賞者が入ると、通常とは異なる奇妙な空間であることがわかる。二つの部屋は、サイズが2:3の比率で作られており、それぞれの中に置かれた家具や小道具も同じ比率で製作されたものになっている。カメラの位置が巧みに調整してあるため、人が居ない状態では全く同じ形式の部屋に見えているが、そこに人が入ると、人の大きさが変化してしまったように感じる。「エイムズの部屋」の錯覚と似た効果を、映像を活用して実現したものと言える。



図 14 空間の歪む部屋

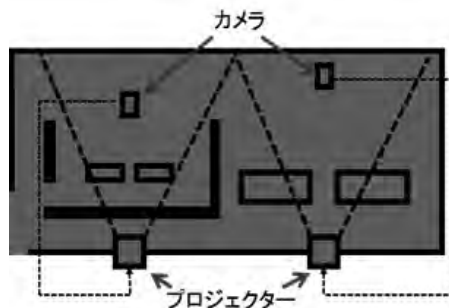


図 15 時間の歪む部屋の平面図（概略）

「時間の歪む部屋」には姿見のような縦型の映像スクリーンが二つ置かれており、それぞれに鑑賞者の姿が映し出される。部屋の中には、二段階にテンポが変化するリズム音が聞こえていて、鑑賞者はこのリズムに合わせて、ジャンプしたり踊ったり、体を動かすように促される。二つの姿見は、一見すると同じ仕組みに見えるが、左の姿見は鏡と全く同じ動きであるのに対して、右の姿見には通常とは異なる時間の流れの中の自分自身の姿が現れている。右の姿見には、映像を蓄積、再生する機能があり、速いテンポ（倍のテンポ）のリズム音の聞こえている期間の映像を一旦蓄積し、その後の遅いテンポのリズム音が聞こえる期間（倍の長さの期間）に、時間軸を倍に引き伸ばしてスローで再生する。逆に、遅いテンポ（1/2のテンポ）の期間の映像は、次の速いテンポの期間（1/2の長さの期間）に時間軸を1/2に圧縮して早回しで再生する。二つの姿見には両方とも、聞こえてくるリズム音に合わせて体を動かそうとしている自分自身の姿が映る。しかしよく見ると、時間の流れ方が速くなったり遅くなったりする不思議な時間軸の中に居る自分の姿に気付く。しかも、それぞれの映像には時間的な欠落は全く発生せず、自分の姿が継続的に映し出されている。



図 16 時間の歪む部屋

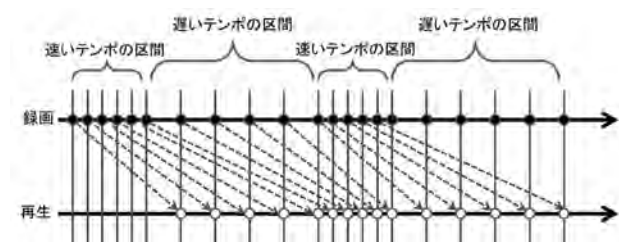


図 17 時間の歪む部屋における録画と再生のタイミングチャート

「歪みの部屋」は、普段とは異なって見える自分自身の身体を鑑賞することによって、自分達がその中で暮らして

いる基本的な概念である「空間」と「時間」にも、新鮮な面があることを感じさせることを意図した作品である。

今回の京都のギャラリーでの作品展示では、日ごろから芸術に親しみを持つ京都市民が、気楽な気持ちで来場し、作品を体験する姿に接することができた。ただし、展示会全体としては京都市立芸術大学の広範な作品領域を網羅するものであり、メディアアートに特化した展示会ではなかったため、京都の様々な美大の学生の来訪が目立つ一方で、関西地区居住のメディアアートに興味を持つ人々を効果的に動員できていないことも実感できた。しかし、本展示を通して、学外スペースを積極的に活用する情報発信の意義を十分に理解することができ、今後は本学における長期的な施策として学外のギャラリースペースについて検討していきたいと考えている。

5. まとめ

本報告では、メディア造形学科における、学外との連携による研究制作の事例と、本学所在地域以外での研究成果の情報発信に関して、2011年度の活動状況を整理した。本報告に含まれる内容は、報告者のめと和田の指導範囲の内容であり、学科内には他にも多くの活動事例が存在すること、また、この報告で扱った数々の事例に関しても、両教員の他に多くの学科教員の教育成果が活かされていることを付け加えておく。

今回報告を行った6つの事例は、それぞれ異なる方向性を持つ多様な活動である。まず学外との連携の事例の3件については、はままつ映画祭がボランティアベースの市民団体との連携、鈴木康広展が公共文化施設との連携、デジタルサイネージの案件が広告代理店との連携である。また、制作物の形態は、はままつ映画祭がWEBサイト、鈴木康広展がWEBサイトおよびインスタレーション、デジタルサイネージでは、特殊なフォーマットの映像コンテンツである。

学外への情報発信の事例では、いずれもメディアアート作品の動態展示の形式をとっている。情報発信の形態としては、ワークショップが県内の他地域における教育的啓蒙的活動、TDW2011が東京地区のデザイン系イベントにおける展示、京都のギャラリーアクアは、大学が保有する学外のギャラリースペースにおける展示である。これらの情報発信形態は、それぞれの特徴的な教育的成果、および広報的成果を持つと考えられる。学外と連携する作品制作活動とその成果を学外に発表する活動とは、表裏一体の関係であり、これらの活動を繰り返すことで、よりよい成果が蓄積されていくと考えられる。今後は、それぞれの方向性に関して、活動を一層深化させていきたい。

なお、本報告に記載した、役職、学年等は、すべて2011年度のものである。また、本報告で述べた各作品の2011年度制作活動、発表活動に関しては、23年度学部長特別研究「社会・地域に貢献するデザイン企画及びその教育方法の研究」が活用されている。TDW2011会場における展示に関する作業については、学部長特別研究「TDW2011への出展」が活用されている。

参考文献

- ・雑誌「AXIS」2012年4月号,アクシス, 2012
- ・白井雅人 他, 「メディアアートの教科書」, フィルムアート社, 2008
- ・東京デザイナーズウィーク事務局, 「ARIGATOUBOOK」, 2012
- ・京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA, 「京都芸大博士展」, 2012

「静岡文化芸術大学学術機関リポジトリ (SUACAR)」の構築に向けて — 学術的成果の公開を通して地域に貢献する —

Toward the Establishment of Institutional Repository at SUAC : Contribution to Society through Dissemination of Academic Accomplishments

古瀬 敏

デザイン学部空間造形学科

Satoshi KOSE

Department of Space and Architecture, Faculty of Design

林 左和子

文化政策学部文化政策学科

Sawako HAYASHI

Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

河手 太士

情報室

Futoshi KAWATE

Library and Information Center

大学教員は研究・教育その他さまざまな活動を行っており、その成果として多くの知的生産物が生み出されている。しかしながら、そうしたものは大学において生み出されたにも関わらず、個人の成果としてしか検索できない状況が続いた。それらを組織としての成果物として、大学が対外的に体系的に提供しようという試みがしばらく前から行われている。それが「学術機関リポジトリ」と呼ばれるものである。ここでは、本学においてその構築の仕組みを検討した結果を報告する。なお、本検討は、平成 22 年度・23 年度の 2 年間にわたり学長特別研究として行った。

University staff are producing vast amount of outputs through research, education and other related activities. However, such outcomes were difficult to have access through university channels. Rather we have relied on individual's names to retrieve such fruits. A recent trend is to collect and store them as database of the own organizations, to be accessible from the outside. Such system is called Institutional Repository. The authors tried to answer the question: What is feasible Institutional Repository for SUAC?

はじめに：学術機関リポジトリの定義と役割

大学などの研究機関においては、そこに属する研究者や教員が研究・教育などの活動を行い、その成果として知的生産物が数多く生み出されている。伝統的にはそういった成果は基本的には個人の名前で学術雑誌や国際会議に発表されることから、大学としてその全体像を把握することは困難であった。しかしながら、組織の活動実績の評価がなされるようになると、そういった発表内容をできるだけ大学として収集保存し、求めに応じて対外的に公開する必要性が強く意識されるようになった。

一方、研究者の行動様式が変化し、論文を中心とする学術情報の流通の中心がインターネットを介したデジタル情報となってきた。多くの研究分野で、先行研究の探索、論文の執筆、研究成果の発表のどの段階においても、デジタル情報が一般的となったのである。そのような状況の下、学術情報の流通の中心を担っている学術雑誌のデジタル化が急速に普及し、利便性が向上した。しかし、もともと高価な外国雑誌が雑誌出版社の合併による寡占化の進行などが原因となって価格が年々上昇したことにより、大学などの研究機関において学術情報へのアクセスが困難になるという問題が生じてきた。この問題に対処するため、インターネットを用いて、学術情報をだれもが無料で、制約なくアクセスできるようにするオープンアクセスの取り組みが始まった。その一つの形が、学術機関リポジトリである。

学術機関リポジトリとは、「機関所属員の研究成果である論文等、大学及び研究機関等において生産された電子的な知的生産物を保存し、原則的に無償で発信するためのインターネット上の保存書庫」¹であり、そのおもな役割は

次の 4 点である²。

- ① 研究者自らが論文等を掲載していくことによる学術情報流通の変革
- ② 大学等における教育研究成果の発信
- ③ それぞれの機関や個々の研究者の自己アピール
- ④ 社会に対する教育研究活動に関する説明責任の保証、知的生産物の長期保存

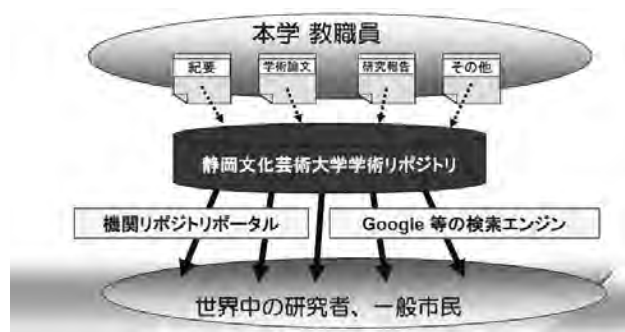


図 1：学術機関リポジトリのイメージ

ただし学術情報流通の変革とは、学術雑誌の価格高騰への対処だけではない。「学位論文、研究報告書、授業の資料など、これまであまり流通していなかった様々な学術情報が電子化され、広く流通すること」³も含まれる。インターネットで提供される情報があふれる中で、機関が提供することで情報の信頼性が高まるとも考えられた。

ところで、学術機関リポジトリで学術論文の無料公開が進んだ場合、論文の被引用回数や学術雑誌の販売（アクセス）にどのような影響が出るのであろうか。この点について、電子ジャーナルサイトで公開されている『Zoological

Science』掲載論文を例に観察実験を行った研究がある⁴。それによれば、学術機関リポジトリに登録されている論文へのアクセスはあったものの、被引用回数、電子ジャーナルサイトでのアクセスとも大きな変化はなかったという。「機関リポジトリ利用者と電子ジャーナル利用者、引用論文著者の比較の結果、機関リポジトリを通じ論文にアクセスする利用者は従来の電子ジャーナルサイト利用者とは異なる層であり、既存の読者が移動したわけではなかった。・・・機関リポジトリへの登録によって「従来とは異なる新たな読者」を獲得できたのである」⁵。被引用回数の増加がみられないことから、新たに獲得された読者は「領域外の研究者か、それ以上に研究者以外の市民が多いと考えられる」⁶。『Zoological Science』には1年間のセルフアーカイブ猶予期間が設けられており、この実験でもそれは遵守されている。そのため、最新情報へのアクセスは学術機関リポジトリからはできない。専門の研究者は、最新情報へのアクセスが可能でありかつ同じ雑誌に掲載されている非登録論文も読むことができる電子ジャーナルサイトの方を選んだと考えられる。逆に言えば、「発行直後から、全ての論文を機関リポジトリに登録した場合には電子ジャーナルアクセス数により顕著な影響がでることも考えられるし、そのような場合にはアクセス数と関係なく購読が打ち切られる可能性もある」⁷。この点については今後の研究を待つことになるが、少なくとも現時点において、学術機関リポジトリへの登録は学術雑誌の販売（アクセス）に大きな影響を与えることなく、広く社会に学術研究の成果を届ける可能性を持つことは確かであろう。役割④にある、社会に対する説明責任であり、社会貢献活動といえる。

国全体としての流れ

2002年に日本で最初に千葉大学が運用を始めた学術機関リポジトリの例が、2003年の『学術情報発信に向けた大学図書館機能の改善について（報告書）』で紹介されている。

国立情報学研究所（NII）のIRP-Workshopが2004年から国立6大学を中心に行われ、各大学におけるオープンソースの学術機関リポジトリ構築ソフトウェアの試行運用を通じ、その構築・運用に係る技術情報の蓄積・公開が行われた¹⁰。2005年には国立17大学に私学である早稲田大学・慶應義塾大学を加えた19大学により、「次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業」がNIIの委託事業として行われた¹¹。その後も普及や研究開発のための支援が、NIIを中心に行われている。

文部科学省科学技術・学術審議会の場合での議論の対象ともなり、2006年に『学術情報基盤の今後のあり方について（報告）』、2010年に『大学図書館の整備について（審議のまとめ）』として報告がなされている。さらに、2011年に閣議決定された第4期科学技術基本計画では、「国は、大学や公的研究機関における機関リポジトリの構築を推進し、論文、観測、実験データ等の教育研究成果の電子化による体系的収集、保存やオープンアクセスを促進する」と明記された。つまり、国が大学等の研究機関に対し、学術機関リポジトリを構築し公開することを要請したとい

えよう。また、大学等の機関別認証評価等において、学術機関リポジトリによる情報発信への取組を評価の対象とすることも検討されている¹²。

図2で示したのは少し古い情報ではあるが、徐々に学術機関リポジトリの数が増えているのがわかる。なお、2011年3月末現在では、国立大学が79機関、公立大学13機関、私立大学47機関、その他8機関となっている。



図2 機関リポジトリ数
（国立情報学研究所機関リポジトリ、平成23年度統計¹⁵より）

この原稿を書いている時点（2012年9月25日現在）では、187の機関リポジトリが国立情報学研究所のリストに登録されている。そこには県内大学では、静岡大学と浜松医科大学が含まれている。静岡県立大学はまだリストに掲載されていないが、予定では平成24年度運用開始とされている。なお、後述するように複数大学が1つの機関リポジトリに含まれている場合があり、機関リポジトリ数と組織（大学）数との間には違いがある。

本学におけるコンテンツ

さて、中身なしに仕組みだけを整えることはできないが、本学では何が公開できるのだろうか。これまでに本学から外部に向けて発信された広報目的のニュースレターなどはすべてその対象になり得るので、他の組織でカバーされているものと見比べながら拾うと、おおよそ次のものが挙げられよう。とくに特別研究費報告以下に挙げたものは、組織としては本学が主体的に出したものであり、印刷物などの従来の形態に加えて、あるいは替えて保存し公開することが期待されている。ただし、講義配付資料は非公式な性格があり、教育現場で利用する場合には著作権法による制約を緩和されていることから、他者の著作権があるものをあちこちから集めてコピー配布していることもあって、扱いに注意が必要である。

学術雑誌掲載論文、[作品]

特別研究費報告

研究紀要

本学発行のニュースレター類

『文化と芸術：文化・芸術研究センターニュースレター』

『温故知新：静岡文化芸術大学図書館・情報センターだより』

本学発行の図書

公開講座、公開シンポジウムなどの記録
講義配布資料
など

構築方法

文部科学省がNIIを核として構築推進事業を始めたときには、それぞれの組織が独自に構築するのが前提とされていた。地域的に隣接している大学が共同で構築するという選択をしたところも現実には現れたが、各個が構築という考え方は変わらなかった。このため、本学においても共同での構築ではなく大学独自の学術機関リポジトリを試行的に構築することにした。NIIで開発されたオープンソースの機関リポジトリ構築ソフトウェアであるWEKOを用いて、有体状態にあったPCで実験的に構築し、学内からのみアクセス可能とした。それにより、学術機関リポジトリを独自に構築し運用することが技術的側面においては可能であることが確認できた。この段階で制度的側面を検討するため、「試用版構築報告時のご案内」（付録）により全学に周知をはかった。

2012年に学術機関リポジトリを取り巻く状況が変わることになった。「個別の大学等によっては、事務体制や技術的な問題等により、独自でリポジトリの構築・運用を行うことが難しい機関もある」¹³。このため共通利用できる共用リポジトリのシステム構築をとの提言に沿った形で、NIIはこれまで行ってきた学術機関リポジトリ構築連携支援事業の一環として、2012年4月から「NII共用リポジトリサービス(JAIRO Cloud)」を提供することになった。JAIRO Cloudでは、NII内で開発した機関リポジトリ・ソフトウェアWEKOをベースに、共用リポジトリのシステム環境が提供される¹⁴。

当然のことながら、独自構築とJAIRO Cloudの利用とではそれぞれに長所と短所がある。独自構築の場合はデザインやアクセスコントロールといった面で自由度が高い。その代わりサーバの構築・保守に費用がかかる。一方JAIRO Cloudを利用すれば、サーバの構築および保守に費用が当面からかわりに、ある程度自由度が制約されることになる。なお、JAIRO Cloudを利用する場合、本学と国立情報学研究所との役割分担はだまかには下図のようである。

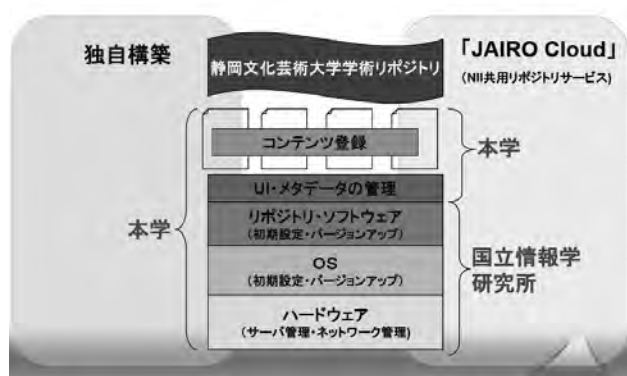


図3 独自構築とJAIRO Cloud利用の比較

諸般の状況を勘案して、本学ではJAIRO Cloudを採用する方向で調整が進められている。順調に進めば、2013年4月に運用が開始される予定である。といってもすべてのデータが整うわけではなく、すでにデータがそろっている紀要などから登録されて利用に供されていくことになる。

おわりに：学術機関リポジトリ導入後の課題

学術機関リポジトリを「継続して運営していく上では、大学全体におけるリポジトリ事業の位置付けの明確化、図書館業務としての定着、大学独自のシステムの構築と維持体制の整備などが課題として挙げられる」⁸。本学の場合もこういった課題について考えておく必要がある。

大学全体における学術機関リポジトリ事業の位置づけについては、本学が開学当初から取り組んできた地域貢献事業の一つとして考えることが妥当ではないか。本学に関心を持っている人や機関は、学術機関リポジトリを経由することで、研究・教育活動の全体像を把握することができる。一方、登録論文への「アクセスの約66%がサーチエンジンの検索結果画面からリンクをクリックしたもの」⁹である。サーチエンジンで登録論文を発見し、学術機関リポジトリにたどり着き、本学へ関心を持つことが考えられる。このように、対外的な情報発信はこれまでと比べて増すわけであるが、それにともない解決すべき問題が生じる。

学術機関リポジトリの構築・運用は、大学図書館が中心となって行っているケースがほとんどであることから、本学においても図書館・情報センターが中心的な役割を担うことになると考えられる。業務としては、メタデータの付与や著作権関連の調査などで、他大学における学術機関リポジトリのコンテンツの登録数から推測すると、膨大な作業量とはならないが、新規事業であるため業務量は単純に増加する。

さらに、地域貢献事業の一つと考えた場合、これまでこのような事業を主に担当してきた文化・芸術研究センターと図書館・情報センターとの役割分担はどうなるのかを考える必要がある。図書館・情報センターのサイトだけに学術機関リポジトリのリンクを設置するか、大学全体のサイトの一部として、大学のトップページにもリンクを設置するのも問題であろう。図書館・情報センターのサイトだけにリンクを設置した方が管理運営は容易かもしれないが、大学の全体像を見渡せること、またこれも大学の地域貢献活動の一環と捉えれば、大学のトップページから直接アクセスできるほうが好ましい。

独自のシステムの構築と維持体制の整備の点では、費用の問題も生じる。現段階ではJAIRO CloudによりNIIがサーバの管理からリポジトリ・ソフトウェアの管理まで負担しているが、将来的には費用分担を求められる可能性やJAIRO Cloudが終了し独自構築が必要となる可能性もある。始めた以上は維持していかなければならないので、今から考えておく必要があろう。

学術機関リポジトリの質は、登録されるコンテンツの量と質に大きく依存する。コンテンツの収集については、知的生産の中心となる教員の積極的な協力が得られるかどうか問題となる。学術機関リポジトリは、新たな情報発信

ルートの獲得や研究成果の可視化の向上などにより、学外の研究者との共同研究などに結びつく可能性があるなど研究活動へのメリットも大きい。この点について周知を図ることで、教員の理解と積極的な協力が得られるよう努力していく必要がある。将来的には学術機関リポジトリが教員にとって不可欠なものとなるのが望ましい。

学術機関リポジトリの構築・運用は本学にとって必須の事業と位置付け、こういった問題への対処を考えていかなければならない。

引用文献

- 1 文部科学省科学技術・学術審議会『大学図書館の整備について（審議のまとめ）：変革する大学にあってまとめられる大学図書館像』2010.「用語解説」
<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/attach/1301655.htm>
最終アクセス 2012 年 10 月 5 日
- 2 同上
- 3 文部科学省科学技術・学術審議会『大学図書館の整備及び学術情報流通の在り方について（審議のまとめ）』2009「2 学術情報発信・流通の推進（1）オープンアクセス 2 オープンアクセス推進の意義・必要性」
<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/attach/1283003.htm>
最終アクセス 2012 年 10 月 5 日
- 4 佐藤翔ほか「機関リポジトリへの登録が論文の被引用数と電子ジャーナルアクセス数に与える影響」『情報知能学会誌』Vol.21 No.3 (2011) p383-402
- 5 同上 p.398
- 6 同上 p.399
- 7 同上 p.400
- 8 文部科学省科学技術・学術審議会『大学図書館の整備及び学術情報流通の在り方について（審議のまとめ）』2009「2 学術情報発信・流通の推進（2）機関リポジトリ 2 機関リポジトリの今後の在り方と課題」
<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/attach/1283003.htm>
最終アクセス 2012 年 10 月 5 日
- 9 佐藤翔ほか 前掲論文 p.393
- 10 次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業 <<http://www.nii.ac.jp/irp/index.html>>
最終アクセス 2012 年 10 月 5 日
- 11 次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業 <<http://www.nii.ac.jp/irp/index.html>>
最終アクセス 2012 年 10 月 5 日
- 12 文部科学省科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会『学術情報の国際発信・流通力強化に向けた基盤整備の充実について』
<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1323857.htm>
最終アクセス 2012 年 10 月 5 日
- 13 文部科学省科学技術・学術審議会『大学図書館の整備及び学術情報流通の在り方について（審議のまとめ）』2009「2 学術情報発信・流通の推進（1）機関リポジトリ 2 機関リポジトリの今後の在り方と課題」
<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/attach/1283003.htm>
最終アクセス 2012 年 10 月 5 日
- 14 JAIRO Cloud とは <<http://www.nii.ac.jp/irp/repo/>>
最終アクセス 2012 年 10 月 5 日
- 15 機関リポジトリ統計 平成 23 年度統計
<http://www.nii.ac.jp/irp/archive/statistic/irp_2011_statistic.html>
最終アクセス 2012 年 10 月 5 日

参考文献

- 国立情報学研究所、学術機関リポジトリ構築連携支援事業、<http://www.nii.ac.jp/irp/>
国立情報学研究所 『変容する学術情報流通、進展する機関リポジトリ』 情報・システム研究機構国立情報学研究所 2011
土出郁子、香海沙織「日本における学術機関リポジトリの発展過程と現状」『図書館界』Vol.62 No.2 (2010.7) p.158-168

付録

参考資料：試用版構築報告時のご案内（2012.04.10）

機関リポジトリに収録する成果物についてですが、以前ご意向を学科からの図書委員にお願いしてお伺いしたときと若干状況の変化がありました。

国立情報学研究所が、論文などの公表刊行物についてはまとめてデータベースに収録するサーバーエリアを提供する、という方針を打ち出しました。これは個別の教員・研究者が情報を提供してそれぞれの大学や研究機関で個別の機関リポジトリを構築する、というこれまでのやり方とは若干異なります。提供されるサーバを利用するという選択をしますと、ウェブアドレスが少し違ってきますが、現時点でもいろいろなところにリンクを張っているということを考えますと、本質的な問題では無さそうです。掲載されるデータに付随する情報は、これまでどおり教員が所属する大学などが定型にしたがって用意することは変わりません。

もし国立情報学研究所のサーバを利用するとしますと、そこに掲載される情報は基本的には論文や論説など、伝統的な図書館での収集対象となります。それ以外のものもいいということのようですが、大きすぎるものは不可、また映像のストリーミング配信はできないなど、一定の制約があります。そこで、そのやり方ではウェブに載らないけれどもぜひ対外的に PR したい、といった内容のものを本学のウェブにおいて機関リポジトリに掲載する、という役割分担になります。（本学のものを構築するとすれば、上記の文献などは本学からのリンクになると思われます。使う側からはあまり意識されないけれど、アドレスが少し異なってくるという意味です。）

つきましては、その場合こういったものが掲載対象候補として考えられるか、それぞれの関係範囲で思いつくものをお教えいただけると幸いです。その際、ファイルの大きさや種類も合わせてお教えください（たとえば映像などですと、著作権の関係からストリーム配信しかできないとか、という事情で、本学側で構築するしかないわけです）。

なお、以前参考例として挙げたものは下記のようになっています。このうち、紀要とニュースレターの一部はすでに本学のウェブに掲載されているので、機関リポジトリを正式に運用し始める際には、現状のままとするか、それとも機関リポジトリのもとに移管統合するか、選択肢があると考えられます。

また、雑誌掲載論文などはそれぞれの学会や出版社側からすでに検索可能な情報として提供されている場合もあります（刊行後一年間は有料、それ以降は無料で閲覧・ダウンロード可能という扱いになっているところもあります）。

- 1) 雑誌掲載論文・論説・解説など
- 2) 学位論文（本学だと修士論文）
- 3) 紀要論文
- 4) 講義用資料
- 5) 開催イベント記録（テープ起こし、映像記録、報告など）
- 6) ニュースレターなど

なお、本学独自で機関リポジトリを構築した場合はどうなるか、ということで作成した試用版は、
<http://172.16.65.86/htdocs/>
からアクセスすることができます。
※ただし、学内からのみですので、プロキシを経由しないように Web ブラウザを設定する必要があります。

ユニバーサルデザイン研究所の設立に関する研究

Toward the Establishment of Universal Design Research Institute at SUAC

古瀬 敏

デザイン学部空間造形学科

Satoshi KOSE

Department of Space and Architecture, Faculty of Design

林 左和子

文化政策学部文化政策学科

Sawako HAYASHI

Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

小杉 大輔

文化政策学部文化政策学科

Daisuke KOSUGI

Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

三好 泉

前デザイン学部生産造形学科

Izumi MIYOSHI

Department of Industrial Design, Faculty of Design

谷川 憲司

デザイン学部生産造形学科

Kenji TANIKAWA

Department of Industrial Design, Faculty of Design

迫 秀樹

デザイン学部生産造形学科

Hideki SAKO

Department of Industrial Design, Faculty of Design

高山 靖子

デザイン学部生産造形学科

Yasuko TAKAYAMA

Department of Industrial Design, Faculty of Design

的場ひろし

デザイン学部メディア造形学科

Hiroshi MATOBA

Department of Art and Science, Faculty of Design

本学では、大学設立以来 10 年余にわたってユニバーサルデザイン教育を推進してきており、また地域との協働も目指してきた。その結果、ユニバーサルデザインにかかる教育成果は大学学部レベルではわが国でトップクラスになった。さらに静岡県、浜松市におけるユニバーサルデザインの浸透はかなりの段階にまで達している。また、国際的にも第 3 回国際ユニヴァーサルデザイン会議の開催時のプレゼンスなど、一定の段階まで到達した。そこで、今回はさらに次のステップに進むための条件を検討することにした。

Shizuoka University of Art and Culture has been conducting universal design education for more than ten years since its establishment. It also tried to cooperate with the local governments and the community. Educational accomplishments have reached a top level in Japan. Understanding of universal design among the citizens has come to a heightened stage. All these accomplishments were reported with evidence at the Third International Conference for Universal Design in Hamamatsu in 2010. Therefore we sought what we can do next toward a more fulfilling outcome through various activities.

はじめに

本学は開学以来ユニバーサルデザイン教育を先進的に推進してきた。また、静岡県や浜松市とともに国際シンポジウムなどを何度か開催することを通じて、ユニバーサルデザイン研究成果の普及による地域との協働もめざしてきた。この 10 年間に渡る教育実践成果は、大学学部レベルではトップクラスの水準となっている。また、国際的な研究連携は、2010 年 10 月に開催された「国際ユニヴァーサルデザイン会議イン浜松」の場で一定の段階に至った。

しかし、今後到来する超高齢社会を考えると、より幅広いデザイン分野においてユニバーサルデザインの理念および実践の重要度はこれまで以上に高まる。とくに地域に開かれた大学として、ユニバーサルデザイン教育による人材育成だけでなく、地域とともにユニバーサルデザイン研究を行い、成果を生み出すことが求められている。ことに急

速な高齢化が現在の市の形的大幅な変容を求めているという指摘もすでになされており、その点の検討も喫緊の課題である。

そこで、ユニバーサルデザイン教育の向上と活用できる人材の創出、および研究成果の創出とそれによる支援のための拠点（研究所）設立・運営に関する研究を行うことにした。

浜松市の次期ユニバーサルデザイン計画策定への関与

U・優プラン（浜松市ユニバーサルデザイン計画）は 2002 年 3 月に策定されているが、それ以来 10 年が経つことから、全体を見直す必要があると判断された。その作業に当たって本学の参加が要請され、できるかぎり協力することになった。具体的には「第 2 次浜松市ユニバーサルデザイン計画策定協働会議」に 1 名が委員として参

加するとともに、市民意識アンケート調査結果の分析のために本学が作業事務局として加わった。

浜松市では、平成 15 年度から数年おきにユニバーサルデザインに関する市民意識調査を行っており、平成 23 年度にもほぼ従前と同様な調査が行われた。以下にその結果とわれわれの分析・評価を記す。

ユニバーサルデザインを知っているという回答と、言葉は知っている（聞いたことがある）という回答を合わせた割合はこの 10 年間ほぼ 70% を維持している。知らないという回答が 30% 前後で変わりがないうことから、よほどのことがないかぎりこれ以上認知度を高めるのは難しいと判断され、内容を知っている・言葉は知っているという合計の中で内容を知っているという割合（23 年度はほぼ 40%）を高めるのが今後の目標になると思われる。

但し、年齢別に見ると、若者（20 歳代・30 歳代）と高年齢層（60 歳代・70 歳以上）に UD の情報が十分届いていない。とくに後者はユニバーサルデザインの受益者となるはずであり、知らないことで損をしている可能性が高い。市民の間での他者への思いやり意識はそれなりに高い。これには日系ブラジル人が周りにごく当たり前に働き、暮らしていることも関係しているかもしれない。

日常生活・民間の対応などにおける UD の広まりを感じるか、誰でも暮らしやすい地域と感じるかについて、UD を知る人にはよくなっている点が認識されつつあるものの、全体として指摘される問題もかなりあり、まだ課題は多い。たとえば、歩行者・自転車の利用しやすさ改善、トイレや休憩所の使いやすさ改善、案内サインの改善について、要望する声が強いの。

とはいえ、一般的に公共施設の利用のしやすさは評価されている。その一方で、民間施設にはまだ課題が多い。ハートビル法そしてバリアフリー新法によって、対応を求められていることがさまざまな難しさもあって実現に結びついていないということであろう。（とくに難題なのは、建築物を改修しようとすると、既存不適格となっている構造・防火要件なども同時に現行要求水準にまで上げなければならないという法規の枠組みである。これを何とかしないと、努力義務がかかっている既存建築物には手がつけられないというのが現状である。）今後欲しいものとしては、UD 地図、UD 製品など、UD 活動など、さまざまな側面についての情報提供が求められている。

こうした結果を踏まえると、今後の UD 展開にあたっては、以下の活動推進が効果的であると判断された。

1. UD のわかりやすく総合的な情報提供：たとえば浜松市の UD の歴史、姿勢、取り組み、製品情報、UD マップ、市民活動など。
2. 高年齢者層に対する啓発：的確な情報提供と、当事者としての社会活動参画の呼びかけ。
3. 若者層に対する啓発：的確な情報提供と、30 年・40 年先の将来像を共有する形での意識高揚。なお、高齢者と若年者とは、より効果的な情報提供の方法が異なるだろう。
4. 歩道・自転車道に関する長期視点での整備。これまでどうしても自動車優先だったのを修正する必要がある。
5. トイレや休憩所、案内サイン等についての使いやすさ評価による問題点把握。トイレについては管理上の問題の

指摘もあるので、人の目が行き届く方策も同時に考えるべきである。

6. 民間施設改善に向けた施策：バリアフリー法に基づく地方条例導入などをそろそろ考えるべき時期に来ている。

なお、最終的に U・優プラン 2（第 2 次浜松市ユニバーサルデザイン計画）は年度末につくられ、2012 年度から運用されている。中身は下記ウェブで見られる。

<http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/lifeindex/study/universal/u-youplan2/mokuji.htm>

はままつユニバーサルデザイン国際シンポジウム：「市民協働によるこれからのユニバーサルデザインー私にできることは？」

本特別研究実施の一環として、2012 年 2 月 9 日午後には本学講堂において、浜松市と共催ではままつユニバーサルデザイン国際シンポジウム 2012 を開催した。

誰にとっても住みやすく、暮らしやすい浜松市にするために、私たち市民一人ひとりがどのようにすれば持てる力を発揮できるか。市民と協働で策定中の第 2 次浜松市ユニバーサルデザイン計画の中では、UD の実践に向けて市民協働を中心に据え、市民のこれまで以上のより積極的な関与が期待されている。この点を広く市民にアピールするのが市役所の希望であり、一方本学としては、これまでどおりユニバーサルデザイン研究の中心になっていくことを表明するのが今回のねらいであった。

シンポジウムは、浜松市山崎副市長と本学河原林副学長のあいさつに続いて、スペインのバルセロナに本拠地を置いているデザインフォアオール財団会長のフランチェスク・アラガイ氏より、「ヨーロッパにおけるユニバーサルデザインの動向」について講演があった。国連の障害者権利条約をほとんどの国が批准している状況の下で、2020 年の到達目標が説明された。休憩を挟んで、昭和女子大学学長の坂東真理子氏からは、「これからの日本でのユニバーサルデザインの課題」と題して、これまでの豊富な経験を交えて、ハードの整備だけではうまくいかないとの指摘がなされた。

再度休憩の後、パネルディスカッションが開始された。ユニバーサルデザインを施策の中心に据えて積極的に取り組んでいる 3 つの自治体から、異なった立場を代表するパネリストに登壇願った。まず浜松市からは来年度から第二期に入る「ユニバーサルデザイン計画」の策定会議会長を務めている杉浦政紀氏から、浜松市におけるこれまでの経過と今後の方向が述べられた。次いで、佐賀県健康福祉本部長の平子哲夫氏より、佐賀県が行ってきたさまざまな施策について紹介があった。3 人目は岩手県立大学社会福祉学部狩野徹教授で、とくに岩手県では東日本大震災への対応がどうなされているかについての話題提供をお願いした。

こうした発表を受けて、ユニバーサルデザインをさらに深め実効のあるものにするためにはどうすればいいかについて意見を交換した。そのなかで、ヨーロッパなどでは強力な法規制を伴うかたちで進める合意がなされているのに対して、我が国ではどの程度までそれにならうことができるだろうかという点が議論になった。もう一つの論点は、

大規模災害時の対応についてである。東日本大震災が起きる前は、災害時にあってもユニバーサルデザインの基本理念がきちんと満足されるかどうかについてあまり意識されてこなかったが、基盤ができていなかったところのほうに災害後の問題も大きかったのではないかと、また、これを教訓に災害にも強いユニバーサルデザインを整備していくべき、との指摘もあった。まとめとして、浜松市の次期計画がいみじくも述べているように、ハード、ソフト、ハートという3つ、きちんとした環境整備、仕組みそして人々の意識改革がいまって初めてうまくいくであろうとの総括がなされた。

なお、シンポジウムの際には情報保障のため、手話通訳とパソコン利用の要約筆記が行われた。このシンポジウムの記録は、過去のこうした催しと同様にウェブに掲載されている。<http://homepage2.nifty.com/skose/UD2012rep.pdf>

ユニバーサルデザイン絵本コンクールの実施

本年度も昨年度に引き続いて「ユニバーサルデザイン絵本コンクール」を実施した。ただし、10周年記念事業だった昨年（注1）とは状況がことなることから、子どもから大学生までに応募対象を絞った。2011年10月1日（土）から2012年1月10日（火）まで募集し、応募作品は以下のとおりであった。

1. 子ども部門：76点（うち小学生55点 中学生21点）。なお中学生のうち2点は特別支援学校中等部。

2. 高校生部門：3点

3. 大学生部門：11点

審査委員会を開催して審査した結果、次のように受賞作品を決定した（注2）。



1. 大賞：1点 「ユニバーとバーサル」 蒲小学校 小川実のり、竹下夏実
2. 子ども部門優秀賞：3点
「あんととすうじのおしろ」 袋井中学校 西尾俊希
「町の中のユニバーサルデザイン」 蒲小学校 長屋花梨ほか2名
「ユニバーサルデザインがある場所」 蒲小学校 伊藤翔太
3. 子ども部門佳作：4点
4. 高校生部門優秀賞：2点
「めくりやすい絵本2」 吉原高校 遠藤詩織
「だじゃれ辞典」 浜松開誠館高校 満田亜実
5. 高校生部門佳作：1点
6. 大学生部門優秀賞：3点
「おおきさなんか関係ない!」 東洋大学 幼なじみ
「ESCOLA do JAPAO em Hamamatsu」 静岡文化芸術大学 金城ジゼレ
「ハチの冒険」 静岡文化芸術大学 青山育子
7. 大学生部門佳作：2点

これらの受賞作品は2012年2月11日（土）から2月19日（日）まで大学で展示されたほか、東京の大崎ゲートシティで3月17日と18日に行われた「子どもの本

の日フェスティバル」の一環である「世界のバリアフリー絵本展2011」の会場でも一部を展示した。

小学生から大学生まで、さまざまな視点から自分の考えるユニバーサルデザインを絵本の形にまとめた今回の応募作品はそれぞれに特徴があったが、来年度はもっと多くのところに応募を呼びかけるための方策を考えている。

注

注1：10周年記念事業の結果は<http://www.suac.ac.jp/news/topics/712.html>に掲載されている。

注2：2011年度の結果詳細は、<http://www.suac.ac.jp/news/topics/940.html>に掲載されている。

参考文献

ユニバーサルデザインの地域での実践に向けて：古瀬敏、阿蘇裕矢、根本敏行、静岡文化芸術大学研究紀要8（2007）

ユニバーサルデザインの地域での実践に向けて（その2）：古瀬敏、根本敏行 静岡文化芸術大学研究紀要9（2008）

ユニバーサルデザインの地域での実践に向けて（その3）：古瀬敏、根本敏行、静岡文化芸術大学研究紀要10（2009）

ユニバーサルデザインの地域への浸透方策に関する研究（その1）：古瀬敏、根本敏行、静岡文化芸術大学研究紀要、11（2010）

ユニバーサルデザインの地域への浸透方策に関する研究（その2）：古瀬敏、根本敏行、三好泉、坂本鐵司、静岡文化芸術大学研究紀要、12（2011）

Musical instruments and the industry as a cultural history of Hamamatsu City: A new interdisciplinary research field for SUAC

Shinji KOIWA

Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management

Shizuoka University of Art and Culture is located in a city where musical instrument companies have long prospered. The city government of Hamamatsu aims at being recognized worldwide as a "capital of music". SUAC, with a Faculty of Cultural Policy and Management that makes a variety of interdisciplinary contributions including culture and industrial development, has a mission to research the cultural history of this unique city and its development concerning the production of musical instruments. Researching industrial culture for musical instruments also should constitute a part of Hamamatsu study or Shizuoka study. SUAC should contribute also to the civic pride of the region. The author of this article, along with some members of the staff at SUAC, share the opinion that there should be an interdisciplinary field in which SUAC can make use of its unique resources, and therefore profit further in this area. This can occur through the unification of musicology, industrial culturology, and design studies, for which SUAC also has Faculty of Design.

本年度冒頭以来の右のような活動を整理すると、「楽器産業文化学」の研究活動の可能性として、まずは次のいくつかを挙げることができる。

- ・ 楽器開発に関する現存資料の整理・管理
- ・ (楽器会社保管のもの、楽器会社ではなく個人が所蔵する／したもの)
- ・ 楽器開発の歴史的な瞬間に立ち会った方々の「証言」の記録制作
- ・ 楽器産業文化に関する入門的内容の資料制作
- ・ 関連する研究者の情報のネットワーク化

当面はこうした作業を蓄積することで、この領域における静岡文化芸術大の拠点性を高めることが求められよう。

ケース一 証言者としての楽器開発者

六月二六日、本学一二階教員交流室にお迎えしたのは日吉昭夫^{ひよしてるお}ヤマハ元代表取締役専務である。日吉氏は電子オルガン「エレクトーン」開発の初期に関わり、現在その時期のありようについて直接お伺いできる貴重な存在である。氏の講演とその質疑については改めて報告することにして、本稿ではインタビュアーの印象を簡単にまとめる。

八〇歳を越えて豊饒としておられる日吉氏は、ヤマハが当時、「エレクトーン」という新しい音を作る意気込みであったことを熱く語られた。エレクトーンが現在、さまざまなアコースティック楽器を模倣する楽器として高い評価を得ていることからすると、同じ会社、同じ商標の商品が、現在とは違うコンセプトで生み出されていたことが浮き彫りになったと言える。社内の商品開発の方針の転換の経緯など、場合によってデリケートな問題を含むこうした問題は、当該企業と連携しながらも、第三者の視点での記述を試みるべきさまざまな内容があることを感じさせた。

「楽器産業文化学」にとって、重要な時期に立ち会った開発者や技術者に、それぞれが所属する企業の社史等とは違うスタンスで取材し、この領域で研究するための一次資料をインタビュアーの形で残すことが重要である。今後、日吉氏同様ハママツの楽器開発の重要な時期を担われた方に、インタビュアーを試みる。

ケース二 現代の楽器開発者

続いてお招きしたのは、ウダー制作者・ウダリストの宇田道信氏である（九月一日）。宇田氏は現在三十一歳。氏の名前を冠した「ウダー」という電子楽器を開発された。楽器の開発に今この瞬間に携わっている方である。

独特の形状をしたウダーは、ピアノをはじめとする多くの鍵盤楽器の欠点を克服する興味深い楽器である。ピアノの場合、一旦発音した音は減衰する一方で、「歌」ことが苦手である。また一オクターヴを構成する十二音以外の音、例えば四分音が出せない。けれどもウダーは、楽器に巻かれたロープの特定の音高の位置を押すことによって、ピアノで出すことのできない音高を演奏でき、また押し続ける強さを変えれば当該の音を次第に強くすることもできる。宇田氏が持参されたウダーを実際に演奏してみても、多くの鍵盤楽器にある左右に広い鍵盤が存在せず、しかし手のひらに収まるスペースで多様な音を自在に生み出すことができるウダーに、高い評価がされるべきだと考えるに至った。

現在、楽器開発を専門にされている方は決して多くなく、また宇田氏のように新楽器の開発に成功された方はさらに少ない。しかし、こうした方へのインタビュアー調査は、現在のこの分野のありよう、最新の知見を明らかにするとともに、楽器開発者が古今東西で取り組む共通の問題を明らかにする可能性もあろう。

なお、現代では「楽器」が必ずしも有形ではないことを付記しておくなければならない。ヤマハのヒット商品ボーカロイドは、開発者剣持秀紀氏にとって「楽器」である（二〇一一年日本アートマネジメント学会大会での発言）。このような楽器開発者の活動拠点が浜松であることも、注目に値する。

ケース三 スタンダード化された現代楽器の歴史研究

学長特別研究では想定していなかったものの、文化・芸術研究センターでは、映像制作プロジェクトに参画する学生に浜松ケーブルテレビから一五分番組の制作依頼があり、音楽文化に興味を持つ学生が中心となつて、鈴木楽器製作所の鍵盤ハーモニカ「メロディオ」を紹介する番組が作られた。昨年五〇周年を迎えたメロディオは、全国の学校教育の場に定着して久しいメロ・イン・ハママツの楽器である。番組では、このような楽器が生まれた歴史的経緯と、現在の工場の様子、そしてメロディオが活用されている教育現場の映像が紹介された。じつは鈴木楽器でもこのような記録映像の制作は十分には行われておらず、制作された番組は鈴木楽器社内でも活用されるとのことである。

こうした試みが明らかにしたのはまず、現在よく知られている楽器であっても、その開発史・製造史に関して記録を残す必要があること（今回の取材によって、わずかに残っている社内資料について再確認することになった）である。また学生の参画という観点でみれば、地域文化に興味を持つ学生が、将来歴史研究に活用される資料の制作に携わることができるため、教育・研究のリンケージという観点からたいへん重要である。

なお文化・芸術研究センターでは現在、ピアノ産業史の調査を実施しており、そのようなタイミングで本年、大橋ピアノ大橋幡岩氏の残した資料を浜松市博物館が収蔵することになった。それは現在のところ、大量の未整理資料である。ピアノという広く知られている楽器についても歴史研究の課題が存在し、浜松というより日本のピアノ製造史の一つの局面を解明する資料が「明るみに出されるのを待っている」という事実も、「楽器産業文化学」が必要な理由の一つである。

「楽器産業文化学」構築の試み

小岩 信治

文化政策学部芸術文化学科

楽器産業によって長らく世界に知られ、「音楽の都」を目指す浜松市に立地している静岡文化芸術大学は、文化や産業に関する学際的な研究領域を射程に収める文化政策学部を擁しており、浜松というユニークな都市の文化史を楽器産業を軸に探究する使命も負っていると言える。こうした研究（それを仮に「楽器産業文化学」と呼ぶ）は、本学入学者が学ぶべき「浜松学」「静岡学」の一部を構成するはずであるし、それは地域の人びとの「シビック・プライド」の醸成に繋がることにもなる。筆者は本学の奥中康人、根本敏行、羽田隆志とともに、二〇二二（平成二四）年度学長特別研究を本論のタイトルで行っている。その成果は来たる二〇二三（平成二五）年度研究紀要で報告することになるが、本稿はその一部に関する中間報告である。

静岡文化芸術大学が、「音楽の都」を目指す地域文化の特性を活かしてアカデミックな探求を展開すべき一つのテーマとして、仮に「楽器産業文化学」と呼べる領域があるのではないか。筆者は二〇〇四年に本学に着任して以来、音楽学者としてこの地のニーズにあった研究・教育活動を模索してきた。その間、おぼろげに姿を現したように感じられるのが、本学が拠点となるこのような研究領域の可能性、アカデミックな「未開の地」の存在である。

音楽学の研究のなかには楽器学という領域がある。それは伝統的に体系的音楽学、つまりシステムティックなことを扱う音楽学とされてきた。これに対する概念は歴史的音楽学であり、音楽史研究がここに含まれる。楽器学に含まれる「オーソドックスな」諸研究は、確かに一面で時代を超えて有効なシステム、例えば楽器分類法の確立に貢献してきた。しかし楽器も時の変遷、文化の変容の波にさらされているのであって、楽器の研究が時間軸を無視／軽視したまま十全に社会の期待に応えられるわけではない。例えば楽器の文化史について論じるべきことは多い。

音楽史研究の方では長らく、とくに西洋音楽史の研究において楽譜を主たる考察対象とすることが多く、楽器の考察は後手に回っていた。楽器のことは体系的音楽学に「任せて」、楽器に関係なく楽譜上に示される「音楽作品」に注目が集まる、という、いわば住み分けが機能していたとも言える。しかしながらそのような状況は過去のものになりつつある。楽器というテクノロジーが音楽史をどのように決定づけてきたのか。それを考察せずに音楽史記述は不可能、と考えられるようになった。

音楽研究を離れば、産業と文化に関する社会科学領域がある。文化を創出するファクターとして産業を捉え、産業文化を研究対象化することは近年珍しくない。しかしながらそこで楽器産業を明確に射程に入れることは、個々の研究者のレヴェルでは行われているものの、その連携・組織化は少なくとも国内では未だ充分に行われていない。

このような状況において、文化政策学部を擁し、つまり文化と政策に関する教育・研究機関である静岡文化芸術大学が、文字通り世界に向けて生産されている浜松地域の楽器を軸に、特色ある文化研究を推進し、その成果を発信するとともに、関係する企業、産業遺産、そしてそれらの研究者を連携させる拠点になることができれば、浜松に立地する本学の特色ある研究・教育分野として世界にアピールできるであろう。むしろ、そのような研究領域を開拓できるのが、世界を見渡したときにハマ・マツではないか。そしてそれは、一つの文化研究領域であるとともに、「いま、ここにある」研究対象に学生の関心をひきつける地域学としても機能するのではないか。このような考えに基づき、筆者は本学の奥中康人、根本敏行、羽田隆志とともに、二〇二二（平成二四）年度学長特別研究を行っている。その成果は来たる二〇二三（平成二五）年度研究紀要で報告することになるが、本稿はその一部に関する中間報告である。

学長特別研究「楽器産業文化学の構築の試み」は、この領域が超域的・複合的かつ研究手法が確立されていないことに鑑み、まずは、この領域を将来学ぶ学生にとって教科書となり得るのはどのような内容かを検討することとしている。具体的な方法として、楽器産業文化を支えてきた人材へのインタビュー調査、そして小規模な楽器（の一部）の制作である。この領域の魅力を学生にわかりやすく示そうとすることを重視しているのは、現在本学で進行中のカリキュラム改訂に合わせたこのテーマの新しい授業を構成することを視野に入れているからである。本稿では主に、前者のインタビュー調査の例を挙げる。

研究報告

「楽器産業文化学」構築の試み	小岩信治	171
ユニバーサルデザイン研究所の設立に関する研究		
静岡文化芸術大学芸術機関リポジトリ(SUACAR)の構築に向けた一学術的成果の公開を通して地域に貢献する一	古瀬 敏、林左和子、小杉大輔、三好 泉 谷川憲司、迫 秀樹、高山靖子、的場ひろし 古瀬 敏、林左和子、河手太士	167
メディア造形学科における研究制作活動、情報発信活動の紹介	的場ひろし、和田和美	163
浜松の民芸運動の現代的評価に向けて		
日中連携による実践型のデザイン教育展開の可能性	黒田宏治、阿蘇裕矢	149
南ウエールズの世界遺産ビッグ・ブット Big Pit……炭坑の歴史と国立石炭博物館のマネジメント	磯村克郎、迫 秀樹、佐井国夫、黒田宏治 藤田憲一	143
負の遺産を包含した都市文化政策事例研究	根本敏行	123
旅行ガイドブック・ブログの中のイギリス産業遺産―観光のまなざし論からのアプローチ―	加藤裕治	115
イタリア語教育の拡充とイタリアの大学との学術交流協定に向けた研究報告	土肥秀行	109
大学生による地域の学校支援活動の組織化に関する研究」報告(その一)	瀬戸知也	105
―平成23年度地域の小・中学校における学習支援ボランティア活動の現状と課題		
外国語活動・英語活動を通じた大学と小規模小学校との連携―授業支援、学習教材の製作を通して―	杉浦香織、マーク・D・シーハン	97
原著論文		
見える力学	海野敏夫	91
カリキュラムを横断した各専門分野協同によるプレゼンテーション		
劇場モデルに関する考察	高山靖子、マークD・シーハン ジャック・ライアン、峯 郁郎、古瀬 敏 永井聡子	85
―帝国劇場の「前舞台領域」消滅から捉えた「多目的劇場」誕生の経緯について―	四方田雅史	81
歴史的運河への「まなざし」―ヨーロッパ・東アジアの比較を通じて	野村卓志、原田茂治	71
大学生に対する情報リテラシー教育		
チャンネル間競争と販売費用削減投資	鈴木浩孝、成生達彦	65
サービス・リカバリー場面での公正と感情…先行研究の検討と今後の展望	小本恵照	53
新カリキュラムに向けての段階的取り組み	マーク・D・シーハン、杉浦香織 ジャック・ライアン	41
―静岡文化芸術大学における英語教育改革に関する報告―	鈴木元子	35
階級の視点から読むアメリカ文学―ソール・ベローの <i>Dangling Man</i> 研究	ジャック・ライアン	25
静岡文化芸術大学でのハビタット・フォー・ヒューマニティ…過去、現在、将来	下澤 嶽	19
地方都市のフェアトレードの現状と展望		
アルジェリア／フランス―『アルジェの女たち』をめぐる絵画と文学の対話(三)	石川清子	13
		1

静岡文化芸術大学研究紀要 二〇一二
第13巻

二〇一三年三月三十一日

編集 静岡文化芸術大学研究推進委員会

表紙デザイン 佐井国夫

発行 静岡文化芸術大学

〒四三〇〇一八五三三 静岡県浜松市中区中央二一―一

電話 〇五三一四五七一六一一

ファクシミリ 〇五三一四五七一六二三

印刷 株式会社シバプリント

Shizuoka University of Art and Culture
Bulletin VOL.13 2012

March 31, 2013

2-1-1 Chuo, Naka-ku

Hamamatsu City

430-8533 Japan

Tel +81-53-457-6111

Fax +81-53-457-6123

<http://www.suac.ac.jp>

13

静岡文化芸術大学

研究紀要

Shizuoka University of Art and Culture Bulletin

VOL.13 2012

Shizuoka University of Art and Culture

13 VOL.13 2012

静岡文化芸術大学
研究紀要

SHIZUOKA UNIVERSITY OF ART AND CULTURE
BULLETIN 2012

ISSN 1346-4744